
ニジゲマ

シジマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニジゲマ

【コード】

N8410M

【作者名】

シジマ

【あらすじ】

お馬鹿は二度生まれる。

どこか普通で、どこかが変な主人公が死後の生活を、老後にニュージーランドで過ごすかのごとく、異世界で生きていく物語。

1-1 どちらさま？（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

1 - 1 どちろとまっ？

ふわふわ

ふわふわふわ

擬音にすると、そんな感じ。

僕は海の上を漂っている。

海は海でも。

一面の雲。

雲の海。

雲海。

ここがどこなのかは…残念だけど想像がついている。
だって僕の最後の記憶が。

『もう…ゴールしていいよね？』

『あかん！ゴールしたらあかん！！』

『僕…がんばったよね？』

「…」
「…」
「…」

ごめん。

嘘です。

嘔吐きました！

似たような最後ではあったけれど、彼女のように幸せと一緒にじゃなかったから。

そもそも僕は頑張っていない。

病室に籠って、文字の海、イラストの海、情報の海に潜っていた

ただだからさ。

…うん、思わず気取ってしまったけど、要するに、

『七瀬さ〜ん。消灯の時間ですよ〜。小説は没収です』

『あああ〜・・・』

『七瀬さ〜ん。漫画は没収です。…3巻だけ』

『殺生な!?!』

『七瀬さ〜ん。パソコンは1時間おきに10分間休憩入れてくださ
いね〜』

『VDT作業休憩!?!』

『お〜。良く知ってますね〜。えらいえろい〜』

『同じ“ら行”だけどさ! 同じ“ら行”だけどさ! !』

こんな感じである。

脱線しすぎたけど、要するに僕の冒険は終わってしまいました、
つてことだ。

というわけで、ここは常世とかそんな感じな場所だと僕は思っ
けです。

ふわふわ

ふわふわふわ

「はは、久しぶりの来客かと思ったたら、迷い込んだ方でしたか」
突然の声に、思わず体が跳ねた。しかも危うく悲鳴を上げそうに
なるほど。

辺りを見回すけれど、人らしい姿形は無い。

声は…。

「珍しいことです。そうだそうだ、こうして出会ったのも縁。私か

ら貴方にプレゼントを差し上げましょう」

この雲海全体から、立体音響で響いてきていた。

「なに、遠慮なさることはありません。私もちょうど人恋しかった所でして」

「あの…」

「何でしょう?」

「貴方は?」

『ごうごうと雲海が轟く。』

な、なんでしようね、これ。何かの感情表現でしょうか。

「いやはや。残念ながら私は人々に忘れられた存在でして」

『『ごうごう』』どころか『ごうん!ごうん!』と雲海が轟く。

冷や汗がタラリと一筋、顎を伝った。

「敢えて名乗るとするならばこれでしょう。『名乗るほどのものじ

やない』と!」

「な、なんとというか…ごめんなさい」

「どうして貴方が謝るんです?」

「いや、なんとなく。あっはっはっは!」

「おかしな人ですね。あっはっはっは!」

周りからギシギシと音が聞こえてくる。

ごう…見えない圧力が。

「まあ、話を戻しますね」

圧力が消えていく。

思わず胸を撫で下ろした。嫌らしい位に厭らしい締め付けな圧力だったのだ。

例えるなら、サイズが一回りも違うジーンズを履く時みたいな感じ。じ。

僕は悟った。

この存在は、逆らってはいけない至上の存在だと!

神様なんだろうなあ、と適当な推測。

「プレゼントがどうとかとおっしゃってましたか」

「ええ、そうです。見れば貴方はお亡くなりになってしまった様子
やっぱりそうなんだ、とちよっぴりセンチメンタルな気持ちにな
りながら頷く。

グラフィティは小説版しか認めない。

「ならば、2度目の生を謳歌してみたいとは思いませんか？」

「魅力的ですね。殆ど病院でベッドの上でしたから、運動とかして
みたいです！」

思わず興奮していた。

だってそうだ！ずっと不自由な生活してたんだ。人間らしい生活
に憧れだって抱く。抱いたっていいじゃない！

そうでしょう、そうでしょう。と立体音響に合わせて雲海が蠢く。
「素直な貴方にサービスです。どうせなら貴方が生きる世界は今ま
どとは異なつた世界なんてどうです？」

「異世界…だと…！？」

…はっ！？あんまりな提案に、思わず顔が劇画調になってしまっ
た。

顔を両手で揉み解しながら、思いついたことを聞いてみることに
した。

「異世界に異世界からやつてきた異邦人…といえば、何か特殊能力
とかそんな感じの物語に？」

自分で思っている以上に興奮しているらしい。

かなり意味不明な日本語だった。

しかし流石は至上なる存在！！

「それはそれは面白そうですね。いいでしょう。貴方の望む特殊能
力とやらを、私が再現させてみせましょう」

「きやつほう！」

「ふふ。私の考えた超強い必殺技、みたいで痛いですね」

「あなた本当に神様か！？」

「ええ。あなた方が忘れても、私はずっと人間達を見つめてきまし
たから」

「ごうんごうん！」

「すみません…」

ダラダラと汗が流れる。

見つめてきたのはジャ プとか、コロ ロとかじゃ…とは、命の危機の前には決して口に出せなかった。そんな僕を誰が責められよう。

「それで、どのような能力がご希望ですか？」

「同調・開始！みたいなのはどうでしょう？」

「信仰に溺れて溺死しろ、ですね」

「！！…突っ込んじゃダメだ！突っ込んじゃダメだ！」

「でも貴方、剣に関する知識なんてあるんですか？」

「無い…ですね。特に思い入れもありませんし」

「ふむふむ、では貴方の知識の中から適当に設計書つつこんどきますね」

「は？いや、その前に…あれが再現できるんですか？」

「私を誰だと思いで？」

「ははー！ー！」

雲の上で土下座す…違った、平伏する。

それにしても、あれが使いちゃったりするのか！テンション上がるね！！

神様！私は一生貴方を信仰します！

「ふふふ、良い心がけです。気分がいいので、もう一つだけ願いを叶えてあげましょう」

「もう十分なんですけど…そうですね…」

何かあったらどうか？と頭を捻りながら足元をみる。

どこまでも続く雲の海。

いつの間にそこに現れたのか、雲の水平線の向こうに、白く輝く太陽が顔を覗かせていた。

風を感じないのが…少し残念に思う。

「空が飛びたいです」

「……なるほど。それが貴方の望みですか」
轟く声に、どこか愉快なものが混じる。そんなに可笑しいことだろうか？

多くの人間が望んだことだと思うのだけど。

「貴方だからこそ、と言っておきましようか」

「はあ……」

偉大なお方だから、僕には理解できないことの二つや三つはあるだろう。それよりも問題なのが。

「ところで、僕はどんな世界に？」

「そうですね…貴方が再現できるようになった能力に合った、魔法が現存する世界にしましよう」

「魔法ですか。僕に使えたりしますかね？」

「貴方は魔法の存在しない世界の生まれなので、無理だと思いますよ」

「残念なような、ちょっと安心したような」
変に力を持つて、人に持ち上げられるような生き方は僕には難しいだろうからね。

だって集団行動なんて未経験に近いから。

「では、貴方の目を通して私もその世界を旅するので、せいぜい楽しんできなさい」

それが本音かい。

雲が渦巻いて門を形作る。

足元に。

一瞬、鳥肌が立つが、開いた門のすぐ下には地面という親切設計。

「いってきます」

ひょいっとそこへ飛び降りる。

「いってらっしゃい」

その言葉と共に、門は閉ざされ跡形も無く消え去った。

そこは戦場だった。

死体が幾重にも折り重なり、幾筋もの光の筋が飛び交い、聞こえてくるのは悲鳴と怒声の2重奏。

「なんじゃこりゃあああああ!?!」

戦場の中心で松 優作。

錯乱した自分の行動に、思わず感動した。

だって、傍から見たら物凄く絵になるじゃないか!!

「おい!その…寝巻きか?寝巻きの人間何してる!死にたくなかつたら伏せる!!」

…絵になるじゃないか?

死んだ時パジャマだっただろうから、そりゃあ今もパジャマですよ。着替えてないし。

戦場にパジャマでオジャマ…なんちゃって!

さむっ!!

「聞こえてないのか?その寝巻き!!」

「僕には立派な名前があつて、七瀬…うひゃあ!?!」

僕を寝巻き呼ばわりする相手の顔を拜んでやるつと目を向けると、背後から赤い光線が僕の頬を掠り、目の前に着弾。

おもわず「うひゃあ!?!」なんて言っちゃったよ!言っちゃったよ!!

「いいからこっちこい!!」

その男の人(?)は塹壕らしき溝の中から顔だけを出して僕を手招きしていた。

その必死な形相に思わず頷き、素直に従って塹壕に飛び込む。

間一髪。

僕の横髪を、静電気を撒き散らしながら光線が掠って飛んでいった。

「……………何…あれ？」

今のが魔法というやつだろうか？

呆然と蹲る僕の隣に、先ほど呼びかけていた人（？）がしゃがみ込む。

「何考えてるんだ貴様は！戦場で動くのを止めたらドタマぶち抜かれるなんて今時の赤ん坊さえ知ってるだろうが！」

そんな赤ん坊いたら嫌だ。

「というか、何だ貴様は？何で寝巻き…だよな、その服。人間…だよな？連合の軍人じゃないのか？」

「ええと、寝巻きなのは単純に着替えが無いだけで…。連合って何ですか？」

「転移魔法でも使って迷い込んだのか？連合っていったら、メセンブリーナ連合以外あるまいよ。んん？どっかの辺境の人間か？」

「いや、まあ似たようなもんです」

この人（？）は困惑しているのか、しきりに首を捻っている。

ちなみに、さっきから何故（？）がついているのかというと、この僕に話しかけてくれている人（？）は、側頭部からよつきりと角が生えているのだ。

その大柄な体躯と合わせて、バッファローを連想させた。

「まあいい。怪しいことには変わらない。悪いが拘束させてもらおうぞ」

戦場に放り出されてもたまらんだろ。というバッファローさんの眩きに、なるほどと納得し、同時にこの人の人の善さを感じた為、従うことにした。

後ろ手に両親指を拘束され、塹壕内を歩く。

バッファローさんが前を行き、後ろから同じように角を生やした女性が…。

「って、いつの間にな？」

「黙って歩け」

クールボイスに僕は胸キュン

…はっ！？何だ今の電波！！あれか！噂の毒電波ってやつか！！
自身の異常に内心焦りつつ、表面上は余裕を繕って塹壕内を見回す。

バッファローさんや背後の女性と同じ服：制服だろう…を身に纏った、こちらと同じくどこか人間とは違った外見的特長を持った人々が悲壮な表情で行き交っていた。

時折塹壕から顔を出しては、その手に持った杖らしきものから光を飛ばしている。

赤だつたり、白だつたり、様々だ。

なんだか僕の場合違い加減が居た堪れなくなつたので、会話を試みることにした。

上手くいけば、この世界に関する情報が得られるかもしれない。

「あれって、魔法ですか？」

「…？」

前後二人そろって首を傾げる。

「お前さん、△ンドゥス・ウエトゥス旧世界の人間か？」

「むんどうす…？インド人？」

「ああいや…今で分かつた」

「△ンドゥス・マギクスここは魔法世界。魔法使いの世界。故に魔法世界」

答えた女性にバッファローさんは厳しい目を向けるが、女性は動じた様子が無い。

「この場においてしまった以上、魔法を秘匿するのは難しい」

「それもそうだな。じゃあ、この坊主が無知を装っている可能性は？連合のスパイという線は？」

にゅつと横から女性の顔が現れる。

思わず見詰め合うこと十数秒。

…ぼっ。

一応断っておく。僕はこの女性に惚れたわけじゃあない。

感情を読み取れないその表情に見つめられていると、僕の奥深く…こっ…痒いのに手の届かない心の背中というかなんというか…そ

んな場所をくすぐられた気がただけなのだ！

俗にそれを、新たな趣味に目覚めたと言う。

…はっ！？また毒電波か！！

「嘘は無い…って精霊達は言ってる。それに、魔力も感じない」

「ふうむ。お前さんがそう言うならそうなんだろうよ。とりあえず、ゆっくり話を聞くにしても後方に下がらなきゃ無理だな」

無事に後退できればいいが。

そんな呟きを、僕は努めて聞き流すことにした。

特に何事も無く辿り着いたのは、大小様々なテントが設置されたキャンプ地だった。

紋章が刺繍された旗が多く掲げられ、それぞれテントの入り口には甲冑を纏った番兵らしき兵士。

僕は一際大きなテントに連れてこられたが、その番兵に暫し待つよう伝えられ、行き交う兵士達の邪魔にならないよう三人でテント脇に佇んでいる。

今日の前にある光景は、まるで洋画に出てきそうな前線基地といった具合だが、テントの外にまで溢れている負傷者達の姿がリアルで、非常に重苦しい空気が充満していた。

僕はこの光景に、非常に苦いものを感じている。病院住まいだったのだ。人の生き死にに関しては、常に身近にあった。

しかしそれは、整った医療環境があり、そこから零れ落ちたものに過ぎず、僕にとってここの光景は理不尽すぎる。

「医者の数も、医薬品の数も全く足りておらん…」

僕の表情から何かを読み取ったのか、バツファローさんが暗い表

情で眩く。

「大規模転移魔法での奇襲…成功したと上の連中ははしゃいでいたんだろぅが、現場はこんなもんだ」

「……………」
以前とは逆に、女性が咎めるような目をバツファローさんに向ける。

それは、身元不明で妖しいことこの上ない僕に情報を与えることに対してか、上層部批判とも取られかねない発言に対してか。

それに気付いてか気付かずにか、バツファローさんは深くため息を吐いて言葉を続ける。

「奇襲の成功ばかりに目を向け、補給や退路を疎かにしすぎたツケが俺達の命だ。彼ら一般兵達の命だ」

聞くところによると、転移魔法…ワープのような魔法で敵の拠点に奇襲をかけて一度は陥落させるも、体勢を整えた敵軍の反撃に遭い再度陥落。

現在撤退戦の途中なのだそう。

相手の進撃を遅らせるための反転、殿の為の拠点の一つがここなのだと言っ。

あの戦場に漂っていた悲壮感の正体が、それだったのだ。

「うう…ちくしょう…ちくしょう…」

また一人、担架に乗せられた兵士が運ばれてきて、空いたスペースに寝かせられる。

「おい！その三名！手が空いてるなら傷口の消毒だけでも手伝ってくれんか！！」

声を張り上げたのは、忙しなく患者達の間を行き交っていた白衣の老人。

その頭から覗くネコミミに、軽くカルチャーショックを受けた。

そんな僕を間に挟んで、二人が視線を交わらせる。

二人のうち片方だけでも手伝いに行けばいいんじゃない？と思うが、良く見れば二人とも落ち着きなくソワソワしている。

二人とも行きたいのだろう。

「僕はここでじっとしてますから、お二人はどうぞお手伝いに…」

「いや、それはできん！」

「無理」

見た目通り生真面目な軍人だった。二人とも。まあ、その返答は予想してたけど。

「じゃあ、僕もお手伝いに参加するのはどうでしょう？お二人のどちらかが監視として一緒に手伝ってくれるのは？」

暫く二人して悩んでいたようだけど、最終的には同意してくれた。僕も、こんな場所であじっと見ているだけなんて、人間として恥ずかしいからさ。

と本音の理由を話して。

「ようやっと来たか。ほれ、これが消毒用のアルコールじゃ。数が少ない。くれぐれも無駄遣いするんじゃないぞ」

「了解だ」

バツファローさんが、白衣のご老人から液体の入ったボトルを受け取る。

女性は既に消毒液片手に走り回っていた。

「消毒が終わったら、重症のものから順に治療師を向かわせる。患者の状態は常に気を張っていてくれ」

ところで、とそこでご老人の目が僕に向く。そして頭から足元へと一通り観察。

「お前さん。連合の捕虜か？」

「いいえ、迷子です」

「ふうむ。まあ、おかしなことはするなよ。例え敵であっても、患者に手を出すような外道とは思いたくないからの」

それと、と老人が差しだしたのは、白を基調とした上下服一式。

「そのナリだと患者を刺激しかねん。衛生兵の制服じゃ。着とけ」

おお、と僕は思わず感動した。

制服、制服だよ！あの、集団生活には欠かせない意思統一の象徴
！！

しかも軍服と来たもんだ。これがテンション上がらずにいられようか！

生前、私服を殆ど持たなかった僕は、意気揚々と着替えた。

サイズは少し大き目だったが、それなりに形にはなったと思う。

「じゃあ行くか」

バッファローさんの後に続いて、続々と負傷兵が運ばれてくる一角へと向かった。

「アリア…アリアあ…ごめんよ」

一目見て、それは手遅れだと思った。

右足が無い。

左手の指が全て無い。

わき腹がごっそりと抉れている。

それでも彼は生きていた。

うわごとのように呟くのは、妻の名前だろうか。娘の名前だろうか。

か。婚約者の名前だろうか。

儚く、脆く、その兵士は生きていた。

いつ息を引き取ってもおかしくない。

「治癒魔法を使える奴はまだか！？」

バッファローさんが必死の形相で叫ぶ。

患者が周りに多くいるにも関わらず、そのバッファローさんを咎める人は誰もいなかった。

いや、誰も咎めることはできない。

その場にいた患者含めて全員が、同じ気持ちだったのだから。

「…アリアに…アリアに…」

横たわった兵士が、枕元に立つ僕に向かって手を差し伸べる。

その手の中には、名前の彫られた認識票。

そして。

真っ赤な血に濡れた、小さなロケット。

「……………」
僕の目の前が真っ暗になる。

死を看取るといふのは、こんな気持ちだったのか…。

涙を浮かべ、時には微笑みながら旅立ちを看取っていた看護師達はこんな気持ちだったのか…！

僕は咄嗟にその今にも力付きそうな兵士の手を取る。

認識票もロケットも受け取らない。

「諦めるな！」

ただ諦めるなと叫びながら。

灼熱する頭の片隅で、冷静な僕のささやきが聞こえる。

僕はあるなにも簡単に諦めたくせに。

と。

「うるさい！！」

辺りは一瞬にして静寂に包まれるが、僕のささやきは止まない。

それに反比例するがごとく、僕のボルテージはガンガン高まっていく。

「僕のことはどうだっていいんだよ！僕は今こうして生きている！

！目の前に死にそうな人がいるんだ！過去に死んだ男のことなんか知るか！！」

「お、おい。落ち着け！」

大丈夫。大丈夫です。と僕は肩を押さえるバツファローさんに頷きで返す。

そう、僕は大丈夫だ。落ち着いている。気が触れているかもしれないけど、それは僕の価値観がこの世界に準拠していないからだ。

兵士の手を力強く握ることで意識を保つ。

冷静になって、思い出すのは僕が再現できる力。

英霊エミヤが可能とした、奇跡の力。

破壊の力がほとんどだったと思うけど、中には魔術的な契約を強制的に破棄する力や、並行世界へ続く力も生み出せた筈。

なら、今ここで役立てる力がその中に無いとは言い難い。
思い出す。

検索する。

思案する。

やがて僕の想いに答えるかのように頭の中に浮かび上がったのは、
一本のビジョン。

一瞬、不安が頭を横ぎるが、熱を感じさせなくなった兵士の手
僕は覚悟を決めた。

目の前の兵士から徐々に生気が失われていくのが目に見えて判る。
急ぎ、頭の中のビジョンを明確に思い描き、「出てこい」と力を
込めて念じた。

「っ!?!」

体中を廻る一瞬の電撃。

視界を覆い尽くした一瞬の閃光。

兵士から手を離し、両手を頭上に振りかぶった。

「お、おい…なにをする…?」

僕の手の中には確かな質量。見れば無骨な鉄の塊とも見える、物
騒な得物がそこにあった。

無数の乱杭歯が付いた、禍々しい棍棒。

やがてその重みに耐えきれず、僕はそれを目の前の兵士に向けて
振り下ろす。

ほんの一瞬の罪悪感。

でも、大丈夫と僕は気持を振り絞った。

「やめろ!」

バツファローさんが僕に飛びかかるが一拍遅い。
ぐしゃり。

この手に伝わった感触は、僕への代償である。
理不尽な奇跡の力を得た代償。

決して忘れるな、と。決して誤るな、と。

目の前には、頭を潰された、兵士の死体がある。

「貴様あー!!」

僕はあれよあれよという間に、取り押さえられた。合間に何度も殴られたが、あんなことをすれば当然だろう。そして地面に拘束されて押さえつけられている。

「何故だ！何故あんなことを……!!」

僕はその問いに答えられない。

というか、猿轡を噛ませられていて、物理的にしゃべれない。目の前には、殺気立った兵士達が立ち並んでいる。

「……………」

あの無表情萌えな女性兵士は冷たい瞳で。

白衣の老人もまた黙り込んで僕を見据えている。

それらから目を反らすことは、なんとなく憚られて、ぼくはただ見返すことしかできなかった。

しばらくその奇妙な沈黙が続いていると、兵士達の向こうから明朗な声が響いてきた。

「道を開けなさい」

縦に割れた兵士達の輪から現れたのは、これまた立派な角をお持ちの、体格の良い老紳士。

全員と同じ制服を纏っているが、その胸に輝く階級章、勲章は、その人物がこの場で誰よりも立場が上であることを示していた。

「大隊長殿……」

全員が一斉に敬礼し、それに返礼しながら老紳士は僕の目の前に立つ。

そして僕と視点の高さを合わせるためにしゃがんで、僕の噛まされてきた猿轡を取り外す。

その際が上がった周りの兵士達の制止の声は、片手を上げるだけで止んだ。

「君はいったいどういう意図で……」

老紳士が言葉を続けようとした時、それ遮る声があった。

『びるびるびるびるびるびる』

なんとも場違いで、なんとも間抜けな少女の声。

その場にいた全員が頭に「？」を浮かんだ。

僕はその言葉とはとれない声に、思わずニヤリとする。まさに、

「計画通り！」

内心はドキドキのハラハラだったわけだけど。

騒然とし始めた場の中で、老紳士の瞳が僅かに驚きで見開かれたのは、近くにいた僕だけが気付いただろう。

「君が…彼を救ってくれたのか？」

老紳士が僕の目を真剣に見詰めながら問う。

どうせ隠すことでもないので、僕もその目を見つめ返しながらかみ返した。

「あの…大隊長…一体どういう…？」

バッファローさんの言葉に、老紳士は無言で、先程までスプラッタな死体が横たわっていた筈の場所を指差す。

そこにはいつの間にか無傷の兵士が横たわっており、

「アリアあ…アリアあ…愛してるよあ…」

寝ぼけているのか地で行っているのか、その手に持ったロケットと熱いベレーゼを交わしていた。

『はぁー！ー！？』

僕と老紳士を除く、全員の言葉が一致する奇跡。

「おい！おい！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？」

「ま…まさか…」

バッファローさんが僕の襟首を持ち上げ、ガクガクと揺さぶり、白衣のご老人がフラフラとその兵士へ歩み寄って診察を始める。

老紳士によって指示を受けたのか、無表情萌え女性兵士に拘束をいつの間にか解かれていた。

「君が使ったというあの棍棒…あれはアーティファクトか何かかね

「？」

「あーていふあくとしてというのが何なのか判りませんが、魔法の道具とでも思っていたらだけば」

ふむ、と老紳士は顎に手を当てて一つ頷く。

視線の先には、地面にこれでもか！と突き立った無数の乱杭歯付の棍棒：もといバット。

兵士達が押収しようとしたが、重さが重さなので難しかったため放置されていたのだ。

あれを一時的にはいえ支えることができた僕は、火事場の馬鹿力というものを実感した。

「一体、どういう効果の道具なのか教えて貰っても？」

どうせ多数の目の前で使用したんだし、しかも自由に僕が出したり消したりできるから教えても問題ないだろう。

「ええ、構いません」

『撲殺バット エスカリボルグ』

殴つても絶対に死なない（死ねない）無数の乱杭歯付きのニッケル合金製バット。

重量およそ2t。

撲殺した相手を蘇生させることが可能。

蘇生時に「びびるびるびるびるびるびる」と謎の音声が付加される。

一応、回復アイテムに分類。

ただし、蘇生可能なのは、エスカリボルグで撲殺した相手限定。

体の一部を欠損した相手に使用すれば、欠損部分を復元した状態で蘇生させられる。

「そんな無茶苦茶な……」

「奇跡体験……」

「アンビリバボーじゃ……」

僕もその気持ち、良くわかります。

頭にビジョンが浮かんだ時、まさに僕がそんな心境だったから。

再び騒然とし始めた兵士達を老紳士は再び鎮め、僕に正面から向き合っ。

「君は、私達ヘラス帝国の敵か？」

僕はその問いへの返答を考え、考えた結果出てきた答えは一つ。

「敵とか味方以前に……ヘラス帝国って何ですか？」

「ふ……ふはははは！ははははは！ヴォンヘン子爵！」

「はっ！！」

豪快に笑いだした老紳士の呼び声に答えたのは、あのバッファローさん。爵位制なのね。

「彼を客人として迎え入れようではないか！」

「それは、帝国としてですか？」

「いやいや、私個人としてだ。今の帝国に恩人を差し出すほど私は薄情ではないよ」

ニヤリ、と二人……どころか兵士全員の黒い笑みがシンクロする。

「恩人よ、君の名前を覚えていただけるかな？」

「ぼ、僕ですか？」

全員の視線が僕に集中する。

なんだこの罰ゲーム。

緊張に内心ビクビクだったけど、しかし全ての視線が好意的なものであることに気付いて、だいぶ気が楽になった。

「七瀬 みそぎ。名がミソギ。氏がナナセです」

「歓迎しよう。ミスタ ナナセ。それと、部下達の非礼を詫びよう。

私の名はバハリ・ダール。この地上軍第17大隊の大隊長を仰せつけている」

「ああ……いえ。紛らわしい事をした僕が悪いのですし。それに、こんな怪しい僕を受け入れて大丈夫なんですか？」

「なに。確かに方法はアレだったが、部下の命を救ってくれたこと

に変わりはない。その行いができる君を私は信じようというのだ」
その謙虚なところもまた、信じるに値する、とかなんとか。

信じてくれたお礼というのもなんだけど、僕はこのまま衛生兵として働くことにした。

まあ、僕の力を良いように使ってくれても構わない。

それだけ信じられる人達だって直感したから。

というより、僕の力って、僕自身把握してないんですけどー。けどー。

1 - 1 どちらさま？（後書き）

あとがき・解説

ネギま！読者様ならおわかりでしょうが、主人公が出現したのは、大分裂戦争中、グレートブリッジ奪還作戦後の、撤退する帝国陣営近くです。

実は私、「魔法先生ネギま！」に関しては、学園祭終了までしか読んでいません。

一応、間をかなりすっ飛ばして魔法世界編を読みましたが、詳細な設定（ネギ君が使う戦闘技能とか）はかなり流し読みです。

そのため、ほとんどがオリジナル設定となりそうなので、その点をご理解頂ければと思います。

ちなみにこの作品は、私のリハビリと、ブログの方で書いている同じネギま！二次作品の練習として書き始めました。（あと、転生ってジャンルを書きたかったのもあったり）

プロットを組みながら執筆していますが、着地点（結末）は未定のまま書き進めています。

ですので、どんな作品になるのかは私にとっても未知数…。

せっかく、こちらのような投稿サイト様に投稿させていただいているので、皆様が楽しめる作品にしていけたらと思っています。

これから先も、どうぞよろしくお願いいたします。

1 - 2 おかげさま（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

1 - 2 おかげさま

「リカルド・ヴォンヘンだ。第5偵察小隊の小隊長をやっている。さつきみたいなのは事前に説明してからやってくれ。心臓に悪い」
すまなかつた、と苦笑を浮かべるバツファローさん、もといりカルド小隊長と握手を交わす。

僕が一方的に悪かった筈なのに謝るあたり、日本人に通じるものを感じた。

「ラツチエダール・パロタ。ヴォンヘン子爵の副官。よろしく」

ミス、相変わらず無表情が素敵ですね。と言ったら未確認生物を発見した農場主のような目で見られた。正直堪らない…！

おのれ！毒でん（以下略

「ムルグ・ケサリーじゃ。これから馬車馬の如くこき使うから覚悟せいよ」

そして、このヘラス帝国地上軍第17大隊の医療部隊所属となつた僕の上官になるのが、白衣のネコミミご老人。

「医学の知識はありませんが、精一杯頑張らせていただきます！」
習つたばかりの帝国式敬礼で答える。

カツコイイ…！なんか今の自分に感動した！

「もつと肘を上げる」

ラツチエさんが腰から抜いたサーベルの峰で僕の二の腕を持ち上げる。

なんだろうね、このゾクゾクする感じ。

「ほほ！威勢がいいのう。それと先に言っておくが、お主のアレは最終手段じゃ。患者の状態が使わざるを得ない場合にのみ許可する。良いかの？」

「解りました。僕も…できるならあんなこと頻繁にしたいは無いですし」

「なに、大抵の負傷者は治癒魔法で癒せる。まあ…肝心の治癒魔法

の使い手が少ないのが現状じゃがね」

他の医療部隊メンバーと顔合わせをするということで、リカルド小隊長とラツチェさんとは別れた。

「ナナセ！包帯が切れた！持ってきて！！」

「ナナセ！こっちは脱脂綿だ！40秒で持って来い！！」

「ナナセ！汗！」

「ナナセ！メス！！」

僕の医療部隊での仕事は専ら部隊員全員の助手だ。

助手というか、雑用。使えばしりだけど。

それは僕が入隊したばかりの新人というのもあるし、それ以上に理由となるのが僕の取っている移動手段。

「ごうごうと、まるでローラーブレードを履いているが如く地面を滑るように移動できる。

僕の足は、地面からほんの数センチだけ浮いていた。

まさに、かの重ロボット。

三連星的な。

空を飛べることを思い出した僕だったが、何度飛び上がろうとしても、暫く滞空しては墜落を繰り返す羽目になり、衛生兵の僕が医療部隊に何度もお世話になる結果になった。

罰として科せられた筋トレのお陰で、体に少し筋肉が付いたのは嬉しいけど、なんとも間抜けな話である。

その反省を基に（反省するのが遅すぎる）考えたのが、最初は高度を低めにして徐々に上げていくというもの。

結果生み出された移動手段が、このホバークラフトもどきだった。疲労は少なく、スピードの調節も僕の意味一つっていうんだから、

テンション上がる！

同じことができる魔法使いが他に二人いれば、是非仲良くしたい。「ぼーっとしてんじゃねえぞナナセ！物資が届いたから医薬品受け取ってこい！伝票はムルグ隊長が持つてるからな！！」

「はい！」

ヘラス帝国領が目の前にまで迫っているが、それに比例するかのごとく相手からの追撃は激しくなっていく。

あまりの忙しさにノイローゼに陥りかけたけど、その度に僕を支えてくれたのがリカルド小隊長とラツチエさんだった。

偵察部隊として、殿の更に後方で連合の動きを観測するという誰よりも危険な任務に着いている二人なのに、こんな僕を気にかけてくれて…本当に感謝しても足りない。

なんだかんだと理由を付けて、僕の話し相手になっってくれる。

「ナナセの住んでいた世界の話は面白いからな。魔法の無い生活というのが興味深い！」

「ミソギが使ったあの鈍器…天使の道具…興味深い」

天使は天使でも、頭に『撲殺』の付く天使だったけど。

この頃僕は、ダール大隊長をはじめ、良くしてくれている人達全員に僕自身の生い立ちや、あの場に現れた経緯を話していた。

さすがに、神様とのやりとりのくだりでは誰もが半信半疑だったけど。

それでも僕を精神病院に放り込まず、普段通りに接してくれる人達…いや仲間達に僕は救われている。こんなに嬉しいことは無い。

「それにしても最近、この大隊に限らず撤退中の部隊はどこも雰囲気が悪くてな…生気を感じさせないというか…」

リカルド小隊長もまた、暗い表情で俯く。

激しくなる敵の攻撃。負傷者の数はうなぎ登りに膨れ上がり、悲壮な雰囲気は更に深刻化してきている。

みんな不安なのだ。希望は目の前と一時は安堵した。

しかし敵がそのまま領内に攻めてくる可能性もあると誰もが思い至り、一時希望を抱いただけに余計にテンションの下降は酷いものがあつただろう。

「死ぬのは誰もが怖い。痛いのが誰もが嫌。家族に会いたい。でも家族に被害が及ぶかもしれない恐怖。みんな眠れない」

「士気が下がれば死傷者も増える。なんとか全員を奮い立たせたいものだが…所詮一介の偵察兵だからな。俺は」

「どんよりとした空気が僕達三人を覆う。」

いつも絶対に弱音を見せなかつたりカルド小隊長がこの有様だ。前線は相当酷い有様なだろう。

確かに、ここ最近エスカリボルグの出番がちらほらあつた。後方の医療部隊でも、魔力の使い過ぎで昏倒する治療師が相次いだからだ。

エスカリボルグは体を癒せても（何か違う気がするけど）、心のケアまではできない。むしろ、心を折りかねない。

「アイドルでも慰安訪問すればいいんですけどね」

「アイドル？」

「ラッチェさんが無表情のまま首を傾げる。」

「ううむ…。」

「こつ…キラキラひらひらな衣装を着た人気の美少女とかが、兵士達の前で歌って踊るんですよ」

「それ、効果があるのか？」

「男性兵士には効果絶大ですね！…ラッチェさんやってみませんか？」

こつ、『キラツ』『トグロアニツ！？』

問答無用で振りぬかれたサーベルの峰に打たれて、僕は地面を転がった。

表情を変えないラッチェさんの背後に、大魔神もかくやという巨像の残影を見たのは、きつと錯覚ではないだろう。

…良い案だと思っただけだ。

「て、手加減しろよ？」

流石にリカルド小隊長の額にも冷や汗が見える。僕は痛みで脂汗がダラダラだ。

しかし…アイドルか。

僕は生前、生身のアイドル、というか芸能人というものに興味は無かった。

まあテレビを見ていなかったから当たり前といえは当たり前なんだけど。

それでもアイドルという存在には一際思い入れがある。忘れもしない。

僕が初めてプロデュースした彼女。

彼女のラストコンサート。

彼女は最後に「うどん」を僕にプレゼントして去って行った…。切なく、ほろ苦い思い出である。

その思い出に呼応したのか、一つのビジョンが頭に思い浮かぶ。もしかして、これも投影できちゃったりするの？

ものは試しと。「出てこい！」と力を込めて念じる。体中を廻る一瞬の電撃。

視界を覆い尽くした一瞬の閃光。

手の中に現れたのは、かのアイドルを象徴する逸品。

その真名を『べろちよろ』という。

カエルの顔を模ったポシエットである。

「か…かわいい…」

それを見たラツチエさんの雰囲気が一変。大魔神も一瞬で姿を消した。そして頬をほんのりと赤く染め、なにやら周りを花びらや蝶が舞っているような風情である。

その光景に、僕とリカルド小隊長啞然。

「そ、それは何ですか？」

「こ、これも魔法の道具で。使い方はええと…」

『べろちよろ』

これを身につけ、ハイタッチすると、相手が元気になる。
ただし、相手が異性で無い場合、効果は半減する。

せえの！

「ハイタ〜ッチ！」

「は、はいた〜っち」

戸惑うラツチエさんを、有無を言わせず付き合わせる。

小気味良い手と手を叩く音。

そして効果はすぐに現れた。

「わ、わわ！？」

先程までとは目に見えて、ラツチエさんの顔色が変っていた。

明るい、血色の良い色だ。

そして気のせいか、ラツチエさんの体の周りを風が渦巻いている。

「お、おいおい、どうなつたんだ？」

「すごい。魔力が回復していく…なんだか体も軽い」

こうかは ばつぐんだ！！

あのラツチエさんが笑みを浮かべている。

再び僕はリカルド小隊長と共に啞然となつてしまった。

「なんか…びつくり箱だな。お前。俺にも使えるのか？それ」

「異性じゃないと効果が薄いそうなので、ラツチエさんに使っても

らえば大丈夫だと思います」

ラツチエさんにポシエツトを差し出すと、嬉々としてそれを首に下げる。

なんか、大人の女性がカエルのポシエツトを下げている姿は、異様というか、何というか。

「何か言つた？」

「い、いいえ何も！じ、じゃあさつきと同じ方法でリカルド小隊長に使つてみて下さい」

「む、俺もあれを言わなきゃならんのか…」

本当はそんなことないんだろうけど、あれは一種の儀式、お約束

みたいなものだ。

ラツチエさんも流石に気恥ずかしいのか、ぎこちなく大の大人二人が向かい合う。

「は、はいた〜っち」

「はーいたっち！」

ぱんっ、と再び小気味よい音。そして。

「お、おお？おおお！？おおおおお！ははは！はははははははは！」

血色が良くなるを通り越して、リカルド小隊長の目がキラキラと輝く。口元には不適な笑み。

「湧いてくる！魔力が湧いてくる！！そしてなんだこれは！？戦える！俺はまだまだ戦える！戦いたい！！戦意が湧いてくる！！」

なんか危ない方向へ飛んで行っちゃった。

やっぱり女性が使うと、効果が上がるのだろうか。

「なんじゃお主ら。随分と元気じゃな」

「ちょうど良かったです。ムルグ隊長。実はこの魔法の道具なんですけどね…」

ムルグ隊長の許可を貰い、翌日から『べろちよる』による一大作戦を開始することにした。

医療部隊の中から、若く可愛い女性隊員に『べろちよる』を着用してもらい、治療の合間合間に患者や兵士達とハイタッチしてもらう。

女性兵士には僕が対応した。

悲壮な雰囲気は相変わらずまだ漂ってはいるが、徐々に患者達の間には笑顔が戻ってきている。

そして兵士達皆が声を揃えて言う。

「……まだまだ！まだ終わらんよー！！」「……」

…これは、希望を持ち直したということでもいいのだろうか…。

士気を持ち直したこのハイタッチという行為は、『べろちよる』

が無いにも関わらず前線の兵士達に伝わり、やがてそれは他の大隊にも広まり、前線から帰還した小隊をハイタッチで迎え入れる習慣が生まれたとか。

プラシーボ効果というやつなんだろう。

ハイタッチを交わす時、タンカに横たわった包帯に巻かれた兵士までもが笑顔を浮かべている。

泣きたくなかった。

勿論、嬉しくて。

「やっぱりお前はびっくり箱だよ」

「驚き」

「まったくじゃ」

戦後、『べろちよろ』を使ってハイタッチしてくれていた医療部隊員の女の子が、軍を除隊して本当にアイドルになったのはまた別のお話。

そんなことがありながらも、僕達地上軍第17大隊を含めた撤退中のヘラス帝国軍は、無事国境を越えることができた。

迎えにきた援軍のお陰で追撃は止み、ここに撤退戦は完了したのである。

戦死者数を聞いた僕は、前世で戦争を人の数でしか考えていなかったことを思い出した。

現場を知った僕にはもう、そんな考え方はできない。

ヘラス帝国首都、帝都に帰還した僕等は、どうやら軍のお偉いさんらしい人（この中年男性は驚くべきことにウサミミだった！）の演説を受けた後、解散することになった。

とはいえ、僕に行く場所は無いわけですが。

しかも一文無しというコンボ付き。

誰かに頼ろうかと周りを見回すけど、出迎えに来たらしき家族達との感動の再会場面で溢れていて、どうにも言い出せそうな雰囲気ではない。

そんな先行きの見えない溜息を、演説のあつた軍の訓練場の門前で吐いていると、自然と人の波が左右に分かれて一人の老紳士が近づいてきた。

非常に見覚えのある光景。

我らがダール大隊長である。

「ナナセ衛生兵。私の屋敷に招待したいのだが、いかがかね？」

「是非！」

思いがけない申し出に、僕は即断で承諾した。

ダール大隊長は伯爵様らしい。となると、その屋敷は豪勢なんだろうなあと夢が広がる。

予想に反して、ダール大隊長の屋敷は帝都の郊外にこぢんまりと佇んでいた。

しかし決してみすばらしいということは無く、重厚な造りで、質素さが逆に存在感を放つ。

玄関をまたいですぐ、品の良いご婦人と、数名の侍従に出迎えられた。ご婦人は大隊長の奥様だそうだ。

「ふふ。バハリが久しぶりにお客様をお連れするといつから、今宵の食事は私が腕によりをかけて作りましたのよ」

夫の生還が嬉しいのもあるだろう。奥様は嬉しそうに料理の一つ

一つを説明してくれる。

見たことも無い料理の数々。

驚かされたのが、マンガ肉だ。

そう、マンガ肉である。

あの一本の骨を覆った肉の塊。その丸焼きが出てきたときには、僕は神様に最大限の感謝を捧げた。

これほど感動した出会いがあるだろうか！？

奥様曰く、トカゲの肉だそうだが、これだけ巨大な体を持つトカゲと言えば、アレしか思い浮かばない。

なんとという異世界。

なんか目から鱗が落ちるような思いと共に食事を終え、僕は大隊長の執務室へと案内された。

「君を招待したのはほかでもない。私から君へ恩賞を差し上げようと思っただけね」

「恩賞ですか？」

大隊長が僕に差し出したのは、紙の帯で留めてある折り目のないお札の束。

受け取ったはいいものの、僕の目は点になったまま札束から離れない。

「君の働きで私達は大いに助かった。本来なら国から恩賞を下されるべきなのだろうが、今は戦時中。君を国に報告すれば、実験動物にされかねない。戦争は人権という観念を人々の中から容易に失くさせるからね」

「確かにそれはありそうです。でも僕はお手伝いをしたただけであって、保護して頂いたことに感謝はすれど、恩賞を頂くようなことは何もしていません」

「君は当事者だから分からないかもしれない。でも隊全体を見ていた私には解るのだよ。君が行ったことが我が隊……いや、最終的には他の隊の死傷者が増えることすらも抑えてくれた」

君の意思を離れて広がったことだがね、と大隊長は右手を頭上に掲げる。

その仕草は、あの撤退戦の後半から至る所で見られた行為。

僕も右手を頭上に翳し、大隊長の手を軽く叩く。

「ハイタッチ、だったかな？」

照れくさそうに笑う大隊長の笑顔が印象的だった。

「ジンクス、とでも言うのかな。兵達の心の支えになっていたよ。だから、ほんの僅かかもしれないが、そのお金は取っておいてくれたまえ」

遠慮しすぎるのは相手に失礼。

僕はその言葉に甘えることにした。

「ところで、我が地上軍第17大隊は敗戦の責任として規模を縮小の後、北方軍へと編入されることになった」

トカゲのしつぽ切り。

よくある話であり、誰もが判る事だ。

「このまま我が隊とともに来てくれるならこのまま個人の傭兵として雇おう。軍を抜けるのであれば、生活を援助しようと思う」

僕の返答は考えるまでも無い。

「連れて行って下さい！」

言葉だけでなく、帝国式の最敬礼で僕の意味を示す。

「了解した。…ありがとう、ミスタ ナナセ」

今ではもう、あの大隊が僕の居場所だから。

ヘラス帝国軍北方師団。通称北方軍。

現在のメセンブリーナ連合との大分裂戦争の前線から最も遠ざかったヘラス帝国北方の離島領土に駐屯する方面軍であり、時折出現

する魔獣退治をする以外は周囲の治安を維持するべく警備と訓練に励む師団である。

よつするに、暇な軍人達だった。のんびりとした牧歌的な基地風景に着任当初は呆然としたほど。

優秀な軍人はこぞつて前線に送られている為、現在は能力の（魔法とか）ランクが劣るとされた軍人達が集められていることも、それに拍車をかけている。

愚連隊だとか、前科持ちの危うい軍人達が集められている…というわけではなく、良い意味で个性的な面々が集められているのだ。

个性的な軍人って、上官とそりが合わないのがデフォルトだったりするし。

今日も今日とて午前中に筋トレやランニング等で体づくりに励み、午後は薬品倉庫及び食糧庫の整理に時間を費やす。

軍人だから格闘術の訓練もあるのではと期待していたけど、そこは魔法戦闘がメインの魔法世界。簡単な護身術は一月に二度か三度あるくらいだった。

というわけで、魔法が使えない僕が参加できる正規の訓練は数少ない。

しかし、そんな僕でも参加できる魔法の訓練が存在した。

それが、空中機動戦闘訓練。

『おおおい！ミソギい！！今日も一発勝負しようぜ！！』

訓練場の片隅でストレッチしていた僕は、大音量で響いてきた声に冷や汗を流しながら恐る恐る上空を見る。

そこには、僕の頭上に滞空する、巨大な魚の姿。

『帝国軍北方艦隊所属フリゲイト“オポチュニティ”！！空中機動戦闘訓練の実施許可を求めろ！！』

『許可します』

ツーといえばカー！。巨大な魚の形をした戦艦からの大音量の申請に、基地管制塔から大音量で許可が下される。

即決で。

本来なら書類やら何やらで面倒な手続きが必要だと言つのに。この基地らしいといえばらしかつた。

『とうわけでミソギ・ナナセ！勝負だ！！』

「なんでやねん」

かくして一対一の、空中タイマン戦が始まつた。

正確には、一隻対一人の。

『直僚部隊射線開け！…精霊砲撃てえ！！』

眼前に飛び込んできた大質量の光を、強引な横ロールで回避する。わざわざ相手は船外マイクで指示を叫んでいるので、来ると解れば回避も可能だ。

ただ、周りを飛びまわる飛行魔法使の放つ魔法の射手でかなり回避先の空間が狭められた為に満足に距離を取ることが出来ず、横を通過しただけでも関わらず制服の左腕を焦がす。

「こ、殺す気かあんたはっ！！」

『ふはははは！安心しろミソギ。威力はいつものように最小限に落としてやってる！！』

目に入った飛行魔法使を手に持ったライフルで牽制しながら戦艦の懷に飛び込もうと狙うが、相手も慣れたものでフォローしあいながら僕への包囲網に穴を開けない。

ちなみに、今僕が使っているライフル。これも実は投影品だったりする。

『ビームライフル』

謎ビームが発射される銃器。

魔力でも気でもない。謎の熱量。

戦艦のビーム砲に匹敵するとかしないとか。

衛生兵とはいえ前線に出て活動することも当然あるので、何か護

身用に武器になるものを検索した結果、これを見つけた。

見た目はまさに、あのビームライフルである。

白い悪魔的な。

見える！とこの闘いに内心興奮しながら回避運動に励んでいると、ほんの僅かに包囲網の綻びを見つけた。

一人だけ僅かに動きの鈍い魔法使いがいる。

伊達に僕も訓練し続けていないのだ。

迷わずその綻びに飛び込み、一気に加速して戦艦へと突っ込む。

『対空魔法隊一斉射撃！！』

「いつ！？」

その瞬間、僕は嵌められたことに気付いた。

戦艦の看板上に整列した魔法使い達から雨あられの如く浴びせられる魔法の光。そして横から下から上からも、先程まで僕を包囲していた魔法使い達から発せられる魔法の光。

「なんとおおお！！」

怖くて閉じそうになる臉を必死に開き、なけなしの集中力を振り絞って弾幕の穴を探し回避し続ける。

相手が速射性を重視して追尾性を捨てていたからこそ出来た芸当だ。

しかしそれでも弾幕が止むことは無く、上手く戦艦に取りつけな

い。

そのギリギリ感に、僕の中の何かが切れる。

「いつもいつも、脇（艦橋）から見ているだけで、人（僕）を弄ん

で！」

『勝てると思うな？ 小僧オオオオオオ！』

何か変なスイッチがお互い入っていた。

「許せない…俺（僕）の命に代えても…体に代えても…こいつだけはー！」

弾幕の隙間から僅かに覗いた艦体に向けて、ライフルを二射。

このライフルは連射ができない代わりに、何故か魔法の障壁を軽

々と突破できるという、ある意味凶悪な性能を持つ。(その代わりに、五発前後打つと銃身が溶け出すという、妙なリアリティもあるけれど)

これはあくまで訓練なので、非殺傷設定…人に当たっても服に軽く焦げ目が付くくらい…で使用している。

ただ、相手が戦艦なら威力は上げてても問題ない筈だ。というがこの現状で低威力で済ませている僕が馬鹿みたいだ。

僕の放った謎ビームは戦艦の障壁を軽々と無視し、艦尾部分に直撃した。

ドゴン！と強烈な打撃音。

『オポチュニティ小破。戦闘続行に支障無し』

淡々と判定する管制塔。

『こいつ………なんだ？』

「分かるはずだ、こういう奴は生かしておいちゃいけないって…！分かるはずだ、みんな(管制官)、みんな(管制官)には分かるはずだ！」

目の前に迫った魔法の射手に、僕は一瞬の迷い。

回避しきれず、肩に直撃して僕はバランスを崩した。

『あせりすぎよ、だからいけないの』

何故かこちらに変なスイッチが入ってしまった様子の管制塔。

『パワーがダンチなんだよ。そういう時は、どうすればいい？』

そして横から割り込む、さっきまでとは別の管制官の声。

「…俺(僕)の体を、みんなに貸すぞ！」

とは言っても結局僕が必死になって弾幕を回避していく。

そろそろ僕の集中力も限界だ。

次で決めると腹をくくって速度を上げる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

『オポチュニティ、動け！オポチュニティ！なぜ動かん！？』

戦艦なんだから、そんな素早く動ける筈もなく。

「ここからいなくなれー！」

ライフルの銃口を、ようやく視界に捉えた艦橋に向ける。
が、次の瞬間には追尾型に切り替えられた魔法の射手に僕は滅多撃ちにされていた。

「私（僕）だけが…死ぬわけじゃない…責様の心も、一緒に連れていく…オポチュニテイ…」

『み、ミソギ、やったのか？光が…広がっていく…？』（錯覚です）

僕はニヒルな笑みを浮かべて、墜落した。

そもそもの始まりは、定期的に開かれる模擬艦隊戦だった。

地上軍、しかも衛生兵でしかない僕がその訓練に参加させられた理由は、言わずもがな。空を飛ぶことができたからである。

空を飛ぶ訓練ができると前向きに考えた僕が馬鹿だった。

何故か攻撃部隊に所属させられ…前世風に言うなら艦載機…突撃を指示される始末。

武器にと投影したライフル片手にあたふたと戦場をフラフラ迷走し、上官役に怒鳴られ必死になって辿り着いたのが、飛行戦艦の構造上の弱点となる艦底部分。

僕のライフルが障壁を気軽に無視して艦底に直撃し、大破判定で脱落した戦艦こそが、フリゲイト“オポチュニテイ”。

そしてその戦艦の艦長が、正座して基地司令官に説教を貰っている僕の隣で、同じく正座する空軍制服の男。

エドガー・ヒューヴァイン。

体を小さくして説教を聞く姿は愛嬌に溢れているが、大の大人である。

「馬鹿騒ぎをするなどは言わん！だがな、お前らの毒を管制塔に広めるな！！」

「それは僕達のせいじゃ無いかと…」

「基地周囲マラソン二十周！！」

「怨むぞ…ミソギ…」

十周目、そろそろきつくなり始めたかな？という頃に、隣を走るエドガーが突然身を悶え始める。

「くう〜！いい歳になって持久走は堪えるなあ〜！しかし！十勝三敗の戦績を思えば清々しいものよ〜！」

僕の三勝は、エドガーが機動戦力への対抗策を確立できていなかったからこそ勝利だった。

「いい加減、根に持つのは止めて下さいよ」

「何を言う！お互い訓練になって万々歳だろうが！しかもあんなに面白いこと止められるかって！」

「艦橋から指示出してるだけのくせに！」

裏拳を叩きこむも、あっさりと受け止められる。

「ふははははは！敗北の後の栄光！気持ちいい！気持ちいいのう〜！」

いつか、いつか必ずビームライフルを全力で叩きこんでやる！残り十周を不毛な争いと共に終え、基地入り口に戻ってくると、なにやら門兵が困り果てていた。

二人の門兵の前には、頭からローブですっぽり覆い隠した小人二人組。

子供が駄々でも捏ねているのだろうか？

「よう、どうしたお前ら」

元来、エドガーは面倒見の良い性分で、そこにトラブルの臭いを嗅ぎ取ると自分から足を突っ込んでいく。

「あ！ヒューヴァイン卿。ご苦労さまです〜！」

「おう！それで、何かトラブルか？」

エドガーが小人二人組に目を向けると、小人はバツサリとローブを脱ぎ捨てる。

ローブの下から現れたのは、やはり子供が二人。

片や髪を短く切り揃え、子供用スーツを身に付けた男の子。

そしてもう片方は、頭から角を生やした色黒の肌を持つ女の子。

女の子はどこか尊大な仕草でエドガーを見上げる。

「おぬし、爵位持ちということとは、隊長格か？」

「まあ一応、空中戦艦の艦長をやってる。そういうお嬢様はどこぞ高貴な出とお見受けするが？」

「ほほう、わかるか。妾はヘラス帝国第三皇女、テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア」

「て、テオドラ様！まだ彼らが…」

「タカミチは黙っておれ！妾の高貴さを一目で見抜く眼力。信用に値する！」

一体、さっきのやり取りのどこが信用することに結びつくのか小一時間問い詰めたい。

しかし、相手は（自称ではあるが）第三皇女。門兵とエドガー、そして僕は慌てて頭を垂れる。

少々疑わしいが、その子が特徴的なヘラス族だった為、本当だった時が怖い軍人四人だった。

どうして皇女様がこんな場所に子供の従者一人だけ連れて、という疑問。

「時間が無いのじゃ。皆のもの面を上げよ。艦長、その方の名は？」
「ヒューヴァイン侯爵家当主、エドガー・ヒューヴァインであります」

「うむ。ではヒューヴァイン、妾を北方軍司令官の許へ案内せよ」
「…どうする？」

（どうするつたって、エドガーがこの中で一番地位が高いんだしさ。僕は判断を任せるよ）

（ナナセ衛生兵に賛成であります）
と一秒にも満たない時間でアイコンタクト。

「畏まりました。ではまず早急に連絡を取りますので、門兵の詰め所でお待ち下さい」

「うむ…しかしなるべく早く頼むぞ」

（ナイス判断だエドガー！）

(ひゅーう…もしかして今の俺、超カツコイイ?)

(きゃー！侯爵さま結婚してー！！)

視線会話を繰り返す僕達を、胡乱なものを見るような視線を向ける少年が印象的だった。

1 - 2 おかげさま（後書き）

あとがき・解説

最後の最後にようやく原作キャラ登場。

今回は本当に自重せずパロディネタを織り込みました。
有名どころばかりですので、大抵の方は分かるのではないかと。
というより、こういったパロディネタをやりたかったが為に書き始めた作品だったりします。

それと、主人公が使っている無限の剣製もどきですが、どちらかといえばドラ もん的な力です。
ですので、この作品の主人公はフェイカーではなく、サモナーといった感じでしょうか。

最後に。

2話目ですが、このような雑作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

ちなみに、私はパプテマス・シロッコが大好きです。
ちなみにちなみに、作中のアイドルプロデュースの話は、実体験だったりもします。

1 - 3 なにさま？（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

1 - 3 なにさま？

「君の意見を聞いてみたい」

目の前のソファに浅く腰掛けたダール“中隊長”は、若干戸惑った表情を浮かべていた。

ちなみに、僕の所属はヘラス帝国軍地上軍第17大隊から、ヘラス帝国北方師団地上部隊第403中隊となっている。

隊長は、大隊長から降格したダール中隊長。僕の上官は代わらずムルグ隊長。リカルド小隊長とラッチェさんは北方軍に編入されず、今も前線で戦っていることだろう。

「僕にですか？」

ダール中隊長の執務室。

安物のソファの筈なのに、ダール中隊長がいるだけで高級感を醸し出し、妙に落ち着かない。

これが大物の貫禄というやつなのだろう。

「うむ。テオドラ皇女がこの北方軍基地にいらしたのは知ってるね？」

「ええ」

門兵詰め所に司令自らがわざわざやって来て、恭しく基地内部へと案内していった。本物の皇女だったのだ。

「司令と共に皇女殿下から聞かされた話なのだがね、いまいちリアリティに欠けたような話だったものだから、異なる価値観の世界から来た君の意見を聞きたいのだよ」

私が若くないからかもしれないが、と苦笑と共に、その皇女殿下から聞かされた話しとやらを僕に語る。

その内容は、皇女殿下の主観入りで回りくどいものだったが、一言で纏めるところだった。

『此度の戦争を裏で動かしていた秘密組織“完全なる世界”^{「スモエンテレケイア」}は、戦

争のドサクサに紛れて“世界を無に帰す儀式”を発動し世界を無にしようと企てている』

というもの。

それを聞いた僕はまず真っ先にこう思った。

「ありがちなストーリーですね」

「ほう…私にはあまりにも突飛なものに感じたよ。君のいた世界ではよくあることだったのかね？」

「いえ、逆です。『世界を無に』とか『世界征服』とかありえないからこそ、空想の中でお約束のように使われてきたシナリオです」

裏で糸を引く秘密組織とか、あまりにも痛い！痛すぎる！！

「それが実話だとするなら、僕も突飛に感じますけど。そもそも魔法の存在自体が僕にとっては突飛なものですから、今更です」

「ははは！成る程な。ということは、君の感覚からするとこの話は『有り得なくは無い』ということかな？」

「まあ、そんなところです」

僕の、あまりにもあっけらかんとした意見が面白かったのか、ダール中隊長は強張っていた両肩から力を抜く。

そして浮かべるのは、いつも見慣れた余裕を感じさせる微笑。

「秘密組織の存在自体は証拠があった為、明らかだったのだ。しかし『世界を無に帰す儀式』となると、少々信じれなくてね。そもそもその意図がわからない」

戦争で儲けようとする死の商人達なら、なるべく戦争を継続させようとする。

人種を問題視する選民思想者達なら、世界全体を消し飛ばそうとする筈は無い。

となると、漁夫の利を狙う第三勢力という線が濃厚だが、何故突然世界を無に帰す、なんて出てくる？

…変な電波でも受信したのだろうか？

そんな連中に右往左往させられるこの世界が不憫で泣けてくる…

僕の生きる世界となっただけに。

「皇女殿下は我々北方軍に秘密組織本拠地への攻撃参加をご要望だ。連合と手を組めとおっしゃる。例えその秘密組織がこの世界共通の敵だとしても、ついさっきまでお互い殺し合ってきたのだ。そう簡単に割り切れることではない」

僕も同感だ。

元々この世界の人間でなかったとしても、今はもうこの国に入れ込んで。

人類共通の敵が現れた！仲が悪かった国々が手と手を取り合って立ち向かう！！そして敵は滅び世界は仲良く平和を取り戻しました！！！！

なんて熱血アニメな展開を現実にやろうだなんて、僕達の感情を馬鹿にしているとしか思えない。

「しかし、この世界が滅びるといふなら。民にまで被害が及ぶといふのなら。我々軍人は進んでこの感情を押し殺さねばならぬのだらうね」

「感情に折り合いをつけるなんて、簡単な事じゃないですよ」

「まったくだ」

自分の中で燻る感情に思わず苦笑してしまう。

僕もだいぶこの世界に馴染んだもんだ。

「司令も半信半疑だったようだ。この件が『有り得なくは無い』のであれば、皇女殿下の要請は断るべきではないだろう。私からも具申してみるよ」

ダール中隊長がソファから立ち上がるのに合わせて、僕も立ち上がる。

「ああ、それと。もし皇女殿下に従って出動するならば我々地上部隊は基地に居残ることになっている。だが空軍のエドガー君がね・

・

その名前だけで僕は嫌な予感を感じた！

エドガーが言い出しそうなことは大体予想できる！！

「君が欲しいそうだな。おっと、男色の意味ではないよ?」

「くっ!? 中隊長…やるようになりましたね…!!」

「はっはっは! 伊達に君達の訓練を見てはいないよ。それでどうするかね? もし連合と戦うことになったならば、君は切り札となるそうだな」

「あいつはどういう目をしてるんですか…・買ひ被りにも程がありますよ」

「ただ単に空を飛べて、ちょっと反則気味な武器を持てるというだけなのに。」

「経験も実力も全く足りていないのは、模擬戦の結果からして明らかで、それは対戦しているエドガーが一番良く分かっている筈だ。」

「私としては、君にこの世界のあらゆる場所を見てもらいたいという気持ちがある。この世界の歴史を目撃して欲しいというのよね」

「中隊長も変な期待をしないで下さいよ。でも、まあエドガーとは浅からぬ縁がありますので、付いて行きたいと思えます」

「世界で暗躍した秘密結社というのも興味あるしね。」

「分かった。では一時的に空軍への出向を命じる」

「了解しました!」

『あきらめるなアルビレオ・イマ!!! この愚か者が』

『こ…広域魔力減衰現象を確認! これまでに観測されたものの比ではありません!』

『世界を呑み込む勢いです!』

『アレは…メガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦!?』

『こちらスヴァンフヴェイト艦長リカード! 助太刀するぜ! 世界のピンチだ敵も味方も関係ねえぜッ!』

国際救難チャンネルから聞こえてくる通信は、相当賑わっていた。そんなお祭り騒ぎを、僕とエドガーはオポチュニティ艦橋の片隅で、お茶を飲みながらぼんやりと聞いている。

「そのとおりじゃ！ハハハハッ！皆の者、力を合わせてあの光球を止めるのじゃ！」

『ハハッ姫様！！』

というのも、艦の指揮、艦隊の指揮をテオドラ第三皇女殿下がノリノリで取っているのだ。

北方艦隊の旗艦からではなく、このフリゲイトから。

「どうして・・・こうなつた・・・」

「ざまみろ」

艦橋にいるテオドラ皇女とタカミチ少年以外全員が苦笑する。

『全艦艇、光球を取り囲み押さえ込め！！魔導兵団！大規模反転封印術式展開！！』

この場を集った全戦艦の看板上に並んだ魔法使い達が魔方陣を形成し始める。

空中に浮かんだ建造物：墓守り人の宮殿：の周囲を取り囲むように広がる幻想的な光景。

『全魔法世界の興廃この一戦にあり！各員全力を尽くせ。後はないぞ！！』

戦いはクライマックス！

物語はフィナーレへ！！

ところがどっこい、そうは問屋が卸さない。

艦橋の観測兵が声を張り上げる。

「墓守り人の宮殿から敵影多数！！召喚された魔族と断定！！」

「な、なぬ！？ええいこんな時に！！」

うるたえるテオドラ皇女とは反対に、目の前の戦闘^{バカ}狂がニヤリと口を歪める。

手に持ったカップをテーブルに叩き付け、颯爽と立ち上がる姿は、まさに真打登場。

観測兵以外の全員の視線がエドガーに向けられる。

「よしお前ら！戦争をしにいくぞ！！」

「ひゅ、ヒューヴァイン？」

「あ、皇女殿下と少年は向こうのテーブルへ」

どうぞどうぞとエドガーに背を押されて、僕の目の前に空いた椅子にテオドラ皇女とタカミチ少年が腰掛ける。

その表情は思いつきり戸惑っていた。

そりゃあ、あの戦闘^{バカ}狂を見たら誰でも戸惑う。目が異様なほどギラついているんだもの。

とりあえず空のカップを取り出して、お茶を注いでおく。

「観測！他国の艦隊の状況はどうか？」

「既に戦闘を開始しているようです。戦況は有利！」

「オーケー。通信！旗艦スピリットへ打診！『ワレ敵ヲ殲滅ス 作戦ヲ続行セヨ』」

「『ワレ敵ヲ殲滅ス 作戦ヲ続行セヨ』！」

戦闘となって艦橋の人員全員が活き活きと表情を輝かせ始める。

それには流石の僕も引いた。

僕との模擬戦の時も、こんな感じだったのだろうか。

「か、艦長！テオドラ皇女様も乗ってるんですよ！？」

ようやく再起動したのはタカミチ少年。

だがしかし、その言葉に対する返答は、エドガーにとっては簡単なことだ。

「ハッハー！この艦はフリゲイト！戦闘こそがその存在意義だ少年！！なに、皇女殿下の座乗艦が最強であることを示しましょう！！」

「…そ、そうじゃな！！妾の乗る船が最強でないはずが無いわ！やっつてしまえヒューヴァイン！！」

「御意！！」

タカミチ少年が絶る様に僕を見る。

止めてくれ…僕の胃を痛めないでくれ…っ。

「ミソギ！出番だ！！」

「……へ？」

「作戦は簡単だ。オポチユニティが帝国北方艦隊に近づこうとする敵を落す。お前がこの船に近づく敵を落す」

「ちょ、ちよつと待った！直僚部隊がいるじゃないか！？」

「あいつらには艦隊をカバーさせる。艦隊の魔法使い達は全員、この封印術式展開に出払ってるみたいだからな」

くっ…なんて後先考えない作戦だ！！

時間は刻一刻と過ぎ去る。駄々を捏ねている暇は無いか。

「分かった。だけど僕は時間を稼ぐのが精一杯だからな！」

「お前なら軽い仕事だとも」

「僕は衛生兵だっ！！」

立ち上がり、急いで艦橋を後にする。

投影するのはビームライフル。体は既にホバーを開始していた。

「ヒューヴァインよ…あやつ一人で大丈夫なのか？」

「十分な実力を持っていますよ。何度も手合わせしている自分が保証します！」

「しかし、衛生兵と言っておつたが」

「優れた洞察力と集中力、姿勢制御に裏打ちされた回避能力。一瞬の機を逃さない判断力。幸運すらも呼び込んでいるような奴です。

衛生兵に留めておくのは勿体無い」

「そんな兵が辺境任務とはのう」

「ま！俺には勝てませんがね！！うははははは！！」

なんか一瞬イラッと来た！！

「落ちろ…蚊トンボ！！」

作り物みたいな顔を持つ悪魔の顔を撃ち抜く。

死体は残らず、霧のように消滅していく。

召喚された悪魔は死ぬのではなく、魔界へ還るのだったか。

不謹慎かもしれないけど、だいぶ気は楽だ。

「そこっ！！」

空中での機動戦は、背後を取られることを一番に気をつけなければいけない。相手は多数、僕は一人だから尚更。

オポチュニティ看板上からの援護射撃があつて、なんとか有利に戦えている。

そして、悪魔にチームワークが無いことも幸いした。

オポチュニティ直僚部隊との戦いに比べれば、なんと軽いことだらう。

それでも、相手の放つ攻撃は必殺の威力を持つ。

「胃の痛みが最・高・潮である！！」

八つ当たりのようにビームを悪魔に突き立て、限界の来た銃身を投棄し、すぐさま新たなライフルを投影。

この調子でいければ！そう思った瞬間。

「！？」

遠くに見えた黒い点。

嫌な予感に従つて、全速力でその空域から移動した。

するとどうだろう。僕のいた空間を何条もの黒い光が薙ぎ払う。

発射地点に目を凝らせば、見るからに今までの悪魔と一線を画す造形の悪魔。

その蝙蝠のような翼の内側に幾重にも魔法陣が浮かび、収束する黒いエネルギー。

恐ろしい速度で一直線に僕を目指して飛んでくる！？

背筋を伝う冷たい汗。

「この戦いは我ラの負けデあるウ。だが…ダタでは還れヌ！付き合つてもらうゾ人間！！」

「拒否は…できないんですよね…」

「当然！！」

悪魔がその翼を大きく広げ、黒い光を一斉射撃。

牽制だったのか、回避した僕に追撃は無い。

その代わりに、いつの間にかその手には長大な剣。
その剣を頭上に大きく振りかぶり、悪魔の口ばパツカリと開き震える。

「人間ト八面白いナ！！何故自らノ世界を無くそうとスル！？」

一瞬の速度で踏み込んだ悪魔の、豪速での唐竹割り。

「くっ！？それが人間の業ってやつなんだろうさ！」

横にすっ飛んで避ける。

予備動作があつたからこそ予測できた。

こいつあ…やべえぜ、と内心ハードボイルドを決めるが、実情はがくがくだ。

体勢を整えるのを後回しにし、射撃。頭部を狙うが、しかしそれは悪魔の左手に阻まれる。

出力を最高に上げているにも関わらず、鎧のような外殻に焦げ目を作るだけに終わった。

悪魔は翼に黒色光を湛える。

「人間のエゴとハ、かくモ美しいモノな力！！」

次々と襲い掛かる黒い光を、その発射角を見極めながら回避。

発射と収束の僅かな間。それを見計らって射撃。

「…エゴの塊の分際でよく言う！！」

しかしそれは、無造作に振るわれた剣に叩き切られる。

「ハハハツ！違いナイ！！」

横一文字に構えられる剣。

暴風が僕を襲う。

振るわれた剣が生み出した豪風だ。

きりもみしながら僕は高度を落とし、艦隊のうち一隻に叩きつけられてようやく止まった。

「ぐっ！？」

咄嗟に受身を取れたものの、呼吸が詰まる。しかし外傷を負わなかったのは幸いだ。

安堵している暇は無い！オポチュニティ護衛が難しい時に、あの

悪魔の力に巻き込まれて他の船が沈んでしまったら本末転倒。笑い話にもならない。

「デタラメな…」

船の装甲を蹴って、一気に加速。

突撃しながら三連射するも、悪魔はヒラリと回避してしまう。

銃身が溶解し始めたライフルを投げつけ、それを悪魔が叩き切る隙に新しいライフルを投影。

「私としテハ、人間にはコノママあり続けテほしいものだ」

「じゃあとつとと還れ！！」

さらに射撃しようとした僕へ、金属片をつなぎ合わせたような悪魔の尻尾が唸りを上げながら襲い掛かってきていた。

その尻尾を、とっさに投影した武器で切払えたのは奇跡だった。

左手に収まった円筒形の物体。

『ビームサーベル』

謎ビームが筒状に固定され、サーベルとして扱える刀剣類。

「…そろそろ、この能力のデタラメさを考えた方がいいかもしれない」

しかし今は心強い！

これでなら、あの剣を切断できるかもしれない。

接近戦を挑むべく、射撃で牽制しようと思悪魔を見て、その様子に一瞬戸惑う。

悪魔は、切られた尻尾を押さえて悶え震えていた。

・・・痛がつてるのだろうか？このチャンスは逃せない。

加速。

咄嗟の砲撃は危険な為、回避運動を取りつつ突っ込む。

慌てた様子で悪魔が全身を振るわせた。

「コノ痛み！気持ちいい！楽シイなあ、人間！！」

「変態だー！？」

加速と共に袈裟斬の斬撃を僕に放つ。

その速度は今までの比にならない。

咄嗟に構えたビームサーベルが、期待通りに悪魔の剣を切断する……が。

「っああああ!？」

半分の長さとなった剣は切っ先を失ったまま豪速で振るわれ、僕の左二の腕を切り裂く。

鋭利な痛みには体が硬直したところへ叩き込まれた蹴り。

空を転がり、ようやく体勢を整えた時に見たのは、大質量の黒色光が解き放たれる瞬間だった。

「人間の割り二八、良くガンバツた。ダガ、その程度デ八私二八届か又」

「はは……前の僕なら諦めてたところだけどさ」

墓守り人の宮殿を取り囲んでいた魔方陣が強烈な輝きを放ち出す。

「何!？」

「元々、僕は時間を稼ぐだけで良かったんだよ」

「私ヲ現界していタ魔力が消えてイク……時間か」

悪魔の体が透けていく。だが、その力を増していく黒色光に嫌な予感が止まらない。

「フハハハハ！次は万全ナ状態で殺してヤロウぞ！これは土産ダ！

受け取レ!!!」

解き放たれる豪光。

僅かな隙間すら見当たらない黒い柱に、僕は成すすべも無く飲み込まれた。

結論から言うと。僕は左腕の切り傷と全身打撲だけで済んだ。

魔力が失われていく中で放たれた悪魔の攻撃は、僕に到達する時には既に力を失いつつあったのだ。

しかし、あの恐怖は僕に植え付けられた。

故に、悪魔のお土産。

これほどありがた迷惑なものはない。

オポチュニティの船室で包帯まみれになりながら、僕は疲労で動く元気も無かった。

「即日停戦合意で、即記念式典だよ。上の連中の考えることは分からん」

そこへ同じく包帯まみれになったエドガーがやってくる。

皇女殿下を乗せていたにもかかわらず、一隻で無茶をしたことに対して司令から厳重注意を受けたらしい。拳的な意味で。

「英雄サマの受勲式もあるらしいね」

「ははっ！英雄なんてプロパガンダの道具だつての」

二人揃って外の喧騒に溜息を吐く。

僕たちヘラス帝国北方艦隊は、式典に参加するテオドラ皇女の護衛としてそのまま、この決戦の舞台となったオスティアに駐留していた。

ただし、式典に参加することも、上陸することも許可されていない。

外の祭りを指咥えて眺めるしかないのだ。憂鬱にもなる。

「しっかし、どうして式典をこんな離島でやるのかね。なーんか、市民もここに誘導されてるらしいぜ」

「臭うね」

「消毒用アルコールで俺は酔いそうだ」

「…はあ」

次の日、祭りとは明らかに熱気の色が違う喧騒で目が覚めた。それどころか、体の奥底を揺るがすような轟音が響いてくる。

『総員第一級戦闘配置！総員第一級戦闘配置！』

艦内に響いた放送にただ事ではないと確信する。
急ぎ着替えて、僕は艦橋へと走った。

「対抗呪文の塗装はまだか!?」

「十分掛かると!!」

「五分で済ませろ!!」

「艦隊司令部からは何も言ってこないのか!?」

「いえ何も…いえ!来ました!!」避難民ヲ收容シ、速ヤカニ離脱セヨ」

「空中王都の崩落拡大中!!本艦障壁、出力上がりません!!」
修羅場と化した艦橋から外を見れば、そこには終末が広がっていた。

豪壮を極めた空中都市が、粉塵を巻き上げながら崩れていく。

上層に浮遊していた島から降り注ぐ大小の浮遊岩が降り注ぎ、白亜の建物達の至る所から火の手が上がっていた。

「エドガー、コレは一体どういうことだ?」

「ハンツ!世界を救う代償の魔力消失現象だそうだ。俺達が常に待機させられていたのは、この為だったのだろうよ。この浮遊都市は魔力で浮いている。その魔力が消えてしまえばごらんの通り…」

この終末の始まりというわけだ。

「魔法世界ってこんなにも脆いのか…」

『最も的確に市民を救えるよう、最大効率で舟を回せ!!ただし!
!捨てて良い命はない!!一人も救いもらすな!これは厳命じゃ!
!』

通信から聞こえてきたのは、凜とした女性の声。

このオステイアの女王だったか。

「市民の混乱を避けたいというのは分かる!だがっ!何故俺達にも情報を秘匿した!」

手すりを思い切り殴りつける音が、喧騒に包まれた艦橋を木霊する。

兵員誰も同じ苦々しい表情を浮かべていた。

「市民の避難作業に入るんだろ？僕は外に出るよ。僕は飛べる。魔力で飛んでないしね」

「すまない。頼む。降り注ぐ破片に気をつけるよ。この艦は暫く動けない。五分、五分だ。それまでになるべく開けた場所を確保し、避難民を誘導しといてくれ」

「了解。避難作業が難航している場所は？」

僕の質問に、通信兵が答えを返す。

「本島傍にある貧民島スラムが難航してるようです！役に立つか分かりませんが、地図を！」

地図を受け取り、目を通す。

貧民島が一番大きな本島の下層。

スラムという言葉のイメージ通り、複雑な街の構造をしているようだった。

「また面倒な仕事だね」

「英雄になって悪の親玉とドンパチやるよりはやりがいがあると思っせ」

エドガーと笑い合いながら敬礼を交わした。

「て、帝国軍！？」

「お嬢さん。取って食べはしないから、今すぐ北西にある噴水広場まで急ぐよ。この島に住んでる皆が集まってる」

痛む全身に鞭打って、貧民島の一区画一区画声を張り上げながら生存者を探し出す。

生存者を見つけたら、僕の体に乗せて空を飛んで確保した避難場所へと運び続けていた。

時折降り注ぐ巨大な岩を破砕するのはこの武器、機殻に覆われた一振りの日本刀。

「フツノ!!!」

『フツノ』

2nd - G 概念（名に力を持つ概念世界）対応のLow - G 製機殻剣。

「断ち切る音」を示す名前に由来し、あらゆるものを切断する。

試作段階での試験運行で過剰な攻撃力を発揮し、山を切り裂き崩落事故を起こした。

その後は壊れたまま封印されていたが、修復され全竜交渉に用いられる。

岩を砕く 山を砕く、という連想からか、この武器の設計図が頭に浮かんだ。

これがあの悪魔との戦闘中に作り出せていれば、結果は変わったかもしれない。

まあ、今は過ぎたことを考えている暇はないけど。

集まった住民達の頭上に降り注ごうとした岩塊を切り裂き、破砕して一息。

「あ、ありがとうございます!」

利発そうな女の子が僕に近寄ってきて頭を下げる。僕が先ほど抱えて運んだ子だ。

その子を良く見れば、手が隠しきれないほど震えている。空元気なのだろう。

孤児院で幼い子供達の世話をしていたというのだから、他の子供達を不安にさせたくないのだと思う。

広場を見渡せば、誰もが地面に力なく座り、今まさに崩落しようとしている上空の島々を呆然と見上げていた。

「もうすぐ帝国の舟が来る。それまで皆を元氣付けてくれるかい?」

投影するのは『べろちよる』。それを女の子の首にかける。

「え…これは？…でも私には…」

こうするんだ、と右手を掲げさせる。

「ハイタ〜ツチ！」

「う？え！？は、ひやいた〜つち！！！」

ぱんっ、と軽く打ち合わせたお互いの手。

「わ？わわ！！な、なんだか凄いです！！！」

女の子から震えが取れて、血色が見る見る良くなる。

「簡単でしょ？お願いできる？」

「は、はいっ！」

空を飛んで生存者を探していると、同様に前方から空を飛んでくる人影を見つけた。

魔力が使えないこの場で飛べるということは、僕同様別の力の持ち主だろうか。

「おぬし帝国兵か？いや、しかし何故空を飛べる？」

「裏技ってやつです」

女性だった。

白いドレスに身を包んだ、鋭利な印象を受ける顔立ち。

映像でだけと見覚えがある。

このオステシアの女王。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア。

「ふむ…まあよい。今は時間が無い。今から妾の魔法で貧民島を不時着させる。住民を一カ所に集めたいのだが、協力してくれぬか？」

「もうやってますよ。それと、帝国のフリゲイトが救助に向かっています。しかし、今ここでは魔法は使えないのでは？」

「そうか…ならば心置きなく行けるな。妾だけならばこの現象の中でも無効化されぬ…オステシアの民のこと…よろしく頼む！」

その瞳は既に決意に満ちていて、何をするのか分からないけど、止めようという気にはなれなかった。

それは王としての姿ゆえなのか。

颯爽と立ち去ろうとする女王を、しかし引き止めるものがあつた。大地を揺るがし、頭の中を直接かき回すような轟音。

僕たち二人を、巨大な影が覆う。

「なに！？本島が完全に落下を始めたというのか！！」

無数の破片が、濁った粉塵が、そして人間一人アリのように潰せる大質量が、緩やかな下降を止めて向かってくる。

この貧民島への直撃コース。

「女王！貴方ならこの島を不時着させられるんだろ！？」

「か、可能じゃ！しかしこのままでは！！」

決めた。

僕は心を決めた。

決意した。

何、なにも迷うことは無い。

初めてこの世界に来て以来、ずっとやっていたことの延長線だ。今頃、必死になってあの女子はハイタッチしているのだろう。

その努力を無駄にしてたまるか！！

「こんな理不尽な結末！認められるか！！」

「お、おぬし大丈夫か？」

「ふざけるな！たかが石ころ一つ、僕が押し出してやる！」

「ば、バカなことはやめろ！」

馬鹿で大いに結構！

「やってみなければ分かん！」

「正気か！？」

「貴方ほど急ぎすぎもしなければ、現状に絶望もしちゃいない！」

「そなた……」

「帝国衛生兵は伊達じゃない！！」

女王の声を無視し、僕は加速して本島の底部に縋りつく。

空中で質量を支えることは出来ない。

だから僕は必死に飛ぼうと、高く高く、今よりもっと高く飛ぼう

と！

僕に翼は無い。どういう原理で飛べるのか未だに分からない。ならばどうする？

簡単だ。翼を作れば良い。イメージすれば良い。僕が原理を定義づければ良い！！

羽ばたけ！

羽ばたけと！！

そんな僕を嘲笑うように、巨大な岩は高度をみるみる下げっていく。背後では、なにやら巨大な力を感じた。

女王が自分の務めを果たすのだろう。

任せれば安心だ、と理屈抜きで思ったその時、

『待たせたなミソギ！』

「オポチュニティ？エドガー！！お前は避難民を收容しろ！！」

粉塵の中から姿を現した戦艦が、その艦首を落下する本島にぶつける。

『間に合うか！！オポチュニティで本島を押すんだよッ！避難民が潰されるのを黙って見ているのか！』

「やめてくれ！こんなことに付き合う必要はない！下がれッ来るんじゃない！」

しかし答えたのは、新たに姿を現した帝国戦艦。

『オポチュニティだけにいい思いはさせませんよ！』

艦橋からその戦艦の艦長が親指を立てる。

さらに本島へ体当たりを決行したのは、白い艦影。描かれた紋章はオステイア国章。

それをきっかけに、次々と戦艦が集う。

「オステイア軍まで…！？無理だよ、みんな下がれ！」

『我が国の民の命が掛かっているんだ！やってみる価値ありまっせ！』

「しかし、爆装している艦だっただけ…。」

一隻のエンジン部分が爆発炎上し、離脱していく。

「駄目だ！質量過多とオーバーロードで自爆するだけだぞ！」

また一隻、更に一隻と爆発、離脱しはじめる。障壁の力が弱く、エンジンの出力も弱まっているのだ。

この重量に耐えられるはずが無い！

「もおいんだ！みんなやめろオー！ー！ー！」

避難民を乗せてるんだろつから、素直に下がって話だ。

どいつもこいつも馬鹿だよ。

支えられない。力が無い。見る見るうちに本島は貧民島へ近づいていた。

零れ落ちた破片が貧民島を砲撃の如く降り注ぎ打ち据える。

あの破片の下に、生存者がいたかもしれない。

こんなことをせずに、避難に力を注げば、助けられる人がいたかもしれない。

「何を今更！！」

体中を廻る一瞬の電撃。

視界を覆い尽くした一瞬の閃光。

「何でもいい！出てきてくれ！！」

オポチュニティが黒い煙を吹きながら離脱していく。

エドガーが何か叫んでいたが、今の僕には誰の声も届かなかった。

そしてこの手にソレは現れる。

ネックレス。

青い宝石に、紋章が刻まれた不思議な雰囲気醸し出す力の結晶。

ああ、これはファイナーレには相応しい。

思わず声を上げて笑ってしまった。

その力を解放しよう。

「リテ・ラトバリタ・ウルス・アリアロス・バル・ネトリアル」

ネックレスを中心に、爆発的な勢いで風が吹き上がった。

まるで掬い上げるように広がる風は、今まさに崩れ落ちようとしていた破片を留め、力尽きようとしていた戦艦を優しく離脱コースへエスコートする。

そして、その風は僕をも優しく包み込んでいた。

「こ、これは！？サイコフレーム（飛行石）の共振？人の意識が集中しすぎて、オーバーロードしているのか？な、何、恐怖は感じない？むしろ暖かくて、安心を感じるとは……」

最後の最後で遊んでいる僕を許して欲しい。

本島が落下コースから移動し始めたのを確認して、安心したのだ。そしてそのまま、僕は意識を手放した。

『飛行石』

天空の城ラピュタでシートが持っていたアレ。風の結晶体。

呪文は「リテ・ラトバリタ・ウルス・アリアロス・バル・ネトリール（われを助けよ 光よ よみがえれ）」で力を解放できる。

ラピュタが無いので、バルスは意味無し。

「本島！貧民島から離れますッ！」

「ミソギは！？ミソギはどうした！！」

本島は飛行石から発せられた青い光を撒き散らしつつ、大地へ向けて落下していく。

ミソギ・ナナセ：本島直撃阻止の際の落下に巻き込まれ消息不明。

ふわふわ
ふわふわふわ

擬音にすると、そんな感じ。
僕は海の上を漂っている。
海は海でも。

一面の雲。

雲の海。

雲海。

「ここは…」

「あつはつはつはつは!!」

立体音響で響き渡る笑い声。

もう爆笑だった。

「いやあ…期待以上の事をやってのけましたね。単なる思い付きだったのですが、棚から牡丹餅とはこのことを言っただけですね!!」

そして再び爆笑する、偉大なるあのお方。

「あのう…」

「何でしょう?」

「もしかして…僕ってまた死んじゃいましたか?」

嫌な汗が頬を伝う。

確かに。

確かに最後のアレは、そんな雰囲気だったけど、僕は死にたかったわけじゃない。

「ええ。それはもう、もの見事に瓦礫の下敷きです」

その光景を想像して、僕は思わず雲の上へ身を投げ出した。
せっかく…せっかく楽しい人生が歩めるかと思っただけに…。

「自業自得という言葉は知っていますか？」

「はい……」

僕が馬鹿でした、と正座して頭を下げる。

「さて、満足したでしょう？安心して成仏しなさい」

「うう……」

「と、言うべきなのでしょうが、貴方のことを私は思いのほか気に入ってしまいました」

雲が轟々と蠢く。

直感だけど、機嫌が良さそうだ。

「強くてコンティニュー、いつてみましょうー！」

「な、なんだってー！？」

再び劇画調になる僕の顔。

「ほんの少し死に辛くなるだけです」

「それはそれで凄いですけど……」

さっさと行けばかりに、足元の雲が渦巻いて門を形作る。

飛び出す前に、聞いておかないといけないことがある。

「貧民島の人たちはどうなりました？」

「それは、貴方自身でお確かめなさい」

「ということは、今からいくのは前と同じ世界ですか？」

「秘密です」

コノヤロウ！と一瞬イラツとしたが、ごうんごうん！と蠢く雲を見て、すぐにクールダウンする。

もう、カキ氷にしてください！と自分から言ってしまうそうなほど。

「そ、それじゃあまた、いつてきます」

ひょいっとそこへ飛び降りる。

「こんどは直ぐに帰ってこないで下さいよっ。」

僕だって帰ってきたくないです！

「にゃ〜！にゃ〜！」

「みゃ〜ん！みゃ〜ん！」

うろうう…頭が痛い…そしてここは…。

まさか猫王国か！？

変な落ち方をしたせいか、頭が朦朧とする。

横たわっているのはわかるけれど、体が動かせない。

目も開けないので、可愛らしい（たぶん）猫ちゃんの姿が見えないのが死ぬほど辛い！

…いや、二度死んだ後なんだけど。

「にゃ〜…」

「みゃ〜…」

頬をペロペロって！！ペロペロって！！

このまま…この心地良い天国の中で昇天していいかも…。

「クツキ〜！ビツケ〜！どこ〜？…あつ！いた〜！あれ？どうしたのこの人〜？」

ああ、天使のお迎えが。

1 - 3 なにさま？（後書き）

あとがき・解説

オステイア崩壊。

このシーンでは誰もが想像したシチュエーションではないでしょうか。

それを私が書いたらこうなっちゃいました。

ほんと、自重してません。

いちおう、魔法世界編全てがプロローグです。（長っ

というわけで、ようやく本編開始。

しかしここで問題が…。

プロットが上手く組めない…。

まあ、気長にお待ちください。

主人公が投影した「フツノ」ですが、登場作品は川上稔さん著の「終わりのクロニクル」です。

何気に、初めて武器らしい武器が登場した気がします。

ビーム兵器は…。

最後に。

3話目ですが、このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

幕間・1 さくらこ（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

幕間 - 1 さくらん

「えっとー、あなたは日本のテレビ局に…えむあんどえー？をしかけました。ルーレットを回して偶数なら…ばいしゅうせいこう？出た目かける五千万円がもらえ、奇数なら…ばいしゅうしつぱい？一億円はらわなければならぬ、だって！」

「なんか、いずれ不正が見つかって逮捕されそうなマスだね…」

「にやはは！それ〜！！」

桜子は勢いよくルーレットを回す。出た目は…。

「10！！やったー！！」

「はい…五億円…。っていうか、一億円紙幣がもう既に無いんだけど！？」

人生ゲームで一人が一億円紙幣を全て総取りとか、オーバーキルにも程がある。

僕等は人生ゲームで遊んでいた。

テレビゲームではなく、ボードゲームの方。

桜子が玩具屋で値引き販売されていたのを見つけて買ってきたらしい。

この人生ゲームに限らず、この部屋の片隅には桜子が持ち込んだ様々なパーティーゲームがうず高く積み重ねられていた。

「ほらほら！ミソにゃんの番！」

「よし！」

気合いと共にルーレットを走らせる！これ以上桜子との差が開かれるわけにはいかない！！

出た目は5。マスの内容は…。

椎名桜子。

僕の恩人。

人類最強のお人好し。

天真爛漫。

純粹無垢。

その少女を表現する言葉は溺れるほど溢れてくるけど、一番しくりくる表現はこれだろう。

『幸運に愛された少女』

「…友人が失踪！連帯保証人になっていたあなたが友人の借金を肩代わりしなければならぬ。三千万払う。結婚していた場合は妻と別れ、子供がいた場合は妻と共に別れる」

「はいはい、じゃあミソにゃんからさんぜんまんえんぼっしゅーと！おくと子供もぼっしゅーと…ごめんねえ、ふがないおとさんと」

桜子が僕の自動車から二本のピンを引き抜く。

妻のピンク色のピンと、子供の小さなピン。

まるで手を振っているかのごとく体を左右に振り、夕日の中へ消えていく幻影が見えた。

「泣けてくるなあ！もう！！」

「にははははは！」

結局、僕は桜子に十倍差の資産額で惨敗した。

桜子は強い。

人生ゲームなんて、運が左右されるだけのゲームの筈なのに（ルーレットを任意の場所で止める人生ゲーム玄人がいるかもしれないけど）非常に強い。

計ったように、資産増加マスで止まるのだ。

そんなん、どうやって勝ってっていうんじゃー！と僕が投げださなかったのは単に、遊んでいるときの桜子の笑顔が輝いているからだ。

初めて見た桜子も笑顔だったけど、遊んでいるときの桜子の笑顔は眩い。

汚れきった人間が直視すれば、蒸発しかねないほどに。

「おっと、もうこんな時間だ」

安物の腕時計を見れば、もうすでに夕暮れ時。

住宅街を歩けば、完成したカリーの匂いが漂ってくる時間帯。

「にゃ〜…もうそんな時間かぁ」

「ほら、小学生はもう家に帰る時間だ」

拗ねた様に渋る桜子の頭をぐりぐり撫でる。

言動もそうだけど、どこか猫っぽくてついつい撫でてしまう。本人はあまり気に入ってないらしいのが大変残念だ。

「途中まで送っていくから」

廃ビルを不法占拠する怪しい男（僕）の所に暗くなるまで入り浸ってるなんて、変な噂が立てば桜子自身に害が及びかねない。

小学生とはいえ、女の子は女の子。

そして僕は、怪しい身分になってはいるけど根は善良なつもりの一一般人なのだ。

「にゃ〜…」

「みゃ〜…」

「おにいさんどうしたの？どこか痛いのか？」

足から飛び降りたつもりだったのに、何故か頭から着地して痛みに悶える僕は、涙で滲む視界の向こうに天使を見た。

愛くるしい二匹の子猫の隣にしゃがんで僕を覗きこむ、これまた愛くるしい少女。

まだ小学生くらいだろうに、ファッション誌のティーンモデルじみた綺麗さと可愛さを兼ね備えた容姿に、僕は不覚にも感動を覚えた。

こんな子と同級生だったりしたなら、さぞや楽しい青い春を謳歌

できただろっなあ…なんて。

まあ、唯の妄想？いや哀愁だけどさ。

「だ、大丈夫。ちょっと頭を打っただけだから。心配してくれてアリガト」

立ち上がり、つつい癖で敬礼をしてしまう。もうすっかり軍隊生活が身に染みていた。

すると、途端に目を輝かせ出す女の子。

「カッコイイ！！お兄さんは自衛隊さん？」

不覚にも、その笑顔に胸を射抜かれた。

まだまだ年端もいかぬ子供にドギマギしてしまう自分を必死に取り繕い、表面上は微笑に押しとどめる。

…意識せず目が泳いでしまう僕は、変な病気なのだろうか。

「ん…正直に言っと、魔法のある異世界の軍人です」

「おー…？おおー！魔法使いさんでありますか！？」

「魔法は使えないけど、手品はできます」

「ヴォン、と取り出したるは、ビームサーベル。」

危ないので、出力は触れればほんのりと温かいカイロ代わりになる程度。

極限まで出力を下げても、サーベルとしての見た目は損なわれないのでチャンバラごっこに最適だ。

「わあ…触ってもいいでありますか？」

とはいえ、何かの拍子に出力が殺人レベルに上がると危ない。

「危険なのでダメであります」

「残念にやあ…であります」

「にゃ〜」

「みゃ〜」

なんだろっ！もう！可愛いなあ！！頬ずりしたい！！

はっ！？

猫にだからな！子猫にだからな！！もっふもふの子猫にだからな！！！！

数秒前の不埒な僕自身を殺したい。

「あ！そだそだ！わたし『椎名桜子』。そしてこっちの三毛がクッキで、黒がビツケ。よろしくね！」

ペコリと頭を下げる桜子とは反対に、二匹の子猫は興味無さげに毛づくろいしたり、あくびしたり。

「ご丁寧にも。僕は七瀬みそぎ。行き場の無い迷子さ……」

……この子のキラキラした目を見ると、ついつい格好付けたくなってしまう僕を、どうかお許し下さい。

自分の痛さに内心血反吐を吐きながら、話題を換えることにする。いい加減、確認しないといけないこともあるし。

「桜子ちゃん。ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「にはは！桜子でいいよ！ミソにゃん！！」
み、ミソにゃん……？

なんか発酵食品みたいな名前を付けられた。

「こっつて、もしかして日本？」

辺りを見渡せば、まるで西洋絵画に描かれていそうな街並み。

しかしその中にチラホラと見える日本語の看板が妙に懐かしい。

「いえ〜す！じゃぱ〜ん！」

どごそのヒロミ・GOのように気取った仕草で一回転。

眩しい笑顔と共にびしっと決めポーズ。

ああ……映像に取っておきたい……。

さりげなく鼻血が出ていないことを確かめながら、表情は平静を装う。

こっつ、余裕を持って辺りを見回したりね。

「……………」

その場所を見て、僕は寒気を覚えた。

僕が落下したのは、申しわけ程度に造られた小さな公園らしく、奇抜なアートじみたデザインの遊具がぽつりぽつりと設置されている。

太陽は真上にあるというのに、遊んでいる子供は一人もいない。

ムンクの『叫び』のような顔を模った滑り台なんて、誰が遊びたがるものか。

更に、ダリのヒゲシーソー…顔写真のパネルを背景に、ヒゲ部分がシーソー…誰が考えたんだ。

公衆トイレの外壁が『ゲルニカ』なんて、最早何かの呪いかと思いたくなる。

公園入り口に立てられた看板には「麻帆良芸術公園」の文字。芸術を何か勘違いしているとしたか思えなかった。

日当たりの悪い廃ビルを出ると、街は一面の赤。

麻帆良市街から一步奥に入っただけなのに、この廃ビルを含めた周囲の建物は驚くほど寂れている。

麻帆良市は学園都市というだけあって学生が多い。

その為、人々の喧騒は表通りに集中してしまっているのだろう。そんな静かなこの場所を、僕は気に入っていた。いつか合法的に住みつきたい。

「明日も来ていい？」

「ん。いいけど。学校の友達と遊んだりはしないの？」

「じゃはは…」

返ってくるのは空々しい笑顔。

その態度に、僕は一気に不安になった。

かつて偉大なスポーツ選手が言った。『いじめ。格好悪い』

嫌な想像に胃が痛くなるのを自覚しながら、それでも僕は桜子に視点を合わせて尋ねる。

桜子は僕の恩人。

僕が雨風を凌げることができるようのも、桜子が猫の集会場となって

いたこの廃ビルを知っていたからだ。

そんな恩人が辛い思いをしているなら、僕は全力で力となる。

「辛いことでもあるのか？いじめられてるとか」

嘘は認めない。

僕は桜子の変化を見逃すまいと、その瞳と正面から向き合った。

それに対して桜子は、慌てた様子で首を横に振る。

「ないない！それはないっ！」

桜子の瞳にブレは無い。

その言葉に嘘は無いようで、ほっと一安心。

じゃあ、何であんな態度を取ったんだろう？

桜子の明るい性格。社交的な所は間近で見えてきたから良く分かる。

それでいて友達が一人もいないなんて、正直想像つかない。

現に僕は、桜子のそんな明るさに魅かれているのだから。

「にゃあ……」

言い辛そうにしているところを無理に聞き出すのも忍びないので、その頭を一撫でして桜子の自宅への道を歩き出す。

結局、桜子はにゃあにゃああと唸り声(?)を上げるだけで、事情を聞き出すことは出来なかった。

小学四年生。

多感な時期であると同時に、気難しい時期なんだなあ…と、まるで父親じみた僕自身に絶望した！

夕方、廃ビルの入り口で日光浴をしていたクツキとビツケを伴って、桜子がズギヤーンと登場。

「転校生が来たんだよ!!!」

「転校生というとあれか！学校生活に1度か2度あるのか無いのか

はつきりしないレイベント!？」

勉強こそしていたものの、滅多に学校に通えなかった僕には、まさに幻の存在。

それが転・校・生!!

僕は郊外の森から拝借してきたアケビの実を放り投げ、思わず立ち上がった。

アケビの実は桜子がナイスキャッチ。

「転校生って、やっぱり大和撫子って感じの黒髪の女の子？」

「おお!? ミソにゃん、なんで分かったの!？」

お約束というやつだ!

「それで、クラスメイトの男子の許嫁だったり!？」

「にゃああ!?! このくだもの甘くて美味しいね!」

アケビって言うんだぜ!

「それでそれで、その男子の幼馴染と恋敵に!？」

「にゃあ…皮食べちゃった…辛い…」

その皮を料理して食べたりますんだぜ!

「ミソにゃんは博学だね」

「桜子にツツコミを期待した僕が馬鹿だったよ」

ふと視線を感じて床を見れば、そこには二匹の子猫のつぶらな瞳。

「にゃ」

「みゃ」

物欲しそうに、僕を見ている。

よ、よせよ…そんな目で見ないでくれよ…残りのアケビは僕の晩

御飯…。

「にゃ」

「みゃ」

「……………」

気づいた時には、なけなしのアケビ一個を献上していた。

また夜にでも取りに行こう。

夜間のトレーニングのついでに丁度良い。

丁度良いつたら丁度良いのだ…。

「それで、転校生がどうしたって？」

「そうそう。なんかすっごいの！ほんもの！ほんもの『なんでやね〜ん』って初めて聞いたの！！」

「つまり関西からの転校生ってわけだ」

「なんでやね〜ん」

…僕にボケると。

期待に満ちた笑顔で、桜子は胸の前に突っ込み用の手をスタンバイしている。

これは期待にこたえないわけにはいくまい！

しかし桜子よ。

何の脈絡も無くボケろだなんてハードル高すぎだろ！？

「え〜、なぞかけを一つ。桜子とかけまして、嫉妬深い奥さんとききます」

それでもやっちゃってしまう僕はとことん桜子に弱かった。

「なんでやね〜ん！あたい奥さんちゃうわ〜！！…ちゃ、ちゃうね〜ん！嫉妬なんてしとらんばい〜」

ずびし！と僕の胸が叩かれる。

いいスナツプだ。伸びのあるストレートが投げられるぞ。

だけどさ。だけどさ、桜子。

「前提から間違ってるからね、桜子。そこは『そのころは？』っていう場面だから。それと違う方言混じってるからね！」

「みや、みや…そのころは？」

「あいくるしいでしょう」

さあ来い！と胸を張るものの、何故か一向にツッコミが来ない。

「？」

「？」

お互い顔を見合わせて首を傾げる。

失敗したか？いや、そもそも何を失敗した？完璧ななぞかけだった筈だ。即席にしては及第点が貰えるくらいの。

「あ、あのね桜子。今のは、桜子が可愛らしいという意味の『愛くるしい』という言葉と、嫉妬深いが故の『愛が苦しい』というのをかけていてね。桜子が『愛くるしい』って言われたことに対して、こうほんの少しの恥ずかしさを滲ませながら『なんでやねん!』ってやって欲しかったんだ。ってネタの説明した上に恥ずかしい事を言わされてるコレは何の罰ゲームだよ!? それこそなんでやねんだよ!」

「にはははは! やだなあ! わたしがカワイイだなんて!」

自分自身を本気で殴れるなら、記憶が無くなるまで殴り続けたい。それでね。明日は転校生の歓迎会することになったの。プレゼントを用意することになったんだけど、何がいいかなあ?」

「唐突だな。僕に聞かれても、プレゼントしたりされたりなんて経験は全く無いから、何とも言えないんだけど。上げて上げるなら、お菓子が無難じゃないかな。アクセサリーとか装飾系は好みがハッキリ分かれそうだし」

「なるほどにや。じゃあミソにゃんもプレゼントにお菓子もらえたら嬉しい?」

「そりゃあ、僕はプレゼントは貰えるなら何でも嬉しいよ」

あの包装紙つてやつに包まれたものなら、どんなに小さくても高級感に溢れてる気がしてくるから、実はずっと憧れてた。

できることなら、綺麗に包装紙を剥がして、そのまま包装紙コレクションを作りたい。

一番の夢は英字新聞の包装紙。あのスタイリッシュさは、想像しただけで痺れる!!

「お菓子かあ。何がいいかな?」

「関西からの転校生なら、関西に無い、埼玉銘菓なんてどうだ?」

埼玉といたら、僕のいた日本では「草加せんべい」「五家宝」

…いや、待てよ? アレがある!

「うまい!」

ピクリと反応した桜子が目をキラキラ輝かせる。

「うますぎるー!」

「「十万石饅頭!」」

「にやはははは!いいね!面白そう!」

こつちの世界にもあるんだなあ。

「いっしょに買いに行こうミソにゃん!」

クッキとビツケが従者よろしく桜子の両脇に、僕は桜子に手を引かれ、後に続く。

「それでねミソにゃん。明日はその子の歓迎会を開くから、もしかしたら遊びに来れないかも」

気落ちした表情の桜子の頭をグリグリ撫でる。

「にゃ、にゃ〜…」

こんな大の男と遊んで、何が楽しいんだか。

まだまだ子供なんだから、子供同士で親交を深めた方がいい。

以前桜子が浮かべた空々しい笑顔が、未だ頭から離れない。

幕間・1 さくらん (後書き)

あとがき・解説

このお話は本編開始前の幕間劇・短編に当たるとお考えください。構想自体は考えていたのですが、原作の設定を基にしたオリジナルストーリーということで、執筆の難しいこと難しいこと。

本作品のヒロイン「椎名 桜子」嬢の登場ですが、原作とは性格その他諸々が変わってしまっている可能性があります。それは…まあ私の桜子嬢への愛が溢れた結果だと思って下さい。

あと、描写をカットしたのですが、現在の主人公は桜子のヒモです。戸籍が無く、ツテも無い彼に働けというのも難しい話ですが。そしてお気づきかもしれませんが、主人公はこの日本が、あの魔法世界と同じ世界だとは知りません。

数多ある二次小説のように、学園都市内にとっぜん現れたにもかかわらず、魔法関係者が接触してこないのは、魔力を持たない一般人であるが故です。

…実は、魔法関係者に気付かれたパターンの展開を書いてみたのですが、どうも主人公を自由に動かすことができなくなってしまいました。

桜子の家に居候というパターンもあったのですが、両方没に。自由度の高い、廃ビルを不法占拠という設定にシフトしました。イメージとしては、化物語の忍野メメでしょうか。

最後に。

ちよっと迷走気味ですが、このような稚作に付き合ってくれている

皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

幕間・2 さくらこ（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

幕間・2 さくらん

悪魔でも呼び出しそうな数々の公園施設から目を背ける。

頭が沸騰：じゃなくて、おかしくなりそうだ。

この、シウルレアリスム絵画から飛び出したような公園は、人間の日常生活に対する挑戦状である。

人っ子一人いないのも頷ける。

なら、そんな公園にたった一人いた桜子は、鈍感なのか、はたまた感性が凡人とは違うのか。

「なんとなく散歩してたら見つけたんだ。静かでいいよね」

「なんか、子供とは思えない感性だね」

「むー、小学四年生なんだから。まだまだ若いのよ！」

膨れっ面の桜子の頭をグリグリ撫でる。

「にゃ！？もう子供じゃないんだからー！」

「ごめんごめん、つい、ね。それと、さっきと言ってることが違ってるから」

「おとめの髪は、安くないの」

桜子は気取った表情で、シャンプーのコマーシャルの「コマのよ」に手で髪を払う。

その姿の愛らしいこと愛らしいこと！

このえもいわれぬ萌え心は、鏡の前で「べろちよる」つけてポージングしていたラツチエさんに匹敵：いやそれ以上だ！！

あの時は視線に気づかれて木刀素振り千回という拷問に処せられたが、今回は違う。

正々堂々、正面から目に焼き付けてやる！！

そして、

「あははははははー！！」

「にゃはははははー！！」

久しぶりに涙が出るほど笑った。

さて、思い切り笑ったら妙に冷静になってしまった自分がいる。これから先の生活への不安が鎌首をもたげてきたのだ。やっぱり、ここは僕のいた日本とはまた別の日本で間違いないらしい。

桜子によると、今年は1998年。

この時点で既にタイムスリップ。

公園に備え付けられた電話ボックスで（四面をゴツホの自画像で囲まれていたのは見えないフリをした）、既に僕が入院しているであろう病院を探したものの、存在しなかった。

いや、確かに同じ住所に病院があったのだけど、そこは僕が過ごした国立病院ではなく、産婦人科と化していたのだ。

ほんのちよっぴり、気分が落ち込む。

まあ、過去の日本だからって、過去の僕に会うつもりなんてさらさら無いんだけどさ。

「どうしたのミソにゃん？」

「ああ、僕は異世界人だからさ、家も無いしお金も無い。無い物だらけでどうすればいいのか見当もつかない」

前回は戦場という特異な場所だったからこそ、保護してもらえた。その後、周りに恵まれて穏便に過ごせたのは奇跡ではあったけれど。

しかしここは平和な国、現代日本。

桜子の服や、周りの家々を見るだけで、僕のいた前の日本と生活水準はそれほど変わらないものだと予測できる。

それはつまり、戸籍によって管理された社会。

戸籍を持たない僕は身分を証明することはできない。

身分を証明することのできない僕は、行政サービスを受けることができないし、民間のサービスも大きく制限される。

…アンダーでグラウンドな世界へ行けということなんだろうか。せつせとDVDを違法コピーして路上販売する自分を想像して、

冷や汗が止まらない……！！

「ウチにおいでよミソにゃん！」

名案だ、とばかりに表情を輝かせる桜子には悪いけれど……。

「遠慮するよ。娘がいきなりどこの誰とも分からない不審人物を連れてきたら、御両親心配するぜ？というか、いくらなんでも僕を信じすぎだ。出会ったばかりの不審な男に軽々しくそんなこと言っちゃダメ！」

「ミソにゃんは大丈夫だよ……！」

その根拠はいつたいいずに……。

「それに、お母さんなら『了承』ですぐオーケー出すよ！」

「それはそれで、謎のジャムを食べさせられそうで困るんだけど……」「むっ、いい考えだと思ったのに」

再び膨れっ面の桜子の頭に、つつい手が伸びてしまっが桜子はそれを軽いステップで回避。

すぐに嬉しそうな笑顔に変わる。

「えへへ」

そのコロコロと変化する表情は、見るだけで飽きない。

再び僕の手が勝手に！桜子の頭へ……！！

またも軽快なステップで桜子が横へ移動し、伸ばした手が空を切る。

「……………ふっ」

「……………にゃは」

お互い不敵に笑い合い、公園中を走り回る鬼ごっこへと発展した。これを、現実逃避と言う。

「そうだ！いい場所があるよミソにゃん……！」

ベンチでジュースを飲んで一服していると、隣に座っていた桜子が勢いよく立ちあがった。

もちろん、桜子のおごりである。

なんかもう、男としてのプライドは風前の灯、危急存亡の秋。

桜子の突然の声に、改めて現状に打ちのめされる僕を文字通り尻目に、地面に丸くなっていた子猫二匹が驚いて飛び上がる。

「クッキ！ビツケ！あそこに行くよ！ほらほらミソにゃんも立った立った！」

桜子に手を引かれて立ち上がる。

「どこに？」

「ねこ達がね、集会開いたりする場所があるの。あそこならきつと住めるよ！」

猫の集会場。

まあ、思うところが無いわけでもないけど、猫に囲まれて過ごすというのも面白いかな。

なんとなく味気ない一日だった。

理由は単純で、桜子というスパイスが無かったからだ。

ああ、僕はもう桜子がいないと生きていけない人間らしい…。

自分で思っておきながら、自分を110番通報したくなった。

こういう時は体を動かそう！

というわけで、既に暗くなり始めた廃ビルの屋上で、フツノを取り出して一心不乱に振るう。振るって、振るい続ける。

型はラッチエさんに罰（ルビは『ごほうび』……ではない）として嫌というほど叩きこまれた、帝国陸軍式刀剣術。

「ふっ！…ふっ！」

気分はダイエットDVDを見ながらエクササイズに励む、お昼過ぎの専業主婦。

強くなる云々よりも、体が鍛えられていくのがたまらなく気持ちいい。

何せ、昔は完全にベッドの上のモヤシだったから。
それが今ではどうだ。

日本刀、しかも機殻で覆われ、重量が増した本物の刃を軽く振る
えるくらいにまでなっているではないか!?

「ふ…ふははははは！今ならエスカリボルグも持ち上げられる！」
調子に乗ってエスカリボルグを投影。

空中から落ちてきたそれを掴む。

「あーっ！っ！！」

そして両肩脱臼。

2tだし。

しかし外れた肩はおろか、断裂した筋繊維まで一瞬で修復する。
死に辛くなつた恩恵様様だった。

(これって、餓死しかけたら、満腹になった状態で復活できないだ
ろうか?)

などと馬鹿な事を考えていると、僅かに、ほんの僅かに砂利を踏
みしめるような音が聞こえた。

すぐに息を殺し、屋上の入り口脇へ張り付く。

その音には覚えがあった。

僕がビル内の所々にわざと撒いた、小さく砕いたガラス。

侵入者察知用の簡単な警報装置だ。

何の為かと言うと、このビルの管理会社なんか来た時に、いち
早く察知する為。

通報されたりして騒ぎになってからでは遅い。

先手を打ち、こちらから仕掛ける必要がある。

「出てこい…」

体中を廻る一瞬の電撃。

視界を覆い尽くした一瞬の閃光。

左手の中に出現したのは、硬質の球体。

それを一言で言い表すならば、「眼球」だった。

瞳孔部分に刺又のような紋章の浮かぶ、妙な威圧感を放つ眼球。

その名を『皇帝の瞳』。

『皇帝の瞳』

かのブリタニア皇帝の瞳。相手の記憶を任意に改ざんすることができるギアス（暗示）をかけることができる。

オール・ハイル・ヴウリタアニア！！！！

発動時に妙な気迫のこもった雄叫びが響くのが難点である。

全ては僕の屋根のある暮らしの為。

このビルには何もなかった、誰もいなかったと記憶してもらおう。

入口のドアを僅かに開き、ビル内の気配を探る。

「……………」

「……………」

すぐに察知した。

時折、ガラス片を踏み砕く足音と共に、小さく交わされる会話が僅かに反響して聞こえる。

僕の耳でも聞こえたのだ。すぐ下の階にまで来ているとみて間違いない。

ドアを静かに閉め、手すりから体を乗り出しビルの窓側の壁面に目を凝らす。

既に暗くなったビル内。懐中電灯の類は持っていないのか、光の動きは無い。

なんとなく奇妙なものを感じながら、入口の上、給水塔部分へと登っておく。

やり過ぎしてもいいけれど、最近徐々に生活臭漂い始めたこの廃ビル（主にパーティーゲームで）。

変に問題にならない為に、打てる手は打っておこう。

じつと息を殺して待つこと数分。

すぐ真下にはつきりとした人の気配を感じ、身構える。

皇帝の瞳が今か今かと震えているけど、気のせい気のせい！

ガチャリと、重々しい音と共に飛び込んできたのは、女の子二人子供。

桜子と同じくらいだろうか。

しかも片方は泣いているのか、しきりに手で目をこすっている。

「桜子！どこ！？」

「だから落ち着きなさいって」

その色々と予想外な闖入者に、不意を突いて飛び出そうとした足が硬直する。

変に足を踏み出していたのが悪かった。

グラリとバランスが崩れる。

慌てて跳躍し、飛行能力を駆使して空中一回転。体勢を立て直して着地する。

跳躍する時に、思わず「トゥツ！」と言ってしまったのは、若さゆえの過ち。

目の前にはポカンとした表情の女の子二人。

今の僕の痛い失態を目撃した二人。

消すか。

記憶を消すか！

手の中で皇帝様が震えてらっしゃる！！

『逝けい！！』

「イエス・ユア・はむとうあろうっ！？」

「桜子をどこにやった変態っ！！」

泣いていた女の子の前蹴りで、僕は地面へと沈んだ。

正確に急所（股間）を狙い、躊躇なく蹴り抜く度胸。

「ぐふっ……」

僕は…星を見た…青い…青い巨星を…。

「ほんとに！ほんとうに桜子はここにいないんですね！？」

「嘘じゃないよ。むしろ桜子がどうしたのか僕が知りたい。何があった？」

僕は屋上で二人の少女と向かい合い、尋問を受けている。
何だろっ、この状況。

これが巷で噂の御褒美とやら…おのれ毒電波め！！

「…ところで、あなたが『ミソにゃん』？」

そう確認してきたのは、歳の割には落ち着いている印象の少女。

「冷静にその呼び名で呼ばれると、果てしなく間抜けに感じるな。

確かに僕は桜子にその名で呼ばれてる。正式には七瀬みそぎ。永遠の旅人さ」

ああっ！そんな蔑んだ目で見ないでっ！！

「わ、私は柿崎 美砂。桜子が言ってた通りの人ね…」

「美砂！そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！？桜子を探さなきゃ！！！」

「それで、こっちのワンコみたいなのが釘宮 円よ」

「誰がワンコよ！！！」

何故か僕を睨むのは、未だ泣き跡が残る少女。僕を一撃で沈めた剛脚の持ち主。

やはり、そのただならぬ様子に、僕は意識を切り替える。

ギャグからシリアスへ。

本気から真剣へ。

「とにかく。桜子に何かあったんだね？」

「…転校生の歓迎会の買い出しに行ったっぷり、教室に戻ってこないの」

「家に帰ってないのか？」

少女…美砂嬢は首を横に振る。

家出、失踪、誘拐、神隠し。

嫌な予想に吐き気がする。

「僕が探しに行く。もう夜だ。二人は家に帰りなさい」

「嫌よ！わたしだっって桜子を探す！それにあんたのことはまだ信用してないんだから！」

くぎゅ…円嬢の今にも噛みつかんばかりの様子…もとい、足を出

さんばかりの勢いに、脂汗が再び流れる。

いくら死に難い体だからとはいえ、痛みは万人に平等。

その様子を見かねたのか、美砂嬢が出したのは妥協案だった。

「わたしたちは桜子の家にいるから、見つかったらすぐに連絡してね」

「美砂!？」

「先生達も捜しまわってるみたいだから、どうせ連れ戻されるわよ。お説教されるくらいなら、桜子の家で帰りを待っての方がいいわ」
澄ました顔で言っではいるが、その瞳が僅かに揺れていたのを僕は見逃さなかった。

初対面の僕が気付いたのに、友人であろう円嬢がそれに気付かない筈が無い。

警戒する小型犬の様だったナリを潜める。

「わ、わかったわよ…」

「じゃあ、送っていくよ」

送って行ったついでに、桜子が帰宅していないかを確認してから搜索を始めよう。

「ところで、何でこのビルに来たんだ？桜子から聞いてたのか？」

「あなたの事は桜子からよく聞かされてたわ。ここを知っていたのは…」

見れば、二人の目があらぬ方向を泳いでいる。

あからさまに怪しい。けれど、怪しい男であるところの僕が言えたことではなかった。

「あはは…桜子に彼氏ができたんじゃないかって、尾行をね…」

流石女の子。

小学生とはいえ、色恋沙汰には興味津津。

ませてるなあ。

美砂嬢と円嬢に桜子の行きそうな場所を聞いたが、芳しい答えは得られなかった。

やはりというか、なんとというか、一緒に遊ぶのは学校にいる時が殆どで、放課後や休日に遊ぶことは稀だったそう。

桜子が自宅に帰ってきているか二人に確かめてもらったが、帰ってきていないとのこと。

ただ、広域指導員とやらが訪ねてきて、両親には桜子のことは心配ないと伝えたそう。

臭う。

これ以上ないほどの芳しさ。

これはあれだ、病室で医者と看護師が笑顔で患者と話し、廊下に出るから非常に深い溜息を吐く、昼ドラ的ニ面対応。

というわけで、その広域指導員とやらを追っていけば何かには辿り着けると思ったものの、誰がそれに該当するのか分からない。

人通りの多い駅前に来てみたものの、途方に暮れる。

何か役立つ設計図が無いかと、ロータリーをウロウロしながら頭の中を捏ねくり回していると、目の前に人が立ち止った気配で僕も立ち止った。

「こんばんは。何かお困りですか？」

眼鏡をかけ、髪を短く刈り込んだ青年だった。

ん？どこかで会ったことあったっけ？

というのが、その青年を見た僕の第一印象。

対する青年もまた、正面から僕を見て、僅かに戸惑っている。

「失礼。どこかでお会いしたことがありますか？」

設計図を探す作業を止め、記憶をほじくり出す。

結果、そんな記憶は無かった。

「…いや…無いと思いますよ…たぶん」

というか、この世界で出会って、まともに関わったことがあるのは

桜子くらいだから当然と言えば当然。

「そうでしたか、ハハ、申しわけない」

照れくさそうに青年は笑って、胸ポケットから煙草を取り出す。

ちようど良いので、この青年に聞いてみることにした。

「人を捜してるんですけど、広域指導員って方々の事務所か何かありません？」

青年は火を点けようとした手を止め、僕にじっと目を向ける。

なんだろうね、この探られてる感じ。

「広域指導員に何か御用が？」

「知り合いの女の子が行方不明らしくて心配なんですよ。その子の御両親から、広域指導員の方に大丈夫だとお聞きした、と伺ったものですから」

なるほど、と青年は穏やかな笑顔を浮かべ頷く。

「桜子くんのご知り合いでしたか」

「…今なんと言った？桜子：くんだと…！？女の子に君付けだど！？なんて…なんて素晴らしい響きだ！！まるで学校の先生みたいじゃないか！？いや、学校の先生なんてレベルじゃない！大学教授レベルだ！！」

と絶叫しなかったけれど、心の中だけで我慢しておいた。

それはさておき、目の前の青年が何者か考える。

スーツ姿の青年。

ポケットに手を入れたまま初対面の人間に話しかけるなんていただけないが、浮かべる表情は怪しげな人間には見えない。

しかし、僕の話だけで桜子に辿り着いたのは何故だろうか。

桜子の学校か何かの関係者か？

いつの間にか今度は僕が訝しげな目で青年を見ていたのだろう。

青年は取り繕うように苦笑する。

「ああ、誤解しないでください。僕はこの学園都市で広域指導員をしている…」

青年の言葉を遮る音があった。

安っぽい電子音。

「失礼」

いささか真剣な表情を浮かべ、青年はスーツのポケットから小さな電子機器を取り出す。

それを見て僕は愕然とした。

伝説としては知っていたけれど、現物は一度も見ることが無かった一品。

あの『ポケベル』である。

そうか。そういえば携帯電話が普及し始めるのはもっと先の年だった。

これも一種のジェネレーションギャップというのだろうか。

「急用が入ってしまいました、申し訳ない。桜子くんのご心配ありませんよ。迷子になっていたところを僕の同僚が保護しているそうなので、すぐに帰ってくると思います」

青年は、じゃ！とばかりに片手を上げ、陸上選手もびっくりな足の速さで夜の街へと消えていった。

その様子はなんとというか…。

「もっと上手く嘘を吐こうよ」

内心呆れながらも、急いで僕は近くの駅ビルに入る。

目指すは屋上。

あの足の速さは、僕では後を付けることは無理だ。

走ってダメなら、空を飛べばいいじゃない。

今は夜。

ネオンを目くらましに、夜の空に紛れこめる筈だ。

それにしても僕は幸運だ。捜しているその時に、広域指導員に話しかけられるのだから。

幕間・2 さくらん（後書き）

あとがき・解説

お盆の連休前で一気に忙しくなった今日この頃。
皆様、いかがお過ごしでしょうか。

私は、執筆する時間が取れなくて物足りない日々です。
決して、ソフトハウスキャラ様の新作g（以下検閲）

それはさておき、この作品の方向性がようやく固まりました。
明確なビジョンはありませんが、結末の流れも大体は思い描いてい
ます。

原作に沿っているようで、しかし大いに乖離した流れになる予定で
す。

その点に関しましては、ご理解いただければと思います。

さて、今回新たに登場したエセ宝具。

この先出番があるかどうかは…。

書き忘れたことがあったので、以下追記。

「ポケベル」ですが、作中の1998年ですと、すでに携帯に取っ
て代わられていたかもしれませんが。

その辺りの記憶が曖昧なのですが、本作では未だポケベルが現役で
す。

桜子の友人二人、原作でもお馴染みの三人組ですが、一体いつから
友人関係を築いたのか分からなかった為、小学生からの付き合いとい
うことにしました。

実際は中学生、チア部に入ってから友人という気がしないでもな
いです。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

PS .

感想とかお気軽にお送り下さい。

というか、ユーザー限定・限定無し、とか設定が必要だったんです
ね…

何を今更、って感じです。

幕間・3 さくらん(前書き)

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま!」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

8/25追記

仕事が修羅修羅ばく状態ですので、続きは今しばらくお待ちください。

幕間 - 3 さくらん

上空から青年の後を付いて飛んでいると、やがて郊外の森へと辿り着いた。

僕が木の実や山菜、川魚にといつもお世話になっている、街の直ぐ傍とは思えないほど自然を残した森だ。

青年の、ポケベルを見た後に僕へ向けられた取り繕うような笑顔からして、桜子に何か起こっていることは間違いない、その内容は桜子に関するものに間違いないと僕は確信している。

となると、この森が桜子に何か関係しているのだろうか。

桜子は買出しに出たつきり帰ってこなかったと、桜子の友人二人は言っていた。

まさか森に買出しに行くわけ無いだろうし……。

やがて眼下の青年は、複数の人間と合流した。

場所は、森の中へと続く林道の入り口。申し訳程度に作られた駐車場。そこに十人前後見受けられる。

「っ！？」

その内一人が空を見上げたような気がして、慌てて高度を取る。

雲が出ていなくて幸いした。雲の中に装備も無く突入したらえらい目に逢うのは経験として学んでいる。

それにしても危なかった。

人目につかない場所に着地して、さり気なく出て行き、さも偶然再会したかの如く振る舞い、詳しい話を聞き出す。

何度も頭の中で繰り返し返したプラン。

空を人が生身で飛んでいる姿なんて見られたら、それどころじゃない。

僕はこの世界において異端であり、異能力者。

しかし人間であることに変わりはなく、だからこそ人間社会から爪弾きにされるのは堪らなく怖いのだ。

「まあ、爪弾きも何も、現状溶け込んでないんだけど」
溜息しか出ない。

しかし、そこで僕は思い返す。
ならば一層、僕を受け入れてくれた桜子を見つけることに死力を
尽くさなければ、と。

最悪、僕の持つ力が誰に知られても、僕が人体実験のモルモット
になろうとも、それだけの価値が……いや、それだけの思いを僕は桜
子に抱いている。

家族だ。

庇護するべき家族。

妹というより、娘のように桜子を見ることに違和感の無くなった
僕自身に苦笑する。

僕は、生前に自分の家庭を持てなかった事が、よほど悔しかった
らしい。

まだまだ若い筈なんだけどな。

青年に接触を試みるために、取り合えず森で着地するべく森の上
空に入った時だった。

ふと、顔に、手足に、何かが纏わり付く感触。

例えるなら、蜘蛛の巣。

気味の悪い怖気に、両手で慌てて顔に纏わり付いたそれを剥がそ
うとした時だった。

「……え？」

僕は森の中に立っていた。

風の上でも、雲の上でも無い。

雑草と落ち葉で敷き詰められた土の上に。

「……………」
悩む。

僕の頭がおかしくなったのか、はたまた全てが夢だったのか。動揺だけが僕の中で渦巻いている。

今までの経験が、出会いが、感情が、全てが、全てが錯覚だったとしたら？

空を飛ぶ夢を見たことがある。

思考を止め、唯々気持ちよく飛んでいるだけの夢。

そしていつも夕日の中に身を投げようとしたところで目覚めるのだ。

目覚めはいつもの病室で、いつも同様胸を締め付ける痛みを伴う。

「そんなわけあるか！！」

気付いた時には既に、僕は近くの大木へ思い切り頭突きをしていた。

何度も、何度も。

魔法世界で出会った恩人達の顔を覚えている。

エドガーの不適な笑みは今でも悔しさで苛つく！

悪魔の放った黒い光に飲み込まれたときの恐怖に今でも体が震える！

崩れ行く浮遊都市で王の姿を見た。

そして、桜子と遊んでいる時は本当に楽しかった。

「…痛い」

切れた額から流れた血が目に入ったことで、ようやく落ち着く。

文字通り、自分の血で頭を冷やしたのだ。

やがて頭の怪我は、時間を巻き戻すかのように塞がり、流れた血

も無かつたかの如く消え去る。

嫌な話だけど、それを見て僕に浮かんだ感情は『安堵』だった。思わずその場にへたり込む。

自分で疑問に思うほど突然、僕は心の中を掻き乱された。

もう本当にわけがわからない。

冷静に何が起こったのか考えると、

「空を飛んでいたら、蜘蛛の巣のようなものに引っかかって、着地していない筈の森の中にいた」

鍵となるのは、空中で感じた蜘蛛の巣のような感覚なのだろう。

ふと思いつき、再度飛行を試みる。

僅かに残った不安を払拭したいというのもあった。

地面を蹴り、もはや体に馴染ませた感覚を許に飛び立つ。

ふわりと重力から解き放たれる感触。

僕は今でも飛べる！

感激と共に高度を上げると、やがて木々の天井を突き抜けて夜空へ。

そして周りを見渡して僕は絶句した。

どこまでも続く木、木、木、木、木。

ここはどここの樹海だ！！

目を凝らすものの、どこまでも暗い木の海が続き、街の光らしきものは一切見えない。

更に高度を上げていくと、再び蜘蛛の巣が纏わり付く感触。

「そして気付いたら森の中に立っていました、と」

なんだこれ、と逆に呆れるしかなかった。

『よつこそ千年林へ〜！』

そんな訳の分からない状況に嫌な汗を流していると、どこからとも無く軽い男の声が響いてきた。

まるでクラッカーでも鳴らしているような雰囲気である。

『目障りな羽虫がいるかと思ったら、自分から蜘蛛の巣へ飛び込んでくるなんて…俺は感心したよ！いや！感動とも言えるな！！』

パチパチパチ、と響いてくるのは拍手だろうか。

その態度に、相手が敵性である可能性が高いと僕は思うことにした。

僕は取り合えず相手の煽りを聞き流しながら、いつでもビーム兵器と投影できるよう意識を集中する。

フツノはまだまだ型が出来上がっていない。戦いで振り回すには経験不足なのだ。

『なんだ、だんまりかよ。まあいいさ！西洋魔術師に面白みが期待できないのは昔からだしな』

せいようまじゅつし？西洋魔術師か？

なんだそのファンタジー？と内心首を傾げる。

『ところで、俺の要求は既に伝えてあるだろ？いつまで待たせる気だよ。俺は待つのが嫌いだって言った筈だぜ？人質がいるってこと忘れてるんじゃないか？』

「人質？」

『あん？…ああ、いや…本当に忘れてるのか？』

人質という言葉に、僕の思考が白熱し始める。

まさか。そんなばかな。ありえない。と否定の言葉が頭に浮かんで消えていく。

悪い予感。嫌な予感というものは、往々にして当たってしまう。

暑くも無いのに、汗が頬を伝った。

『木乃香お嬢様の同級生だ。お前らは木乃香お嬢様を人質に俺達を脅す。俺はその同級生を人質にお前達を脅す。簡単な話だろ？』

皮肉げに笑っている雰囲気を感じるけど、生憎、何の話なのかさっぱり見えてこない僕には意味不明なだけだ。

ただ、この声の主が僕を誰か、いやこの場合は誰々かと勘違いしているのは分かる。

「人質は無事なのか？」

しかし、その勘違いを正すべきかどうか迷う。正した場合の相手の行動が読めない。

現状分かることは、犯人が人質を取って立てこもり、何らかの要求を出しているらしいという、まるで絵に描いた立てこもり事件のようだという事。

『俺だってこの方法は不本意なんだよ。子供を利用するほど落ちぶれたのかと思うと、お互い泣けて来ないか？なあ？』

「要するに、無事なんだな」

『ふん：今のところは、とっておこう。ただ、時間が経てば俺も行動を起こさなきゃなくなる。言っただろ？俺は待つのが嫌いだってよ』

暗に、早くしろ、と言っているようだけど、僕にそれを要求するのは筋違いというものだ。

「あんたが人質に取っているのは、椎名桜子という女の子か？」

『ああ、名札にそんな名前書いてたな』

頭が痛い。視界が揺れる。

予想はしていたけど、心構えができていなかった。

この訳のわからない状況に目眩がする。

こみ上げる吐き気をぐつと我慢。僕が今ここでダウンするわけにはいかない。

「その子以外には？」

『お前：もしかして関東魔法協会の人間じゃないのか？』

「魔法」という言葉に、返答に一瞬の迷い。しかし、今はそれどころではないと、気を取り直す。

嘘を吐いていたわけでも、隠していたわけでもない。ここは正直に答えるべきか。

そんな時だった。

森全体を揺るがすような爆音。

一度や二度じゃない。断続的に響いてくる。気のせいか、地面までもが揺れていた。

地震、というよりも、空爆と言われた方がしっくりくる。

『チツ！力技で千年林を破壊するつもりか！？これだから脳筋共は！！』

事態が動いているらしい。軽かった男の声の調子が、切羽詰まってきた。

『テメエ、困ったのかよ…ハハツ！一杯喰わされたぜ！とりあえず…寝とけ』

咄嗟にビームサーベルを投影するものの既に遅く、横から飛来したツタが数本寄り固まった太い触手に頭を殴られ木の幹に叩きつけられる。

「っ！？」

痛みに声を上げることが出来なかった。

ツタの触手があらゆる場所から湧いて出て、僕の全身を、取り分け首を締め上げる。

呼吸を求める喉からは、音にならない風切り声しか出ず、徐々に思考が鈍り、視界が白く染まっていった。

「どっせーい！」

ビームサーベルで体を覆っていたツタを切り裂き、脱出。

酸欠で気を失う前に、酸欠が死に直結すると判断したらしい体が蘇生を開始した結果、酸欠と蘇生を何度も繰り返してしまった。

新手的拷問としか思えない。

ツタの締め付けがそのまま緩まなかったら、と思うとぞっとする。取り敢えず、桜子の現状は把握した。

人質にされている、という最悪な状況。

しかも犯人は、何やら謎めいた力を使っていた。しかも会話の中

に登場した「西洋魔術師」や「関東魔法協会」といった単語。

日本は日本でも、やはり異世界は一味違ってるってことなのか。大地を揺らす爆音が今も続いている。

「まるで戦場だな」

それを懐かしいと思ってしまった自分の頬に拳をぶち込んで、大地を蹴り飛び上がる。

上空ならば、何が起きているのかを見ることができると思ったのだ。

木々のカーテンを抜けた先で、僕はそれを見た。

あの駅前で僕に声をかけた青年がポケットに手を入れたまま空中に立ち、その視線の先で隕石でも落ちてきたのではないかと思うほどの破壊を生み出している。

木々が噛み砕かれたように薙倒され、大地は円状に陥没。舞い上がる土砂が時を忘れたかのように空中で一瞬静止し、やがて豪雨として大地に降り注ぐ。

ダイナマイトでも使ってるんじゃないかと思うものの、それを否定するような力強さがそこにはあった。

その青年の真剣な横顔を見て、再び僕の中であの感覚が蘇る。

…どこかで会ったことがある気がするんだよなあ、と。

まじまじと青年を見つめていたら（僕にソツチの趣味は無い）、青年と目が合った。

「あ」

と思った時はもう遅い。

お互い、驚きの表情で見つめ合うこと（僕にソツチの趣味は無い）数瞬。

青年が空中を蹴ってこちらへと向かってくる。

もう隠す意味は無いな、と僕は諦めることにした。

人が飛べるなら、僕が飛べたって可笑しいことは何も無いのだから。

「あなたは駅前で会いました…失礼ですが、あなたは何者ですか？」

青年の目は恐ろしく真剣だ。

間近で向かい合って、その胡乱なものを見るような目を見て、

「ああ…もしかしてタカミチ少年？」

ようやく僕の記憶の中の少年と面影が重なった。

「え？た、確かに僕は高畑・T・タカミチですが、あなたは？」

「ああ…」

なんと…なんということでしょう！？

あの少年がいつのまにこんな成長を！？とか、煙草を吸い始めちゃってもー！とか、劇的なビフォーアフターに打ち震えていると、胡乱げな視線がそろそろ限界だったので、急いで気を引きしめなおります。

「僕は七瀬みそぎ。元ヘラス帝国軍の衛生兵で、空中戦艦の中で会っていた筈だけど…」

言いながら、ある可能性に思い当たった。

もしこの青年が同姓同名の別人だったり、ここが平行世界だとかで僕の合ったタカミチ少年とは別人だったら…。

嫌な汗がダラダラと流れる。

そもそも、ほんの少し会っていないだけで、こんなに成長するものだろうか？

タカミチ少年…いや、高畑青年は僅かに考え込むような仕草で黙り込む。

その沈黙は、まるで死刑宣告までのカウントダウン。

痛い人間認定された日には、僕はきつと一生拭い去れないトラウマが刻まれる…！

「…も、もしかして、あのオポチュニティの…ナナセさん!？」

「テオドラ皇女殿下と一緒に乗り込んだ、タカミチ少年だよね!？」

「え、ええ!」

高畑青年は面白いほどの驚きの表情を浮かべて固まる。

よかった…あのタカミチ少年で本当に良かった!

思わずホロリと涙が一筋。

「オスティアが崩壊した時に行方不明になってたと聞いたのですが…生きてらしたのですね！」

うん、本当は死んだんだ。

「でもどうしてここに？」

「実はちよつと込み入った事情があつて…説明したいけど、今は時間が無いんだ。桜子を助けないと」

桜子の名前に、高畑青年ははつと表情を引き締める。

「そうですね。ただ、これだけは聞かせて下さい」

「うん。何でも聞いて下さい」

嘘が許されない、その雰囲気。あの少年が…と再び感慨に耽りそうになるが、僕も真剣に耳を傾ける。

「桜子くんを心配していたあの時の言葉に、嘘はありますか？」

「嘘は一切無いと、誓います」

それは僕自身に対する誓いでもあった。

幕間・3 さくらん(後書き)

あとがき・解説

プロット上で分かっていたことですけど、改めて書いてみると女っ気が全くないという今回の投稿。

今回登場した「千年林」ですが、テレビで屋久島の特集番組を見ているときに思いついたオリジナルです。

幻覚を利用した結界って感じです。

そこは魔法が実在する世界ですので、超自然的な力もあるわけですが。

原作ではド派手な技や魔法が華々しく活躍しているので、こちらでは隠密性に優れた術として、呪術師とか頑張ってもらおうかな、なんて。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

PS .

男だらけの物語はもう暫く続くんじゃないや…ゴメンナサイ、嘘です。次はきちんと女性キャラ出ます。

幕間・4 さくらこ（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

幕間・4 さくらん

「さつきから何をやってるんですか？」

高畑青年の視線の先でクレーターがまた一つ出来る。

「どやら、拳一つパンチ一発であんなことが出来るらしい。」

「この結界の基点を壊してるんです。かなり細かい細工らしくて、捜しだすのに時間がかかるんですよ。ならばいつそのこと、と」

「随分と大味ですね…」

敵が山に要塞を築いて立てこもるなら、山ごと破壊すればいいじゃない。的なのりか。

高畑青年は頭を掻きながら苦笑を浮かべる。

「ナナセさんに敬語使われると、変な感じがしますよ。タメ口でお願いします」

「そうは言っても…だって、ついこの前までは少年だったのが、今では僕より年上に成長してるんだ…どう話したらいいか分かりませんって」

まるで、思春期の息子を持った父親の悩みだった。

「あれからもう十五年ですから。僕だって大人になりますよ」

…僕は十五年もの年月をぶっ飛んでたのか…そりゃあ、あの少年が老けるよ。

「とうか、老け過ぎじゃない!？」

「ははは、僕にも色々あります。気にしてるので、触れないでもらえると助かります」

笑いながら、その視線の先では巨大なクレーターがまた一つ穿たれた。

高畑青年が小さく息を吐く。

その瞬間、冷たい風が僕等を凪いだ。

いままで流れていた風が腐っていたと思えるほど、冷たく、透き通った風だ。

「境界を完全に破壊できたみたいですよ」

その言葉を肯定するように、街の光が戻った。

その光を背景に、二人の人間が空を跳ぶようにしてやってくる。

一人は黒いスーツに黒いサングラス（夜なのに）オールバックの髪型に、ダンディズム溢れる髭、と一見マフィアかと思ってしまうほどガタイの良い男性。

もう一人は、日本刀を手にしたタイトスカートの女性。

「タカミチ、ご苦労。そちらの方は？」

サングラス越しでも分かる警戒感。女性もまた、眼鏡の奥の瞳が警戒色に染まっているようである。

しかしその怜悯な女性の視線は、久々にどこか僕の琴線に触れるものがあった。

「僕の昔の知り合いです。七瀬みそぎさん。ヘラス帝国で軍人をされていた方で、信用できる方です。桜子くんの……」

「友人やっています。どうぞ宜しく」

「ほう、ムンドウス・マキクス魔法世界の……。俺は神多羅木だ。教師をやってる。しかし、椎名は魔法とは無関係の一般人だった筈だが？」

静かに煙草を啜る姿が、恐ろしく絵になっている神多羅木先生。コートとボルサリーノを身につければ、イタリアンマフィアと言われても違和感無い。

これで教師というのは、なかなか冒険的だ。

それにしても、やっぱりこの世界にも魔法があるのか。

いや、タカミチ少年がいたことからして、やはりあの魔法世界と同じ世界なのか。

ムンドウス：なんとかかというインド人っぽい単語にも聞き覚えがある。

「気付いたらこの街に倒れていた僕を介抱してくれたのが桜子です」

「彼女に魔法の事は？」

鋭利な言葉を投げかけてきたのは、やはり鋭利な視線で僕を射抜

く眼鏡美人。

原因不明の激しい動悸に襲われながらも（背筋がゾクゾクする！）、努めて表面上は冷静を装い、首を横に振る。

この動悸は、不純な理由からに違いない。決して！決して桜子に魔法世界の事を話してしまったことを思い出したからではない！

「もしかして、魔法の事って隠さなきゃダメ？」

さり気なく高畑青年に並び、小声で尋ねる。

「ははは…まあ、あの年頃の子なら、作り話としか思ってくれませんよ…きつと」

そんな男二人をジト目で見ていた眼鏡美人は、やがて諦めたように溜息を吐く。

「葛葉刀子です。一般人に決して魔法の事はバレないように！」

その、後光の射した女神のような姿に思わず、「お心遣い光栄です、レディ」と空中に跪き、その手を取って口づけ。

ふっ…伊達に貴族制国家で軍人やってたわけじゃない。その手のマナーやら何やら学ばされたのだ。

それがまさか日常の中で役立つ日が来るとは！

「雷鳴剣！！」

「うわっ！危なっ！！」

ニヒルに浸っていた僕の頬を、バチバチと帯電した刃が掠る。本気で命の危険を感じた。

「た、たたた、たかはたくん！？犯人の居場所が割れたから私先に行くわね！！」

まるでジェットエンジンでも搭載してるんじゃないかと思うほどの効果音を残して、眼鏡美人…葛葉さんは飛び去った。

「……………」

もしかして、今のがツツコミだったのだろうか…。

「タカミチ、彼は…大丈夫なのか？」

「ははは…そういえばこんな人でした」

失礼な事を言われているが、今は聞き逃そう。

それよりも、女性は聞き捨てならない事を言っていた。

「犯人つて、桜子を人質に取っている奴の事だよな？」

「え？ええ。僕達も急ぎましょう！」

森の中の一角、力技で薙倒された荒い切断面の木々がそこかしこに散乱し、結果森に穴が開いてしまっていた。

まだ無事な周囲の木々の陰に同化するように佇むのは、影絵にポツリと紅い絵の具をたらしただけのような目を持つ異形が一体。

影絵でありながら、木々の影に同化しきれないほど濁った黒色をした化物。

そんな不気味な化物に、あるうことか桜子が抱えられていた。

一体どういう原理か、お札のような紙切れに口を塞がれ、桜子は涙目ながらも一声も発することが出来ないようだ。

その光景に僕の中でドロドロと汚い感情やら罵声やらが渦巻くが、辛うじて表には出さなかった。

僕を含め、切り開かれた森の広場に背中を合わせて構える四人の間には、気を抜けばスッパリいきかねない鋭利な緊張感が充満しているからだ。

僕達：僕と高畑青年と神多羅木先生と葛葉さんの四人は包囲されている。

影絵の化物はただ立ち尽くして僕達を無感情に見つめているだけにも関わらず。

間違いない。

完全に。

「シッ！！」

神多羅木先生のフィンガースナップから放たれた風が、乾いた音

と共に飛来した何かを撃墜する。

ストンと地面に突き刺さったのは、細い蔦が複数本抜け細く長く寄り固まった一本の針。

いや、二の腕の長さ程のそれは、槍と表現した方が正しいのか。その植物の槍が、周囲の木々の陰から放たれるのだ。

影絵の化物は一瞬たりとも動いていない。じっと目を凝らしている僕が断言する。

しかも、飛んできた方向は真逆から。

それはつまり、周囲に僕達の誰も感知できない何者かが潜んでいるということ。

襲撃者。

狙撃者。

暗殺者。

あらゆる方向から槍が飛んでくるため、迂闊に動けないのだ。

高畑青年は当初通り、周りの空間を力技で破壊し暗殺者を燻り出そうとしたが、出てきたのは桜子を人質にするように立ち塞がった影絵の化物のみ。

あれよあれよという間に高畑青年の同僚五人が槍に貫かれ、地面に磔になった。

ご丁寧に殺されていない。

見せしめのように両手と両腿を貫かれ、口には地面から這い出た蔦で塞がれている。

貫かれるだけならまだしも、魔法使いだったらしい彼らにとって口を塞がれたことは致命的だったようだ。

しかも、何らかの薬を使ったのかと思うほど呆気なく彼らを眠らせた周到さ。呪文を紡ぐことも、何らかのアクションを返すこともできず、彼らは無力化された。

そんな見えない敵の鮮やかな手腕をも凌ぎ続けるこの三人はかなりの腕なのだ。

僕は勿論除外される。

しつこいようだが、僕は…というか僕の体はあくまで一般人の範疇であり、多少鍛えたとはいえ、やはりそれは一般人のレベル。

ここに来る前に高畑青年と神多羅木先生に、その事を念入りに説明していた時の高畑青年の胡散臭いものを見るような表情にはイラストきた。

失礼な。

素でメガトンパンチを打てるビックリ人間と比べると、僕は道具頼りのミジンコ野郎なのだから。

「神多羅木先生、まだ相手の位置を特定できませんか？」

葛葉さんがやや焦った声色で背中越しに声を発する。

答える神多羅木先生もまた背中越しだ。

「気配が複数ある。しかし人間と比べると存在感が小さい。恐らく式だ。術者本人の気配は感じられない」

『ハッハー！！悪いね。俺は臆病者だからよ！』

声と共に飛んでくる槍。嫌らしいことに、声が響いてきた方向とは微妙にずれた位置からの飛来である。

視覚が使えない時は聴覚に頼るしかない僕にとって、槍の飛来する風切り音が耳障りな声に邪魔されるのは致命的なほど効果的だった。

だからこそ、僕は無力感に暴れまわる感情を押し殺して他のメンバーに頼るしかない。

飛来した槍が見えない何かに弾かれる。

高畑青年が小さく息を吐いた。

「桜子くんを救えさえすれば…」

邪推だ。

邪推だと分かっている。

でも、足手まといだと自覚のある僕にその言葉は、思いのほか深く突き刺さった。

桜子を助けると、助けたいと強く願っている癖に、何の役にも立てない。

惨めさが僕の感情をドロドロと溶かしていく。

「タカミチ。お前のその短絡的な考えは改めると、何度言ったら分かる」

目の届く範囲に人質を連れているなら、何らかの保険がかけられている、と静かに諭しながら、再度飛来した槍を神多羅木先生が迎撃。

その瞬間を狙ったのか、一段と鋭い気配を感じた。

「っ!？」

直感と勘に従い、ライフルを射撃。

夜の闇を奔った一条の光の軌跡に、槍は質量を失い灰となって地面に落ちた。

「はあ…はあ…」

自分で分かるほど息が荒い。

今にも胃の中身どころか、内臓全てを吐き出せそうだ。

「七瀬さん冷静に。椎名さんを目の届く範囲に連れているのも、言動もすべて含めて相手の術です」

「わかってる。わかってます…けど」

葛葉さんの言葉に少しだけ落ち着くものの、焦りや惨めさで、直今の僕は正常な思考というものが持てない。

気を遣われる度に、惨めさが助長されているというのもあるから酷い話だ。

「その通りだけどよ…!」

葛葉さんが刀を振るう。

恐ろしいことに、その腕が一瞬視覚から消える程の速度。

次の瞬間には、地面に三本の槍が落ちた。

「テメエら本当にメンドクセエ!!」

囚われている桜子と目が合う。

安心させる、なんて気の利いた余裕を持たない僕の表情から何か

を感じ取ったのか、桜子は駄々を捏ねるように涙を流しながら首を横に振る。

生憎、僕に桜子の内心を推し量ることはできなかった。

見えない敵の叫びと共に、夜空から弧を描いて多数の槍が降り注いだ為だ。

防御手段を持たない僕は回避するしかない。

しかしその必要は無かった。

目に見えない何かによって、その全てが薙ぎ払われる。それを例えるなら、風の奔流とでも表現しようか。

高畑青年のメガトンパンチ。

「……つたく、人質見捨てて強行突入とか、ちつとは日本の警察を見習えっつんだ。こういうのは交渉戦から入るのがお約束だろうが」
「やれやれ、と疲れたような事を言っではいるが、その声色は全てにおいて笑っていた。

「改めて言うぞ。木乃香お嬢様をこちらに渡せ。この子供はそれと交換だ」

「そういう交渉は警察相手にやれ。俺達は教職に身を置く者だ。どんな理由であれ、生徒を差し出すことは絶対にしない」

神多羅木先生が静かに前傾姿勢。腰溜めにされた右手に風が集まっっていく。

「刀子、タカミチ、客人。相手がアクションを起こす瞬間を見逃すな。それが椎名を救出できるチャンスだと思え」

二人が僅かに頷く。その様子は先ほどまで以上に真剣で、どこまでも冷静に見えた。

それに反して僕の中では不安が鎌首をもたげる。

僕にできるのか？僕が足を引く張るんじゃないか？失敗するんじゃないか？

桜子が傷ついてしまったら…。

その想像に、僕は知らず息を止めていた。

「七瀬さん…？」

高畑青年の声がやけに遠く、間延びして聞こえる。

『ハハハ！期待通りの言葉をアリガトよ！ならば仕方がねえ…本当は俺だつてやりたかねえんだがよ。嘗めてもらっちゃ困るからよ』
初めて影絵の化物が動きを見せる。

その手に抱えた桜子を左手一本で眼前に掲げる。

その表情を僕らに見せ付けるように。

そしてその頭上に振り上げた右手の爪が一瞬にして伸び、まるで日本刀のような刃へ変化する。

『俺達は目的の為なら手段は選ばないってな！その目に焼き付けとけ！！』

「くっ！？」

「桜子くん！！」

葛葉さんが、高畑青年が、神多羅木先生が飛び出そうとする。

だがそれよりも先に。

「桜子に触れるならまず俺の許可を取りやがれゴキブリ野郎！！」
僕は飛び出していた。

地面すれすれをホバーで疾走し、手にはフツノを投影。

僕の持つ最大攻撃力で叩き潰す！

「いけない！？七瀬さん！！」

『なーんてな！俺の目的は最初ツからテメェらを地面に這い蹲らせることなんだよ！』

森中に響く声を楽しそうに笑い声を上げた。

「ごうつと、風がうねり森が轟く。」

木々の間から飛び出してくるのは先ほどまでと同じ鳶の槍。

全方向から一斉に飛び出したそれが、桜子に気を取られた高畑青年達三人に、そして飛び出し孤立してしまった僕一人に襲い掛かる。まだまだ取り回しの効かないフツノを持ってしまっていたことが災いした。迎撃が間に合わない。

後ろの三人が必死に迎撃しているのを感じる。

僕は眼前にまで迫ったそれを、ゆったりと流れはじめた時間の中

感じながら、ただ真正面から桜子を見つめていた。

この感覚には身に覚えがある。

自分は死ぬのだと、思い悩んだ病室のベッドの上。

点滴の落ちる雫が緩慢に見え、全ての音が僕の世界から消えた……
言わば諦めの境地。

悔しい。

悔しいと。

僕では桜子を救うことはできないと。

諦めそうになる自分に嫌悪を抱きながら、僕は久しぶりに涙が流したのを感じた。

「ミソにゃん!!」

一瞬だけ。

そう、一瞬だけ僕は見た。

桜子の瞳が一瞬だけ金色の光を発したのを。

そして、あの口に貼り付けられていたお札が風に飛ばされていた。
そして僕は……

「あだっ!？」

思いつきりコケて、地面を転がっていた。

その頭上を、鳶の槍が素通りしていく。

僕は失念していたのだ。地面に礫になっていた人達の存在を。

その脇腹を思いつき蹴ってしまったらしい。

眠っていたその人が苦しげに呻く。

焦りと混乱と申し訳なさで、思わずエスカリボルグを空中に投影。
それを蹴っ飛ばしてしまった人の頭上に落そうとして、しかし横
から飛んできた数本の鳶の槍を弾いて目標がずれる。

地面に頭からめり込んだエスカリボルグを、更に横から叩いたの
は高畑青年のメガトンパンチだった。

「あ」

とは件の高畑青年の声。

僕めがけて飛んできていた槍を打ち落とすつもりだったらしい。それが突如出現したエスカリボルグによって弾かれてしまって、標的を見失ったメガトンパンチはそのままエスカリボルグを打撃したと思われる。

2tもの質量を持った撲殺バットが、唸りを上げて飛んでいく。

影絵の化物めがけて一直線。それは桜子めがけて飛んでいるとも言える！

「桜子おー！！」

最早僕は涙と鼻水のバーゲンセールだった。

「ちよっ！？ぐへっ！！」

慌てて投影を放棄しようとした僕は、しかし、あんまりな光景を目撃してしまい啞然としてしまった。

回避しようとしたのだろう。

跳躍しようとした影絵の化物は、しかし地面を蹴ろうとして前のめりにすっ転んだ。

その衝撃で手を離れた桜子は、背中を摘まれて持ち上げられた猫のように体を丸めてびよーんとエスカリボルグの軌道から離脱。

そして凶悪な鉄塊の砲弾は、容赦なく転んだ影絵の化物に直撃した。

『ぐああああああ！？』

ずがん、ばきんと想像したくも無い効果音を轟かせて、化物はエスカリボルグ諸共すっ飛んでいった。

・・・死にはしないだろう。エスカリボルグだし。

後に残ったのは、戻ってきた静けさと、一連の出来事を呆然と見送っていた僕を含めた大人四人と、泣きながら僕へ駆け寄る桜子と、化物が転んだ足元に落ちている潰れたアケビの実。

「ミソにゃん！ミソにゃん！！よかった…怖かったよお…！！」

地面にへたり込んだまま、桜子の抱きつき（タックル）を受け止めた。

その嗚咽に、僕もまた涙腺が弛んでいくのが分かる。

「無事なんだな？何もされなかったな？痛いところはないな？」
しきりに頷く桜子の様子に安堵しながら、僕は立ち上がった。

まだ肝心の犯人がどうなったのかが分からない。

高畑青年達三人が油断無く周囲を警戒しながらこちらへやって来る。

「…どうやら、あの異形こそが術者だったらしいですね」

高畑青年の苦笑に、神多羅木先生と葛葉さんが揃って溜息を吐く。

「これだから呪術師は厄介なんです…」

「タカミチ、刀子、術者を拘束するぞ。客人はこのまま椎名の傍で警護をお願いしたい」

異論は無いので、素直に頷く。

犯人の下へ飛び出そうとした三人だったが、しかしそれは飛来した鳶の槍に足を止められる。

『ぐおおお…痛エ…痛…かったはずなのに体は快調なのは、どういうことだコンチクショウ!!』

桜子を引き寄せ、直ぐに警戒態勢に入る。

どうやらエスカリボルグがその力を遺憾なく発揮したらしい。あれがフツノだったら…残念なことをした！桜子に手を上げたことは万死に値する！！

感情の昂ぶりに呼応するように、投影したビームサーベルの輝きが増していく。

『チツ…テメエらの運が良いのか、俺の運が悪いのか』

その言葉に、腕の中の桜子の体が一瞬、大きく震えた。

そつとその表情を伺えば、見るからに顔が真っ青。

何か声をかけようとして、僕を見上げた桜子の、笑顔にも関わらず悲しげな表情に、言葉が詰まる。

「人質はもう意味を成さない。大人しく投降しろ」

静かな神多羅木先生の勧告に、しかし声はさも愉快だと笑った。

『謹んでお断りいたします…ってな！今日はこの辺で勘弁してやる』

よ。またな、ご立派な魔法使い諸君!!」

あでゆく、とふざけた捨て台詞を残して、声が遠ざかっていく。犯人の追跡に入った三人を見送り、とりあえず僕はビームサーベルを放棄。

改めて桜子と向き合った。

「ミソにゃん……」

「良かった……本当に無事で良かった……」

「うん……うん……っ！ミソにゃんが助けに来てくれたからだよ！すごく！すごく嬉しかった！！」

先ほどまでとは種類の違う涙を流し、顔色の戻った笑顔を浮かべる桜子に、密かに投影していた皇帝の瞳を放棄する。

辛いと、怖かったと、あの笑顔を見れなくなるなら、桜子の記憶を改竄でもしてやる！と一瞬でも考えてしまった自分自身を恥じた。

『フツハツハツハツハー!!』

消え行きながら満足げに笑い声を発する皇帝の瞳に、恥ずかしさからイラッと来た僕は皇帝の瞳を投影しなおし、地面に埋めておいた。

「とりあえず……この倒れている人達を介抱しよう。桜子は辛いなら……」

「にゃ!？わたしも手伝うよ!!……ちよっとこわいけど……」

珍しく頭を撫でられるままに任せる桜子に満足し、僕は腕まくりをする。

さて、元衛生兵の真の戦いはこれからだ。

幕間・4 さくらこ（後書き）

あとがき・解説

間が空いてしまったので、かなり難産でした。

時間があるときにチマチマ書いていた為、文章が安定していないかもしれないかもしれません。

何度も推敲したものの、私自身訳が分からなくなったりと、スランプの兆候が！？

ゆったりとした時間の中で書き進めたいものです。

桜子嬢の物語も終盤を迎えました。

というか、この作品全体を通してみると、まだまだ序盤なわけですが。

お気づきだと思いますが、この作品に登場する桜子嬢は特殊な存在です。

それがこの物語の一つの鍵である…と言ってもいいかもしれません。それが何であるのかは、物語の中で明かしていきます。

魔法先生二人登場。

刀子先生は離婚して間もない時期という設定です。

主人公がフラグを建てたように見えますが、実際はそんなことありません。

刀子先生は生粋の日本人なので、手の甲にチューなんて初めての経験に戸惑ったさんじゅ…ああ、いや、今いったいいくつなんでしょう？

神多羅木先生は渋くて大好きなキャラの一人です。

そのうち、フィンガースナップでビルを切断し始めるかもしれません。

敵役の彼が使用していた術ですが、詳しい説明はしませんが、蜘蛛の式を操り（修学旅行編で登場した小太郎くんの乗っていた蜘蛛の小型バージョン）、糸で弓矢のように針…というか槍を射撃していました。

語られる場合は恐らく無いので、この場で解説を。

自分の術を敵に語る術者なんていませんよね。

最後に。

このような雑作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

幕間・5 さくらん（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

幕間・5 さくらん

流石に疲労が限界だったようだ。フラフラと危なっかしく頭の揺れていた桜子をおんぶして、桜子の家路を辿る。

そうしていると、いつの間にか背中からは寝息が聞こえてきた。安心。

不安で不安で堪らなかった僕は、思わず顔が笑ってしまう。それでも、不安の種はまだ残っていた。

金色。

一瞬の発露。

金色に輝いた瞳。

僕ははつきりと覚えている。

桜子の事だ。僕が見逃すはずが無い。

一体あれは何だったのか…。

桜子にそれとなく聞いてみようとしたけれど、駄目だった。

痛々しいほど青ざめた桜子の表情がチラつくのだ。

「……ああ、いやだいやだ」

後ろめたい気持ちを抱くなんて、まるで桜子を疑ってるみたいじゃないか。

これは単なる好奇心。興味本位。

「……更に最悪だろ、僕」

低俗だ。下劣だ。

あらん限りの罵声を僕自身に浴びせていると、やがて見覚えのある公園が見えてきた。

懐かしい…とは腐っても思いたく無い奇抜空間。

麻帆良芸術公園。

暗闇の中、ところどころ街灯に照らされた遊具が更に不気味さを

増している。

なるべく見ないようにして通り過ぎようと、冷や汗を額から垂らして足を速める。

「あ、ミソにゃんと初めて会った場所だ」

「起こしちゃったか。まだ着かないから眠るときなよ」
首を横に振る気配。

そして桜子は僕の背中から飛び降りた。

「ちょっとだけ寄り道しようよ！」

「もう夜も遅いから……」

帰ろう、という言葉呑み込む。

笑顔で僕の目の前に回りこんだ桜子。

その瞳はいつもの色を失い、金色に輝いていた。

麻帆良芸術公園の片隅のベンチで、僕と桜子は肩を並べて座っていた。

桜子の瞳は、既にいつもの色を取り戻している。

「その目は……」

意を決して搾り出した僕の言葉を、桜子は明らかに遮るタイミングで言葉を発した。

「ミソにゃんって、本物の魔法使いさんだったんだね」

「ああ、いや僕は……」

否定しようとして、しかし思い至った。

この世界にいる魔法使いの使う魔法を僕は使えない。魔力をそもそも持たないから。

だから、魔法使い達から見れば、僕は否定される。

けれども、桜子のような事情を知らない人々からすれば、僕の持つ投影魔術もどきは立派な魔法になるのだろう。

しかも空を飛べて、容易には死なない。

魔法使いというより、妖怪か……

「悪魔って感じた」

あの大きいなる存在に力を与えられて送り込まれたのだから、天使じゃないかとも思ったけれども、僕に純白の羽とか絶対に似合わないのと言わないでおく。

あの方が神様は神様でも、魔神の方である可能性もあるし。

桜子は大きな瞳を更に見開き、口を半開きにして固まっている。

はて、そんな間抜けな顔をされるような事を僕は言ったのだろうか？

あまりにも固まり続ける桜子に不安になってきた僕は、桜子の頬を摘んでみた。

「はひゃっ！ミひよにゃんっへ、あふまひゃんひゃっひゃ…ひはいひよミひよひゃん！」

「ああ！ごめん。予想以上に柔らかくて話聞いてなかった」

「いいひゃら、はなひへ」

名残惜しい。名残惜しいけど、桜子の目に涙が浮かんだのを見て慌てて頬から手を離す。

「むー！やってくれたねミソにゃん！これはお返しだ…じゃなくて！ミソにゃんって悪魔さんだったの！？」

「そうひゃもひへないっへだひえへ、ほふはにんひえんのひゅもひ」

「真面目な話してるんだから、日本語で話してよね！」

だったら、可愛らしく摘んで引っ張る僕の頬を離して欲しいな。

「に、にゃあ…ごめん」

「……………」

いつもと様子が違いすぎて、調子が狂うな。

あんな事件に巻き込まれたのだから当然といえば当然なのかもしれない。

ただ、理由はそれだけではない気がする。

「僕は人間のつもりだけど、人間かもしれないなんて実際は悪魔とか別の生物だった、ってオチがついた方がしっくり来るんじゃないかと思った今気づいたわけだ」

「ミソにゃんの言うことはたまに分かんなくなる…」

「うつ！?…よ、ようするに、僕は悪魔と人間の中間にいますってことさ！」

僕自身、語彙の少なさで表現が回りくどくなることは気づいてる。でもそれで桜子に『ミソにゃんメンドクサイ』なんて蔑まれた日には僕はもう！もう！！

「!?!?…わたしと…いつしよだったんだ!!」

「へ?」

ちよっと待って。今の会話の流れはどういうこと?なんか展開が予想外すぎるのだけど。

桜子はベンチから飛び降り、戸惑う僕の目の前に立ってクルリと一回転。

僕がフィギュアスケートの審査員なら満点をつけるほどの可愛らしさと、優雅さで。

「わたし、悪魔なんだよ」

『ラックイーター』

その単語に僕は行き着いた。

僕の知る小説の中に登場した悪魔の種族名。

運命確率を操作する能力を持つ悪魔。

ただ、桜子の場合はその能力の発動が無意識的な面が強いらしい。気づけば自身にとっての幸運が舞い込んでいる。

近くの人を不幸にして。

「だから学校の友達なんかとは遊びたがらなかったのか」

「うん…わたしね、二年生のころに転校してきたんだ。前の学校で友達に大怪我させちゃったから…」

イジメがあったのだという。『疫病神』と。

ただ皮肉なことに、幸運にも桜子を直接傷つけるような虐めは起きなかった。

起こせなかった。

当時の桜子にとって幸運なことは、虐める相手が不幸になること。桜子に手を上げようとして、不幸にも逆に相手が大怪我を負ってしまうことは一度や二度ではなかったらしい。今回の犯人のようにそれが逆に桜子を一人ぼっちに追い詰めていくことは不運な事ではなかったのだろうか。

そう、転校する前の学校で、桜子には『友達』は一人もいなかった。

幼いながらも自身の異質さに気づいてしまった桜子にとっての幸運は、近くに傷つける相手がいないことだったのだ。

最早こうなつてくると、優先順位が滅茶苦茶になったマクロジみてる。何を第一に置いて、何を切り捨てるのか。その判断基準が狂っているとしたか思えない。

桜子の幸福というものが計算に入っていないのだから！

「怖かった。すっごく怖かったけど、思い切っておとうさんとおかあさんに正直に話したんだよ。そうしたら教えてくれたんだ。ずっと昔の桜子のおじいちゃんが、わたしと同じだったって」

悪魔の血を引いているのだと。

「先祖返り、というやつか」

成る程、事情を察した桜子の両親はこの麻帆良市に引っ越してきたわけか。

高畑青年の話によると、この街は魔法使い達の日本における一大拠点。

魔法使い達がいるのなら、特殊な力を持った桜子も受け入れられるかもしれない、と。

事実、桜子は受け入れられた。

思い出すのは二人の少女。

今も桜子の家で桜子の帰りを待っているに違いない。

子供ながらに力の制御に細心の注意を払いながら生きていくのは辛いことだろう。

クラスメイトと自分から距離を置こうともしたらしい。今現在もなるべく距離を取ろうとしている。

しかし、この麻帆良市の子供は、そんな距離をものもしないで突き進む子供ばかりなのだ。

「それはもう痛いほど僕自身、身につまされたよ…」
思い出すだけで脂汗が…。

「なら、なんで僕に色々世話焼いてくれたんだ？」

「ミソにゃんはね、なんだか普通の人とは違ってたんだよ。わたしが何度か力を使っちゃった事があったのに何も起こらなかったから、不思議だなんてずっと思ってたんだ。おとうさんとおかあさん以外でそんな人は初めてだった！」

出会ったとき既に、僕に驚いて一瞬だけ制御を忘れてしまっていたとのこと。

「にははは…わたしもお休みの日に一緒に遊んでくれる友達が欲しかったから…悪魔の力なんて忘れて遊びたかったから！」

桜子の家の呼び鈴を鳴らすと、血相を変えて美砂嬢と円嬢が飛び出してくる。

「桜子！」

「バカ桜子！！」

二人は桜子の姿を認めると、一目散に抱きついた。

微笑ましい光景ではあるけれど、しかし桜子が二人に完全に気を許せることは出来ないのだろう。

常に気を張らなければならぬ。距離を作らなければならぬ。

それを思うと僕の心には苛立ちやらもどかしさが沸き立つ。

それを押し殺し、三人を見守っていた桜子の両親と軽く挨拶と事情を説明してから、僕は辞すことにした。

桜子の両親は魔法使いの存在を知っているらしいので、事情の説明は変にはぐらかす必要が無くして楽だ。

葛葉さんに怒られないで済む。

廃ビルへの帰路を辿っていると、途中街灯の下に見知った人影を見つけた。

相手は僕を待っていたらしい。軽く片手を挙げて挨拶し、僕の許へとやって来る。

「すみません。桜子くんの話、聞かせてもらいました」

開口一番、謝罪して頭を下げたのは、高畑青年。

「もしかして尾行してた？全然気づかなかったな……」

気まずそうに頭を掻く青年は、再度申し訳無さそうに頭を下げるが、僕にはそうしななければならない事情は承知しているつもりだ。

なんていったって、僕は真正正銘、完全無欠の不審者なのだから。「僕も桜子くんの力になってあげたいのですが…僕が鍛えたのは腕っ節だけで」

「その腕っ節で救える人もいるだろうから、そこは適材適所でいけばいいと思うよ」

正直、僕が桜子の悩みを解消してあげたいと、独占欲に近いことを僕は思っている。

どこの中学生だ、と僕自身に呆れながら、しかし頭の中ではひっきりなしに桜子の力になる設計図が無いか探し続けていた。

「そう言ってもらえると助かります…正直なところ、困っている人全てを救えるようになりたいんですけどね」

「贅沢だね」

「僕もまだまだ若い証拠ですよ」

はっはっは！と明朗に笑う高畑青年。意外と根に持つタイプかもしれない。

「ところで、何か用があつて待つてたんじゃないの？」

「ああ、そうでした。学園長：関東魔法協会の理事を務められている方なのですが、七瀬さんにお会いしたいと」

まあ、偶然とはいえ、魔法関係者であるところの僕が潜伏していたのだから、事情聴取の一つや二つはあるだろう。拘束されないだけマシだと言えた。

今の高畑青年相手なら、一瞬にして取り押さえられる訳だけど。

「今から？」

「今日はもう遅いので、明日の朝でお願いします。僕が迎えに行きますよ」

「分かった。お願いします」

「承りました。そうだ、七瀬さん晩御飯は食べましたか？どうですか？一緒に」

僕の頭に閃光奔る！！

「僕、一文無しなんだけど…」

「僕がお誘いしてるんですから、勿論僕が出しますよ。再開を祝して、ってことでどうです？」

「よし行こう！さあ行こう！食べられるなら僕は何でも嬉しい！」

タダ飯ゲット！！と内心叫んで、しかしふと冷静になった。

僕が始めて高畑青年と出会ったときは、まだ彼は少年だった。

つまり、現在の実年齢は逆転しているとはいえ、よく考えてみればかなりの年下になるのである。

年下（しかも大幅な）に奢られる…。

自己嫌悪スパイラルに陥ろうとしたものの、「焼肉」という単語で僕は全てを吹っ切ることにしたのであった。

背に腹は変えられない。プライドでお腹は膨らまない。年齢って食べられるの？なにそれ美味しい？

晩餐の後、僕がねぐらにしている廃ビルへと高畑青年を案内し、ではまた明日と別れた。

廃ビルの二階。寝床にしている部屋に向かおうと階段を上っているときだった。

人の気配。

不法占拠という悲しい性から、このビル内であれば気配に敏感になるという役立つんだか微妙なスキルに引っかかるものがあった。手の中にビームサーベルを出現させ、同時にいつでも投影できるように頭の中で皇帝の瞳をスタンバイさせておく。

気配のする部屋の中に素早く身を滑り込ませた僕が見たのは、部屋の中央に直立不動で佇むスーツ姿の老人だった。

「あいや、待たれよ。ナナセ卿。怪しいものではございません」

その頭に被っていたシルクハットを取り、老人がゆったりと優雅に礼をする。

それを見た瞬間、僕は動きを止めた。

その老人の頭に、見慣れた、とても懐かしいものを見たからだ。角。

鹿のような天へと枝分かれして伸びる立派な角。

魔法世界で常に周囲にいた亜人の特徴の一つ。

「ミソギ・ナナセ勲功爵殿で間違いございませんか？」

「勲功爵……？というか、その角って明らかにシルクハット内に入りませんよね！？」

「そこは企業秘密というものでございます」

今日は千客万来だ。

幕間・5 さくらん(後書き)

あとがき・解説

前回のあとがきで「スランプ」と書いてしまったのが悪かったのか、かなり調子が悪い中で執筆しました。それでも一応形には出来て…いればいいなあ。しかし、ちよつと急ぎすぎた感が否めない…。

今回の幕間のテーマは「桜子の秘密の一端」です。

ご存知の方もいらっしゃるでしょうが、「ラックイーター」の元ネタはアスラクラインのアニア嬢です。

桜子嬢をヒロインに据えて物語を展開しようとしたとき、桜子嬢の公式設定「幸運」を用いようとした時にどんな設定にすればいいか悩んだ末、こうなりました。

もう一案、桜子嬢が女王蜂的存在で「運喰い虫」を使役する…なんて考えたりもしましたが、シナド様が降臨しそうなのでボツに。

…いや、今後の展開としてはアリかも…なんて考えたり。

今回の投稿。

執筆段階で全消去を4回繰り返しました…。

最近買った「ボーダーランズ」でちよつと気晴らしします…。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。ございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

幕間・6 さくらん（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

幕間 - 6 さくらん

「え、ええと…」

「さあ、行こうか」

「は、はあ…」

戸惑う高畑青年を急かし、関東魔法協会の理事なる人物の許へ向かう。

背筋を伸ばし、歩みはゆるりと、しかししっかりと踏みしめる。

視線は動かさない。ただ正面だけを真剣に見つめる。ノンフレームのメガネをかけておくのも忘れない。

スーツの上から羽織ったロングコートを靡かせ、雰囲気で周りを威圧してパーソナルスペースを確保しながら歩く。

「…七瀬さん。変な映画でも見たんですか？」

「失礼な！…じゃなかった。失礼だな君は。交渉に赴く外交官といったらこのスタイルだろう？」

ふふん、と胸ポケットから葉巻を取り出す。

葉はキューバ産らしい。よく分からないけど。

ずり落ちてもいないメガネを押し上げ、気取った様子で空を見上げようとして…。

「ミソにゃん…？」

ランドセルを背負った桜子と目が合った。その両脇で啞然と僕を見る美砂嬢と円嬢もいる。

登校するにとしては遅いんじゃないかなあ…と考え、しかし昨夜あんなことがあった直ぐ後だから仕方が無いか、と納得した。

友人二人も、まあ仕方が無いことだろう。

「おは…ぐつもーにん、みすサクラコ」

再度メガネを指で押し上げ、キラリと一輝き。

軽く片手を挙げるのも忘れない。

凄い…僕思いつきり外交官やってるよ！輝いているよ僕！！

見てくれ桜子！僕の真なるスペックを！！

「ミソにゃんがグレたー！ー！？」

「ちょ、ちよつと桜子！？」

「桜子を泣かせたらただじゃおかないんだから！！」

一目散に走り去った桜子と、それを追いかけていった友人二人。

ずり落ちたメガネが、音を立てて地面を転がった。

「な…何故？」

高畑青年が頭を掻きながら苦笑する。

「七瀬さんの今の様子は…まあ…インテリヤクザっていうんですか？そんな感じで…」

「バ力な！？」

僕と絶叫が被ったのは、今までひっそりと僕の背後についてきていたスーツ姿の老紳士。

「相手に舐められない威厳と空気を醸し出すこのスタイルがご理解いただけないとは…誠に残念にございます！！」

「僕が…僕がこのスタイルを着こなせていないんだ！僕に威厳なんて無理なんだつ！！」

「そんなことはございませぬぞ！卿は英雄と称されてもおかしくは無いお方！黙っていてもその溢れ出るオーラを私は感じていますぞ！！」

冷めた高畑青年の視線に気づいたのは、それから十分後の事だった。

高畑青年に案内されたのは、女子中等部の建物。

男三人でゾロゾロと校舎内を歩いたわけだけど、僕がめげずに（老紳士に乗せられた）雰囲気作りに励んだせいか、咎められる事は無かった。

実際は高畑青年がいたからだろうけど。

やがて着いたのは『学園長室』と下がったプレートに刻まれている部屋。

成る程、立派な扉だ、と意味無く余裕を装って扉の木目を見つめているが、実際の内心はバクバクである。

面接を受ける人達ってこんな気分なのだろうか。

いっそのこと、皇帝のお力を借りて、僕は麻帆良にいませんでしたよ、と記憶を改竄してしまおうか。

と、益々余裕が無くなり思考が安易な方向へ傾きかけた僕を急かすように、高畑青年はドアをノックして、返事に従って入室する。

「ナナセ卿。交渉事は私にお任せあれ」

老紳士がそつと耳打ちしてくる。ドアが開き、室内の人間が僕に注目するタイミングを見計らって。

既に戦いは始まっているのである。

事前に打ち合わせしていた通りとはいえ、外交の世界って怖い！と内心恐怖した。

打ち合わせといっても、僕のスタンスの確認くらいのもものだけど。「わかりま…分かった」

僕も表面上は余裕を装い、しつかりと頷く。

ちなみに、この行為に何の意味があるのかというと、僕がある程度地位のある、権威のある立場の人間であると示す為であるらしい。実際に僕はそういう立場になってしまっているらしい。ヘラス帝国で。

僕がいなくなった後の十五年間になにがあっただんだか。

室内に入ると、まず目に入ったのは骨董絵画に描かれていそうな中国山間部に隠棲していそうな御老人だった。

いわゆる、仙人というイメージぴったりの外観をしているのである。

思わず手を合わせて拝みそうになるのを寸前で留める。

今、この場で僕はヘラス帝国の…爵位こそ貰っていないが受勲した立場。イギリス風と言うなら、ナイトを受任した立場になるのだ。胸を張って、外交的な立場は対等であると表現し相対しなくてはいけない。

この関東魔法協会は魔法世界の連合と繋がりのある組織。
付け入る隙を与えさえしなければよいのでございます、とは老紳士の言葉。

「お呼び立てして申し訳ないのう。僕は関東魔法協会の理事を務めておる近衛近右衛門。この麻帆良学園の学園長もしておる」

「七瀬みそぎです」

初めまして、と握手を交わす。

「ところで…そちらの方は？」

近衛老の目が鋭く見開かれる。向けられた先は、僕の隣に静かに佇む老紳士。

この立派な角をお持ちの方は、ヘラス帝国陸軍情報局の外遊官：魔法世界外のこの世界（旧世界というらしい）での情報収集が任務の方。

まあ、簡潔に表現するならスパイさんだ。

この麻帆良に潜伏している協力者からの情報で、僕のことを知りすぐさまやって来たらしい。

「ヘラス帝国外務庁外務官を務めております。昨夜は少々強引な方法でお邪魔したことを、まずは謝罪いたします」

スーツ姿の老紳士は帽子を取り一礼。立派な角が現れる。

「しかしご理解いただきたい。私共ヘラス帝国が長い間捜し求めていたミソギ・ナナセ卿が見つかったのです。いても立ってもいられなかった、この老いぼれの心境を！」

「…同じ老いぼれとしての忠告じゃが、もう少し落ち着かれたらどうかのう。魔法先生二人が無力化されたという報告には肝が冷えたわい」

「私はきちんとした手続きに従ったにも関わらず、拘束しようとしたそちらの不手際でございましょう？」

「昨夜は…ちと込み入った事情があつての。こちらこそご理解いただきたい」

二人の老人の間では見えない火花が散っていたが、しかしどこか

予定調和的な話の流れを感じた。

まあ、僕の出番は無いので、偉そうに踏ん返り返っていればいい。…というのは外面だけで、実際はぼーっと壁にかけられた数々の表彰状や写真を眺めている。

そんな僕に改めて近衛老は視線を向け、頭を下げた。

「昨日の事件に関しては高畑君に事のあらましの報告は受けておる。農達に協力してくれたことを、この麻帆良における魔法使い達を代表して礼を述べたい」

「いや…当然のことをしたまでだ」

「うわー！何この偉そうな人！？」

僕です。

僕が役になりきろうとしている事を知っている高畑青年は、下を向いて必死に笑いをこらえている。

下痢の秘孔つぼみを突いてやろうか！と思ったが、今回は見逃すことにした。

昨日の焼肉の恩があるしね。

決して、返り討ちになるのが目に見えているからではない。

「ふおふおふお。桜子君は僕にとっても大事な生徒。感謝してもしきれぬわい」

「その桜子くんに関してですが、僕も七瀬さんも気になることがあります。学園長にお尋ねしたいことがあるんです」

グツジョブ！と葉巻を啜える仕草の中、さり気なくサムズアップ。

「っ！？」

すぐさま視線を横に逸らされた。肩が隠し切れないほど震えている。

「……………」

「高畑君？どうかしたのかの？」

「い、いえ。失礼しました。学園長は桜子君の特殊な体質についてはご存知でしたか？」

近衛老はしばし黙考し、やがて確かに頷いた。

「うむ。あの子の両親から直々に相談を受けた。あの子の祖父とはちょっとした顔見知りでの。君達があの子の秘密を知っているのは、両親から聞いたのか？」

「七瀬さんは直接本人から打ち明けられました。僕は偶然それを聞いてしまっただけです」

「そうか、あの子から直接……信頼されておるのだな」

羨望の眼差しで近衛老は僕を見た。

それに戸惑った僕は、一瞬成りきることを忘れ、素の口調を近衛老に向けてしまう。

「あの子はきつと窮屈な思いで生きています。対処法はないので……無いのか？」

ソファに座った足を組み、メガネをクイツと持ち上げる。

ふっ……僕がやって絵にならない仕草などないのだ。

「っ!？」

不自然に俯く高畑青年。どうやらドツボに嵌ってしまったらしい。

「……………」

「残念ながら僕にも分からん」

予想していた通りとはいえ、落胆は隠せなかった。

「そうじゃ!」

その僕の様子に気づいたか、近衛老は努めて明るい声と共に手を叩く。

瞬間、僕と老紳士は刹那の間だけ視線を交わした。

「この麻帆良には世界各国から集められた書物が保管されている図書館島がある。科学技術の促進にも自負がある。聞けば七瀬殿は数多くのアーティファクトの使い手とか。桜子ちゃんの悩みを解消する為に僕達に力を貸してくれんか!? 勿論、麻帆良への不法侵入、不法滞在に関しては何の咎めもありはせん!」

その言葉に反応したのは高畑青年だった。

ソファから立ち上がり、今にも近衛老に掴みかからんばかりの勢

いだ。

「学園長！子供をダシにしてそんな！？」

その様子が、僕はとても感慨深かった。

あの少年がまっすぐ育つて…僕に対して笑いを堪え切れていなかったのは一生恨むけど。

「成る程、良い案でございますな」

「ふお！？」

「え！？」

予想外だったのだろう。近衛老と高畑青年が揃って驚いた表情のまま固まっている。

その様子を面白そうに眺めながら、老紳士は軽い調子で言葉を続ける。

「ナナセ卿はもとよりそのつもりでした。ナナセ卿の存在が帝国にとって非常に重要であることは、既にご察しいただけているかと存じます。私としましては、是非帝国にお戻りいただきたい。しかし重要になるのはやはりナナセ卿の意思。そこで妥協点でございます」

老紳士が内ポケットから取り出したのは、一枚の書状。

「ナナセ卿をヘラス帝国外務庁外務官に任官し、駐麻帆良大使となつていただく。素晴らしい案でございますよう？」

その書状は委任状。

僕の名前、そしてヘラス帝国皇帝の名とテオドラ第三皇女の名が連名で入っており、勿論国璽も入っている。

大層、準備の良い事だった。

僕は思い出す。昨夜の事を。

立派な鹿の角をお持ちの老紳士は、ヘラス帝国陸軍の諜報員だと

自己紹介した。

ヘラス帝国…その名前は、つい最近にも関わらず酷く懐かしい。

「早速でございますが、ナナセ卿とお話されたいという方がおられます。繋げますので少々お待ちを」

老紳士がスーツの内ポケットから取り出したのは、21型ブラウン管テレビ。

スーツの…内ポケットから…？

「企業秘密でございます」

「まだ何も言つてません」

「失礼いたしました」

電源を繋いでいないにも拘らず、テレビの電源が入り砂嵐を映し出す。

白黒の砂嵐が、やがて色を帯びていき、人の顔を映し出した。

懐かしい。

やはり懐かしく感じる、僕の恩人だ。

『元気にしていましたか？ミスタ ナナセ』

老けているものの、その人を惹きつける穏やかな笑顔を忘れるはずが無い。

「ダール中隊長…ご心配をおかけしました！」

あのオスティア崩壊の日から十五年間。僕の行方を捜してくれていたそうだ。

「私共、陸軍情報局外遊課はナナセ卿を旧世界で捜すためだけに結成されたのでございます」

ダール中隊長だけがじゃない。ヘラス帝国という国が。

その好意に、思いに、僕は堪らなく胸が締め付けられて涙が流れる。

今はその恩に何も返せない。

だから僕は精一杯の感謝の気持ちを乗せて最敬礼をダール中隊長へと返した。

ダール中隊長も返礼し、しばしお互い不思議な沈黙に包まれる。

『…ふふ、私は今では陸軍中将だよ。見ての通り、もう年寄りさ』

「はー…出世しましたね。でもまだ若々しいじゃないですか」

白髪まじりになってはいるものの、豊かな髪は綺麗に整えられ、刻まれた皺も芸術のように整っている。

若々しいというのはお世辞でも何でも無いのだ。

『そういう君は全く変わっていないな。一瞬、十五年前に戻ったのかと思っただよ』

「ええ、それなんですけどね…」

僕はまた、洗いざらいあの日、オスティアの本島を受け止めた日に何が起こったのかを報告した。

時間跳躍…神らしき存在…と、傍で聞いていた老紳士が卒倒しそうだったが、画面の中のダール中将は慣れたもので、

『今だけはその神に感謝しなければな』

きつとあの方も喜びますよ。

『それで、今後に関してだがね。ミスタ ナナセは私個人の傭兵としての契約は続いていて、今後の生き方は自由に任せる…としたいところなのだが、エドガー君やテオドラ第三皇女殿下の推薦で君に騎士の位が叙任されてしまっていてね、正式に帝国軍人に名を連ねてしまっているのだよ』

「なるほど…」

と、訳知り顔で頷いてみるものの、正直何がどうなるのか見当もつかない。

まあ、戦死して二階級特進的な感じなのだろうけど、僕は実際にここに生きている。

『ああ、これは余談だが、君の認知度も帝国内限定ではあるが高くてね』

「な、何故です…?」

何か目立ったことやっちゃったっけ?と首を捻る僕に答えたのは部屋の片隅に待機していた老紳士だった。

心なしか目が子供のように輝いている。

「あの大分裂戦争中、北方師団に従軍していたヘラス映画界の巨匠ルーデンガルフ！戦争映画を多く撮り続けた彼が唯一発表したドキュメンタリー映画『ARIKA〜ウエスペルタティアの落日〜』！実際の記録映像を用いて終盤の山場となった王都オステイア崩壊のシーンでナナセ卿とアリカ女王が交わした言葉！二人が成しえた奇跡！あれがどれほど私共戦争に疲弊し、絶望していた軍人に希望を与えたことでしょう！我らは人を殺すだけが能ではないと！！発表から十年経った今でもリバイバルは絶えず、お二人をモチーフにした作品も溢れているのでございます！！ああ…実物に御会いできるなんて…部下を差し置いて飛んできた甲斐があつたものです！！」

輝くどころか、既に血走っていた。

本来は喜ぶべきところなのだろうけど、そのシーンって思いつきり僕が死ぬシーンだよな…。

「…と、いうわけだよ。軍人だけでなく民間人にも人気者さ」
「なんだか、悲劇だったからこそ人気者になっちゃった的な感じをヒシヒシと受けます…」

「はは！そういった側面はあるだろうね。まあ、そういった理由で君が帝国に戻れば英雄になれるかもしれない。だが、今我らは危機的な状況に面していてね、君の力を是非とも借りたいのだよ。そちら、旧世界で」

帝国に戻れば、どこぞのハリウッドスターのように豪邸建てちゃったりできるのかな。

女性に囲まれ、お風呂はお札風呂…そんな生活を想像して…。

無いな。

そんな安っぽい豊かな生活は僕の描く幸福じゃない。

「…卑怯かもしれないが、君に軍人として命令する。旧世界に滞在し、任務を遂行せよ。任務の内容は極秘であるため、一度帝国へ戻ってきてもらう必要があるが。尚、極秘任務を遂行するにあたり、騎士ミソギ・ナナセは今後、ヘラス帝国陸軍情報局外遊官、及び外

務庁外務官の兼任とする』

迷…うことは何も無かった。むしろ歓迎すべきことである。

極秘任務というのが不安を掻き立てるが、しかし僕に指針ができた。後ろ盾もできた。そしてなにより安定した収入がある！！

逡巡は一瞬。

僕はビシツと敬礼。

「了解！」

『…感謝する。早速だが君は日本…麻帆良にいるんだったな。麻帆良は魔法勢力の旧世界での拠点の一つ。丁度いい、麻帆良に滞在できれば彼らの動きを掴める…か。どう思うかね？』

「どう思うかねって、遠慮しなくなりましたね！」

『フツフツ、私や妻を心配させた報いを受けたまえ！それと、本任務は君にとって未経験のものになるだろう。それに、単独任務となる。三年ほど帝国で訓練を受けてもらいたい。君に逢いたがっている者達もいることだ。麻帆良に滞在する手立てと、帝国へ帰還する手筈はこちらで整えよう』

三年か。ふと頭に浮かんだのは桜子の顔。あの子の問題を放置してこの街を離れることが僕にできるか？

できるわけがない。

「中将、そちらに悪魔に関して詳しい方はいらっしやいませんか？ 専門家とか」

『ふむ…一人…心当たりがある。こちらに戻ってきた際に紹介できると思っ』

結局、この街を離れないといけないわけか…。

やはり、僕の記憶をひっくり返してでも役立つ設計図が無いか探してみる必要があるそうだ。

と、いうわけでこの皇帝と皇女の署名入り委任状は一晩で用意されたものなのだ。

魔法世界ってそんなに近いのか！？と思ったけど、そこはやはり「魔法だから」で片付けられてしまうらしい。

「すげえ！魔法すげえ！！」

「だけど僕は使えない。」

というわけで、この関東魔法協会との協議は、僕の立場と存在を正当化するための茶番劇だったのだ。

しかし、さすが連合の息のかかった組織。

「ううむ、それは流石に考えさせられるのう」

簡単には事が進まない。というか、近衛老の困った風な様子はどこか白々しい。

老紳士がニヤリと黒い笑みを浮かべる。

「万が一、メガロメセンブリアと手を切る際は私共帝国との友好関係が助けとなりましょう」

近衛老もまた、ニヤリと黒い笑みを浮かべる。

「万が一、本当に万が一ということもあるしのう」

これだから腹芸のできる人間って。

なるべく関わりたくないな、と願望というか決意を己が内に刻み込んでいると、白けた表情で二人の腹黒を眺めていた高畑青年と目が合った。

なんとなく、良い友人関係が築けそうな気がした。

幕間・6 さくらん(後書き)

あとがき・解説

今回のお話も男成分高めです。

しかし、舌戦とか交渉事は本当に苦手。

参考になる面白い小説があれば教えていただきたいほどです。

…まあ、面白くても私が実際に書けるかという別問題なのですが。

この幕間の大きなテーマは「幸運」。

ヒロインの桜子嬢が人質になったりと不運がありました。最終的には主人公が後ろ盾を得るという幸運を得ました。

恐らく、次の話でこの幕間は閉じます。

ようやく、漫画本編に時間は移るか。

3年間の主人公の特訓はダイジェストでお送りしていいのだろうか
…と迷い中。
フットキャノン

予想以上に幕間を長くしすぎました。

反省。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
ございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。
す。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

幕間・終 さくらこ（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

幕間・終 さくらん

「お手紙出すね。ちゃんと返事出してね！」

桜子が珍しいことに拗ねた表情を浮かべていた。

「うん。分かってる。」

その頭を撫でようとして、しかし膨れっ面の桜子に軽く回避されてしまう。

桜子そのまま引率で来ていた母親の背に隠れると、顔だけこちらに向けて、あっかんべー。

「ふんっ、だ！」

まあ、そんな表情も絵になっていて可愛いんだけど。

僕は空港に来ていた。

これから魔法世界：ヘラス帝国直通のゲートがあるというトルコ、イスタンブールへ向かう為だ。

「嫌われたんだか、なんなんだか……」

「ははは、分かっているくせに」

こちらも見送りに来てくれた高畑青年。

忙しいんでしょう？と遠慮しようとしたが、帝国と正式に協定を結ぶことになったんだから、その主賓である僕を「はいサヨウナラ」で放り出す事は許されないんだそうだ。

「まあ、直前になって三年間は会えないって言わざるを得なかった僕の優柔不断さが悪いんだけどさ」

「いい年の男性から、お別れが言い出し辛かった、なんて聞かされるなんて思ってもいませんでしたよ」

「随分辛辣になったよね。僕に対して」

誤魔化すように高畑青年はタバコを取り出し、啜える。

「そつえば、桜子くんがかけているあのメガネ。あれが力を抑制するんですか？」

そう、桜子はメガネをかけている。
メガネっ娘だ。

「あれをかけている間は、力が暴走することは無いよ」

「あれもアーティファクトですか？」

「うん」

古今東西、力を隠す、封じると言ったらメガネと相場が決まっているのだ。

…というのは大嘘で…まあ、僕が投影したメガネであるのは間違いないんだけど。

『ジュネスメガネ』

大型シヨップینگモール「ジュネス」に1,980円で売っている度無しメガネ。

メーカーは「Kuma^{クマ}」

どんなに霧が濃くても見通すことができる。

桜子の力…周囲の人間から運気を吸い取り、自身の幸運へと変換させる…を封じることなんてできない。

桜子の力の正体を知りもしない僕に、そんな都合の良いアイテムを作り出すことができなかった。

帝国へ一時帰国する日にちも迫り、焦る僕が思い出したのは一人の剣豪。
鵜堂刃衛。

彼は自身に暗示をかける事で己の潜在能力を引き出した。

そう、自己暗示って使えないか？と思ったのだ。

潜在能力を引き出せるなら、その逆が不可能である道理は無い！
と思わず廃ビルの屋上で高笑いしたものだ。

…桜子と一緒に遊びに（という名目で僕の監視）来ていた円嬢に蹴り落されそうになったけど。

『これは魔法のメガネ。これをかけている限り桜子の力は発揮されないんだ』

まあ、ほんの一時的な気休め。時間稼ぎ。

根本的な解決にはならない。

桜子はいつかは気づくだろう。

…そうなる前に、なんとか魔法世界で情報を探したい。

これは僕の見栄だ。

しかし、その見栄が桜子を傷つけてしまいかもしれない。

力は発揮されないと安心した桜子が、気づかず周りを不幸にしてしまい、再び虐めに発展するという可能性だってある。

だから僕のいない間は高畑青年に全てを託すことにした。

「なるほど、そういう事ですか。でも心配いらなと思いますよ」

「どうして？」

高畑青年が浮かべたのは苦笑。

「あの”麻帆良ですから。七瀬さんも長く住むことになれば分かると思います」

妙に実感の籠った言葉だった。

「出発の時間にございます」

気を利かせたのか、少し離れた位置に待機していた老紳士がやってくる。

壁にかけられた時計を見れば、搭乗手続きの時間。

殆ど物の入っていないリュックを肩にかける。

「ミソにゃん…」

動き始めた僕の目の前に、母親に背を押されるようにして桜子が

躊躇いがちにやって来た。

「じゃあ、ちよつと行ってくるよ」

「帰ってくるんだよね？また遊んでくれるよね？」

桜子の声は震えていた。

先ほどまで不機嫌そうだった瞳は、まるで空気に震えるかのように潤い輝いている。

そんな不安を浮かべる桜子に、僕が向ける表情は一つだ。

ドラマじゃないけど、別れるときにはやっぱり笑顔だろうと。

「当たり前だろ？僕は桜子が好きだからさ。すぐにも桜子シックにかかって飛んで帰ってくるかもしれない」

右手を差し出す。

その意図に気づいてくれたのだろう。桜子は慌てて袖で涙を拭い、同じく右手を差し出す。

それは、お互いがお互いを大事に思っていることを示す行為。

別れ行く友人同士の絆。

「えへへ…握手したのは初めてだね！」

「手を繋いで…というか、引き摺られてばかりだったからね。僕は」

「にははは！帰ってきたら、もつといろんな場所に行こうね！」

「おう！勿論！」

僕が手を離すと、桜子はすぐさま母親の許へ駆け寄り、何かを受け取って引き返してくる。

その手にあるのは、包装紙に包まれ、リボンで装飾された小さな箱。

「はい、ミソにゃんにプレゼント！」

「僕に？」

受け取ると、その箱からは僅かに甘い香りを感じた。

人生初のプレゼントに、胸の奥が熱くなる。

箱なのに、唯の小さな箱なのに…それがかけがえの無い、まるで宝石のように思えてくる。

「手作りだからね！ちゃんと食べてね！」

この状態のまま永久に保存しておこう！と内心密かに思っていた僕を見透かすなんて…恐ろしい子…！

「ミソにやんって分かりやすいんだから」

クスクスと笑う桜子が、まるで僕を年下扱いしているような気がして面白くないので、仕返しだ！とその頭を撫でる。

驚くべきことに、桜子は避けようともせず、大人しく僕に撫でられていた。

逆に僕が戸惑ってしまったじゃないか。

それでも、まあ思う存分撫で回してやれ！と桜子分を補充しようとして企てる僕に、僕だけに聞こえるように、桜子は小さな声で呟いた。

「桜子ね、頑張つてこの力と仲良くしてみるよ」

え？と首を傾げる僕に向けられた金色の瞳。

「それはメガネがあれば…」

桜子はいつもの天真爛漫な笑顔を浮かべて、首を横に振る。

「ミソにやんのウソも分かりやすいの！」

絶句した僕の許から、ぴょんと桜子は後ろへ下がる。

「クツキとビツケも待つてるからね。いつてらっしゃい、ミソにやん！」

手を振る桜子と、穏やかにお辞儀する桜子の母親。

その隣で、最初から全てを予見していたかのような笑顔で、高畑青年が片手を小さく上げて頷いた。

ハハハ、と自分では乾いた笑いが出たつもりだったけど、思いのほか安堵しきつたような息が出た。

チクシヨウ、と声が漏れる。

悔しくない。ごくごく自然と漏れた言葉だ。

悔しくないから笑いとともに。

イスタンブールから一瞬の内に辿りついた魔法世界、ヘラス帝国のゲートで僕を出迎えたのは、タイトスカートの女性用軍服に身を包んだ女性だった。

老紳士は旧世界で別件の仕事が溜まっっているらしくトルコで別れたので、魔法世界では彼女に案内されることになる。

その女性軍人の耳はネコミミ。

背筋をピンと伸ばし、立ち姿からして凜とした佇まいとのあまりにもギャップに、戦慄せざるをえない。

「マイア・ケサリーです。卿の帝都までのご案内を務めさせていただきます」

その敬礼もまた、見本のように綺麗である。

しかし、その名前に僕は一瞬引つかかるものが合った。

「ケサリー…？ケサリーってもしかして」

「はい。卿と共に大分裂戦争に従軍しておりましたムルグは私の祖父です」

僕が配属されていた医療部隊の隊長。ムルグ・ケサリー隊長。

「ムルグ隊長の！？隊長はお元気ですか？」

僕はただ、懐かしい思い（僕の体感では数ヶ月）から出ただけの言葉だったのだが、マイアさんは静かに目を伏せる。

その様子に、僕は思わず息を呑んだ。

「五年前に祖父は他界いたしました」

聞けば、戦後は軍を退役し、故郷で開業医として働いていたそう
だ。

死因は老衰。

「卿がモチーフになっている映画を見ては、何で帰ってこないんだと怒ってましたよ」

マイアさんは、先ほどまで纏っていた堅苦しい空気を僅かに引っ
込め、小さく笑う。

僕も…自分がモチーフになった映画というのが想像できないけど…その場面が、ムルグ隊長の怒った表情が想像できてしまう。

「…今度、ご挨拶に伺ってもいいですか？」

「ええ、もちろん。祖父も喜びます」

マイアさんに連れられ、帝都に入った僕は一直線に皇族の住まう宮殿へと案内された。

なんの心構えも無かった僕は、戸惑う間にメイドさん達にあれよあれよと式典用の軍服に着替えさせられ、せめて心構えを！とストップをかける僕をガツシリとした体格の黒服二人に、どこぞのグレイよろしく引っ立てられ、一際きらびやかな部屋へと放り込まれた。すわ謁見の間か！？と戦慄するものの、しかし玉座は存在しなかった。

玉座とまではいかないものの、豪華な椅子に折り目正しく腰掛ける女性。

褐色の肌に、頭に生えた角。

「テオドラ…皇女殿下？」

「うむ。久しぶりじゃのう。ミソギ・ナナセ。また会えて妾は嬉しいぞ」

あの小さな女の子が、おっそろしく成長していた。

時の流れをここでも実感。

そして、冷静になってみればテオドラ皇女殿下の傍に控えるように並んでいる面々にも見覚えがあった。

「無事帰還できたようだなにより」

「ダール中将はもちろん、

「……ふ…ふふふ…ふは…っはは！！これは俺を心配させた報いだ！！」

「エドガー！？ちょっと！？まっ…ホメドアライツ！？」

物凄くいい笑顔で踏み込み&アッパーカットで僕を吹き飛ばしたエドガー！。

「…唯で死ぬはず無いと思っていた」

ボクシングにも蹴り技あるんだあ…と朦朧とする意識の中、はっきりと感じる冷めた視線。

「ラッチェさん…？老け…：てませんよね…：全然！！」

僕の即頭部スレスレでサーベルの峰が止まった。

冷や汗が頬を伝う。

「お主ら！妾の執務室で暴れるでない！！」

ああ、あの世界だ。僕が初めて訪れた異世界だ！

望郷にも似た感情に胸を震わせていると、僕の目の前に軽い足音と共にローブ姿の少年が立った。

「ほう、お主がダールの言っておったアーティファクトの使い手か」
しかし、見た目に反して言葉遣いは古臭い。

ヘラス族などのように、体の成長が人間と比べて遅い種族なのだろうか、と自己完結しておいた。

ダール中將がその隣に立つ。

「ミソギ外務官、紹介しよう。こちらがラッチェダール・パロタ士官学校校長と共に君を鍛える…」

「フィリウスじゃ」

ラッチェさんが校長？と聞きたいことはいくらでもあるが、とりあえずこの場では流れに身を任せよう。

フィリウスさんと握手を交わす。

「フィリウス殿は悪魔の造詣も深い。君の助けとなるだろう」

「貴方が！？」

と思わず握手する手に力が籠る。

「う、うむ。何でも聞くがよい」

「遠慮なく！」

今にも握った手をぶんぶん振り出しそうな僕に気づいたのだろう。フィリウスさんはそそくさとテオドラ皇女殿下の後ろへ下がる。

「再会と顔合わせは済んだようじゃな。最後になってしまったが…改めて名乗ろう。妾が本日よりミソギ・ナナセ、そなたの直屬の上

官となるテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア
じゃ。三年間の訓練終了後から死ぬ気で働いてもらうからの。覚悟
しておくのじゃ」

最敬礼で答えると、テオドラ皇女殿下は満足したように頷く。

しかし、僕にはどうしても拭い去れない一つの疑問があった。

「僭越ながら…リカルド小隊長はどうされてるんです？」

答えたのは、かつて副官だったラツチエさん。

「ヴォンヘン伯は、軍を退官し、オレンジ農園を経営されています。
人手が足りないので手伝いに来いとおっしゃっていました。非番の
際に訪問すると良いでしょう。ちなみにヴォンヘン伯領でのオスス
メはオレンジムースです」

なんだろう…帝国でゼロなレクイエムでも起こったのだろうか。

幕間・終 さくらこ（後書き）

あとがき・解説

これにて幕間は終了です。

主人公ブートキャンプの様子はバツサリと切り捨てました。本編中でちよくちよく描写していくかと思えます。

しかも、今回の後編は大変な急ぎ足…。

というわけで、次からいよいよ原作漫画の時間軸に突入する予定です。

ただ、プロットがまだ纏まりきっていないので、この飛び石連休中に固めたいところ。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしく願いいたします。

2 - 1 ようこそ（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

2 - 1 ようこそ

『オノレ！！オノレ！！下種トモガ！！』

中空に磔にされた巨大な甲冑の騎士が吼える。

煌びやかな装飾が施されていた甲冑が今ではヒビだらけの鉄板と化し、純白だった四枚翼は血に塗れてどす黒く変色していた。

その主だった原因は、甲冑の騎士の体中に穿たれた杭。

杭からは鎖が伸びており、騎士を包囲する面々の手に繋がっている。

「口にアンカー打ち込め！攻撃が来るぞ！！」

騎士の口…人間の持つ口ではない。ましてや生物の持つそれではなく、機械制御されていそうな金属の口腔。

兜から覗くそれが重々しく開き、その正面に白く輝く魔方陣が展開した。

その奥から見るからに危険な熱量、白く燃え盛る輝きが溢れ出す。

「アンカー射出！！」

それに怯むことなく、騎士の眼前に飛び出した一人が肩に担いだ円筒形の装置から杭を射出。

鎖が尾を引きながら騎士の顔に突き刺さらんと迫るが、しかし騎士の眼前で見えない壁がそれを阻み、甲高い音と共に火花が花開いた。

「ナナセ！障壁に穴を開ける！！」

「了解！」

杭の接点を狙いビームライフルを射撃。

謎ビームは魔法の障壁を無視する。

故に、ビームが障壁を貫通したと同時に杭が障壁を抜け、今まさに光を放つ寸前だった騎士の顔、口腔を突き破った。

『アアアアアアア！！』

爆発。

対精霊兵器であるアンカーにより、魔法としての方向性を失った白い光は純粋なエネルギーとなる。

制御を失ったエネルギーは騎士の口内でのた打ち回り、膨れ上がった光は騎士の顔を呑み込み爆ぜた。

首から上を失った騎士の体がゆっくりと落下を始める。

見るからに力を失っていたが、しかし…

「再生する前に決めるぞ！！総員攻撃！！」

包囲していた全員がアンカーの鎖を手放し、それぞれの得物を抜き放ち騎士へと飛ぶ。

僕もまた、フツノを投影し突貫。

危機を感じ取ったのだろう。

騎士の巨大な両手が大きく跳ね上がり、迫る僕等を払うように振るう…が、そんなものに当たるようなヤワな鍛え方はしていない。

「断ち切れ！！」

フツノが内包する概念の力が吼える。

切断の力は遺憾なく發揮され、一瞬にして騎士の両手を切断。

そして全員の剣が、槍が、矢が騎士を貫く。

断末魔の咆哮は無く、騎士の全身は粒子となり蒸発して消え去った。

始発を降りて駅を出る。

街は朝靄に包まれて真っ白だ。

ああ、いや、ここまでいくと霧か。

駅前のベンチに腰掛けて、平然と自動販売機が並んでいるのを見て日本に帰ってきたんだなあと感傷に浸ってみる。

しばらくぼうつとしていると、やがて軽快な足音。

霧の中、やがて見えてきたのは小柄な影。

「…久しぶり…」

シスター服の小さな女の子。

「去年ここに連れてきた時以来だね。元気してた？」

ココネ。

ココネ・ファティマ・ローザ。

「…体に異常は無イ」

「それはよかった。学生生活はどう？」

「…問題無イ」

相変わらずでお兄さんは安心だ。

ココネは魔法世界が崩壊するであろう将来、生粋の魔法生命体である亜人達を旧世界に移住させるためのテストケース。

というのは表向きの理由で、実際は僕達が旧世界で活動するためのサポート要員の一人である。

「…アジトに案内すル」

「アジト！…なんか悪の秘密結社みたいで胸が張り裂けそうだ！…でも僕にとっては馴染み深い場所なんだよね。大丈夫。場所は分かるから」

そう、事前に取り決めていた。

ほんの数ヶ月だけだった我が家。

「ココネは今日も学校があるんだろ？」

僕のことには気にするな、と言ってみるが、

「…案内する。それが任務」

テクテクと僕を置いて歩き出す。

相変わらずでお兄さんは安心だ。

掴みどころが無いというか、取っつき難くてこの子が少し苦手だったりする。

まあ、逆の意味で自意識過剰というか、ココネも僕の事を苦手に行っている節がある。

人づきあいは難しいもんだなあ。

などと格好付けて溜息を一つ吐き、急いでココネの後を追った。

廃ビルは相変わらず廃ビルだった。

取り残されたような静けさの中に、ぽつねんと佇む廃墟。

以前と変わったところといえ、二階と三階の窓ガラスが全て真新しく輝いているところだろうか。

「クーがリフォーム済みって夕」

階段も綺麗に清掃され、壁も塗りなおされていた。

ほんの少し寂しさを感じながら、住居として使用する予定の二階へ上がる。

「家具も揃えてもらったんだ……経費で落ちるかな……これ」

「……お金持ちのクセニ」

騎士としての年金が、僕が消息を絶った……とされる十五年分きつちりと積み立てられており、手渡された通帳には見たことも無い桁が並んでいた。

それプラス、現在は給金と危険手当を初めとした収入がある。

「貯金のできる男って格好良いじゃない？」

「……狭量なオトコ」

「そのままの君でいて」

実を言うと、何に使っていいか分からないのだ。

パソコンを買ったり、本を買ったりと一般感覚の買い物ならまだしも、古城を丸々買い取れそうな額を貰ったって困る。

「ああ、そうだ。パソコン用意しなきゃ」

「……ネット回線を含めてライフラインは全部開通済ミ」

「ありがたや、ありがたや。助かるよ」

このビルにいるせいだろうか。自然とココネの頭をグリグリ撫でながら三階に上がる。スルリと避けられてちよっぴり傷つきながら。

そして三階には僕の注文通りの設備が整っていた。

防音室にマイクにミキサーに録音機器に……って!?

「ちよっと本格的すぎやしませんかねココネ先生」

「形から入るのが基本」

「明らかに一人で運用するには無理があるんだけど？」

「ガンバレ」

「やあ学生みんなはもうじき学年末テストらしいね」

「と、言うことは勉強しながらこの放送を聴いている子もいるのかな？」

「テスト勉強といえれば一夜漬け。一夜漬けといったら深夜ラジオは欠かせないよねえ」

「はは！今頃必死になっている諸君に素晴らしい情報だ！！」

「麻帆良の皆はもちろん図書館島に一度は行った事あるよね？」

「僕も一度だけ行ったんだけど、ほんと広いよねあそこ。どこのダンジョンだっと思ったよ」

「ダンジョン」

「そう、ダンジョンだ」

「ダンジョンには宝物が付き物。実はあの図書館島には一つ面白い噂があつて、なんでも、一目読むだけで頭が良くなるという、魔法みたいな本があるっていうんだ」

「え？胡散臭いつて？ははは！僕もそう思うよ！」

「頭が良くなるって言っても、別に記憶力が良くなったり、唐突に技を閃いたりするだけじゃない」

「頭の「形が」良くなる魔法の本ってオチもありえるからね」

「というわけで、本日の麻帆良不思議探訪の情報は、ペンネーム「ぬめりひょうたん」さんからのタレコミでした」

「ギヤラクシーマホラジオでは、みんなからの不思議な噂話や情報を随時待ってるよ」

「…あ？」

昨夜収録したデータを編集したまま寝ていたようだ。寝違えた首の痛みと、机の硬い感触で目が覚めた。体を起こすと、何かが肩からずり落ちる。プリントされた可愛い猫と目が合う。

「毛布にやあ」

毛布なんていつ羽織ったんだろう。

というか、こんなファンシーな毛布を僕は持っていない。

まあ、心当たりはバツチリ。

毛布を綺麗に畳みつつ、二階へと降りる。

すると案の定、リビングとして使っている部屋に、もはやお馴染みとなった三人娘がいた。

「あ、ミソにゃんおはよー！」

桜子と。

「おじゃましてまーす」

円嬢と。

「まーす」

美砂嬢。

「おつす。…勉強？」

見れば、ガラステーブルの上にノートや参考書が敷き詰められていた。

「にゃん…ミソにゃん代わって〜」

ぐて〜と桜子がテーブルに突っ伏す。

三年前からメガネっ娘な桜子だが、勉強は苦手らしい。

「残念。僕がテストを受けに女子中学校へ登校した瞬間に人生落第

決定了」

「というか、アンタって勉強できるの？」

見るからにバカっぽいんだけど、と失礼な事を円嬢が物申すので、とりあえず頭グリグリしておく。

「それにしても、まじめに勉強だなんて、どっぴろ風吹き回しなんだ。三人とも」

「失礼ね。まあ事実だけど」

美砂嬢は胸を張るが、絶対に開き直る場面じゃないと思う。

「次のテストで私達が最下位だと、ネギ先生がクビになっちゃうんだよ」

「ずもも…と復活した桜子は、上唇と鼻でシャーペンを挟んだかと思うと、再度ぐてぐとテーブルへダウン。

そのタコ口を何気なく引っ張ってみる。

「うに」

「ネギ先生…ってあれか、噂の子供先生」

葱…じゃなくてネギ。

ネギ・スプリングフィールド。

英雄の系譜。

「みそぎさんって、ネギ先生に会った事無いの？」

「無いよ。そもそも女子中学校の先生と知り合う機会なんて無いし、なるべく接点は持ちたくないし。」

「ま、いずれ遭わなきゃならなくなるさ」

美砂嬢は特に興味が無いのか、思わせぶりな僕のセリフはスルーされた。

「ちょっと悲しい。」

「それにしても、クビね…。桜子達が勉強し出すほど優秀な先生なの？」

もしそうだとすれば、クビにするのは本末転倒というか、主客転倒というか。

「ネギ先生カワイイからね」

「将来有望よね」

「さいですか」

そういえば、さつきから円嬢が静かだ。

頭グリグリはそれほど強くやっていないので、痛くは無いと思うんだけど。

見れば、ノートの片隅に円をグルグルと何重も何重も描き続けている。

見るからに心ここに在らずだった。

「どうかした？」

僕の言葉で気づいたのか、桜子と美砂嬢の視線が円嬢に集中する。ハツと顔を上げた円嬢は取り繕うように苦笑い。

「いや、七瀬さんが先生になったらどんな授業風景になるかと思って想像してた」

「ミソにゃんが…？」

「教師…？」

桜子と美砂嬢が遠い目をする。

僕が学校の先生？

そりゃあもう、腐ったミカンが種から新たな芽を出すような夜回り先生的なですね！！

「にははは！匍匐前進で教室に入ってきそう！！」

桜子。君の中で僕は一体どういうキャラ付けなのか、後でじっくり話し合おうな。

「なんか、屋上からワイヤー伝って窓を蹴破って飛び込んできそうよね」

明らかに先生じゃないよね、それ……ダイナミック朝礼！！

「なんか、理科室で人体模型をニヤニヤしながら眺めてるイメージしか浮かばないわ」

とりあえず、円嬢の頭を再びグリグリしておいた。

2 - 1 ようこそ（後書き）

あとがき・解説

今更ですけど、私はギャグやコメディが絶望的に苦手です。

それを学習する為の本作品なのですが…逆効果な気がしてならない
っ！！

今回の話から本編開始です。

主人公の紹介的なお話。

しかし、なるべく主人公の掴み所を無くそうとしたせいか、かなりの難産に苦しみました。

挫折しかけたのにも反省。

ちなみに、ラジオのモチーフは某ギャラクシーなニュースのレイディオだったりします。

今回のペンネームが誰だかは簡単かもしれない。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
ざいます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

2・2 おおざっぱ（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

2 - 2 おおざっぱ

「ミソにゃんお腹すいたー…」

三人娘から離れたソファで新聞を読んでいると、桜子がフラフラとよつてきて力なく肩にもたれかかる。

「僕の顔をお食べ」

机の上に広げていたマシユマ口をその口に突っ込んだ。

しかし物足りないようで、もたれかかる重みが更に増える。

「勉強はもういいのか？」

「もうお昼だよ、休憩」

ああ、もうそんな時間か、と時計を確認すれば丁度十二時。

「よし、料理しちゃうぞー！」

「ホント！？やたっ！！」

キッチンへ向かうべく立ち上がると、リビングにいた二人が同時に胡散臭そうな目で僕を見る。

これは僕の本気を見せ付けて二人の鼻を明かさねばなるまい。

「今日は天井だ！」

「てんでんどんどん」

「てんでんDoon!!」

桜子とハイタッチを交わし、僕は登り始める。

この長い長いクッキングパパへの上り坂を。

などと適当に思考を打ち切りつつキッチンに立つ。

…と、その前に携帯、携帯…。

改めてキッチンに向かい、隣には、何故かついて来た桜子。

「キューピー、三分クッキング」

「てれってて」

僕のフリに律儀にあのBGMで返してくれる桜子が、僕は大好きです。

「さて、本日はたった三十秒で作れる天井のご紹介です」

「え？」

「え？」

観客と化していた円嬢と美砂嬢が揃って首をかしげた。

ふふふ、見て驚け！食べて悶えろ！！

「まず用意しますのは…」

「これだよね！」

桜子が待つてましたとばかりに手渡してきたのは百円均一で揃えたドンブリが四つ。

それに、牛丼屋チェーン店ばりに手際よくご飯を盛り付ける。

今日この時を予想して多めにご飯を炊いていた僕の先見眼を褒めるがいい。

：単純に一回に炊く量を多くして、冷凍保存させて炊く手間を減らしているだけだけど。

「そして次に用意しますのはこちら」

「ほいっと！」

再び桜子が慣れた手つきで棚から小袋を取り出す。

天かす。スーパ－の惣菜売り場。無料。

「ざらざらざら〜」

どんぶりに降り注ぐ天かすの雨あられ。そこへ間髪おかず既製品の天ツユを降りかけた。

「完成です」

「いえーい！」

「…え？」

「…ええ！？」

簡単、安い、早い。ただし美味しいかは個人の味覚によります。

「うそ…美味しい…」

心底驚いた表情で円嬢が呟く。

「悪くないけど…」

まあ、女の子にこの料理はダメだろうなあ、と美砂嬢の微妙な表

情を見て思う。

その反面…。

「美味しいよね！」

まあ、桜子が特別だということだ。

と、まあ僕の料理を振舞ってみたものの、男として異性にこれは甲斐性として流石に…というわけで。

呼び鈴が鳴り響く。

『ピザールです。お届けにあがりましたー！』

吐く息が白く登っていく。

屋上で月光を浴びながら筋トレしていると清しい気持ちよさがあるのではなく、筋トレしているとまれなく僕達を鍛えた教官の声を自然と思い出される。

『速く！速く！速く！顎が上がっているぞ！もっと体を落せ！』
腕立て伏せ。

二の腕に力が入らなくなり地面に突っ伏しそうになると、目の前に刃を立てたサーベルが差し込まれるのだ。

『死力を尽くせ』

腹筋の時は後頭部に刃の恐怖を。

スクワットの時は、一定のタイミングで頭上を刃が振り抜かれた。少しでもタイミングが遅れると頭と体がサヨウナラ。

よく続けられたし、よく生きているなど僕自身驚きだ。

ただ、達成感は半端なく気持ちが良い。

ああ、あれは麻薬だ。

だから、僕は今でも鍛錬を続けられる。

筋トレが終われば、次は剣術。

といつても、一人でやることなので素振りと型を繰り返すしかない。

あとは射撃訓練もしたいけれど、場所にしても訓練方法にしても念入りに検討しないといけないので保留。

「ふっ！ふっ！」

腕立て伏せが八百回に突入したところで、携帯の着信音が鳴った。
ディスプレイには「学園長」

「はい、七瀬です」

「夜分遅くすまないの、ちと緊急事態じゃて」

「帝国に助けを求める程の？」

「ああ、いや…農個人から君への依頼として扱ってくれんかのう？」

「無理です。僕も一応公務員…軍人の端くれですし」

とほほ、とあるで漫画のような嘆きが聞こえるが、これは妥協してはいけない問題なのだ。

僕を動かせば帝国へ報告が行き、しかも何らかを要求されるかもしれない。

組織と組織、国と国との関係は面倒臭い。

「それで、一体何があつたんですか？」

「麻帆良西部の森林地帯から襲撃を受けているのじゃが、数が多くてのう。人手が全く足りておらんのだ」

「戦争は数だよ兄貴」

「圧倒されているではないか、我が軍は」

どんなに優れた、強力な個人が数人いたところで、多勢に無勢な物量に抗うことは難しい状態らしい。

「安全保障条約に従い、助力を要請したい！」

「分かりました。すぐに向かいます。でもいいんですか？一部の先生達に僕はあまり良く思われてないらしいですけど」

「そこは農がなんとかするわい」

二十年近く経ったとはいえ、人間の魔法勢力と亜人の魔法勢力は本気で殺しあい、結局勝敗は有耶無耶。

今現在も微妙な関係が続いている。

「ただ、まあ、背中からぶつすりやられることは無いだろう。そんなことしたら、また戦端が開かれそうだし。」

「じゃが：まあ、そういった者のところには麻帆良の魔法使いを向かわせよう。君はその穴を防ぐという形でどうかの？」

「オーケーです。で、具体的にはどこへ向かえばいいですか？」

「さあ、行こうか。」

「マウンテンバイクに跨る。」

「気分は逃げる護衛対象を救出すべくバイクに跨るアンドロイド。」

「マウンテンバイクだけ。」

「一漕ぎ。」

「たった一漕ぎだけでトップスピード。」

「何度乗ってもこの感覚には慣れない。」

「向かうのはいつぞやの森。」

「森林という地形上、襲撃者が侵入しやすいらしい。」

「ならば警備も強化すればと思うものの、人手不足が深刻だとか。」

「頼みのタカミチ君といえば、出張が多く最近麻帆良にいる日のほうが少ない始末。」

「学園長からすれば、他国の手も借りたい状況なのだろう。」

「とか考えているうちに、目的地が見えた。」

「人を寄せ付けられない結界が張ってあるらしいけれど、結界に対して耐性を付けさせられた僕には無視できるレベルのものだった。」

「膜を前進で突き破る感覚。」

「それと同時に、指先が一瞬痺れて感覚を失う。」

「結界耐性の為の薬物投与の弊害だ。」

「ハンドルを手のひら全体で力を込めて握る。この辺は慣れたものだった。」

「オオオオオオオオ！！！！」

「せいっ！！」

見えた。

刀を手にした女性が、見るからに人外している五匹相手に大立ち回りを演じている。

僕に気づいたのだろうか、一瞬だけ女性が僕に眼を向けた。

一瞬のアイコンタクト。

僕の意を汲んだ女性が後ろへ大きく跳躍し距離を取る。

「神鳴流奥義……!!」

女性が力を溜めるのを確かめ、そこへ襲いかかろうとする人外……

鬼……の一匹をロックオン。

「ははっ!!」

思わず笑いが漏れる。この昂ぶりに全身が震え上がった。

鬼達も僕の接近に気づいたようだ。

だが遅い!!

トップスピードのまま突っ込む。

ブレーキはかけない。

そもそも、このマウンテンバイクのブレーキは利かない!

人生いつも全速全侵全力全壊!!

回避よりも迎撃を選んだのだろうか。鬼が金棒を振り上げるが、し

かしゃっぱり遅い。

「どーーーーーん!!」

インパクトの直後、巨体であるはずの鬼が、まるで綿の詰まった人形のように、それこそ枯葉の如く回転しながら吹き飛ばされる。

夜空にキラーンと輝きかねないほど。

無茶しやがって。

どう見ても大事故。

にも関わらず、金属のフレームで、しかも軽量であるはずのマウンテンバイクは無傷。

鬼との接触で、ようやく停止できた。

「七瀬さん!!」

女性の呼びかけに間髪おかず、再びペダルを一漕ぎ。またしても

一瞬にしてトップスピードに乗る。

その背後で、

「雷鳴剣!!」

無慈悲な雷が空間を埋め尽くした。

鬼達の断末魔を掻き消す雷鳴。

彼女が一番得意にしている技なだけはある。

僕も負けてはいられないなこれは。

空中戦で嫌というほど鍛えられた反射神経とバランス感覚を最大限に発揮させ、悪路を踏破し木々を避けてUターン。

雷が討ちもらしたた鬼の一体を再びロックオン。

「どーーーーーん!!」

…無茶しやがって。

「援護感謝します。でも貴方が来るとは予想外でした。学園長ですか?」

「ええ。でも葛葉さんがピンチの時はいつでも駆けつけますよ」

「そういうことは椎名さんに言いなさい」

「それは残念」

そういえば、ついこの間彼氏ができたんだっただか。

今度は長続きするといいですね…とは口が裂けても言えない。言ってはいけない。

葛葉 刀子さん。

敵に囲まれ、アクション全開だったにも関わらず、スーツに傷一つ無く髪の毛の乱れも無い。

流石と言うべきか。

「…召喚した術者達を捕らえたようです。もう大丈夫でしょう」
念話というやつだろう。つくづく魔法は非常識だ。

「貴方のその自転車も非常識ですけど」

「単なる思春期の男子学生の頭の中みたいに自制が無いってだけで
すよ」

勿論、このマウンテンバイクは僕が投影した一品だ。

『七香バイク』

一漕ぎだけで最高速度に到達し、標的を跳ね飛ばす戦車。もといマウンテンバイク。

移動手段として便利だが、誰かを撥ね飛ばすまで止まらない。

撥ねられた相手は、物理法則を無視して吹き飛ばされる。

「生きている人、いますか？」

普通の人間なら生きていない。

「さて、それじゃあ煩い先生様と鉢合わせする前に僕は退散します」「あら、今晚の警戒態勢には力を貸してくれないのかしら？」

自分から進んで敵意や悪意を向けられる現場に行くのは勘弁だ。

「さっきの襲撃だけって条件でしたしね。僕も報告書書かないといけませんし、ラジオの収録もありますし」

とか言っているうちに、二人誰かが近づいてきた。

サイドポニーの女の子と、褐色の肌の女性。

顔に見覚えは無い。ということとは、魔法先生というやつではないのだろう。魔法生徒ってやつだろうか。

まあ、サイドポニーの女の子は制服姿だし見るからに女子中学生。桜子と同じ制服だ。

褐色の女性の方は大学生辺りだろうか。

別に二人に思うところは無いが、なるべく魔法関係者とは面識を持ちたくないで慌ててマウンテンバイクに跨る。

「じゃあ僕はこれで。お疲れ様でした」

「ええ、おやすみなさい」

ペダルを漕いでトップスピードで帰り路に行く。

「…ん？」

あれ？どうやって止まるっ？

2・2 おおざっぱ（後書き）

あとがき・解説

天井^{かす}…貧乏学生時代はお世話になりました。
意外といけるんですよ、アレ。

本日登場したエセ道具の元ネタは「CROSS+CHANNEL」
から。

実際は普通のマウンテンバイクです。

太一君は撥ね飛ばされますけど。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
ございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。
す。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

2 - 3 じべた（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

2 - 3 じべた

「まったね〜！」

「夜はちゃんと寝なさいよ！」

「ごちそうさまでした〜」

桜子達三人娘を駅で見送る。

明日月曜から学年末テストということで、景気付けに晩御飯を焼肉にしてみたのだが、おかしいな。

この土日だけで一週間分の食費を費やした気がする。

『うおオン、俺はまるで人間火力発電所だ！』

と四人して調子に乗ったのがまずかったか。

まあ、必要経費だったってことで。

「テスト頑張れよ！」

三人の暮らす女子寮まで送っていくには、いかに一般エリアにあるとはいえ難易度が高い。

最高難易度は当然、女子校エリア。

まかせとけー！と三人ガッツポーズをこちらに向け、元氣よく改札へと消えていった。

若いな。若いっていいな。

それに比べ僕ってやつは…。

胸焼け。

次からはちゃんと野菜も食べよう。

野菜を焼くって、なんか苦手なんだけど。すぐ焦がす。

帰りにコンビニで胃腸薬でも買って帰るか。

思いついたが吉日。

駅から割りと近い場所にあるコンビニに足を運ぶ。

そういえば、ラジオ番組に寄せられた情報に、夜になるとコンビニに現れる幽霊というものがあつた。

幽霊というものは実在するらしいが、残念ながら僕には視えない。

イボタカ子さんなら視えるだろう。

「らっしやーませー」

コンビニ入ると条件反射というやつだろうか。

目的の商品へ真っ先に向かわずに、ついつい雑誌コーナーから迂回してしまう。

なんとなく前世とは微妙に異なる雑誌名を眺めていると、マナーモードにしていた携帯が震えた。

メールの着信。送り主は：クーサン。

『少々まずいことになりました。今すぐこちらへ向かってください』
ああ、なんて、なんて清清しいほどの嫌な予感だろう。

あのクーサンがふざけた文章を書かず、シンプルな内容で送ってくることで自体がありえない。

胸焼けから胃痛にシフトしつつ、とりあえずソルマツクならぬ、ソルマツチヨを購入してコンビニを出た。

「アランドロン不在でしたー！」

図書館島。

図書館の、島。

ライブラリー、アイランド。

ラブラリー 愛。

ただし、その中の構造に愛は全く感じられない。秘境だ。卑怯だ。

畏とか。畏とか。畏とか。

「正々堂々と蔵書しとけって話だ」

とか言いつつ、図書館裏手のエレベーターから地下に直行する僕だった。

卑怯だ。

図書館島の建立は明治中期。

正確に言えば、地上部分が作られたのが明治中期だったらしい。地下に広がるダンジョンかと思ふほどの構造物、空間はそれより以前からあったと思われる。

エレベーターから降りて、薄暗く底が見えない螺旋階段を落下という名のショートカット。

階段のあちこちに破壊痕が見える。

以前来た時には無かったと思うから、急な呼び出しと関係しているのだろうか。

そして、同様にちらほらと見える木の根。

この麻帆良のシンボルともいえる、通称世界樹から伸びてきている根らしい。

なんともデタラメなこと。

「魔法世界よりはマシだけど」

螺旋階段の底に辿り着くと、ロープですっぽりと全身を隠したいかにもな魔法使いが僕を出迎えた。

「待ってましたよ。早速ですが、貴方の出番です」

挨拶も無しに手渡されたのは、一冊の古ぼけた本。

その本からは、もう随分と嗅ぎ慣れた、ある種特有の匂いというか、臭いを感じる。

「どういうことですか？」

僕に本を手渡した魔法使いクーサンこと、クウネル・サンダースさんは余裕とも妖しいともとれる微笑をフードから覗かせ、肩をすぼめる。

「それは魔法書です。それ自身が魔力を持つという、正真正銘本物の」

「魔力を持つ、ということとは……」

「ええ、案の定、例の精霊が中に巣食っていました。もっとも、初期段階で本の魔力諸共封印されていたのと、強力な魔力を持たない

本ですので、幼生体のまま成長できなかったようですが」

だから僕一人だけ呼び出されて、しかもこうしてのんびりとして
いられるわけか。

「ん？封印されているなら、どうして僕が？」

クウネルさんが懐から数枚の紙を取り出す。

写真だ。写っているのは…。

「あうとー！」

あられもない姿でツイスターゲームをしていたり、水浴びをして
いたり、巨人から逃げ惑う姿の少女達。

少女達の未来と人権の為に、この写真はここで処分しよう。

ちよっぴり勿体無いと思いつつも、念入りに破りに破って、投影
したビームサーベルで焼く。

「それで、今のが何なんですか？」

写真が処分されたにも関わらず、クウネルさんは相変わらず余裕
の表情だ。

「見覚えのある子が写っていませんでしたか？」

「見覚え？」

ちよっぴりと記憶してしまっているさっきの写真を頭に思い浮か
べる。

見覚えがあるといえば、制服くらいのものだろうか。桜子と同じ
中学校の制服。

…いや、いたな。資料で見たことのある二人が。

「ウエスペルタティアのアスナ元王女と、近衛 木乃香嬢ですね」

「ええ」

「まさか、アスナ元王女がその封印を…？」

「封印が解除される一歩手前まで来ています。記憶を無くしている
筈なので、無自覚にでしょうけど」

アスナ元王女は、魔力完全無効化能力の特殊体質持ち。

その彼女がこの麻帆良にいるというのも、僕がこの街に駐留する
大きな理由の一つだ。

彼女の動向にはとにかく注意しておかなければいけない。
なんといつても、あの大分裂戦争の鍵であったのだから。

「…再封印は？」

「せっかくなので、害虫駆除してからのほうがいいでしょう？」
クウネルさんは微笑を浮かべる。

サドっ気たつぷりの。

「あー、そうですね。そうなりますよね。だから僕が呼ばれたんですよね」

「というわけで、サクッとやっちゃってください」

僕の手の中に遭った本へクウネルさんが手をかざす。

「え！？ちよつと！！」

次の瞬間、本は生き物のように震えだし、やがて手で押さえきれないほど暴れ出した。

慌てて本を螺旋階段部屋から投げ飛ばそうとして、

「向こうには貴重な蔵書があるので、状況はこの中だけでお願いします」

ちゃっかり入り口傍へ移動していたクウネルさんは、清らしいほどの爽やかな笑みを残し外へと消える。

入り口を塞ぐ重々しい扉が閉められる音と共に。

「ノゾミガタタレター……」

本の暴れっぷりがシャレにならないレベルに達したので、現実逃避を素早く中断し本を上空めがけて思いっきり投げる。

間一髪。

本が中空へ停止すると同時に迸る白い光。

それは細長い紐のように空中にふわりと拡がり、やがて幾何学模様
様が折り重なった円を描く。

魔方阵。

その中央に描かれた方形が、生き物のように胎動した。

精霊門。

精霊の出入り口。

精霊の胎盤。

精霊が生まれ出る場所。

一際白い閃光が迸り、魔方陣が縦に割れてそこから落ちてきた。

純白の羽で体を包んだ、白銀の甲冑を着た騎士が。

なるほど、幼生体というクウネルさんの話は当たっているらしい。

大きさは人間大。羽根は一对。

精霊の中では下位に分類される固体だ。

とはいえ、戦うとなれば気を引き締めなければならない。

僕一人しかいないのだ。精霊のような超自然的なファクターではない、凡々たる人間である僕が。

『オオオオオオ！！我ヲ封ジタ不敬！！許サレヌゾ！！』

純白の羽を大きく広げ眼下を見下ろす。

自らが至上の存在であると誇示しているのだろう。今まで戦ったどの固体もそうだった。

だが、そんな茶番にも口上にも付き合う義理は無い。

先手必勝！！

ビームライフルを投影して射撃。

「むっ……」

ヘッドショットを狙ったつもりだったが、しかし騎士の持った風型の盾に阻まれる。

『我ニ楯突クカ！！』

「盾だけに、つてか！！」

騎士が腰から両刃の剣を抜き放ち急降下してくる。

それはまさに白い濁流。

辛うじて視認できた斬戟の軌跡を、地面を蹴り上空に飛び上がることで回避。

地面に激突した瞬間、剣から白い爆発が起こった。

光。

熱量。

魔法使い達が使用する魔法と同じ力だ。

「これは予想以上…っ！！」

見れば地面はガラス状化している。

ぞつと、背筋を悪寒が走った。

「我が頭上ヲ行クトハ…愚弄スルカ人間！！」

飛びたたんとする騎士をビームライフルで牽制…しようとしたが、初見で防がれたのがまずかった。

騎士が盾を前面に突っ込んでくる。

あの熱量を放つ相手と正面からぶつかるのはまずい。

ビームサーベルやフツノによる接近戦という選択肢を排除。

距離を意識しながら牽制しつつ飛行する。

自然と、上へ上へと昇っていた。

「アウウウウウツルラアアアアアア！！」

有利であるはずの頭上。それに加え飛び道具。だがしかし相手の

甲冑の固さがまずい。

障壁は無視できてもダメージが通らない！

連射できればマシだろうけど、無いものねだりは死亡フラグ。

極めて不利な追いかっこは、天井が近づいたことで終わりが見えた。

どうする？場所を移すか？移せるか？

「くそ！」

焦り。

それを浮かべていた自分に気がついて自分自身を殴る。

どうする？どうする…っ…って、天井はすぐそこ。次に移動できるとしたら下しかない。だが、下に行けばあの打ち下ろし。光の打撃とも言うべき一撃が降ってくる。

牽制だけで決め手が無い。

全てはその一言に集約されていた。

…いや、決め手になりうる一撃は、あるにはある。

だけどそれは、賭け中の賭け。しかも分が悪い方の。

『チヨコマカト!!!』

「っ!?!」

盾が飛んできた。

弾丸、いや砲弾。

横に滑るようにして回避した背後で、飛来した盾が壁を破壊しそのまま突き刺さる。

狙撃のチャンス!!

しかし騎士は既に眼前へと迫っていた。

盾の投擲と同時に突撃。

「こんな下手な手に引つかかるなんて…っ」

『我が威光ニ消工去レ!!!』

騎士の剣の光が膨れ上がる。

「そう簡単にやらせは!!!」

一か八かでフツノを投影。

ぶつかり合った瞬間、概念の力を発揮する間もなくフツノの刀身が沸騰。

伝播した熱で掌が焼かれた。

「ぐあああっ!!!」

それだけではない。

全身が焼かれる。沸騰する。蒸発する。

皮膚と同化していたフツノを無理やり剥がし、全力で下へと落下。焼け焦げる臭い。

頭が痺れる。無理やり意識を繋げる、この死に難い体が今この時は憎い。

『マダ在リ続ケルカ…シブトイ。ダガココマデヨ』

もう。

もう十分だ。

賭けだとか、分が悪いだとか、冷静であるにはもう十分だ。

やらなければ死ぬ。

ただそれだけで十分。

幸い、場は整った。

「出て来い」

落下しながら、何度も、何度も何度も繰り返したイメージを、最早条件反射の領域で頭の中に思い浮かべる。

かすれた声に反応して、感覚を殆ど失った掌にアーティファクトが現れた。

一枚のコイン。

何の変哲もない、ゲームセンターで使われているような銀色のコイン。

「光ヨ!!!」

騎士が纏う輝きが増す。

その光がやがて剣に集中し、騎士が降下姿勢へ移行。それと同時に僕はガラス化した地面へと降り立った。

コインを握りこんだ右手を腰溜めに。視線は騎士を正面に。やがて右手の中で突き刺すような痛みが弾けた。

放電。

コインが放電を開始したのだ。

「アアウウウウツルアアアア!!!」

上空から迫る光の奔流。

それはまるで、第二の太陽が生まれたかのごとく。

馬鹿正直に一直線に落ちてくる。

「ははっ！助かるよ!!!」

光に眼が焼かれる。

だが不安は無い。

あの騎士が一直線に僕を分断しようというならば、この一撃が一直線に騎士を粉碎できない道理は無いのだから。

コインから放たれる電流が増大。体が跳ねようとするのを、けなしの全力で持って押さえ込む。

「…行くよ」

右手を思い切り振り上げる。

掌を開放したと同時に今までと比べ物にならない程の電撃…それは最早、雷だった。

弾ける。

弾けた。

右手が。

コインを乗せていた右手が、肩から先が衝撃で弾ける。それを代償として、コインは光となって打ち出された。

騎士の白色が覆い尽くすような太陽だとすれば、それは鋭利に切り裂く彗星の光。

彗星の光は、しかし太陽に焼き尽くされる事無く奔りぬけた。

「グツナイ…」

弾ける。

弾けた。

コインは騎士の体を破砕しながら貫通。

そのまま何も無い闇の中を切り裂き、やがて光となって弾けた。

「超電磁砲」

見た目はコイン。ただし勝手に強力な電流で磁場を作り出し、勝手に加速して飛んでいく。

使用の際は、手で直接持つと危険です。致命的に。

「ご苦労様でした」

いつの間にか傍にクウネルさんが現れていた。

「…酷い有様ですね」

「ああ…ええ…まあ」

右腕がまるっと無くなっているし、体中のあちこちを火傷している。

視力も回復しない。

「…放っておけば治りますよ」

幸い、神経が麻痺しているのか、死に難いこの体がセーブしているのか、痛みは少ない。

そうでなければ…痛みでショック死確定だろう。

「いつもあんな戦い方を？」

「僕は仲間に支えられています。一人で戦おうとしたら、あんなものですよ」

「無様ですね」

「ああ…僕もそう思いますよ」

思っても、やっぱり悔しかった。

「少し、休ませてもらっていいですか？あと、鎮痛剤とかあると嬉しいんですけど！」

痛みが出てきた！痛みが！！痛みガ！ガガガ！？

「ふふ、無様で格好良い、ブザカツコイイ貴方に死ぬほど鎮痛剤をプレゼントしてあげましょう！！」

「あ！できれば魔法で治療ヨ！！」

「ご心配なさらず。こんなこともあるうかと注射器はばっちりです」
その手には、どこから取り出したか五寸釘のような針をもつ巨大

な注射器。

あれだ…象とか巨大生物に打つ麻酔弾みたいな。

自分自身にエスカリボルグを使用しようかと本気で悩む。

2 - 3 じべた（後書き）

あとがき・解説

あの人が登場。

あの人らしさが出ていればいいのですが…。

図書館イベントは原作どおりに進んでいますが、原作の影でこの作品のイベントは進んで行きます。と、というのがコンセプトです。

ただ、必ず交わる時があるわけですが。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございました。ざいます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

2 - 番外 ねこようび（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

2 - 番外 ねこようび

釣り。

フィッシング。

海や川、湖といった水辺で水棲生物を吊り上げる漁法。娯楽。

釣竿を手に構え、釣り糸を垂らすそれは釣りという行為で間違いないはずだ。と少女は参考動画として検索にヒットした「イカ釣りスターシリーズ」という情報を元に確信する。

(エラーです)

少女は思考ルーチンを阻害する視覚情報を判断した。

矛盾。

エラー。エラー。

しかし何故でしょうか？と少女は首を傾げる、という極めて人間的な行動を取った。

明らかな矛盾。頻繁に吐き出されるエラー。しかし、別に気にしなくてもいいような、無視してもいい気がします…と。

「ニャー」

頭の上で子猫が一鳴き。

「ニャー！ニャー！」

少女の視線の先でも数匹の猫達が鳴く。

そして。

「フーーーーッシュ!!! ああ、いやこの場合は…キヤーーーーッ
ット!!!」

青年が限りなく奇声に近い雄叫びを上げていた。

それは、小さな公園のたった一つのベンチに体育座りし、感情の判別がつかない表情で釣り糸を垂らしている一人の青年。

糸の先にはイネ科エノコログサ属の植物、エノコログサ。

俗称、猫じゃらし。

青年はそれを大胆且つ繊細に操作し、じゃれ付こうとする猫達を

回避し続けていたのだが、焦れに焦れた一匹の猫が野性味溢れるジャンピング。

糸に絡まってしまったらしく、ぷらん、と釣り糸に垂れ下がっていた。

それが、先ほどの青年の雄叫びに続くのである。

「キャット・アンド・リリース」

無邪気に笑っていた青年は再び感情の判別がつかない表情に戻ると、絡まっていた糸を解いて猫を地面へと降ろす。

「ニャー」

「分かつてる。今日は僕の負けだ」

言いながらも青年は片手で釣竿を操作し、じゃれ付こうとする別の猫々を手玉に取り続けていた。

「猫：お手玉…毛玉…」

少女は毛糸の玉で遊ぶ子猫の動画を記憶領域から引つ張り出し、しばし至福の時間を味わう。

しかしそこでまた、エラーに突き当たる。

ガイノイドたる自分に、幸福や喜びを感じる機能があったのでしようか？と。

答えは出ない。

ガイノイド。

絡繰 茶々丸。

主人の世話が最優先任務である彼女だが、野良猫達に餌を与えるのが日課になったのは、いつからだろうか。

命令されたわけではない。プログラムされていたわけではない。

ごくごく自然と、彼女のAIが自分で考え、自分から行動した。

それが自律意思だと、生まれて間もない茶々丸に親たるハカセは言ったものだ。

とにかく、自分の意思で始めた猫への餌やりだったが、時折先客がいることがある。

一人の青年。

やる気や覇気というものを一切感じさせない、どこか掴み所の無い印象を感じさせる青年。

表情がいつもと言っていいほど眠たげで、無造作に伸ばされた前髪からは片目しか覗かせず、しかもその瞳がどこか濁っているものだから近寄りがたい。

しかし、猫達からの評判は悪くは無さそう。

現に、青年が垂らす釣り糸の下では猫達がひしめき合い、折り重なりあい、ちよつとした塔：キャトタワーと化していた。

その様を映像記録として『ぬこ』フォルダに保存しながら、茶々丸の思考は迷う。

青年を見かけることはあっても、実際に接したことは一度も無い。たいがい、茶々丸が訪れる頃には入れ替わりのように青年は立ち去るのだ。

しかし今日は何故か青年は猫と遊び続けている。

茶々丸の提げたビニール袋の中には、途中のコンビニで購入したキャットフード。

「ニャー」

催促するように頭上で子猫が鳴いた。

決断。

あまり遅くなってしまつては、晩御飯の準備に支障が出てしまう。主人を待たせることは、従者として許されざることだった。

「あの…」

茶々丸が声をかけると、青年はベンチの上で体育座りのまま顔だけを上げた。

ちやつかり釣竿を操作したままで。

青年は特に驚きも戸惑いもせず、平坦な表情のまま、当たり前のように言った。

「こんにちはレディ。今日も良い猫日和ですね」

そして照れたように小さく笑う。

照れるくらいなら言わなければいいのに、と茶々丸は自然とツッコミの言葉を思い浮かべたのだが、そんな自分に気づき一瞬だけフリーズした。

『エラー診断プログラム起動』

『エラーはありませんでした』

「…こんにちは」

ペコリとおじぎ四五度。

茶々丸に気づいたのだろう、キャットタワー化していた猫達が次々と傍へ寄って来る。

「いつもこいつらにご馳走してくれてるの君だよな？」

「あ…はい。ご迷惑でしたでしょうか？」

青年は「まさか」と首を横に振る。

茶々丸は気づいた。

遠目で見ていた青年は…悪い言い方をすれば生気を感じない人物だったが、間近で見ると青年の表情は意外と多彩で、濁っていると感じられた瞳は恐ろしく深く黒い。

そして青年は感情表現を、主に身振り手振りで表現している。

「こいつらはさ、もともと僕が今住んでるビルに集まってたんだ。

でもなんだかんだで人の出入りが多くなって落ち着かなくなっただろうな。僕が追い出しちゃったようなものだから」

青年はベンチから勢いよく立ち上がり、釣竿を肩に担ぐ。

「お世話になっております。そして、ありがとう」

「いえ。私が勝手にやっていることですので」

二人しておじぎ四十五度。

「これからも、こいつらに良くしてくれると嬉しい」

勿論です、と茶々丸は思う。

これは茶々丸自身が始めたこと。プログラムでも、命令でもない、茶々丸の意思。

「…ふむ」

立ち去ろうとした青年だったが、何かに気づいたように立ち止まる。

そして茶々丸の頭から足の先までを一通り観察。

「濡れてるね。雨降ったっけ？」

「川に入りましたので……」

流されていた子猫を助ける為に。

その子猫はいつの間にか茶々丸の頭から降りており、物欲しそうにビニール袋を見上げながら茶々丸の足元をぐるぐる回っている。

「だいぶ暖かくなってきたけど、水遊びは程々にしときなよ」

「い、いえ、私は……」

「分かつてる。冗談。何か事情があつたんでしょ？君がそんな事をするような子には見えないさ」

青年は澄ました顔で笑うと、どこから取り出したのか、いつのまにかその手に綺麗に折りたたまれた布の束を持っていた。

（縫い目やボタンが見えるところを考えると、服でしょうか）
ズームした茶々丸のアイカメラが、襟首と思われる場所に『Se
in Frau』と刺繍されているのを発見する。

（ドイツ語？）

「ところで君はソ連が嫌いかい？」

「そのようなことは……ソ連は崩壊した筈ですが？」

「残念。でもまあ、これに着替えるといい」

青年からその服（？）を手渡される。

広げてみたそれは、黒い長袖ロングスカートと白いエプロン。ワンピース用なのか赤いネクタイ。そして白いカチューシャ。

その組み合わせ、その形状に茶々丸は心当たりがあった。

「メイド服でしょうか？」

何を隠そう、主人の家ではメイド服で過ごす彼女である。

「なんとなく、なんとなく君にはこれかな？って」

しかし、出会ったばかりの他人に与えられた服を着用することは、流石にガイノイドとはいえ躊躇するものがあった。

自分はこの制服のまま問題ありません、そう遠慮プログラムを起動しようとして、しかし青年の瞳が期待に満ち溢れているのを見て躊躇してしまう。

「べ、べつに僕はメイドさんフエチってわけじゃないんだからね！ほら！その公衆トイレで。風邪ひいちゃうよ！」

茶々丸の視線に気づいて顔を真っ赤に染め、そっぽを向く青年に、企てことや謀略の類ではないと判断。

「風邪をひくことはないのですが…。では…ありがたく…」
人の好意を無碍に断ることのできないAIだった。

個室でメイド服に着替えた茶々丸は、その服の着心地に、というかサイズがぴったりだったことに驚いていた。

動きやすさからミニスカートとメイド服を着用することが多かった彼女だが、ロングスカートでありながら一切動きを阻害しないこの服に感嘆を通り越して違和感を覚える。

「大丈夫…でしょうか」

センサー類で隅から隅まで調査したし、生地を引っ張ってみても逆に恐ろしく頑丈な裁縫で驚いたくらいだ。

手洗い場の鏡の前でくると一回転してみる。

スカートが僅かに遠心力で広がるが、それだけだ。

意を決してトイレから出ると、涙を流しながらサムズアップする青年がいた。

「君と出会えて良かった…！！」

人々に奉仕し喜ばれること。それはガイノイド、茶々丸にとっても喜ばしいことだ。

（喜び…？）

エラーが発生する。

しかしこれは何かが違うのではないのでしょうか、と疑問に思えてしょうがないのであった。

餌を食べ終わり満足した猫達がそれぞれのねぐらへと帰っていく。その後姿を見送りながら、茶々丸が後片付けをしていると、少年と少女の二人組が公園に足を踏み入れた。

「…こんにちは。ネギ先生。神楽坂さん」

それは茶々丸の通う麻帆良学園中等部の担任と、クラスメイト。

茶々丸は後片付けを中断すると、立ち上がりメイド服のスカートを優雅に持ち上げて一礼する。

茶々丸の主人で…エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが現在敵対している担任教師、ネギ・スプリングフィールドが自分の前に現れる理由は唯一つ。

「…油断しました。でもお相手はします
障害たる自分を排除しようというのだ。」

(当然の判断ですね)

「茶々丸さん。あの…僕を狙うのはやめていただけませんか？」

「…申し訳ありませんネギ先生。私にとってマスターの命令は絶対ですので」

しかし茶々丸は思う。

必ず人目のある所を歩くんだぞという主人の命令を私は破ってしまったのではないのでしょうか、と。

「ううっ…仕方ないです…」

内側に向こうとする思考をカット。

(この場にはネギ先生だけでなく、神楽坂さんがいる。マスターに一撃いれた彼女が)

茶々丸は戦闘プログラムを起動。体の各所にチェックプログラムを走らせる。

返ってきた言葉は『問題なし』。

「…では茶々丸さん」

「はい」

「…ごめんね」

準備は整った。

しかし、ふと体のステータスを表示する項目に、一文ありえないはずの表示がある。

『全兵装制限解除』

茶々丸は現状特別な兵装を有していない。

固定ビーム砲が搭載されているが、使用許可は出されていない筈である。

チェックすべきか迷い、しかし今は不可能と判断。

「行きます！！契約執行10秒間！！ネギの従者『神楽坂 明日菜』

！……」

少年…ネギの一息での詠唱。同時にクラスメイト…明日菜が飛び出す。

一般人とは思えぬ踏み込み。その速度。

西洋魔術師の、契約者に対する魔力提供による身体強化。

一瞬にして目の前に現れた明日菜に対して茶々丸が放ったのは左手によるデコピン。

だがそれは、明日菜の手に弾かれる。

茶々丸の思考に一瞬だけ走るノイズ。

速度が乗った上に、筋力まで強化された明日菜の打撃は、ガイノイドの強固な装甲を貫通しセンサーの一つを揺さぶったのだ。

明日菜の左手が突き出される。

咄嗟に茶々丸は右手でガードを試みるが、その伸びの速さに防ぎきれないと判断。

スウエーピングで回避した茶々丸の目の前で明日菜の指が弾かれる。

デコピン。

「はやい！素人とは思えない動き」

明日菜の動きを再計算すべく、めまぐるしくCPUが数字を走らせる。

そのとき、茶々丸のアイカメラが片隅に光を捉えた。

「光の精霊11柱：集い来たりて…」

ネギの周囲に生まれるいくつもの光点。

熱量増大、ロックオンアラートが茶々丸に危険だと嘆きの声を上げた。

「魔法の射手 連弾・光の11矢!!」

「……………!!」

(追尾型魔法、至近弾多数!…よけきれません)

回避不能、回避不能、回避不能…。

茶々丸の視界全てを覆い尽くす赤い文字。

「すいません…貴方との約束は果たせないかもしれません」

被害予測をはじき出そうとした表示が、突然文字化けする。

(?)

それどころか、回避不能の文字郡が突然崩れた。

赤いドットが流砂のように茶々丸の視界を流れる。

やがてそれは一つの単語を形作った。

『ABFANGEN!』

『ABFANGEN!』

『ABFANGEN!』

『ABFANGEN!』

生まれる。生まれる。生まれる。

それはまるで叫びだ、と茶々丸は理解する。

叫び。

誰のか?

(私のか?)

『ABFANGEN!』

自身のステータス画面に表示が追加される。

それは、青年に与えられたメイド服を着た自身の姿。

そのスカート部分。スカートの内部に描かれた長方形の表示を矢印が指し、一言。

『Maschinengewehr 42』

そのすぐ下に赤く点滅する文字がある。

『戦闘開始』

茶々丸は迷い無くそれを選択した。

全ては自身の叫びを叶える為に。

「や…やっぱりダメーッ！」

生徒を傷つける。

そもそも、茶々丸の悪い人(?)ではない。

茶々丸の浮かべた諦めの表情に気付いた…気付かされたネギの決断は一瞬だった。

(納得できないままなんて！)

放った魔法の方向を変更する。

どこへ？

追尾性の魔法は一度決めた標的を追いかけ続ける。虚空へ向けるのでは意味が無い。

(なら標的を僕に！！)

「もど…！？」

しかしネギは見た。

諦めの表情と感じさせた茶々丸の表情が変わっていることを。

目の前に脅威から眼を逸らさず、凜と踵を揃え背筋を伸ばし、そして…。

「迎撃します」

優雅に回る。

遠心力で持ち上がるロングスカート。

その中に手を差し込み、抜き放ったのは無骨、あまりにも無骨な黒い鉄骨。

否。

それは雄々しく猛々しく力強い力の象徴。

MG42機関銃。

迷うことなく引かれた引き金に、毎分1、200発の鉛の猛威が
歡喜の咆哮を上げた。

命中精度の低さを、その発射速度が補う。だがそもそも、黒い獣
を飼いならすのは超高性能AI。

「不可能はありません！」

銃弾が直近の魔法の射手から駆逐していく。

地を蹴り空を舞い黒い重火器を軽々と取り回し、舞う、舞う、舞
う！

そんな光景に、ネギと明日菜はただただ驚くばかりだった。

全ての魔法の射手を撃ち落した茶々丸は、ネギと明日菜との戦闘
を続行すべきか迷ったが、中断を選んだ。

不可解な現象が起こりすぎたのである。

その手の中には黒い機関銃。明らかな対人兵器。

非殺傷プロテクトにバグが生じていて、ネギと明日菜に銃口を向
けてしまうかもしれない。

それは主人の意思に反しているし、何より茶々丸自身の意思にも
反していた。

地面に落としたままだったエサの空き容器入りのビニール袋を拾
い上げ、ネギと明日菜にペコリと頭を下げて、茶々丸は飛び去った。

2 - 番外 ねこようび (後書き)

あとがき・解説

一言

「むずかしい」

活動報告に書いていた通り、主人公じゃない視点かぎりなく茶々丸に近い三人称視点。

主人公がおそろしい紳士的変態に…。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

2 - 4 そらに（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

2 - 4 そらに

『満月の夜は桜の道に気をつけな』

『出るぞ出るぞアイツが出るぞ!』

『そう...』

『吸血鬼だ!』

『知ってるかい?』

『桜通りの吸血鬼』

『満月の夜。桜通りを歩いていると吸血鬼に襲われるんだそうだ』

『吸血鬼は処女の血を好み、血を吸われた人間は生ける屍となり吸血鬼の奴隷となる!』

『...ってメールに書かれてるんだけどさ、今時の吸血鬼ってそれでいいの?って思わない?』

『今時の吸血鬼ならさ、常に貧血でフラフラしてたり、逆に鼻血を出しやすい体質だったりしてキャラ作りしなきゃ流行らないよね』

『ドラキュラ: ドラキュ: ドラキ: ドラきゅん?』

『思わずウツカリ日光の下に出してしまったって全身火達磨なんて、僕的には二重丸だね』

『というわけで本日の麻帆良不思議探訪の情報は、ペンネーム「サン」オからの刺客「さんからのタレコミでした』

『...なんか著作権で揉めそうだな』

『ギヤラクシーマホラジオでは、みんなからの不思議な噂話や情報を随時待ってるよ』

『ああ、そういえばもうすぐメンテナンスで停電になるらしいね』

『ロウソク買ってきてみたんだ。赤いロウだから三倍くらい赤くなるんじゃないかと思って買ってみたんだ。でもそんなこと無かった』

『よくよくパッケージを見てみたらさ...何て謳い文句が書いてあったと思う?』

『「肌に着けても熱くありません」だってさ!』

『ロウソクにそんな機能求めてないよ!!』

『ミソギ・ナナセ。オヌシを一週間の謹慎に処する』

「な!?!」

『何故です?とは言わぬよな?ミソギ』

通信機: いや、昭和臭漂うブラウン管テレビの向こうから、フー
ドの奥に怖気のある無表情を浮かべてプロフェッサー・フィリウス
は無機質めいた怒気をぶつけてくる。

昔懐かしいアニメの血管マークが浮いている幻覚さえ見えた。

『あれほど魔法関係者へ自分からの接触は極力避けるように言っ
ておいたにも関わらず、よりもよって!よりもよってエヴァンジ
エリンの従者!!』

エヴァンジエリン。

エヴァンジエリン・A・K・マクダウエル。

吸血鬼。

子供。

齢六百を超える、生粋の魔法使い。

その二つ名は数え切れず、「闇の福音」「不死の魔法使い」「人
形使い」「悪しき音信おとずれ」「禍音の使徒」「童姿の闇の魔王」。

おお、怖い怖い。

まあ、それは置いておいて。

そんなことより。

そんなことより!!

あの子を実際に目の前にした瞬間: 僕に電撃が走った!

あの...耳...メカミミの少女。

その姿は僕の中でとある記憶を呼び覚ました。

かつて、日本全国の大きなお友達達をディープでホットな世界へと誘った、あのアンドロイドの少女を。

「あの子はまるでセリ……」

『ワシは異次元と話しているほど暇では無い。進めるぞ』
「わあ、ひどい」

『接触しただけに留まらず、オアシは機密たるアーティファクトの力を晒した。本来ならば処分されても当然じゃ』

ゾクリと背筋が粟立った。

ブラウン管越しに感じるプレッシャー。

プロフェツサー・フィリウスの表情がローブの奥に消え、瞳と思われる金色。金色の光が僕を射すくめる。

『これ以上、余計な行動は起こすな。…分かるな?』

「イエス・サー……」

迷うことなく敬礼。

条件反射と言ってもいい。

そんな僕に満足したのか、体に纏わりつき這い回っていたプレッシャーが消え去る。

すっ、と気づかれないように一息。

できることなら、床に倒れこみたかった。

『何故、今回の処分が軽いかというんじゃない?』

まるで今までのことが嘘だったかのように軽い調子でプロフェツサー・フィリウスは言い、嬉しそうに微笑を浮かべる。

「収穫があつたのでしょうか」

『その通り。自動人形なる科学的に造られた生命体。否、生命ではないな。機械じゃ。機械が魔法に対抗した。恐るべき事実じゃ! オアシが与えたあの武器は特殊な効力は持たぬのじゃろ?』

「ほんのちよつと、やんちゃなだけの重火器です」

『服は?』

「ほんのちよつと、毒っ気があるだけのメイド服です」

『ははは!!!魔法の防壁を持たず!魔法による身体の強化をせず!

魔法を！ヒトを跳ね除けるか！！」

プロフェッサー・フィリウスは大きく空を仰ぎ見る。

両手を大きく頭上に掲げ…。

『…使える。有用じゃ』

獰猛な笑みと共に、その手元の机へと叩きつけられた。

『おお、そうそう。近いうちに空軍からそちらに二人送る』

テレビの電源を落そうとする間に聞かされた内容に、思わず首を捻る。

「ここにですか？空軍ということはエドガー少将が？」

あのエドガーは、恐ろしいことに今では少将にまで出世していた。

あのエドガーが、ヘラス帝国空軍の一翼を担う。

空軍の行く末が心配でならない。主に戦闘狂的な意味で。

『いや。ワシの下に居る技術仕官じゃ』

なんとなく察した。

技術仕官といえば、兵器をはじめとした軍事技術の開発やテストを担う部隊員。

そして、プロフェッサーという呼び名の通り、フィリウスさんは研究者。

主に兵器方面の。

『旧世界で運用試験を行う』

やっぱり。

しかし、何故僕の所へ？

疑問には答えてもらえなかった。

「今日から一週間…僕は何をして生きていけばいいんだ」

「…普段から何もしてないじゃない」

ソファにうなだれる僕の向かい側で、ココネが携帯ゲーム機P Fに視線を落としたまま答える。

普段から何もしてない…？そんな馬鹿な！？

早朝から夜中まで僕は…。

僕は？

あんまり外出しない？

通勤するも何も、趣味と実益を兼ねた職場はここだし、外交官っぽい交渉事や接待なんかは僕に回ってこない。

「あれ？ 謹慎してても問題ないや」

買い物や猫と遊びに出るくらいで、ほとんどこのビル内で自分の行動が完結していることに気づき愕然とする。

「それでも… 閉じ込められていると思うと、精神的に反逆したくなるのが性つてものさ」

「…子供」

「ふっ… 否定はしない。そういえば、ココネは何しにここに来たんだ？ 珍しいじゃない」

ココネはさも面倒そうな瞳で僕を一瞥。

そして再びP F Pに視線を落としていた。

「…馬鹿の監視」

「…苦労様です」

思いつきり足を踏みつけられた。

タンスの角に小指をぶつけた時以上の痛みに、床をのた打ち回りながらもんどりうつっていると呼び鈴が鳴る。

誰だろう？と思う前に勢いよくドアが開かれた。

駆け込んでくる二匹の小さな影。

小さな影は一直線にソファ向けて疾走し、その勢いそのまま跳躍した。

いや、飛翔とでも表現しようか。

弾丸のように飛び込む先には、焦った表情のココネ。

「…あ…え？ま、まっテ！！」

「ニヤー！」

「にゃー！」

ぺしゃり、と。

二匹の猫が、ココネの顔に、頭に張り付いた。

わたわたとココネの手が助けを求めるように彷徨うが、害は無いので放置しよう。

相変わらず愛されている。

「おー、やっぱりココっちがいたかあ。クッキもビツケもココっち好き好きで妬けちゃうなあ」

後に続いてやってきたのは桜子。

その言葉通り、微笑ましそうに笑っているが…寂しそうでもある。それもそうだ。

幼い頃から可愛がっていた二匹の猫。仲の良い兄弟姉妹のような二匹。

初めて二匹とココネが遭遇した時、一瞬で懐いたその光景に桜子を見るからにいじけていたもんだ。

「いらっしゃい、桜子」

「いらっしゃいましたー！って、ミソにやんどうしたの？そんなところに寝て。お昼寝？」

「フローリングが冷たくて気持ちがいいよ…でも真似をするなら夏になってからな！お兄さんとの約束だ」

「はい！」

と、いつものようなやり取りを桜子と交わすが、チラチラと二匹の猫に遊ばれるココネを気にしているのがバレバレで微笑ましい。

思わずにやけてしまっていた僕に気づいたのだろう、桜子はハツとした表情と共にスカートを両手で押さえ、バックステップ。

嫌な予感しかない…。

「あ！もしかしてスカート覗こうとしてる！？」

凄まじい容疑をかけられていた！！

「い、いやこのアングルからはお御足しか拝謁できず…っ！ 冤罪！ 冤罪でそれでも僕はやつていナツパー！？」

桜子のとび蹴りが顔面にクリーンヒット！

おもいつきり、隠してた意味を無くすがそれ以上に驚きが勝る。そして痛みも。

いや、痛いだけじゃ…無い！？

「えっち！えっち！えっち！！」

ガスン！ガスン！ガスン！と顔を踏まれ、僕はまた一つ、新たな世界への扉が開く音を聞いた。

魔法世界。ヘラス帝国北部領内、上空九千メートル。

飛行機雲が二つ、白い軌跡を描いていた。

風を切り裂くのは、まるでツギハギだらけの西洋甲冑。

鋭角かつスマート。

風の抵抗と重量、そして圧力の軽減。その試行錯誤の果てに行き着いた空の騎士。

一般的な魔法使いのように杖や箒に跨らず、旧世界の戦闘機のように大きく三角に伸びる翼と腰に広がるスカート部分から煌き輝くのは推進剤の白い光。

二人の騎士の内、先を飛ぶ一人が風防越しの空を眺め、もう何度とも知れない想いを馳せていた。

(初めて飛んだ空とはだいぶ違うけれど、騎士様の見ていた世界…) 微笑を浮かべた兜の防護マスクの奥。騎士：彼女には幼い頃から忘れられない、一度として忘れたことの無い記憶があった。

幼い頃を過ごした、今は無き王都オステアの貧民島。

いつも仰ぎ見ていた壮麗な島々が噴煙を上げながら崩れ行く光景。

帝国の紋章を胸に刺繍した一人の軍人。

そして、その腕に抱えられ、全身に感じた風。

魔法を学ぶ機会が無かった彼女が初めて飛んだ空。

(私も翼を得ました…)

甲冑に包まれた右手を胸に置く。

その奥にある…。

「…隊長？」

彼女の思考に割り込んだのは、どこか不機嫌さを感じる声。

士官学校を卒業したばかりの、まだ少年から抜け出しきれない印象を受ける彼女の部下が、後ろを飛行しながら気遣わしげに彼女を見ていた。

「もつすぐ作戦空域に入る。機動殻のモニタリングに異常は無いかな？」

『問題ありません。いつでも行けます！』

「よろしい。本作戦がテスト飛行だからといって無様は見せるなよ」
私も無様に飛ぶわけにはいかない、と彼女は小さく息を吸い、置いた右手で軽く胸を叩く。

「しゃらん、と鎖が鎧の内側で波打ったのを感じる。

(見守りください！)

アラートが彼女達の耳元で鳴った。

「第二次運用試験を開始する！『D i v e』！！」

二人の騎士が翼の舳先を地表へ向ける。

それに呼応するように推進剤の噴射ノズルから発せられる白い光が爆発的に膨れ上がり、次の瞬間には地表へ向けて急加速を開始。

あっという間に上空から二人の騎士が姿を消した。

通常では考えられない重力に必死に絶える彼女の胸元で、カエルの顔を模ったポシエットが揺れる。

2・4 そらに(後書き)

あとがき・解説

変態(+1)

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
ざいます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。
どうか次話もよろしくお願いいたします。

2 - 5 ふたり（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

2 - 5 ふたり

ココネに連れられてやってきたのは男女の二人組みだった。

綺麗に切りそろえられたショートカットと、きつちり着こなされたスーツ。

見た目はキャリアウーマン。しかし凛々しく敬礼する姿はまさに軍人。

「空軍第108技術試験隊所属、シャドネ・ミランであります」

そしてもう一人は天に突き立つ真っ赤な髪と、粗野に着崩したミリタリー。

見た目は格ゲーキャラ。しかし雑に敬礼する姿はまさに海兵隊員（全世界の海兵隊員のみなさんごめんなさい）。

「…空軍第108技術試験隊所属、リーベン・スクラッド」

どうにもチグハグな二人組みだった。

シャドネさんからはキラキラと直視するには眩し過ぎる眼差しを向けられて僕は困惑。

リーベンさんからはギラギラと直視すると撲殺されかねない眼差しを向けられて僕は疲弊。

「君達がフィリウスさんの言っていた技術仕官の…シャドネさんと…」

「シャドネでお願いします！騎士さ…ナナセ卿！卿は我々より上の立場です。敬語もお止めください」

顔を真っ赤に染めながらも爽やかな笑顔だ。

「あ、うん。シャドネとリーベンさ…」

「リーベンでいい。アンタにさん付けされるとか気持ち悪すぎる」
眉根を寄せて心底嫌そうに吐き捨てるリーベン。

シャドネに注意されているが、そっぽを向いて態度を改める様子は無さそうだ。

こんな感じで暫く顔を合わすことになるのかと思うと、胃が痛く

なってきたよ。

助けを求めるべく辺りを見回すと、そこには我関せずとソファに寛ぎバーチャルボーイで遊ぶココネさんの姿が！！

「またコアな物を……」

「……サクラコのチョイス」

桜子なら仕方がない。

「えっと、それで二人は旧世界で運用試験をするとしか聞いていないんだけど、具体的に何を？って話なんだけど」

リーベンとは恐らく話ができないと確信したので、シャドネに訊ねた。

聞けばシャドネが第108技術試験隊の隊長とのことで、妥当とも言える。

……なんて、自分を正当化するくらいリーベンの第一印象は最悪であり、苦手意識を持つには十分だった。

そんな僕の内心を知る由もないシャドネは表情を真剣なものに改め、姿勢を正す。

「はっ。この度、空軍技術研究所では精霊の力を伴わず飛行を可能にする魔法技術を開発いたしました」

失礼します、と一言断りを入れ、シャドネが床に置いたスーツケースから取り出したのは数枚の写真。

写っていたもの、それを一言で表すならロボットだった。軽量高機動型とでも言うべきか。

つま先から頭の前、手の指先まで三角形で形成されたような鋭角。そして何より、その腰から広がるスカート内部や、背中に背負った大きな三角翼の下部から覗くロケットエンジンのようなノズル。

その外見はまるで……

「……アーマード・コ……」

「機動殻と呼ばれています」

「……………」

「鎧部分はあくまで人間が運用することを考えての耐圧防護用であり、この装備の中核は推進力を生み出す動力部にあります」

再びスーツケースから取り出したのは、仰々しい計器やパイプがむき出しの、二の腕ほどの太さがありそうな円筒形の物体。

それに僕は見覚えがあった。

「ビームサーベルの試作品だね。結局アレの原理が解明できず、全く別物に仕上がったって話は聞いていたけど」

「はい」

シャドネはスイッチらしきボタンを押し込む。

すると、白色の光が円筒の先端から伸びた。

ただし、サーベルと言えるほど長くはない。せいぜいコンバットナイフくらいの刃渡りだろうか。

「卿の持つオリジナルの放つ謎のエネルギー！。それが根本的な部分は魔力と同質であると分析されました。魔力を何らかの方法で変質させた結果、障壁を容易に突破させる力が生まれたのだろうと。ですが……」

「その変質させる方法がサツパリだったわけだ」

「ええ、その通りです。魔法学者達は総当り！。それこそ思いつく方法を片っ端から試したと聞きます。幾人もの魔法学者が涙の海に沈んだとも。ですが、怪我の功名というものでしょうか。一人の魔法学者が偶然にも魔力を基礎に持つ優れたエネルギー物質を生み出すことに成功しました」

手元の写真をめくる。

やがてその中に、翼を持つ鎧と肩を組んで笑う白衣姿の老人の写真を見つけた。

「それこそが、精霊の力を借りず、限定的な方法でありながらも飛行を、飛行魔法の完成に繋がった変質魔力！。生みの親であるコウ・ジマ博士の名前から、この物質の名をコウ・ジマ粒……」

「ちよっと待った！」

博士の名前の段階から嫌な予感を感じた僕は、咄嗟に声を遮った。

突然の大声に驚いたのか、目をまん丸にしてシャドネが僕を見る。その僕は冷や汗が止まらない！

立ったまま眠っていたのだろうか、リーベンがあくびを噛み殺しながら小さく舌打ちしたのを聞いたが、今はそれどころじゃない。

「その物質って、環境に悪影響を及ぼす汚染物質なんじゃないだろうね」

「い…いえ。根幹は自然に満ちている魔力ですし、魔法世界で何度も試験を行っています、そのような報告は…」

不安だ。果てしなく不安だ。

「…そうですね！旧世界の環境に及ぼす影響も注意深く観察するよう、試験項目の重要度を上げたいと思います。流石です。試験責任者に卿を指名して良かった…」

「またもやキラキラと直視するには眩し過ぎる眼差し。訳が分からない。」

「チツ！」

そしてその後ろからはガラガラと直視すると撲殺されかねない眼差し。訳が分からない。

「開発の経緯は分かったよ。つまり、その粒子の旧世界での働きと、飛行魔法の為の装備の運用を試験するということか」

「はっ！よろしくお願いいたします！」

そして、何故僕の所でかと言うと、シャドネが何故か僕を指名したからと…。

ところで、その試作品ビームサーベルに使われているのが…件の粒子なのだろうか。

そう思うと、なんとなく自分の吸っている空気が重くなった気がした。

そして、自然と頭に思い浮かぶ設計図。

出そうと思えば出せるのだろうか。だけど、これは永久に封印しておきたいと思っただけであった。

「ところで、二人はどこに滞在するんだ？ここに泊まる？」

と、善意で言ったつもりだったが、返ってきた言葉はリーベンの、
「勘弁」

という返事。

胃の痛みを通り越して肺が痛い！

「帝国の戦後復興を放り出して、旧世界に逃げ込んだアンタと四六時中顔を突き合わせるなんてゴメンだね」

「……………」

「リーベン！！貴方最近どうしたというの！？」

リアル『修正してやる！』が見れそうだったが、シャドネはハツとした表情で慌てて頭を下げる。

「も、申し訳ありません！部下の無礼は私の監督不行き届きです！」

土下座しかねない勢いだったので、慌てて押さえた。

やはり、そういう見方がやっぱりあるのかと痛感しただけ。

大丈夫。

大丈夫。僕の臓器はまだまだ戦える……。

僕の気にしていないという想いがようやく伝わったか、シャドネは紅潮した顔で改めて頭を下げた。

「私としては騎士さ…卿の下に控えておりたいのですが、麻帆良は政治的な問題がありますので……」

そんなやり取りがあつて、昨日二人は滞在地の東京へ行った筈なのに……。

「おはようございます騎士様！トーストはバターでよろしかったですか？」

起床してヨーグルトでも食べようとキッチンへ行くと、フリフリのエプロンで武装したシャドネとエンカウントした。

思考停止すること十秒。

とりあえず、その手に持ったトーストに塗ろうとしていた貝柱を、冷蔵庫から取り出したバターにさり気なく取り替えておく。

それにしても、貝柱なんてあつたつけ？

貝柱パン…ちくわパン、さつま揚げパンに匹敵するパンかもしれない何かの誕生である！

「いやいやいや！そうじゃなくて…何でここに？」

「はっ！始発で参りました！！」

そんな胸を張って言われても。

「うむ、方法は分かった。では、何故ここに？政治的な理由で滞在は難しいでしょ？」

「日中、騎士様の謹慎期間中であれば滞在許可が出ております。申し訳ありません。昨日はリーベンの事があつて説明し忘れておりました」

リーベンの名前に反応し、思わず暗くなつてしまった僕に気づいたのだらう。

シャドネは真剣な面持ちで居住まいを正す。

「卿を快く思わない者達は確かにいます。ですが、それは同時に卿を慕う者達がいるということです」

「逆説すぎるよ」

「そんなことはありません！」

そう言うやいなやシャドネは自分の上着に、襟から片手を突っ込む。

それがまるで服を脱ぎ去るような行動に見えて慌てて静止しようとするが、それよりも速く引き抜かれた手に遮られた。

その手の中には、カエルの顔を模ったポシエット。

「…べろちよろ？」

見間違えない。見間違える筈がない。

所々ほつれたり、首紐部分が鎖に変わったりもしているが、僕が投影できる「べろちよろ」に間違いはない。

どうしてそれを持っているか訊ねようとした僕の眼に映ったのは、涙ぐむシャドネの表情だった。

「あの日…オステイアが壊れた日、貧民島で私は騎士様と女王陛下に助けられました。命を助けられました！私がこうして生きているのはお二人のお陰なんです！！」

オステイア。貧民島。二十年前。女の子。べろちよろ。思い出した。

あの日、崩れ行くオステイアで投影を行った回数は少ない。それに、あの日の記憶は今までで一番鮮烈だ。

『もうすぐ帝国の舟が来る。それまで皆を元気付けてくれるかい？』
『わ？わわ！！な、なんだか凄いです！！』

「君は…あの時の…？」

「はいっ！」

シャドネが右手を頭上に掲げる。

僕も右手を掲げた。

「はいた〜っち！」

「はいた〜っち！」

体の奥から湧き上がる不思議な温もり。

鼻にツンとこみ上げてくるものもある。

「お会いしなかった。お会いしてご恩を返したかった。こんな私が言うのだから、間違いありません！」

学園都市中が停電で闇に包まれる中、麻帆良市の境界にあたる橋で2色の極光が煌く。

「闇の吹雪！！！！」

「雷の暴風！！！！」

やがてそれが激突。同時に轟音。

空気の震えが橋を軋ませた。

打ち下ろしの一撃と天を指す一撃。

空に行く吸血鬼の真祖、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの暗色の一撃が、橋上に踏みとどまるネギ・スプリングフィールドの白色を押し返す。

「ぐうっ……くくっ……」

愉しそうに、それはもう楽しそうにエヴァンジェリンは笑いながら、その手に力を込めた。

闇の中にあつて、更に暗い光が膨れ上がる。

「ええい！！」

ネギもまた持てる力を全て杖に注ぎ込むが、対抗するには力が足りない。

押しつぶす。押しつぶされる。

両者の思いが重なり合おうとしたとき、両者にとって予想外の出来事が起こった。

「ハックシュン！！」

爆発的な勢いで膨れ上げる白色。

いや、実際にそれは爆発だった。

白色は暗色を解体しながら突き進み、やがてその起点にいたエヴァンジェリンに激突。

轟音に再び橋が軋みを上げた。

「ネギー！！」

「マスター……」

目撃者の誰もが「大丈夫かこれ！？」と不安に駆られる中、晴れた煙の中姿を現したのはエヴァンジェリンとネギの健在な姿だった。

ただし、エヴァンジェリンは素っ裸だが。

「あ、あわっ、脱げッ…!?」

「…やりおつたな小僧…フツ…フフフ、期待どおりだよ。さすがは奴の息子だ…」

「や、やったぜ兄貴！あのエヴァンジェリンに打ち勝ったぜ!?信じられねー!!」

「ぐっ…だがぼうや、まだ決着はついていないぞ」

そんな小動物…オコジョ妖精アルベル・カモミールの発言に青筋を浮かべながら、エヴァンジェリンは更なる魔法を放つべく魔力をその手に湛え始めた。

しかし、真っ先に異変に気づいたのは事の推移を見守っていたエヴァンジェリンの従者、絡繰 茶々丸。

麻帆良学園都市内の電磁波の広がりを感じたのである。

「いけないマスター！戻って!!」

橋の照明が一瞬にして点灯。湖上を飛ぶエヴァンジェリンを眩く照らし出す。

「な…何!?」

「予定より7分27秒も停電の復旧が早い!!マスター!!」

「ええいつ！いい加減な仕事をしおって!!」

停電の間だけ魔力を取り戻す事ができていたエヴァンジェリンは、慌てて空中から橋へ降り立とうとするが、余りにも遅すぎた。

「!!」

エヴァンジェリンの全身を走り抜ける不快な静電気。

一際鋭く奔った痺れにエヴァンジェリンの思考が一瞬のホワイトアウト。身構える間もなく落雷じみた轟音と共にその体を白色が覆った。

「きゃんっ!!」

ネギの放った雷の魔法とはまるで違う。

冷たい。どこまでも冷たい印象を抱かせる白色。

茶々丸は地を蹴った。

「マスター…！」

「ど、どうしたの!？」

「停電の復旧でマスターへの封印が復活したのです!魔力がなくなればマスターはただの子供。このままでは湖へ…」

同じく推移を見守っていた神楽坂 明日菜の問いに答えながら、ブースターのリミッターを強制解除。

背中 of ブースターから光が爆ぜ、地を這うように茶々丸はスピードを上げる。

「エヴァンジェリンさん!!」

「!!」

湖目掛けて落下するエヴァンジェリンを救い上げようと、欄干を今まさに乗り越えようとしていたネギと茶々丸は見た。

エヴァンジェリンを覆っていた白色がその身から剥がれる。

やがてそれは形を作った。

間近にある形。

エヴァンジェリンと瓜二つの少女の形に。

「あれは…魔力の塊!??でも、あれは一体…?」

白一色の少女は笑う。

目の前のエヴァンジェリンに笑顔を向けたのだ。

パツカリと三日月型に割れた口で、不気味に、不快に。

次の瞬間、近くにいた三人諸共、湖が白い光に呑み込まれた。

それは、白い少女の背から膨れ上がった巨大な翼。

2・5 ふたり（後書き）

あとがき・解説

しゅじんこうは さいあくなへいきを おもいだした！

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

2・6 とまどい（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

2 - 6 とまどい

今夜、学園都市全体が一時的に停電になる。学園を覆う対魔結界発生装置のメンテナンスということだけだ…。

内側にある巨大な魔を封じ、外から来る魔を拒む結果。だけど、だ。

何故それを、よりもよって夜に機能を停止させるのだろうか。ネットゲームのメンテナンスだってプレイヤーの少ない昼間にメンテナンスを行うというのに。

『協力要請』と題されたメールに「自己責任、自業自得」と返信しておく。

まあ、ただ僕が謹慎中で身動き取れないだけなんだけど。

しかし、あの学園長はいつたいいくつ帝国に借りを作るつもりだろうか。

「政治家の考えることだよな」

僕に魑魅魍魎の政治の世界は厳しい、と半ば食わず嫌いな自分を自覚しながら二階に降りる。

すると、何かに導かれるようにその姿に気づいた。

夕日に照らされる窓際のデスクチェアに、膝を立てて座る桜子。

物憂げな表情と共に、手にしたジュネスメガネをメガネ拭きで拭いているその姿。

普段とまるつきり正反対の、その儂げな姿。

そんな表情もできるのかと、僕の頭を痺れさせる。

もっと、ずっと、この光景を、その表情を、その全てを見ていたい。

ずっと。

ずっと！

ずっと…！

しかし、赤く輝くその幻想的な光景が終わりを告げたのは唐突だった。

「…との…人の話を聞けー!!!」

「ヴァサラッ!?!」

横からの飛び蹴りをモロに横っ面に受けて、そのままゴロンゴロンと床を転がる。

しれっと飛び蹴りの瞬間を横目で捉えていたのはナイショだ。

犯人は白…じゃなくて、円嬢。健康的でよろしい。

「ちよつと七瀬さんに聴きたいことがあるの」

「な、なんだい?」

腫れた頬がすぐさま治っていく様を手に感じながら立ち上がると、不機嫌そうな表情に迎えられた。

「何か、今日ここに来たときにビルの入り口で女の人と出くわしたんだけど…」

一瞬、円嬢は言葉を呑み込んでチラリと横に目を向ける。

僕もそれに釣られて目を向けようとすると、ガツチリと円嬢の両手に顔がホールドされた。

なんだこのシチュエーション?…すわキスかつ!?!いやいやこの子達は妹というか娘というか、親戚の子供というかそんな感じでもそれってアリじゃない?」

ねーよ。

と脳内で否決してみたものの、横を向いていたその顔が正面…僕に向けられる瞬間はドキリとした。

ただし、ヘッドバットされそうな殺気でだけけれど。

「…あの人、七瀬さんのコレ?」

と、小指を立てる。

女の子がそんな事をしちやいけません。

それはともかく、円嬢の言う女の人とは、二人と入れ替わりのように帰って行ったシャドネの事だろう。

勿論、シャドネとはそんな関係である筈もなく。

優しくその小指を押さえて折りたたませる。

「同僚だよ。一応、僕の部下になるのかな。今は」
謹慎中の上官という情けない状態だけだ。

「そっか。そうよねー！こんな七瀬さんに、あんな仕事ができそうな女の人がなびくわけ無いよね」

「こんなって、どんなだよ」

不機嫌な顔が一転。その爽やかな笑顔がむかつく！

殺気を気取られたか、円嬢はピーカブースタイルで防御しながら後退。

伊達に僕の頭ぐりぐりを受け続けてはいないということか…なかなかやる！

「あれ？でも待って…」

円嬢は意味深に顎に手を当てて俯く。

「何さ」

「七瀬さんって仕事してるの？」

僕は床を蹴った。

ホバリング技術を利用して一瞬で円嬢の目の前に。

「甘いつ！」

円嬢はすぐさま防御体勢を取るが、甘いのは君だ！

「ボディが甘いぜ！」

しゃがみ体勢からのわき腹マッサージ炸裂。

軽快に、軽快に、軽快に、あばらの骨一本一本に指を這わす！！

「きゃははははは！ちよ、ちよっとタンマっ！！」

「怖かるう、悔しかろう。たとえ服を纏おうとも、心の弱さは守れないのだ」

真っ赤に染まった顔で必死に逃れようと体をよじらせる円嬢の姿に、あれ？僕って危なくない？と客観的に考えた一瞬の隙に、円嬢が両手を振り上げた。

「タンマ！待って！待って！言ってるでしょうがっ！！」

その両手に頭を打ち付けられ、僕はそのまま床に沈んだ。

「見事…だ…」

床を転がって天井を見上げていた視界に、ひよっこりと桜子が顔を出した。

あの儂げな雰囲気は微塵も無く、眩く暖かな笑顔と共に。

ああ、桜子だ。

意味無くそう思った。

「ミ・ソ・にゃん！」

差し伸べられる手を取り、立ち上がる。

なんだか妙に嬉しそうな桜子は、そのまま僕の手を取りくるくると回り出した。

なんというか、これは…そう、フォークダンスというやつか！！男女それぞれ輪を作り、手と手を取りながら踊るのだ。

好きなあの子との番が今か今かと待ち遠しくて、さあ次キター！となった瞬間に曲が終わるのだ。

最後に踊ったのが人数合わせで女子の輪に入れられた男子だったりね。

まあ、僕はそんな経験なんて全く無い訳だけど。

しかし、今僕はまさにその感動を！

「はいはい、桜子。気持ちは分かるけど、テーブルで足打っちゃいそうだから止めなさい」

「にゃははは！いや、落ち込むなんて柄じゃないね！どうしちゃったんだろ、私」

「それが…大人になるということよ」

「うわ、くぎみーが変なテレビの見すぎだ」

二人の少女がキヤイキヤイじゃれ合う。うん、素晴らしい光景だ。で、結局一連の出来事は何だったのだろうか。

柄にも無くというか、本領発揮というべきか。

台風直撃時の夜のようにワクワクしながら赤いロウソクの炎を見つめて、人工の光の無い夜を楽しむ。

しかしそろそろ日付が変わり、停電も終わる頃だ。

電気が復旧したら、まずはこの停電の想いを日記に綴ろう。そしてラジオでのトークに役立てよう。そんなことを考えている時だった。

一瞬だけ点灯する電灯の光。しかしすぐさま暗闇に戻った。メンテナンスで事故でも起こったのか？

ふと、違和感を感じた。

いや、違和感なんてレベルではない。明らかな異常。

「息が白い……」

急に気温が低下したのだ。

もう季節は春過ぎ。これを異常と言わずして何と言おうか。

外に出てみようと、屋上を目指す途中に携帯電話の着信音が鳴る。

ディスプレイには「クーサン」

『こんばんは。突然ですが緊急事態です』

「前にもこんなことがありましたよね」

『ええ。ですが以前のものとは比べると、事態の危険性が段違いです。とりあえず、今すぐ屋上に出て、北西の方角。麻帆良と外とを繋ぐ橋を見てください』

一言も冗談を挟まないその雰囲気、僕も気を引き締める。

階段の段差を無視して屋上入り口まで飛び、妙に冷え切ったドアノブを回して屋上に出た。

真っ先に感じたのは突き刺すような冷たい風。

一瞬で全身に鳥肌が立つ。

そして、風に舞う小さな白い粒。雪だ。

「異常気象にも程がある」

クーサンの言葉に従い、巨大な…それこそ大鳴門橋か、関門海峡大橋かと思えるほどの巨大な橋が掛かっているのだが、それが見えるであろう方角に目を向ける。

「は…？」

目を疑う、というのを初めて実感した。

橋を探すまでもない。

その方角に、明らかな異常があった。

巨大な、巨大な白い繭型の物体が、夜の闇の中にドツカリと鎮座しているのだ。

「何ですか、あのオブジェクト。停電を利用したサプライズ企画か何かですか？」

「あれが単なるオブジェクトだったら良かったのですが…残念な事に、例の精霊の魔力を感じました」

「また魔法の本の中からですか！？」

気づけば、寒さも、謹慎中であることも忘れて空に飛び出していた。

あの精霊が存在する。しかもこの麻帆良に。

それは僕にとって、全ての優先順位をかなぐり捨てさせることに十分な事態だった。

「いいえ、違います。この麻帆良には極めて巨大な魔力集積機能を持つ者が三名いるのはご存知ですね？」

ネギ・スプリングフィールドと、近衛 木乃香嬢。そして…。

「ネギ君と木乃香ちゃんは、まだ生まれて十年程に過ぎません。あれほど巨大な実体を持つ精霊が寄生していたとは考えられない」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

六百年を生き続ける吸血鬼。

「魔力を封じていた結界が再起動を果たした際、キティから結界が魔力を奪うタイミングで外に出たのでしょうか。まあ、推測に過ぎませんが」

「そもそも、以前に同じ事は起きなかったのですか？」

雪に濡れて顔に張り付く髪を乱暴に払う。

視界が最悪な状況だが、目的地はとにかく目立つので迷う事は無い。

「このメンテナンス自体が、ここ十数年では初めての出来事ですので」

「…そういえば、もう一人優れた魔力集積機能の持ち主に学園長がいた筈ですが」

「恐らく違うでしょう。あの方は今学園の中枢で指揮を執っておられます。ああ、言い忘れておりましたが、あの橋では直前までネギ君とアスナさん。そしてキティと茶々丸さんが戦闘を行っていました。つまり消去法で行くとキティが原因である線が濃厚というわけです」

「…何でそんなことになってるんです」

「さあ？私にはなんと」

「まあいいです。過程がどうであれ、今ある結果をどうにかするのが僕の仕事だ」

電話の向こうでクーサンが微笑むのを聞いた。

「これ程の異常、一般人も絶対に気づく筈です。そちらは魔法使い達に任せましょう。貴方の行動に支障の出そうな魔法使いに関しては、私とココネで対処します」

魔法使いがああ精霊と相対することは、火に油を注ぐ行為に他ならない。

いや、正確には精霊の力を借りた魔法…精霊魔法を使う魔法使い達が、と言うべきか。

だから生粋の精霊魔法使いたるクーサンを戦力として計算できない。

ココネは戦闘能力は少なくともあるが、あの子は自分から戦いを望む子では無い。そんな子供を戦場に送り出すのは、戦闘中に女の子の名前を呼ぶ行為に並んで愚かな行為だろう。

「だとすれば、あの規模の相手を僕一人では極めて困難だと思いま

す。援軍の要請を」

「他の地域のメンバーが一番近いのがタイ王国です。残念ながら到着まで時間が掛かります」

思わず舌打ちが漏れる。

白い繭に近づくと連れて、その現状が見えてきたのだ。

白い繭の正体は氷。

巨大な橋を丸ごと飲み込み、下に流れていた川は果てしなく凍り付いている。

川だけじゃない。大地を凍らせている白い靄が繭を中心に徐々に広がりとつあるではないか。

「ですが、タイミングの良いことに、派遣されて来た二人に援護を打診しました」

「!?!? いてくれただけマシですか」

「見せてもらおうじゃないですか。彼らが作り出した新たな力というものを」

でも、実験がいきなり実戦の中でなんて、物凄く不安だ。

「：タカミチ君の力だけでも借りれませんか？」

「彼は今、魔法世界です」

：まあ、本人から行き先を聞いてたから知ってたけど。

「そうそう、先に言っておきます。あのオブジェの中には先ほど申し上げた四名が取り込まれています。今回のミッションは、精霊の討伐だけでなく、その四名を無事救出することも絶対条件ですので、気をつけてください」

「ば…!?!?」

戦力がタダでさえ少ない現状で救出作業も行えと仰る!!

思わず吐いた「馬鹿な!?!?」という叫びを慌てて呑み込んだ。

風を切り裂く飛翔音。

繭からの攻撃かと身構えるが、しかし繭に動きは無いようだ。

飛行機だろうか、自分より更に高度へ目を凝らす。

見えた。

オレンジの光を煌かせ、上空を旋回する二つの姿。

『…速いですね』

「さすがコジマ粒…」

『とつとと二人に接触してください。警察や自衛隊、米軍が動き出す前に状況を終了させましょう』

2・6 とまどい（後書き）

あとがき・解説

何かと床に転がっている事の多い主人公です。私自身、今回の話を読み直して気づきました。あと、説明シーンとか苦手…。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

2 - 番外？ しろ（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

2 - 番外？ しろ

じわり。

じわりと少女の体を白い冷気が侵食していた。

指先から、徐々に、徐々に熱が奪われていくのを、彼女のセンサーは克明に感知する。

「…ます…ター…」

白く凍てついてゆく指。

その先に彼女が仕える主が。

彼女が護るべき主が。

敬愛する主が。

主が。

「な、なに！？」

「わ、分かりません」

明日菜の疑問の声に、ネギも茶々丸も答える事ができなかった。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの体から、いやその姿に酷似した何物かから爆発的に膨れ上がった白色に、橋の上にいた絡繰 茶々丸、ネギ・スプリングフィールド。そして慌てて駆け寄ってきた神楽坂 明日菜の三名は一瞬の内に呑み込まれた。

そして気づけば洞窟のような細く狭い通路の中程にいたのである。両脇の壁も、天井も床も白色。洞窟のような空間でありながら暗くないのは、その白色が僅かに発光しているからだ。

茶々丸はすぐさま周囲をスキャン。

結果は一瞬で出た。

「この空間を形成しているのは氷のようです」

発光する氷という物質に疑問が浮かぶが、茶々丸にはそれ以上に優先しなければならぬことがある。

「うわっ！どーりで寒いと思っただっ！」

半袖姿の明日菜とネギは白い息を吐きながら忙しなく体を動かして何とか体温を高めようと努力するものの効果は現れず、結局二人して体を寄せ合う方法に落ち着いたようだ。

そんな二人を尻目に、茶々丸は必死に辺りの分析を続ける。捜しているのだ。

茶々丸の主、エヴァンジェリンもまた茶々丸達同様に白い爆発に呑み込まれたのを観測している。

外とのデータリンクが途絶えていることもあり現状が認識できない状況ではあるが、大気の組成や氷を形成している水の質から、麻帆良の橋の上から一步も動いていない可能性が高いと判断。

転移魔法の類では無いと結論を出した茶々丸は思う。主もまたこの空間のどこかにいる筈だと。

しかし、周囲を赤外線センサーで探るものの、低温の寒色だけがひしめいており、生命らしき暖色が存在しない。

彼女の主、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは吸血鬼である。

真祖と呼ばれる吸血鬼の中でも別格の存在。

不老にして不死。

その存在は永遠である。

ガイノイドという無機にして半永久の彼女が仕えるに相応しい主。

茶々丸は今はその絶対的な存在を感じないでいた。

科学の結晶である彼女が、存在感で物事を計るといっなのは可笑しな話ではあるが。

「ネギ先生、神楽坂さん」

「ど、どうしました茶々丸さん？」

「マスターを捜す為に私はこの場を離れます。この空間では何が起るかわかりませんので、警戒しておいた方がよいかと」

背中のバーニアを展開し滑り出そうとした茶々丸だったが、がっしりと両手を掴まれた。

それぞれの手を、左右から挟むように掴んでいたのは、ネギと明日菜。

「なんででしょうか？と首を傾げる茶々丸に、二人は熱い熱い視線を向ける。」

「僕もエヴァンジェリンさんを捜します！」

「それに、どっちみちここから出る為に探索しないとね！」

とりわけ、拒否する理由が思い浮かばなかった茶々丸は二人と協力することにした。

「…わかりました。でもお二人とも寒くないのですか？」

「わ、忘れようとしたのに思い出させないですよー！…背中のそれってストーブにならない？」

「あ、明日菜さん！失礼ですよ！」

その発想はありませんでした、と割かし感心した茶々丸が最小出力でバーニアを点火した。

「おお、暖かい！」

「この先に、僅かですが生体反応があります」

「エヴァンジェリンかなー？」

寒さが多少は和らぎ、心に余裕が戻った一行が洞窟を進み辿り着いたのは、一際巨大な空洞だった。

そして、その中央に突き立つ巨大な氷柱。

透明度の高い、まさに水晶と表現するに相応しいその結晶。

一見すれば幻想的な光景だが、しかしネギと明日菜がその光景に見惚れたのは一瞬だった。

そこにある傷ましい姿に、誰もが動きを止める。止めざるを得な

かった。

「マスター!!」

水晶に手足を埋め込まれるように磔にされている少女。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

茶々丸の声に反応して顔を上げたエヴァンジェリンは、茶々丸達三人を見ると焦ったように首を横に振る。

「何故お前達がここにいる!?今すぐこの場所から離れる!!」

その言葉に構わず動いたのは茶々丸だ。

背部と足裏のバーニアを展開し滑るようなスタートダッシュ。

「今そこからお出し…!?!」

「来るな茶々丸!!」

茶々丸のアイカメラが飛来する物体を補足。

形状から敵性と茶々丸は判断。

しかし回避する間もなくそれが茶々丸の左足を貫き、飛来した勢いそのまま茶々丸の体から奪い去った。

「茶々丸!?!」

「茶々丸さん!!」

オートバランスに致命的なエラーが生じ、茶々丸はそのまま地面へと叩きつけられ、氷の床を滑り壁に当たることでようやく止まる。

「誰です!?!何故こんな酷いことを!」

反射的に負荷で先端の装飾が壊れてしまった練習用の杖を構えたネギは見た。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

いつそこに現れたのか。

いつからそこにいたのか。

千切れ飛んだ茶々丸の左足を興味深そうに持ち上げ眺める少女。白い。

白一色で構成されたエヴァンジェリンが。

一糸纏わぬ姿で磔にされているエヴァンジェリンとは異なり、所

々透明色の装甲板で補強されたドレス。

背から天上へ、天下へと巨大に広がる二対の羽。

やがて興味を失ったのか、無造作に茶々丸の左足を投げ捨てる。

『家畜カト思ツタガ：キサマハチガウナ。魔力ヲ食イ荒ラスダケノ人形。害虫。害虫ノ分際デ妾ノ眼ニ映ル事ハ許サヌ』

滑らかに空中を滑空すると、軽快な足音と共に茶々丸の眼前に立つ。

今まさに両手で体を起こそうとしていた茶々丸は、その白いエヴァンジェリンを仰ぎ見た。

そこに、彼女の知る傲慢で、尊大で、偉大で、我侷な主の面影は存在していない。ただただ、光景を写すだけの目といびつに歪んだ口だけがある。

「茶々丸！そいつから離れる！お前ではそいつには…！」

主の叫びから、目の前のこれが敵であると確定。

主を解放する最大の障害と判断。

「マスター、私は唯マスターの為に」

明日菜との戦闘で用いたロケットデコピンとは比べ物にならない、限界出力のロケットパンチ。

初速が容易く亜音速を突破するそれを至近距離で受けた白い少女は、しかし微動だにしなかった。

『害虫ガ：汚ラワシイ。汚ラワシイ。汚ラワシイ』

茶々丸のロケットパンチを受け止めたのは、幾重にも輝く魔方陣。魔方陣に捕らえられた茶々丸の右手は、一瞬の内に音を立てて凍りついてしまう。

そして茶々丸がワイヤーを引き戻す暇も無く、白い少女の手によって氷諸共握りつぶされた。

そして白い少女が無造作に踏み出した一步が、残る茶々丸の右足を大腿部から破砕。

「茶々丸さん!？」

いかに茶々丸がガイノイドだろうと、ロボットだろうと、自動人形だろうと、ネギにとって茶々丸は生徒の一人である。

他の誰とも違わない、生徒なのだ。

ネギはあれこれ考えるよりもまず先に体が動いていた。

同じくシヨツキングな光景に体が硬直してしまっている明日菜を追い抜き、役に立つか分からない練習用の杖を片手に。

ネギ自身、自分がどうするつもりなのか分からないまま。

「お、おい坊や！そいつは駄目だ！そいつは私達にとって…」

「茶々丸さんが傷ついてるんですよ！？」

杖…とも呼べない棒切れを白い少女へ向け詠唱。

「今すぐ茶々丸さんから離れてください！…ラス・テル マ・スキル マギステル…」

白い少女は茶々丸の左手を潰そうとしていた足を止め、ネギに振り返る。

その杖に集まる魔力を感じて、口を歪ませた。その表情は、まさに「歡喜」。

『オオ、貴様ハ素晴ラシイナ！！』

白い少女の羽が淡く発光。

「魔法の射手・戒めの風矢！！」

十を超える魔法の射手が様々な軌跡を描き白い少女に迫る。だが。

「え？う、うそ…」

風の魔法は、掻き消えるように白い少女の目の前で分解され、そよ風となってその羽をなびかせるに終わった。

白い少女の表情が、愉悦に歪む。

『良イ…良イ質ト量ダ』

「そいつに魔法は効かない！神楽坂を連れて逃げる坊や！！」

「でもエヴァンジェリンさんと茶々丸さんが…」

白い少女が宙に浮かぶ。

両手を大きく広げ、初めて人間らしい…それはもう人間らしい慈

愛に満ちた笑みをネギへ向けた。

その表情に、ネギは一瞬にして総毛立つ。

抱いた感情は、恐怖。

『大事二、大事二飼ッテ上ゲマシヨウ』

白い光がネギを襲った。

全身を凄まじい冷気が襲うが、ネギに避けることはできない。見れば、靴がいつの間にか凍り付いている。

そして、一気に体から何かが抜け出す感覚。

(魔力が…)

「ネギーー!!」

魔力だけでなく力までもが抜けていき、その場に崩れ落ちそうなネギを支える手があった。

「明日菜…さん？」

ネギを覆っていた白い光が霧散。

ネギの小さな体を隣で支え、白い少女を睨み付けるその横顔。

明日菜の姿に、ネギは何故か懐かしさを感じた。

「あんた！誰だかわかんないけど茶々丸さんやネギを虐めるなんて許せないわ！」

『貴様…！何故妾ノ力ガ…！？』

床が音を立って割れ、鋭い破片となって白い少女の周囲に浮かぶ。白い少女が片手を挙げると、それらが一斉に切っ先を明日菜へと向けた。

『コレナラバドウダ？』

「こ、これってかなりピンチ？」

「明日菜さん逃げて！」

『往ケ！』

破片が一斉に飛び掛る。

だが。

『…同胞達ヲ窒息サセル。魔力ヲ消失サセテイルトデモ言ウノカ』
明日菜に刃が届くことなく、パラパラと破片は地面に転がった。

「凄いです明日菜さん！」

「な、なんだかわかんないけど、助かったのよね…って!？」

ネギと明日菜がほっとしたのもつかの間。目の前の光景に言葉を失う。

白い少女。

その頭上には先ほどの破片とは比べ物にもならない、巨大な氷柱が一本。

『ソウカ：貴様モ人形カ！：魔法ヲ受け付けヌノナラバ質量デ潰スマデー!!』

唸りを上げてそれが明日菜目掛けて放たれた。白い少女はネギのことが頭に無いらしい。

だがそれは早い段階で二人の横に反れた。

「お二人ともすぐに撤退を！」

それは、背中のブースターで氷柱に体当たりを決行した茶々丸。

「でも…！」

「デモもストもあるか！坊やではアレに対抗できないのは分かっただろう！！茶々丸の言うとおりここから離れる！！」

「ちよつとギャグが古くない？エヴァンジュリン」

「五月蠅い！さっさと行け！！」

茶々丸が主の為でなく二人を守る為にその身を賭けたのは、ほぼ衝動的な行動だったと言ってもいい。

主は先ほどから二人を逃がそうとしている。

だから、自分は主の意に沿った行動をしたのだけだと。

決して不快ではないエラー！。

渋々とはあるが、撤退を開始した二人の姿をカメラに捉え、同時にその背に向けて放たれた氷柱に再度体当たりを敢行。

両脚を失っている為、着地できる筈も無く。

茶々丸は床に叩きつけられ転がった。

「絶対に！絶対に助けを呼んできますから！！」

明日菜に引きずられるネギの涙に、ありがとうございます、と茶々丸は動かない口で伝えた。

動かない。首も回らない。

茶々丸の顔は氷の床に押し付けられている為に。

その横顔を押さえつけるのは、白い少女の足。

『害虫ガ…人形ノ分際デ邪魔ヲシテクレル…。ダガ残念ダナ。コノ宮殿ニ出口ハ存在セヌ』

ギシリと、茶々丸の顔に掛かる圧力が増し、音を立てて左目…アイカメラの一つから映像と信号が途絶えた。

残る右目が、横に必死な形相の主、本物のエヴァンジェリンを捉える。

「…調子に乗るなよ…たかが精霊が神様気取りか？」

『貴様コソ、タカガ家畜ガ超越種気取りトハ笑ワセテクレル！家畜、貴様ハ妾ノ入レ物トナツタガ故二人ノ域ヲ超エタノダ』

「っ！？あああああ！！」

エヴァンジェリンを拘束する水晶の中を白い光が奔る。

縦横無尽に、まるで血管のように網目を巡らす極小の筋。

それがエヴァンジェリンの両手両脚から伸びて地面へと吸い込まれていった。

『光栄ニ思工。ソノ忠義ヲ称工、貴様ハ一生妾ノ家畜トシテ飼育シテヤル。精々、魔力ヲ溜メル事ニ励メ』

（マス…ター…！）

主の苦痛は従者である自身が和らげなければならない。その思いに突き動かされ、残る左手を伸ばすが絶望的に届かない。

そしてセンサーが急激な気温の低下にアラートを鳴らす。

『害虫駆除モ飽キタ。永遠ノ氷結ニ朽チ果テヨ』

最早、機体温度が活動限界点を下回ろうとした時にそれが起きた。ノイズの酷い音声センサーが捉えたのは、何かが盛大に破碎する音。

次の瞬間には、広間のあちこちに大小、氷の破片が降り注いだ。

『何！？羽虫ガ妾ノ外殻ヲ突破シタトイウノカ！？』

「目標補足！ビンゴだ！！」

それは、どこか聞き覚えのある声。

つい最近のメモリーに残っている。

『貴様：！何故止マラン、人間デハ無イノカ！？』

何が起こっているのか茶々丸には見えないが、しかし現状を打開できる何かが起こるといふ核心があった。

「……！！」

ノイズ混じりの雄叫びが茶々丸を揺さぶる。

体中を覆っていた冷気が消え、辛うじて動く顔を上げて目に映った光景。

それは、白い少女の胸に刃を突き立てる血塗れの青年の姿だった。貫通した刃が床にまで到達し、そこを青年のものであろう血が伝って血溜りを形成している。

そんな状態にあるにも拘らず、二人は…。

青年は壮絶な笑みを浮かべて。

そして白い少女もまた歪な笑みを浮かべて。

息が掛かるほど間近で額をぶつけ睨み合っていた。

2 - 番外？ しろ（後書き）

あとがき・解説

主人公補正。

いったいどちらの主人公にそれが備わっているのでしょうか。

あと、お気づきかもしれませんが、重要な人…動物が登場していません。

原作の戦闘時の空気を再現できない…。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

2 - 7 いたみ（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

2・7 いたみ

白く発光する繭から少し離れた上空で、僕はヘラス帝国空軍第108技術試験隊所属の二人、シャドネ・ミランとリーベン・スクラッドに合流した。

暴風と雪が渦巻く上空。

容赦なく体温が奪われていく事態に、考え無しに飛び出した自身を呪いたくなった。

しかし、一時的とはいえ部下になる二人の前で弱音を吐くわけには行かない。

上官は見栄を張ってなんぼとは、誰の教えだっただろうか。

表情はなんともない風を装い（寒さで固まってるわけではない！）、二人の敬礼に返礼。

「ナナセ卿、これを」

風に声を邪魔されないように顔を寄せたシャドネが差し出したのは、携帯ラジオのような立方体の機器と、イヤフック式の片耳用のヘッドセット。

帝国軍で使われている通信機だ。主に僕のような念話の使えない兵士の為に。

魔法使い一人を介して、擬似的な念話が可能になるのだとか。

本体を後ろポケットに突っ込み、素早くヘッドセットを右耳にかける。

「ありがとう。助かるよ。この前最後の一つを壊してたんだ。でもよく僕が用意してないって分かったね」

『フィリウス様が1ダースほど送ると仰っていましたので』

そんなに僕は壊すイメージか…。

『チンタラしている暇はあるのかい』

リーベンの言葉に、改めて気を引き締めなおす。

「すまない。それでは今回の作戦を説明する」

『まずは私が軽く現状を説明しましょう』

通信に割り込んできたのは、さっきまで携帯電話で聞いていた声。クーサンこと、クウネル・サンダース。

『突如発生した繭状の物体、今後は「繭」としましょう。繭から感じた魔力の質により、精霊。しかも、あの規模ですと第二段階以上の精霊であると推定できます』

『第二段階！？中隊規模で相対する相手だろそれ！！』

『そこは反則気味なアツカーで穴を埋めます』
シャドネとリーベンの視線が同時に僕を向く。

いつもならうるたえる所だけど、生憎、今夜は事前に覚悟を決めてきた。

「僕が精霊の眼を引きつける。二人には中に閉じ込められた民間人三名の救出を行ってもらおう」

『おや？四名の筈ですが？』

「できることなら、茶々丸さん…だっけ。あの子にサポートしてもらいたい。僕のアーティファクトとの親和性が高そうだし、戦闘データも取れば皇女殿下もフィリウスさんも文句は無いでしょう」

『私は反対です！』

意志の強い瞳が僕を睨み付けていた。

きつく拳を握り締めたシャドネだ。

『ナナセ卿一人では危険すぎます！しかもそのサポートを民間人にさせることは軍人として容認できません！私にサポートを担当させてください！！』

その言葉は非常に僕を感動させた。

今まで共に戦ってきた部隊の連中は、揃いも揃って笑顔で僕に面倒事を押し付けていただけに。

しかし、しかしだ。

「あの繭に突入し、中で戦闘になった場合、君達の兵装では不利だ」
飛行用の兵装で室内戦は無謀としか思えない。

『しかし！！』

「これは決定事項だ。二人は民間人を救出し、即座に離脱してもらう」

上官は揺るがず、起きたことの全責任を負う。これもまた誰の教えだったのだろうか。

悔しげに俯くシヤドネに罪悪感を感じるが、それを表情には出さない。出してはいけない。

「お二人とも。まずは中への進入経路を探しましょう。中の様子が分かりませんので、その後のことは臨機応変に対応するのがよろしいかと」

「そうですね。まずは繭の周囲を手分けして探索。突入経路が見つからない場合は、あの外壁を破壊し道を開く。二人ともいいね」

「…了解しました」
「了解」

慎重に距離を詰めて繭の外壁を探るものの、滑らかな光沢だけが続いておりネズミ一匹通れそうな穴が無い。

「こちらも見つかりません」

「こつちも駄目だ」

「仕方ない、プランを変更して…?」

外壁を破壊する作戦へ移行しようとした時だった。

氷と思われる繭の外壁が音を立ててひび割れていき、破片の切っ先が一斉に僕へ向いた。

ほぼ直感。

反射的に通信機に向かって叫ぶ。

「攻撃来るぞ！回避運動とりつつ繭から離れ…!?!」

言い終わらないうちに、それが来た。
波。

細かく、鋭利な氷の破片が一斉に飛来。

「くっ…おおおおお！」

咄嗟に投影したビームサーベルで薙ぎ払いながらランダム運動で

回避。

だがその数の多さと、細かさから、避け切れなかった破片が容赦なく体中に抉り込む。

削られた頬から流れる血が口に入り、その味が体中を震わせた。

一瞬の思考の空白。

『騎士様！！』

「…っ！僕の事は構うな！そちらの損害は！？」

『損害は軽微！』

『問題ない』

破片の波が途切れた。

繭を見れば、白い霧を噴出しその表面を覆っていく。

「嫌な予感しかしない！早急に外壁を破壊して突入する！！」

『方法は…っ！？』

霧が風に流され、現れたのは繭の根元から生えた透明色の触手。

氷柱が連なつた鎖とも言つべきそれが、先端に鋭利な刃を生やして蠢いている。

「二人は上空に離脱しろ！」

「じゃらり、と鎖が鎌首をもたげ…」

『騎士様は！？』

「繭に取り付いて外壁を破壊する！！」

一斉に襲い掛かった。

待ち構えることはしない。ジリ貧になるくらいなら、自分から飛び込む！

航空シヨ一のパイロットも真つ青な曲芸飛行を演じながら、襲い掛かる鎖をすれ違いざまにビームサーベルで切り裂きながら少しずつ、少しずつただけで外周を回りながら近づいていく。

包囲されているというプレッシャー。

一度捕まれば、動きを止められ切り裂き串刺しにされるといふ恐怖。

食いしばった歯が軋みの音を上げた。

だというのに。

だというのに！

僕の思考は次第に熱く、爛れ、物足りない、弾けたいと、唯ひたすらにもどかしく、もどかしく、もどかしく！！

気づけば、繭の天頂部、本の少し高度を下げれば着地できる位置にまで到達していた。

繭の表面がひび割れる。

向けられる破片の切っ先に、ゾクリと背筋が震えた。

僕が感じたのは「悦び」だ。

『騎士様！！』

『困まれてる！来るぞ！！』

ビームサーベルを放棄。すぐさま投影したフツノを横一文字に構え、空中一回転。

串刺しにせんと、全方位から襲い掛かった氷の鎖を両断した。

なんとという快感。

これは爽快感。

僕は今、快楽に体を支配されている！

「断ち切れ」

回転した勢いのまま、頭上に振りかぶったフツノを繭の外壁に突き立てた。

外壁が爆発。

否。

鋭利な破片が一斉に吹き上げたのだ。

僕の体が削り取られる。

「あああああ！！！」

『騎士様！無茶です！！』

『あんた、ただの死にたがりかよ！！』

『すぐに離脱してください！！』

シヤドネの悲痛な叫びに、僕がかぶりを振る。

「まだだ！」

フツノの柄を握る両手に、更に力を込めた。

概念の補助を得たフツノは、その刀身の半分まで外壁に埋まり、即座に四方八方へ罅を奔らせる。

だが…破壊するまでに至らない。

「くっ…」

「そこをどけ!!」

通信機越しではない。その声は頭上から響いた。

咄嗟にフツノの投影を放棄して後ろへ飛ぶ。

「砕けエ!!」

そこへ上空から激突したのは、巨大な三角翼。

リーベンだ。

その手にもった武器…いや、無骨な重機の杭を、フツノが広げた罅に落下の勢い全てをぶつける。

杭。杭打ち機。パイルドライバー。

そして体の奥底を揺さぶるような破裂音。

杭が煙を上げて射出され、罅は更に拡がり外壁が陥没した。

「チッ…あと少し!隊長頼みますよ」

「行きます!!」

すぐさま離脱するリーベンと入れ替わるように、光が空から降ってきた。

一直線に、天頂から。

瞬く推進剤のオレンジの軌跡。

それを邪魔しようとする氷の鎖を、ビームライフルを投影して撃ち落とす。

「せいっ!!」

再度のインパクト。

シャドネのぶつけたパイルドライバーが、あれほど強固だった氷の外壁を古びたコンクリートのように粉碎した。

ぽっかりと開いた大穴。

「よし、先行する。シャドネ、無理はするなよ」

『まだやれます！』

力なく垂れ下がった右手を押さえ、シャドネが背筋を伸ばす。
あの時。オスティアの貧民島で出会った時のあの子がね…。

「民間人の方は任せるよ」

感傷に浸るのは後だ。

シャドネに頷きを返し、繭の内部へ飛び込んだ。

突入したそこは、広大な空間だった。

白一色。

部屋の中央に巨大な水晶がそびえ立つ幻想的な空間。

その中に見つけた。

水晶に手足を拘束されている全裸の少女。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

そして、地面に力なく横たわる少女。左手を残し手足を奪われて
いるのは自動人形。

絡繰 茶々丸。

そして。

『何！？羽虫が妾ノ外殻ヲ突破シタトイウノカ！？』

姿こそエヴァンジェリンと同じものだが、その背に広がる二対の
翼。

そして、怖気を感じる白一色…間違いはない、あれがこの繭の主。
精霊。

「目標補足！ビンゴだ！！」

実に運がいい！

「交戦を開始する」

『了解。』武運を』

『風穴が開いたお陰で、内部の状況が掴めました。ネギ君とアスナさんの位置情報をお送りします』

シアドネの言葉に続いてクーサンからの吉報。

これなら、救出に手間取るといふことはないだろう。

ビームライフルを精霊目掛けて射撃。

「ソナナ玩具デ妾ニ…ッ!？」

一射目が白い精霊の展開した魔方陣を無視し、頬を掠め髪を一束蒸発させた。

「何ダソレハ!？」

「僕が知りたいね!」

二射目、三射目は体を覆うように閉じられた翼によって弾かれた。ビームライフルを放棄し、フツノを投影。

そして加速。

持てる全力、僕の出せる最高速。

「近寄ルデナイ!」

大小さまざまな氷柱が眼前から飛んでくる。

怖くないといえは嘘になる…けど、同時に高揚している自分がい
るのも確かだった。

だから、止まらない。

進路上の障害になるものだけを迎撃していき、細かい破片などは目を潰されさえしなければ良い。

与えてくれる痛みが、僕は前に進んでいるのだと教えてくれる！
僕がまだ動けるのだと教えてくれる！！

固定砲台に徹する精霊にフツノの切っ先を向けた。

『貴様…！何故止マラン、人間デハ無イノカ!？』

「人間で無いことに何の問題がある!!」
姿を消そうとするが遅い。

『クッ!!』

地を蹴ることにより更に加速。

滑るように精霊の懐に飛び込み、まるでバターに溶け込むように

フツノの刃が白い少女の体を貫通した。

勢いで鏝まで呑み込まれ、お互いの瞳孔の色が分かるほどに接触する。

『…ヤツテクレタナ』

その白銀色の目が細まり、口が歪に吊り上る。

僕も、こんな簡単に終わるとは思っていないぞ。

2・7 いたみ（後書き）

あとがき・解説

変態（+2）

指揮（-2）

描いたイメージを表現し切れないもどかしさ。

最後に。

このような雑作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
ざいます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

2 - 8 せなか（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

2 - 8 せなか

ぼこり、とエヴァンジェリンの形をした精霊が泡立ち、そして一瞬にして形が崩れた。

蒸気が吹き荒れる。

高熱の蒸気ではない。超低温の蒸気。

「ぐ……！！！」

フツノを放棄し、大きく後ろへ飛び退る。

貫いていた白い少女の姿は既に無い。

この身に嫌というほど染み付いた直感。警告。同時に確信！

蒸気が渦巻き物質として具現した。

それは、整然と並ぶ円柱の群れ、群れ、群れ。

恐ろしいほどに透明度が高く、形の整った氷柱の大群だ。

一本一本が人間大。

「磨り潰シテクレル！！！」

号令と共に解き放たれた群れが、我先にと降り注いだ。

野太い風切り音。

そして着弾の衝撃に氷の床が爆ぜ上がり、吹き上がった氷の飛沫にあつという間に視界が塗りつぶされる。

純粹な質量による爆撃。

野太い獣の雄叫びじみた爆撃音に、すぐさま耳が使えなくなった。

「節操なしめ！」

ビームライフルを投影し、ジグザグに回避運動を取りつつホバリング。

翳した手で降りかかる飛沫を防ぎながら、注意深く目を凝らす。精霊本体が見つけられない。

心中に浮かぶのは焦り。

回避しきれず直撃するかもしれないというイメージ。

そんな僕を嘲笑うように、ひらりと爆撃の隙間に羽が見えた。

目でそれを追う。

……追ってしまった。

それは完璧に、完全に、致命的な隙。気づけば押し寄せる氷柱の群れに、思わず息が止まる。

『貴様ノ墓標ダ！』

「死に場所くらい自分で決める！！」

だが、辛うじて体の動きは止めない。

地面スレスレ走るイメージ。

ステップを踏んで床を蹴り、ホバリングの速度を上げる。

直前まで自分がいた場所を抉る氷柱。

恥も外聞も無い。

時に這い蹲り、時に無様に転がって避けて、避けて、避け続ける。

「はあ、はあ、はあ……」

早鐘を打つ心臓が、そろそろ集中力の限界を告げていた。

これほど集中力を磨耗し続けた日はいつ以来だろうか。

しかし限界を感じるなんて、まだ経験が足りていない証拠。

とにかく、一息つきたい。

この状況を打開する方法を探さなければ、危機感に精神が押しつぶされそうだ。

どこか遮蔽物は……と広間の中を見回して見つけた。

いや、忘れていたというべきか。

中央に突き立つ水晶。

『チヨコマカト……！！』

でたらめにビームライフルを射撃する。

当たれば儲け物の牽制でしかなかったにも拘らず、氷柱の豪雨を一本のビームが潜り抜けた瞬間、ぴつたりと僕をマークしていた氷柱たちが微妙にずれた。

「ふっ！」

呼吸を一つ。

思い切り地面を蹴り、高度を僅かに上げて広間の中央の水晶へと

跳んだ。

途中に倒れいていた自動人形の少女を攫って。

「あなた、は……」

「久しぶりだね、お嬢さん」

少女を脇に抱えているという状況のシユールさに奇妙な感慨を覚えつつ、水晶の向こうに再度居並ぶ氷柱の群れに次はどう対処すべきか考える。

一斉に薙ぎ払う事ができればどんなに楽なことか。

ビームライフルは火力が足りないし、近接武器は論外。

その他、思いつく武器はデメリットだらけで使い辛い。

「お、おい貴様！私を盾にするつもりじゃないだろうな!？」

「ふと聞こえてきた声に上を見上げるが、そこには壁しかなかった」

「……握り潰されたいようだな」

「ごめん。男として終わりそうだから本当に勘弁」

頭上には、水晶に礫にされたエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

目のやり場に困ったので、取り合えず視線は逸らしておく。

「おい貴様、私をここから出せ！」

「そこにいた方が安全だと思っね」

「安全だと？私が安全を求めていると？……貴様が何者か知らんが、この闇の福音を舐めるなよ！」

牙を剥いて獰猛に笑うが、残念でした。

どんなに凶暴な獣でも、動けなければ怖くないってもんよ。

おー、背德的背德的。

と、ちゃっかりそんなレア姿を目に焼き付ける僕がいた。

「おやおや、そんなダークでエヴァンジェルな吸血鬼様が、そんなガラス一つ自力で破壊できないなんて驚きだなあ」

「ほほう、私のことを知っているか。知っていながら喧嘩を売るとは良い度胸だな貴様……」

「胸の無い人に胸を褒められてもね。それは傷の舐め合いって言うんだよ」

「よーしよし……貴様、そこから動くなよ。引き裂いてくれる……！八つ裂きにしてくれる……私を出せ……！」

真つ黒いオーラを身に纏いながら暴れるエヴァンジェリン。

おー、怖い怖い。

「あの。私からもお願いします。マスターを……」

控えめに、しかし確固たる意思を感じさせる声が小脇に抱えた少女から発せられた。

自動人形の少女。

絡繰 茶々丸。

懇願するように見上げるその表情に、一瞬だけ被虐心とも言える妖しい衝動に背筋がゾクリと震える。

ああ、あの精霊が一思いにこの子を破壊しなかった気持ちがあんなとなく分かった。

共感してしまった。

そんな自分に自己嫌悪。

頭を冷やす為にも、僕は床を蹴って水晶の陰から飛び出す。

「逃げるな！！大人しくその首を差し出せ！！」

「悪いね、お嬢様。今はあっちのお客様と先約があるのさ！」

水晶の根元めがけ、無数の氷柱が殺到した。

巻き上がる氷塵を潜り抜け、再びホバー移動での回避。

遮蔽物にされた水晶とはいえば、僕が潜んでいた根元を狙った攻撃だった為に、中程に取り残されたエヴァンジェリンに傷一つ無い。

すぐさま離脱したのが功を奏したか。

僕と違つて完璧な不死だから問題無い、と考える一方、やはり見たくない光景は見たくないのだと本音では思う。

ああ、今は頭を切り替えよう。

チラリと振り返る背後。空中に次から次へと際限なく氷柱が生み出される。

元凶たる精霊の姿は、やはり見えない。

「きりが無い！」

ミサイルランチャーもかくやという勢いで背後から射出される凶器。

唸りを上げて飛来する、その唸りが先ほどまでとは比にならない凶悪さを持っていた。

初めは人間大だったそれが、今では樹齢数百年ものの丸太の如き太さにアップグレードしているのだ。

相手の焦れる内心が伝わってくるようだった。

そして僕もまた、一息ついて持ち直した余裕を削り取られていく。唯一の救いは、その質量ゆえに飛来数が少なくなっていることだろうか。

だがしかし、相変わらずの圧倒的な面制圧力であることに変わりはない。

ホバーの途中にステップを挟み、加速と減速のフェイントを織り交せて広間中を駆け巡る。

速度が上がらない為、単純に振り切れないのだ。

「私を投棄してください！私の重量が無くなれば速度を上げられる筈です！」

左脇に抱えた絡繰さんが叫ぶが、僕はそれを無視。

振り向きざまにライフルを射撃。

狙いは氷柱が射出される方角。

偶然にも、それが今まさに僕の進路上に割り込もうとした氷柱の右半分を蒸発させた。

そうか…質量が増している分、狙撃しやすいのは当然か！

バランスを崩した氷柱が僕の左側面を通過する。

絡繰さんに当たると避ける為、案外重いその体を更に抱き寄せ、その場をすぐさま離脱。

「どうしてですか？」

「それは、何故僕が君を守るのか、という問いかい？」

腕の中で絡繰さんが頷く。

一本、二本と、ビームライフルによる射撃で軌道を逸らさせながら、僕は何と答えるべきか考え……。

爆音も凄まじく、長つたらしいセリフは無意味と思い単刀直入に切り出すことにした。

「赤外線センサーみたいな機能で、あの精霊を捉えることはできないか？」

暫く宙に顔を向けていた絡繰さんは、すぐに表情を曇らせて申し訳無さそうに俯く。

「周囲の状況が悪いので、難しいかと思われます。あるいは、その……精霊？でしょうか。そもそも……」

「あの精霊自体に体温というものが存在しないかもしれない、か」
「言われてみれば確かに、額をつき合わせた時に体温らしい体温は感じなかった。」

「僕の五感はいくまで人間の範疇なんだ。人間には捉えられないものを捉える、君の力を借りたいんだよ」

「当初は違う形で力を借りたかったのに。いつだって思うように事は運ばない。」

「貴方を手助けすれば、マスターを救っていただけますか？」

「僕が救うんじゃない。君が救うのさ」

少しの間、瞳を閉じた絡繰さんは、やがてしつかりと頷いた。

「あらゆるセンサーでの索敵を行います。最適化と修復が必要ですので、五分ほど時間をいただけますか？」

「わかった」

「それと……」

何かを言いかけた絡繰さんがまず先に気づいた。

「すぐに上昇を！」

足元。

霜が足元を覆い、靴が凍りつき始めつつある。

靴に巻きつき、今まさに足首へと伸びようとしてた極小の氷の鎖。

「くっ！」

氷柱を巨大化させていたのは、足元から注意を逸らす為の陽動か

！？

動きを封じられるのはまずい。

すぐさま床を蹴り、力づくで鎖を引きちぎって空中へと飛び上がった。

雨あられのように降り注ぐ、大小様々な氷柱。

上昇する際には、どうしても速度の低下が免れない。

そのタイミングを狙われた。

氷柱が群がる！飛来する！

ビームライフルで迎撃するものの、既に数発消費していたライフルは三発も撃つと高温を発生し自壊してしまった。

ライフルを捨て、ビームサーベルを投影する僅かな間。

「危ない！！」

その時には既に眼前にまで氷柱の切っ先が迫っており、サーベルを発動させるも間に合わない。

「ああアああアアあ！？」

容赦なく腹部を貫通された。

脳の許容量を超えた激痛に、体中の筋肉が強制的に硬直。

僕を貫いた氷柱の勢いは止まらず、飛来した速度のまま広間の端まで一直線。

背中から壁に激突した。

氷柱は壁に食い込み、僕の動きを封じる。

だというのに、傷の熱も氷柱の冷たさも何も感じ無い。

完全な思考の空白。

ふわり、ふわりと空を漂うような、漠然とした不安。

「ぐお……っ！！」

食道を逆流し、口から吹き上がった僕自身の血の不味さに意識を取り戻した。

「ご無事ですか!？」

「っ………なんの!！」

早く体の自由を取り戻さなくては!

躊躇する間も惜しい。

ただ無我夢中で思いついた方法を実行する。

それは、ビームサーベルで僕を貫く氷柱、腹から前に見える部分を切断。

そして前へ飛ぶ加速でもって、壁に礫にする楔から強引に脱する。体内に残る氷柱をわざと貫通させるのだ。

体の中から何かがごっそり持っていかれるような、もはや激痛を通り越した感覚に、意識が一瞬の間だけ爆ぜた。

だが、僕は死なない。

死ねない。

体よりも先に意識が修復。

落下速度を調整しつつ着地し、腹部に力が込められないせいで前のめりに倒れこむ。

自分でも驚いたことに、脇に抱えたまま離さなかった絡繰さんを、壁に寄りかからせた。

目を見開き固まっている絡繰さんの頭を一度だけ撫で、今まさに切っ先の向きを変え襲いかからんとする氷柱群の前に這いずり出る。

「残り時間は？」

「あ、あと三分です」

「すまない。ここで防戦する。上手く飛べそうに無い」

なんていったって、上半身と下半身が千切れかけているのだ。

ビームサーベルを右手に。更に、空いた左手にもう一本フツノを

投影。

フツノを支えにして、体を起こした。

壁だ。

壁になるのだ。

全身を、指先から髪の毛一本まで……全てを捧げる。

ゾクリと、この場には相応しくない愉悦に背筋が震えた。

「一本たりとも届かせはしないさ」

震える、震える、震える！

いったい何が、どんな感情が体を震わせているか僕自身理解していない。

唯言える事は、ネガティブな感情は一切無いということ。

「……お名前をお教えいただいてもよろしいでしょうか？」

背後から聞こえる落ち着いた声色に、体の震えが止まる。

水を差された？……いや、むしろ逆に思考が一瞬にしてクリアに。そういえば、この子のことは僕が一方的に知っているだけだった。謹慎の原因を今更ながら思い出し、一瞬迷ったけど、どうせ今更である。

「七瀬みそぎ。七瀬とでも、みそぎとでも呼んでいいよ」

横目に見た絡繰さんは、無表情のまま頷く。

「七瀬様。もうご存知のようですが、私は絡繰 茶々丸と申します。

茶々丸とお気軽に呼び下さい」

「……わかったよ、茶々丸さん」

再度頷いた茶々丸さんは、まっすぐに僕の顔を見上げる。

その瞳から、彼女の意思が流れ込んでくるようだった。

とても重厚な、鉄の意思。

「お願いがございます。私に武器を与えていただけませんかでしょうか？」

「それは……でも、君には索敵を優先して欲しい」

「複数の作業を同時にこなせないほど、私の性能は安くございませ
ん」

言つて、茶々丸さんは左手を伸ばす。
指の一本一本を丁寧^{テイジン}に動かして見せる。

「私に……引金を引かせてください」

その言葉で、その表情で、彼女が何を望んでいるのか、何を求めているのかが分かった。

それは確固たる彼女の意思。

しかもそれは、間違いなく感情が起因している。

「……分かった」

自動人形が宿す感情。

これほど胸が熱くなることがあるだろうか！？

故に、拒むという選択肢は僕に存在しない。

彼女に相応しいアーティファクトを作り、預けようじゃないか。

「出て来い」

体中を廻る一瞬の電撃。

視界を覆い尽くした一瞬の閃光。

手中に現れたのは、綺麗に折りたたまれた服が一式。

微妙に形状が異なるものの、僕の記憶に残る一着のメイド服だ。

「^{ザインフラ}在るべき婦人」

完全奉仕型のメイド（自動人形）のみが着用を許されるメイド服。スカートの中は秘密の花園……夢がいっぱい！

ただしドイツ製に限る。

茶々丸さんは左手一本で器用に着ていたミニスカート型のメイド服を脱ぎ、これまた器用に左手一本で僕が手渡したメイド服を着込んだ。

装飾のネクタイも、カチューシャも完璧に整っている。

その姿に揺らぎは無い。

そして、おもむろにスカートの中から取り出したのは黒い銃身の

MG42機関銃。

片手で大丈夫だろうかと一瞬疑問が浮かぶが、そこは流石自動人形。

軽々と取り回している。

「迎撃準備整いました。掃射いたしますので、射線に入るのだけはくれぐれもご注意下さい」

「分かってる。頼りにさせてもらおうよ」

傷口が修復しつつあり、ようやく立ち上がれるようになった。

空気を呼んで腹筋の修復が最優先に行われたのか、下半身、足への力の伝播も問題ない。

しかし、逃げ回るにはもう遅すぎた。

壁を背にする僕達を、180度取り囲む氷柱の軍勢。

足元を覆おうとする靄をビームサーベルで追い払い、深呼吸を一つ。

「絶望的って程じゃないな」

「何故でしょうか？」

「味方がいるってことさ」

2・8 せなか（後書き）

あとがき・解説

続きは明日の予定です。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
ざいます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。
どうか次話もよろしくお願いいたします。

2 - 9 せなかに（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

『無益ナ時間八終ワリダ害虫！二匹纏メテ潰レルガヨイ！』

「……声紋データ、反響指数サンプリング完了」

「頼もしいね」

氷柱の軍勢が解き放たれた。

飛来する唸り音が、未だ距離があるにも関わらず間近に聞こえる。杖代わりにしていたフツノを床に突き立て、代わりにもう一本ビームサーベルを投影。

二刀流の心得なんて無い……ぶつつけ本番だ。

「敵弾急速接近。迎撃します！」

黒い獣の咆哮が飛来する軍勢の雄叫びを迎え撃った。

黒い銃身から放たれる数十発が、数百発が、数千発が！

弾幕には弾幕で対抗。

大小問わず、射線上の氷柱を容赦なく削り破碎していく。

しかし、いかに高度なＡＩがターゲットイングに優れているとはい

え、銃は一丁しか無いのだ。

弾丸の幕を突破してくる氷柱、それを僕が抑える！

「おおおお！！」

気合を入れる七瀬みそぎ。

背に誰かを守る……いつも夢見たシチュエーションじゃないか！
床を蹴る。

加速！加速！加速！

身軽になったこの体に、速度が制限されることは最早無い！

茶々丸さんの攻撃範囲を見極め、そこから抜け出した氷柱をすれ
違いざまに一閃。

勢いそのままに回転し、もう片方のサーベルで更に一閃。

僕目掛けて氷柱が殺到しようとするが、その前に後方から襲い掛
かる弾丸によって削り崩される。

大きく膨れ上がる氷の飛沫。

加熱するこの体には丁度いい。

「ははっ……！」

楽しい、楽しいじゃないか……！

『何故ダ！何故攻メキレヌ……！』

三桁を超える氷柱の矢を放ちながら、しかし一向に敵を殲滅できないことに白いエヴァンジェリンは歯噛みしていた。

壁際に追い詰めた筈の二人は、しかし一向に崩れる気配を見せない。

圧倒的な対軍魔法による飽和攻撃。

太古の昔、大地を埋め尽くす程の軍勢をも一人で相手取った彼女にとって、これは不可解であり不愉快、侮辱以外の何者でもなかった。

（許サレヌ！許サレヌ！許サレヌ！）

『数百年ノ歲月ヲ小娘ノ中デ過ゴシ、ヨウヤク魔力ノ芳醇ナ土地デ解放サレタノダ』

感情の昂ぶりに呼応して翼から魔力が迸り、空气中の水蒸気が凝固して拳大の氷の破片が生み出される。

『カツテノ栄光ヲ取り戻ス為ニ……！』

無数に、無数に。

『肉片一ツ残スナ……！』

連弾。

壁際の二人へ向けての一点集中砲火。

だが……。

『イナイ……？』

見るも無残に破壊の爪痕が残る広間の一角には、既に二人の姿は無かった。

すぐさまこの繭の広間中に広げた感覚に問いかける。

反応があった。

一直線に天頂を目指し飛行する影。

『逃ガサヌ！』

広間を覆い尽くす蒸気を影が突破した瞬間、残る破片を一齐に差し向けた。

散弾。

しかし、二人まとめて挽肉に、との彼女の目論見はあっけなく狂わされる。

それは、矢を全て防いだ盾。

否。それは盾とは呼べない筈のもの。

白と黒でデザインされた、ごく一般的な生活用具だ。

傘…長い支柱を持つ、ビーチパラソル。

『何ダソレハ！？ソナナ物デ……！！』

傘が閉じた先。白いエヴァンジェリンは、男に背負われた人形がはつきりと自分に視線を向けていることに気づく。

「七瀬様、十時の方向、仰角十三度、距離七十」

「墮ちろ！！」

それが来た。

幾重にも張り巡らされた魔法障壁のことごとくを容易に突破する光線が。

『グアアアアアアアア！！』

翼を閉じ、魔力を通すことで強固な耐火防御となるのだが、それを実行するよりも男の射撃が速かった。

翼の一つが撃ち抜かれる。

体に纏い、溶け込ませ認識を阻害させていた蒸気から転がり出るように、白いエヴァンジェリンは墜落した。

ようやく姿を見せた精霊に追撃でビームライフルの銃口を向けるが、精霊は墜落する姿勢のまま再び蒸気を爆発させて姿を消した。

「茶々丸さん！」

元々着ていたメイド服で背中に括りつけられた彼女は、ビーチパラソルをスカートの中に戻し、再び機関銃を取り出す。

「気温の変動を確認。不可解な気流が発生している地点があります。

四時の方向。俯角三六度。距離百二十」

そのナビゲートに、空軍で鍛えた体が条件反射的に動く。射撃。

蒸気を切り裂いたビームが、更に濃い蒸気に直撃。

「貴様！！」

ビームは弾かれるが、蒸気が晴れて再度精霊が姿を現す。

やはり、あの翼での防御は硬い。ビームライフルでは無理だ。

MG42機関銃では魔法障壁に阻まれてびくともしない。

「茶々丸さん。手筈どおりに」

「畏まりました」

ならば、最大火力を叩き込むまで。

茶々丸さんのナビゲートの精度は確かめた。

後は…そう、確実に当てられる状況を整える必要がある。

チャンスは一度きりと言っても良い。

「生き汚イ害虫ガ…！凶二乗ルデナイ！！」

翼を大きく広げた精霊から広がる白光の爆発。

迫り来る光。

だが、精霊が空中に静止している今が最大のチャンスだ。

「突っ込む！行けるね！？」

「勿論です」

茶々丸さんとを結ぶ即席の縄を解き、眼前に抱く。

左手を腰に回し、彼女もまた機関銃を手放し左手を僕の腰に回した。

「跳びます!!」

その言葉と共に、茶々丸さんの肩甲骨部分が展開。現れたのはブースター用のノズル。

炎を湛えたそれが、一気に噴射。

僕自身の加速と合わさり、一瞬にして精霊目掛け白い光の中に突っ込んだ。

いつか味わった超高温の白光ではない。

対極。

超低温の世界。

温度調節を行ってくれているのであろう。

抱きしめた茶々丸さんの体から伝わる熱で、辛うじて動ける。

とつくに凍り付いていたビームライフルを捨て、取り出すのは一枚のコイン。

『ドウィウツモリダ?……マダ動ケルト言ウノカ!?!』

右手を差し出す。

握り締めたコインから光が溢れた。

放電の開始。

音を立てて凍りついた指が、放電のショックでひび割れていくのが分かる。

指だけでない。精霊に近づくに連れて、体が徐々に……やがて加度的に感覚を失っていく。

『何ダ……何ナノダ貴様ハ!?来ルナ!!近寄ルナ!!』

茶々丸さんのブースターから光が途絶える。

見れば、僕を胸の中で見上げたまま動きを止めていた。

その顔が徐々に白く凍り付いてゆく。

だが、だが微かに口が動いたのを僕は見た。

「任せろ」

それに頷き返す。

加速は失われた。しかし、これだけ近づけば十分。

右手から発せられた雷の光が蛇のようにのた打ち回り、そして吼える。

雷鳴。

解放しろと！唯目の前に！目の前に立ち塞がるもの全てを破碎せよ！！

とつくに凍り付いていた耳でなく、その慟哭は頭に直接響く。

白く、音の失われた世界の中で……。

幾重もの魔法の障壁を突き破り、一筋の光が白い少女の形をした精霊を両断した。

地面に激突した衝撃で、意識を取り戻した。

辛うじて、頭が凍りつき破碎するなんて悪夢は避けられらしい。

……いや、一度破碎して元に戻っただけかもしれないけれど。

「あ………れ？」

体を起こそうとするが、右手が動かない。

左手は茶々丸さんを抱きかかえたままであり、加えて言うならば

凍りついて一体化していた。

右手を見れば……。

やっぱりそうだよな。

丸々無くなっている。

しかし、早く動けるようにならないと不味い。

さつきから地響きがしているのだ。

上からはパラパラと氷の破片が引っ切り無しに降ってくる。

お約束、というのだろうか。
通信機で救援を呼ぼうとするが、そもそも通信機が無くなっているじゃないか。

いつから無くなっていたのか分からないあたり、自分の間抜けさ加減にうんざりする。

とにかく飛び立とうと、体を起こすべく四苦八苦していると頭上に嫌な……とても嫌なものを感じた。

咄嗟に横へ転がる。

間一髪。

僕の頭があつた場所に氷柱が突き刺さった。

『ツクツク……気二喰ワヌ』

上空には、下半身だけでなく上半身の大半を失い、翼も辛うじて一枚だけ残った精霊が浮いていた。

仕留め切れなかったのか！？

左手を！左手が動きさえすれば！！

驚愕と焦りで頭が空回りする僕を見下ろし、精霊は嘲笑うように口を歪に吊り上げた。

『マダダ、マダ妾二八魔力ヲ搾り取ル家畜ガ……アツ！？』

しかし、その精霊が驚愕に目を見開き、やがてその表情が憤怒に染まった。

精霊の、エヴァンジェリンと瓜二つの顔。

その顔の真ん中から生える鋭い爪の手。

『家……畜……！！』

「家畜は貴様だろう？私がいままで飼ってやっていたのだから。飼いに主に噛み付く家畜には仕置きが必要だよなあ？」

愉悦と屈辱に表情を歪める吸血鬼が、精霊の背後に浮いていた。

吸血鬼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルはチラリと僕に目を向けると、つまらなそうに鼻を鳴らす。

「だが残念だ。私の従者が仕置きは既にやってしまったらしい。本当に、できた従者だよ。それに……こうして貴様に止めを刺せる機

会を残してくれたのだからなあ！」

エヴァンジェリンは空いた片方の手で精霊の羽を切り飛ばすと、顔に突き刺さったままの手を振りかぶり、地面へと叩きつけた。

そして精霊の顔を地面へと押し付け、鷲掴みにするその手へ力を込めてゆく。

『マタシテモ……妾ガ人間ニ敗北スルト言ウノカ!!』

「塵一つ残さず消えろ!!」

エヴァンジェリンに握りつぶされた精霊の頭は、光の粒子となって虚空に消えた。

「さて、次は貴様の番だなあ？」

ニヤリと、素晴らしいくらいに生き生きとした表情でエヴァンジェリンが頭上に立つ。

仁王立ち。

「い、いやあ。そうしてもらえるのは嬉しいんだけどね。早く脱出しないと危ないと思うんだ」

本格的に、この繭が崩れ始めている。

冷たい汗がタラリと額を流れ落ちた。

「安心しろ。茶々丸を救ってくれた礼がある」

エヴァンジェリンは更に邪悪に笑い……。

「貴様はここで安らかに眠らせてやるっ」

「うわーい！嬉しいなー!!」

そうだろう、そうだろうと満足そうに笑うエヴァンジェリンは気づいていないのだろうか。

仁王立ち。

頭上に。

誰が？

全裸が。

「あー、でももうちょっと育ってたほうが僕としては……もっと嬉しいかな」

「何の話……き、キキキサマ、クロス!!」
即頭部にサッカーボールキックを貰い、今度こそ流石に意識を手
放した。

2・9 せなかに（後書き）

あとがき・解説

後日談が残っていますが、これにて原作でのエヴァンジェリン編は終わりです。

やはり、全然表現力が足りていないのが執筆中の悩み…。

映像作品と違ってスピード感や爽快感、重厚感を文章で表現するのが凄まじくきつかったです。

次話は、おまけの予定。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

2 - 終 あんやく(前書き)

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま!」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

2 - 終 あんやぐ

「……つまり、あれは全てエヴァンジェリンの仕業で間違いないと言っのじゃな？」

「彼女自身もそう言っているのです、そうなのでございましょう。ナセ卿の報告でもそうなっております」

むう、と重々しく唸り、ソファーに深く体を沈めるのは近衛 近右衛門。

学園都市の中心たる麻帆良学園の学園長であり、麻帆良に拠点を置く関東魔法協会の理事。

それに相対するのは、余裕の表情でカップを優雅に傾けるスーツ姿の老紳士。

表の顔はヘラス帝国外務庁外務官。しかしその実体はヘラス帝国軍陸軍情報局の人物。

諜報員である。

特徴的な長い頭と、立派な鹿の角を持つ頭の二人が、締め切られた学園長室で顔を突き合わせていた。

「しかし、麻帆良への侵入者の対応を拒否したそなた達が、何故内側で起こった事態の解決に乗り出したのかのう？」

「いかに協力関係にあるとはいえ、我々は旧世界では新参者。安易にこちらの勢力と事を構えることはできないのでございます。加えて、あのままでは一般人が被害を被るとの判断がございました」

「儂等が倒れ、この麻帆良が陥落すればそちらも困るのではないのかね？」

「そうならないと私共は確信しておりますので。いえ、これは信頼していると言ってもよいでしょう。いざと言う時は、先だつての夜のようにお力を貸す所存です」

白々しい、と近右衛門は内心舌を打つ。

あの大停電の夜に発生した異変は全て、エヴァンジェリン・A・

K・マクダウエルの仕業であったと、事態に介入したヘラス帝国の外務庁より正式な形で報告があった。

ご丁寧に、エヴァンジェリンと思わしき少女が帝国の外務官に攻撃を加える短い映像と共に。

そして、当のエヴァンジェリンもまた自分がやったのだと言っている。

おかげで、ここ麻帆良の魔法使いからはエヴァンジェリンの排斥をとの声が多数出る始末。

更に頭の痛い事に、関東魔法協会のバックボーンであるメガロメセンブリアからは身柄を本国へ移送せよとの通告が非公式に出ていた。

皮肉にも、帝国が外務官への過失を理由に身柄の引渡し要求を突きつけている事から、三竦みの絶妙なバランスが形成され、エヴァンジェリンには自宅謹慎との学則に則った罰しか与えられていない。

近右衛門は思う。

エヴァンジェリンを快く思っていない魔法先生達が、危機感を募らせて排斥に動くのは分かる。

だが、魔法世界の二大国家、メガロメセンブリアとヘラス帝国の要求は不可解。

一見、ヘラス帝国の要求は理に適っているように思えるが、しかし要求とは打って変わって特に動きが見られないのだ。

と言うか、被害者である筈の外務官が気軽に当のエヴァンジェリンと接触している。

よほど視野が狭くなければ、帝国の要求は茶番だと分かるというもの。

恐らく、エヴァンジェリンをこの地に留めて置く為の牽制なのだろう。

何の為か？

恐らく、エヴァンジェリンと帝国の間で何らかの取引があったと近右衛門は考えている。

対するメガロメセンブリア。

排斥しろとも、拘束しろとも言うのではなく、移送。

しかも非公式に。

これもまた、よほど視野が狭くなければ裏がありますと言わんばかりである。

エヴァンジェリンにかけられた呪いを理由に突っぱねてはいるが、水面下での推移。裏での暗闘。

あの季節がまるつきり変わってしまった現象は何だったのか。橋を丸ごと呑み込むほど巨大な繭のような物体は？

一度復旧した筈の対魔結界発生装置が何故ダウンしたのか。

前の二つはエヴァンジェリンの仕業と一応は説明されているが、結界装置の件は不可解なままである。

自身が真実に辿り着けないもどかしさに、近右衛門は内心深く溜息を吐かざるを得なかった。

自分が巻いた種：ネギ少年への試練のつもりが、生えてきた植物がとんだ食虫植物。

「まだ納得なさららない顔でございますな」

「いや……あの夜、結界が再度落ちた後に今までにない規模で鬼が召喚され、侵攻を受けたのじゃ。あれが無ければ農達の手だけで事態を収め、貴公達の手は煩わさずに済んだのにと考えると、残念でなう」

「ほう、相当な手練がいたのでございますな。しかしそれを凌ぎきったのです。私共の信頼は間違っていないかった」

「フオフオフオ、そう言ってもらえると嬉しいわい」

お互い笑顔を浮かべるが、少なくとも近右衛門は内心で笑ってないなかった。

『やあみんなこんばんは。ギャラクシーマホラジオの時間だ』

『元気になっていたかい？僕はちよつと風邪気味だ』

『体の頑丈さが取り得ただけどき、流星にこの前の大停電の夜は参ったよ』

『雪だよ、雪。異常気象ここに極まれりつてね』

（おい！いつまで下らん事を話してる！早くしろ！！）

『おおつと！そうだったそうだった。みんな今日は驚けよ』

『なんと！！この番組が放送開始して以来始めてのゲストの登場だ！！』

（な、なんか緊張してきたぞ！）

（ああ…輝いています。マスター）

『誰かって？聞いて驚け見て笑え！！』

（笑うな！！）

『アイタタタ…机の脚で脛打っちゃったよ。僕も興奮してるのさ』

『番組初ゲストは何と！あの麻帆良学園女子中等部の永遠のロリータアイドル！バックベアード様もまたいで通るこの人だ！！』

（なんだその紹介は！誰だバックベアードって！？）

（このロリコンどもめ！！じゃなくて、ほら、自己紹介、自己紹介）

（そ、そうだな！）

（マスター、ファイトです）

『ご、ごほん……エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ』

（カフ！カフを上げて！！）

（し、しまった！やり直し！やり直させる！！）

『失礼します。麻帆良学園中等部3年A組10番、絡繰 茶々丸です。得意技はロケットパンチです。胸からミサイルは出ません』

『ちや、茶々丸うー！？』

『はい！と言うわけで、カット無し、ノー編集でお届けするよ』

『ま、待て！エヴァンジェリンだ！エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ！！今日のゲストは私だー！！』

2 - 終 あんやく(後書き)

あとがき・解説

おまけを投稿する予定でしたが、物語の構成を見直した結果、2を終わらせてからの方が良さそうでしたので、予定変更しました。前話の後日談は3に組み込み。そのせいで、いつもより短い内容に。

次こそは、おまけ話の投稿となります。

…ラジオのシーン、誰がどのセリフか分り難くはないでしょうか？
最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
ざいます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。
どうか次話もよろしく願いいたします。

幕間 けいおん？（前書き）

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

幕間 けいおん？

麻帆良中の桜が開花を迎え桃色一色に染まっている頃。

やれ出会いの季節だ、高校デビューだ、大学デビューだ新歓だと空気が甘ったるい気がしてビルの中に閉じこもっていた。

いつもどおりの僕である。

春眠暁を覚えやがらないので、とびつきり濃く入れたコーヒ一片手にラジオの原稿と睨めっこしていると、ドタバタといつものにも増して賑やかな足音が聞こえてきた。

「助けてミソにゃ〜ん！」

「どうしたんだい桜子くん？」

部屋に飛び込んだきたのは桜子。

軽い身のこなしで僕の座るソファアの背もたれを飛び越え、ストンと隣に収まる。

そして身を乗り出すようにして僕を見上げる顔は、走って来た為だろう。僅かに紅潮していた。

何か急ぎの用事だろうか。

「三階に空いてるスタジオあったよね？」

「ああ…あるね。完璧に物置化しちゃってるけど」

コントロール・ルームとブースが備わった、正真正銘録音スタジオなのだけど…正直、一部屋あれば十分なのだ。

二部屋目のそこは、取り合えず買ってみた家電等を積んでいた筈「お願いっ！貸して欲しいの！」

いつの間にかソファアの上に正座した桜子は、手を合わせて頭を下げる。

正直、すぐに了承しようとした僕だが、その真剣な様子に事情が気になった。

まさか、この二階の生活スペースを自由に使っている桜子が今更自室を欲しがるとは思えないし。

訂正。

円嬢や美砂嬢も気ままに使っているので、プライベート空間が欲しくなるかもしれない。

おかしいな。僕の住まいの筈なんだけど、いつの間にアメリカのホームドラマみたいな空間になってしまったのだろうか。

「いいけど、何に使うんだ？」

「へへへ 実は今年の麻帆良祭で、バンドのライブを開くことになりまして」

「バンド？ライブ？」

「にゃっはは〜！その名も『でこびんロケット』！！」

ははあ、話が見えてきたぞ。

「練習場所として使いたいと？」

「うん。音楽室は部活で使われてるし、スタジオはお金がかかったりやうし……だめ？」

先に断っておく。

先だって述べたように、僕は元々了承するつもりだったし、なにより桜子に頼られるならばなんでもしてあげる。

だから。

だから！

僕は決して桜子の上目遣いにやられた訳ではないのだ！！

「駄目な筈無いだろ。使っても構わないよ」

「ありがとー！ミソにゃん！！」

よほど嬉しかったのか、躊躇無く飛び込んできた桜子を抱きとめる。

おお、桜子よ。そんなに僕を再起不能にしたいのか。

「明日、皆を連れて来るね。お掃除と片付けと準備しなくちゃ！」
取り合えず、流れる鼻血をこっそり拭いた。

「ミソにゃ〜ん。来たよ〜」

物置化した防音室で荷物の仕分を準備していると、入り口から桜子の声が聞こえてきた。

半ばバリケードじみたダンボールの壁から顔を出すと、部屋の入り口に桜子をはじめとしたいつもの三人娘がこちらに手を振っている。

「おー。すぐそっちに行くよ」

ダンボールの波を掻き分け、掻き分け。

ようやく脱出に成功すると、桜子、円嬢、美砂嬢、そしてもう一人…見覚えの無い女の子がいた。

「いや〜、七瀬さんのお陰でスタジオ代が浮くわ〜」

「でも…これ、散らかってるってレベルじゃないわよ」

部屋の中を嬉々として覗き込む円嬢と美砂嬢は置いておき、初対面であろう女の子に向き合う。

人間、第一印象が大事だね。

「初めましてかな？桜子達の友人の七瀬みそぎです。七瀬とでも、みそぎとでも呼んでください」

その女の子はアワアワときこちなくお辞儀して、照れたようにはにかむ。

「は、は、初めまして！ウチ、和泉 亜子います！ど、どうもこの度はお世話になりう〜！？」

「だ、大丈夫？」

舌を嚙んだらしい。傍から見てもクリーンヒットだった。

「う…うう、ご、ご心配なく！」

面白い子だなあ。

思いつきり目に涙を溜めて気丈に振舞うその姿に、失礼だけどそう思ってしまった。

人間、第一印象が大事なのだ。

「亜子は我がでこぴんロケットのベーストなのだー！」
そんな亜子嬢の肩を抱いて、何故か桜子が自慢げに胸を張る。
なるほど、ということとは彼女が背負っているのがギターケースと
いうやつか。

ロケットランチャーだったり、機関銃が内蔵されているという、
あの伝説の。

あ、いや、ベースだから違う？

少々不躰に見つめてしまっていたらしい。

亜子嬢は桜子の背中に隠れてしまった。

気まずい空気が流れるのもあれなので、話題を変えてみることに。

「そういつ桜子は何を演奏するんだ？」

「えへん！私こそは…ヴォーカルの椎名 桜子！」

ドーン！とその背後に爆発が見えた気がした。

可愛らしく決めポーズ。

綺羅星

それを合図にするかのように、部屋を物色していた二人が跳んで
来る。

「ギター！柿崎 美砂！」

ドーン！

「ドラム！釘宮 円！」

ドーン！

「そして！」

と三人娘の声が入り、視線が呆気に獲られていた亜子嬢に視線
が集中。

「へっ！？う、ウチもやらなあかんの？」

「そして！」

と再び三人が入る。

なんとというプレッシャー！？見ているだけの僕も何故かワクワク
してきたゾ！

無茶振りされている方は堪らないだろうけど。

観客たる僕と目が合った亜子嬢は、真っ赤に染まった顔で恐る恐る三人を做って決めポーズ。

「べ、ベース…和泉 亜子…」

ドーン！

消え入りそうな声。そして、その頭からは今にも煙を吹きそうだった。

「四人揃って！」

「へ？まだあんの！？」

『でこぴんロケット！！』

ドーーーーーン！！

四人の背後で、四色の爆煙が弾けた。

「さて、じゃあ早速片づけから始めようか」

動きやすい服装、ジャージに着替えた三人娘を前に今回の作戦の開始を宣言。

亜子嬢はセルフ体温でのぼせて目を回してしまったので、戦線離脱。二階に寝かせている。

「でもこれだけの荷物、どこに運ばばいいのよ」

円嬢がぼんぼんと叩くダンボール箱は、未開封の洗濯機。

家電屋さんで物色中は、「便利そうだ！」と高いテンションで買ってしまうのだが、それが家に届いた途端、今までのもので十分だと思いい結局開封せずに保管してしまう。

ココネにリサイクルショップで売るなりしると突付かれるが、いつか今使っているものが壊れた時に、すぐ交換できると思うと処分に踏み出せない。

そんな優柔不断さが生み出した産物の山だ。

「一階に置こう。ビニールシートが引いてあるから、その上に」

大きく重い家電の箱は僕が運び出すことにし、サポートとして付き添う桜子が寂れたままの一階の空間を見て寂しそうに呟く。

「みんな来なくなっちゃったね…」

言わずもがな。このビルに集っていた猫達の事である。

人の気配が絶えない場所なので、居辛くなったのだろう。

「悪いことをしたよ…」

背負っていた冷蔵庫（未開封）をビニールシートの上に置き、配置を整える。

「桜子のお気に入りの場所だったのに」

思えば、僕は居座り強盗のようなものだ。

彼ら猫達からすれば。

こうなることは半ば予想できていた。できていたからこそ、申し訳なさを余計に感じてしまう。

「私はいんだよ！ミソにゃんを連れてきたのは私だし、今はミソにゃんがここにいてくれるし」

後ろに手を組んだ桜子は、照れたように笑った。

「それに、あの子達は別のいい場所見つけたんでしょ？」

「うん。小さな公園だ。近くに教会があつて、なかなか静かな雰囲気の良い場所だよ」

「へへ、いいにゃへ。今度行つていいかな？」

「勿論。案内するよ」

目をキラキラと輝かせて幸せそうに笑う桜子に、自分グッジョブ！と心の中で拍手喝采。

この笑顔を見せられると、僕も自然とテンションが上がってくるのだ。

「はいはい、そこのお二人さん。片付ける荷物はまだまだ残ってるんだからね！」

声に振り向けば、オープンレンジの箱がえっちらおっちら一階に降りてきた所だった。

「く、くぎみーが喋った!？」

「ちょっと待ちなさい桜子！そこは『箱が喋った!？』でしょ!？それと、くぎみー言うな!」

「にやはははは！間違えちゃった」
上半身を覆い隠すほどの箱を、円嬢は軽々と抱えてやって来る。
そして僕に手渡されるが、決して軽くは無い。
「これくらい、人生の重みと比べればなんとも無いわ」
「わ、またくぎみーが変なテレビの影響受けてる」
「だから、くぎみー言うなと…」

スタジオもすっかり片付き、打ち上げと称して二階のリビングでお菓子やジュースを広げてちよつとしたパーティーが始まっていた。アルコールはもちろん入っていない筈なのだが、自分達専用のスタジオが手に入って嬉しいのか、妙に全員テンションが高い。

唯一人、亜子嬢は気まずそうにしているのだが。

「うう、うち途中からしか手伝えへんかった」

「気にしなさんな。せつかくのバンドの門出なんだからさ」

「楽しまなきゃ損というものさ。」

「そうそう！というわけで、ここはひとつゲームで盛り上がるー！」
と、桜子が持ち出したのはジエンガ。

ただし、僕の知るジエンガとは明らかに違う。

それは…ピンク。

パッケージからして危険な匂いが漂ってくるピンク。

そう、パッケージにはこう書かれているのだ。

『ラヴ・ジエンガ』と。

「ちょ、ちょーつと桜子？そいつは危険な感じがヒシヒシと伝わってくるんですが！？」

「面白そうだったから買って見たの」

そう言っつて桜子はパッケージを開封し、テーブルの上にピンクと

白のブロックを積み上げる。

「ブロック一つ一つにゲームが書かれていて、ブロックを抜いた人はそのゲーム内容に従わないといけないんだって」

「へー、面白そうね。ためしに一つ引いてみていい？」

美砂嬢は興味津々といった様子で、中間のブロックを一つ引き抜いた。

「えっと……？『右隣の人の耳に吐息』だって」

全員の視線が、美砂嬢の右隣に注がれる。

なんというか、デジャヴだ。

「へ？う、ウチ？そ、そんな女の子同士やからって、そんなんだメやって！」

逃げ出そうとした亜子嬢を驚くほど素早く組み伏せた美砂嬢は、ゆっくりとその耳元に顔を近づけ……。

「……ふっ」

「ひゃああ！？」

一瞬で、亜子嬢の顔は茹った。快感からか、妙に色っぽい。

なんというか、健全な青少年には見せてはいけない光景。

残る僕を含めた三人は、その光景に釘付け。

なんというか、シヨッキングだった。

これが、ピンク色の空気か、と。

「こ、これは……男の僕がいたらやばそうだから、席外すね！」

僕が立ち上がると、タイミングを同じくして右隣の円嬢も立ち上がる。

「あ、暑いな。ちょっと外の空気吸ってくるわね！」

しかし、走り出そうとした僕等の首根っこを、がっしりと引き止める手があった。

振り返れば、直視できないほど眩い笑顔の桜子。

「三人だけじゃ楽しめないよ」

「え！ウチ参加人数に入っとるん！？」

「桜子？女性同士ならまだ許せそうな内容だと思っよ、うん。でも

僕は正真正銘の異性であって…」

「じゃあ、私が引きまゝす！」

「桜子さあん!?!」

桜子が僕の説得に耳を貸す間もなく、ブロックを一つ引き抜いた。ドクドクと不安と期待で高鳴る心臓音。

桜子の手から解放され、逃げようと思えば逃げられるにも関わらず、足は動かなかった。

僕も…ああ言ってはいたが、健全な男なのだ。興奮もすれば期待もする！

そして同様に、円嬢も年頃の女の子と言っことなのだろう…視線が桜子の引いたピンクのブロックに釘付け。

「なにになに?」ひとり1つHな言葉を言う『」

その瞬間、僕と円嬢は計ったようにアイコンタクト。

お互いぴったりのタイミングで、傍にあった武器を引き抜く。

円嬢はポツキーを。そして僕はプリッツを。

「来たかい、円！」

「人が、安心して眠る為には！」

打ち合わさったポツキーとプリッツが火花を散らす！

真正面から向かい合った円は、恐ろしいほど真剣だった。

恐らく僕もそうなのだろう。

なぜならば、人生において黒歴史に刻まれかねない罰ゲームは、全力で勘弁なのである。

「戦いの中で、人は己の中に闘争本能を甦らせる！」

「それが動物というのでしょうか、人類は歴史を重ねているのよ?」

鏢迫り合い。

仕切りなおすと、お互い同時のタイミングでバックステップ。距離を取る。

そして、改めて手にプリッツを構えなおした。

突然の奇行に、呆気にとられている亜子嬢。ニヤニヤと面白そうに眺める美砂嬢。そして、目を輝かせて観戦する桜子。

再び、円とアイコンタクト。

(このまま桜子の気を逸らせれば)

(やってやるわよ!)

「ふははははっ! それでいい。我らの闘争本能に赴くままにグリコ同士のエネルギーを使い切れば、僕らの食わず嫌いは治るかもしれないぞ?」

「そういうものか!」

プリッツを振りかぶり、踏み込みと同時に兜割り。

しかし、それはもう一本ポツキーを引き抜いた円の二刀に受け止められた。

「戦うと元気になるなあ、円。チョコを意識するから、歯で削ることが実感できる!」

「その先にあるものが味気ないから、プリッツには様々な味が登場しました!」

ポツキーの一刀が、僕の口を目掛けて突き出される。

それを、首を捻って回避。

体を回転させ、プリッツを横薙ぎに振るうが、それもまたポツキーに受け止められた。

「違う! チョコを凌ぐ人気を出す為には、万人に受け入れられる味を模索せねばならんから開発された!」

「自分勝手な解釈をするな!」

払われたポツキーを受け流し、プリッツを突き出すと円は躊躇無くそれを噛み砕いた。

「貴様は食しているぞ?」

「!? あなたが差し出したからでしょ!」

美砂嬢が投げ渡したプリッツを受け取る。

そしてポツキーに叩きつけ、動きが止まったその隙に中程まで食べた。

「私は人間だ。チョコが苦手のままというわけにはいかん」

「戦いの歴史（キノコの山とタケノコの里的な）は、繰り返しませません！」

「もう一度食べさせられるか？この七瀬みそぎに！！チョコの為に戦う貴様なぞに、この私は倒せん！！」

「倒す……倒します！！」

上手く打ち合わされたプリッツがいなされ、僕の体勢も崩される。急いでプリッツを引き戻し、円の口を狙うが…。

「っ！？」

「遅いつ！」

それよりも先にポッキーが口元に迫っていた。

容赦なく二本のポッキーが口に突っ込まれるが、僕のプリッツもまた円の口に含まれた。

「純粹に味を楽しむ者こそは！！」

「チョコを捨てず戦える者には！！」

二本という数の利。思わずポッキーを齧ってしまう。

「お、のーれー！！」

床に倒れ、死んだフリをする僕と円二人を見下ろし、桜子は笑顔で言う。

「次はミソにゃんが引く番ね！」

- - - - - おまけのおまけ - - - - -
- - - - -

主人公紹介

なまえ：ナナセミソギ

ぶんるい：ゆかうえポケモン

おもなせいそくち：はいびる

いつでも どこでも ゆかのうえに

たおれていることが おおい。

ほかのぽけもんにも やられているからだといふ。

幕間 けいおん？（後書き）

あとがき・解説

活動報告に書いていた内容とは多少異なってしまいましたが、本編とは（あんまり）関係の無い日常の一幕。

…日常？

春休み中の一幕です。

あと、関西弁ですが、筆者は分りません。もし間違えていたらご教授ください。

更に、他作品を見習って主人公紹介を付けてみました。

……あれ？何か間違いました？

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

3 - 1 じゅんぴ (前書き)

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

3 - 1 じゅんぴ

『揺り籠計画、じゃな』

廃ビルの最上階である四階。

一階同様リフォームされておらず、コンクリートむき出しの壁や床、天井、柱。そんな殺風景な部屋の一番奥に、昭和臭漂うブラウン管テレビが設置されている。

「というか、僕が設置した。」

画面の向こうには、フードを目深に被った少年。プロフェッサー・フィリウス。

そして、テレビに直面する形で置かれたテーブル、そしてソファに腰掛けるのは長い金髪を優雅に広げる少女。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

二人が見た目通りの少年少女であるかは…まあ、あり得ないわけだけ。

「私はガキのお守りなんかやらんぞ」

『お主がお守りされているではないか』

と、フィリウスさんの視線がエヴァンジェリンの後ろに控える茶丸丸さんを見る。

主をからかわれ、反論でもするかと思われた彼女は、むしろ嬉しそうにエヴァンジェリンを見つめていた。

本人は否定するかもしれないが、その口元は確かに微笑を浮かべているのだ。

「戯言はいい！…で、それはどんな計画なんだ？」

『神の復活を目指した計画よ。処女の体に遺物を植え付け母体とする…だったかのう』

その言葉を聞いた瞬間、エヴァンジェリンの表情が険しくなった。ギリギリと齒軋りが今にも聞こえてきそうである。

「私が吸血鬼化した原因がそれだということのか？」

『そのとおりだとも。人間から魔力を直接摂取する方法は、連中…神々が作り出したシステムじゃよ』

「その神とやらは、あの忌々しい精霊のことか？」

『半分正解じゃな。正確に言えば、有史以前の地上を支配していた精霊よ』

精霊。

今でこそ人の目には見えない超自然的なファクターと化しているが、遙か昔。キリストが生まれるよりもさらに古い、古い時代。

この世界に人間は存在せず、二つの種族が闊歩していたというのだ。

その片割れが、精霊。

その古い時代の精霊こそが、図書館島、氷の繭で戦った者達。

人間を遙かに超越した魔法の力を持つ……ああ、条件びつたり。

神様だ。

『お主も感じたであろう？旧き精霊の持つ力は強大じゃ。その力を信奉する人間もまた、おる』

「…その計画を企てた連中は？今もその計画は存在しているのか！？」

今にもテレビに掴み掛からん勢いで、エヴァンジェリンが身を乗り出す。

その様子を冷静に見つめ、フィリウスさんは首を横に振った。

『とつくの昔に計画も、人員も抹消されておる』

「……そうか。この手で全員くびり殺してやりたかったが」

再びソファーに腰を落ち着けたエヴァンジェリンは、優雅に足を組んで溜息。

『とはいえ、お主が母体として機能し続けていることに変わりはない。その体を欲する人間はまた出てくるであろうな』

鼻を鳴らすと、どこから取り出したのか鉄扇をその手に広げ、優雅に扇いでみせた。

「望むところだ。殺し尽くしてやるよ」

エヴァンジェリンが浮かべる笑み。

僕が今まで抱いていた、イジリ甲斐のある少女というイメージ（クーサンの入れ知恵含む）を一瞬にして払拭するほどに妖艶、濃艶、凄艶。

だというのに、背筋が凍りつくほど凄惨だった。

「ふん…ああ、そういえば坊やの事はどうなったんだ？魔法か薬かは知らんが、軽く記憶を弄ったんだろ？」

「あの夜の出来事は鮮明に思い出せないじゃろうな。お主の好きにするがよい。だが、ワシ達に繋がる情報は出すなよ」

「随分と警戒してるんだな」

「ふむ。子供というのは純粹で残酷じゃからな」

エヴァンジェリンと茶々丸さんを見送った後、今度は僕がフィリウスさんと向かい合う。

「これで、麻帆良の魔法使いたちを攪乱できるじゃろう」

そもそも、エヴァンジェリンとフィリウスさんの対談は、お互いが提示した条件の取引から生じたものだった。

エヴァンジェリンは精霊の、そして自身の情報を欲し、その対価として帝国はエヴァンジェリンの協力を得る。

エヴァンジェリンの協力の内容は具体的に、大停電の夜に精霊によって引き起こされた一連の異常を、エヴァンジェリンが行ったとすること。

簡単に言ってしまうえば、未解決事件に適当な容疑者をでっちあげて解決にしましちゃう、悪の検察みたいなものだ。

「茶々丸さんのデータと技術も得られそうですね」

「ラジオへの出演じゃったか？」

「毎週聞いてくれるそうですよ」

そんなものか、とフィリウスさんは若干納得いかなさそうな息を吐く。

まあ、他人の趣味や価値観は理解しづらいものだから仕方がない。

『開発者の方は、こちらからいくつか技術を渡そう。継続した取引ができれば尚良い』

開発者ごと引き込むつもりだろうか。この方は。

『まあ、その辺りに関してミソギは気にする必要はない。お主に交渉ごとは望めぬからな』

「おっしゃるとおりで」

奥多摩：東京とは思えない自然溢れる地域。

東京と言ったらコンクリートの巨木が生え揃うジャングルだとばかり思っていた。

あまりにも清浄な空気に、現代人を思いやる心優しい宇宙人にアブダクションされたのかと思ったほど。

そんな奥多摩にあるキャンプ場の一つに僕はやって来ていた。

山中に建てられた一軒のロッジ。そこを、シャドネとリーベンが拠点にしているのだ。

「右手はもう大丈夫みたいだね」

骨折していたらしいシャドネの右手は、まだ一週間も経っていないのに完治しているようだった。

「申し訳ありません、騎士様。…不甲斐ない場面をお見せしました」
跪こうとするシャドネを必死に宥める。

そうしないと、リーベンが恐ろしい形相でにらんで来るのだ。

僕の胃腸のためにも、勘弁してほしい。

「そ、そんなことより、前回の戦闘でのデータはどうだった？」

「はっ。旧世界の大气中でのコウ・ジマ機関の動作データ。重力下での飛行データと興味深いデータがいくつが取れました。ですが、環境に及ぼす影響に関しては、長いスパンで試験を行わないと無理

ですね」

「とりあえず、運用自体は問題無し、と」

報告書を提出する必要があるので、メモを取っておく。

勿論、第三者に見られてはまずいので暗号文でだ。

『？は最強（運用はOK）ただし、善行を積みなさい（環境に及ぼす影響に関しては引き続き調査の必要有り）』

「ようやく謹慎が解けたし、今度から飛行訓練の時は立ち会つよ。

僕に何ができるかわからないけど」

「了解しました！よろしくお願いいたします！」

有事の時なんかは、力になれるだろう。

ビシッと敬礼するシャドネと、相変わらずいい加減な敬礼をするリーベンに返礼し、ロッジを後にした。

修学旅行の準備の為、原宿まで来ていた椎名 桜子、釘宮 円、

柿崎 美砂の三人は衝撃的な場面に出くわしていた。

『なな、コレなんかどやる？ネギくん』

『あ、いいですね！かわいいーですよ！』

『ほれ』

『はい、似合いますよ、このかさん！』

『あんもー。ネギくんたらちやうてー』

クラスの担任であるネギ・スプリングフィールドと、クラスメイ
トの近衛 木乃香が仲睦まじく服を見繕う光景。

「……………」

咄嗟に隠れた物陰で、三人がゴクリと唾を飲む。

その内心は、見事なまでに一致していた。

（こ…これって…もしかしてデートじゃないの…！？）

そして三人は自然とお互いの顔を見合わせ、やや興奮気味に円陣を組んだ。

三人が三人、色恋沙汰に興味津々な年頃の乙女。他人の恋路（推定）、しかもスキヤンダル級のネタを掴んでしまったのだ。興奮するなと言う方が無理なのかもしれない。

「で、でもネギ君十歳だし…ちょっと姉弟感覚で買物に來ただけじゃ…」

円が否定的な意見で逃げ道を作り、
「それで、わざわざ原宿まで出てくるー？」

美砂が肯定への為の理由付け。

「ネギ君はただの十歳じゃないよー」

そして桜子が謎の直感を發揮させる。

再び三人の間に奔る緊張感。

ゴクリと、再度唾を飲んだのは誰だっただろうか。

再び顔を見合わせた三人は、溜めに溜めた好奇心がついに爆発。

一気に色めき立った。

「あーわわわ！たた、大変かもーっ！！」

「生徒に手を出すなんて、ネギ君クビだよクビ〜！！」

「誰かに知られたらマズいよ、これ！！」

知らせる気まんまんたる、これ。とは、通行人全員の言葉である。

「い、いや待って。落ち着いて！」

まだ慌てるような時間じゃない！といち早く冷静になったのは円。

その表情は、事の深刻さを表すほど真剣。

桜子も美砂も思わず黙り込んだ。

円はそれを確認すると、右手の人差し指をそっと立て、

「この場合、手を出したのはネギ君というより、多分このかなんじや……？」

と、大人の世界では言い訳にならない逃げ道をさらに用意した。

自転車が飛び出してきて自動車にぶつかっても、悪いのは自動車すれ違った小学生に笑顔で挨拶したら、不審者として警察が発表し

た。そんな感じ。

しかし、結局三人にとって教育現場の乱れとかそんなことは、はなっから頭に無いのであった。

「大体、このかとネギ君って同じ部屋で暮らしてんだもんね」

「このか、面倒見がいいから母性本能くすぐられて、いつしか恋愛感情が……そして、ある昼下がり……」

「こっ、子供に手を出すなんて！」

悶々、悶々と。

ヒートアップしていく円と美砂の妄想。それを戸惑いながらも興味心身と聞いていた桜子は、徐々に眼鏡を熱気で曇らせていく。

そんな中、美砂の目がキラリと光った。

桜子と円は、長年の付き合いから直感。

（また余計なことを思いついた顔だ！）と。

美砂は携帯を素早く開き、目にも留まらぬ速さでアドレス帳からダイヤル。

「と、とにかく当局に連絡しなくちゃ！！」

「ととつ、当局って！？職員室！？」

「バカ！んなどこ連絡したら即クビ&退学でしょ！！」

スクープ！スクープ！！とはしゃぐ円と美砂を見て、桜子はふと思いついた。

スクープといえばマスコミ。マスコミといえばニュース。ニュースといえばラジオ。ラジオといえば……。

「そろそろミソにゃんと合流できないかな？今どの辺だろ？」

初めて訪れた知らない街の空気に、テンション上がってきた！

僕は今池袋西口公園…そう、池袋ウエストゲートパークをうろろろしている。

なんだか、すれ違う人全てが芸能人に思えてきてしまうのだ。更に、奥多摩と違い、イメージ通りのコンクリートジャングル。ここで東京受胎が起こったのかと思うと…僕は…もう…!

テンションで人が死ねる…今ならそんな論文を発表できる気がする。

ああ、そういえば、桜子達も東京に出てきているらしい。

東京を案内してもらおう。そうしよう。まずはどこがいいかな？堪え切れず買ってしまったガイドブックを開くのと、携帯が着信音を鳴らすのは同時だった。

ディスプレイには…噂をすれば影がさす。

3 - 1 じゅんび（後書き）

あとがき・解説

PCが不機嫌で、執筆中のデータを2度…消失。
閻魔様に説教されたい。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

3 - 2 もだん うおー ふえあ（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

3 - 2 もだん うおー ふえあ

「なー、ネギ君。これなんかどやる？」

「へー、ペアルックかあ。このかさんも着るんですか。ちよつとハズかしくないかなー」

少し先で、少年と少女の二人組みがショーウィンドウを覗き込んで和気藹々としている。

まだ十代だというのに生意気な！

僕の過ごした暗黒の十代を思えば、天誅の一つや二つ、神様も大目に見てくれるはず…。

僕と同じくビルの陰から少年…ネギ・スプリングフィールドと、少女…近衛 木乃香を監視している三人娘に目配せ。

「ステンバーイ…（ペアルック許すまじ）」

すると、美砂嬢（？）が分かっているとばかりに頷く。

「ステンバーイ…（七瀬さんと桜子でアタックよ）」

桜子（？）がサムズアップ。

「すてんばーい…（オーケー）」

円（？）がそれに親指を立てて激励。

「ステンバーイ…（健闘を祈る！）」

ネギ少年と近衛嬢が店に入ろうと入り口へ向かおうとしていた。

そうはさせるか！入店阻止！！

「GO！！」

ビルの陰から飛び出した。

桜子と並んで歩道を駆け抜ける。

すれ違う人々を軽いステップで回避しながら、目指すは店のガラス戸に手をかけた少年と少女。

カサカサ、カサカサと。

その姿はまさしく、シシガミの森でオッコト主を追い詰めるジバ

シリ。

ただし、被っているのはイノシシの毛皮ではない。
ふさふさと生い茂る草を被った人型。

その姿を見た人々は、まずあのキャラクターを思い浮かべるだろう。

伝説の緑色。スポーツ万能恐竜。

……の相棒である、赤色の雪男。

さて、そんな奇特な格好で街中を走っているにもかかわらず、誰一人として僕たちを注目していない。

すれ違う人でさえ、気づかない。目を向けない。

見えていない。

完璧な、完璧すぎる隠密性。まさにステルス人間。

それもそうだ。この装備は迷彩に定評のあるグリーンスーツ。

その中でも、伝説のスナイパーがチエルノブイリでの任務時に着たとされる一品だ。実績がある。

ただ…。

ただなんというか……草地仕様なのに、街中でも効果抜群というのは、いささか斜め上すぎやしないだろうか。

「グリーンスーツ」マクミラン」

伝説の兵士が使用したとされるグリーンスーツ。

どのような状況下でも、人間の目から見えなくなる。

ただし、着用中は特定の単語しか喋れない。

原宿駅の竹下口改札で桜子と合流し案内された先に、円と美砂嬢の二人がいた。

いた…というのは少し違つかもしれない。

コソコソとビルの陰から陰へと移動している二人に追いついたのだ。

可哀想だから言っただけあげないが、不審者丸出しである。

その二人に合流し、強制的に付き合わされる羽目になった僕もまた、不審者だった。

「むー！二人の恋路をこのまま鑑賞した…いやいや、見守ってあげたい！」

美砂嬢が拳を握りしめて身悶えしている。不審者三割増し。

「むしろ応援してあげたいけど、いいんちよがね…」

円は焦点の合わない瞳で虚空を眺めている。不審者五割増し。

正直なところ、赤の他人として距離を取りたい。しかし、取れない。何故なら、桜子が腕を掴んで離さないから。

僕の背に隠れた桜子は、そっと顔を出して通り沿いの、ある一軒の店に視線を向けている。

…僕は電柱かい。

そんな桜子の、猫を殺しそうな好奇心で輝く視線が突き刺さる一軒の店。

輸入雑貨店だろうか。

入り口付近にいる、二人の少年少女。

どこか見覚えのある赤毛の少年と、シャンプーのコマーシャルに出ているような黒髪の少女。

ネギ少年だ。

少女の方は実物だと初めて見る。近衛 木乃香お嬢さん。

さて、そんなデートをしているらしい二人を、何故尾行しているのかというと、

「デートの邪魔ねえ…。馬に蹴られなきゃいいけど」

というわけであった。

「馬に蹴られるより、ダークサイドに墮ちたいいんちよの方が怖いわ」

三人娘が揃って頷く。

「その『いいんちよ』とは何者ぞ？」

『シヨタコン』

自信を持った三人の声が揃う。聞かなきゃよかった。

被っている帽子の位置を調節しながら、美砂嬢は真剣な表情。

「そんな怖い怖い、いいんちよの歪んだ愛を応援する為にも、あの二人の進展を少しでも押し留めなきゃいけないのよ」

「具体的には、どうやって？」

「シヨツピング中っていうんなら、二人が買おうとするものを先にゲットして邪魔すればいいのよ！」

「…そんな無茶な」

それを実行するとなったら、まず二人に限りなく接近して待機しておかないといけない。

そして、もし二人が買おうとするものが一点物でない場合は…。

「私たちもシヨツピングするだけよ。良心は痛まないわ。痛むのは…財布だけよ」

その目は本気だ。

しかし、こっそり聞こえた「いいんちよにツケを…」という言葉。ちやつかりしてる。

残る問題は二人に気づかれず至近距離にいななければならない点。取れる解決策としては、変装だろう。やっぱり。

「変装なら任せて。アテがあるわ。桜子！円！行くわよ！」

「おー！」

三人娘は連れ立ってどこかへ消えた。

僕は放置なんだ…。

とりあえず、デート中の二人を見失わないように監視しておくこ

とにした。

東京にまで来て、僕は何をやっているんだろう。

幼いながらも、整った西洋の顔立ち。美少年。

幼さをどこか残しながらも、整った今風の日本美人。美少女。

若い二人の恋路を、青春を…青春を…青春？恋路？恋愛？

「ふ…フフフ、フフフフ！そうか、そうか…ああいうのをリア充と
いうのか！」

ドロドロと狂気が渦巻く。

嫉妬、羨望、やつかみ。

よし、決めた。

傷み無くして青春は謳歌できない。

だから、だから！僕がその障害となってやるうじゃないか！

などと、ダースベイダーのテーマを頭の中でリピートしていると、

三人娘が帰ってきた。

ネギ少年達は幸運にも店から動いていない。

さて、何をしているのか尋ねようと振り向くと…。

「変装完了！」

「チアリーダーの名にかけて！！」

「いいんちよの私利私欲を応援よ」

セーラー服姿の桜子と美砂嬢。そして詰襟姿の円がいた。

「却下」

判断は一瞬。

「な、なんでよー！」

ノリノリでポージングしていた美砂嬢がガツクリと頂垂れた。

「逆に目立ちすぎだって、それ」

ウンウンと円が頷く。詰襟に不服のようだ。凄く似合ってるんだ
けど。

「えー、可愛いのに〜」

桜子が胸元のリボンを弄ぶ。その表情は本当に残念そうだ。

可愛い。確かに可愛い。そして何よりミニスカートから覗く太腿が眩しすぎて目に毒だ。

更に言えば、桜子のセーラー服プラス眼鏡という組み合わせは、なんというか…その…スターデストロイヤー級。

非常に残念ではあるけれど、尾行にその服装はあり得ない。

「仕方ないな。変装なら僕にも心当たりがある」

ネギ少年が開けた扉から、体を店内へ滑り込ませる。

脇から強引に体をねじ込んだにも拘らず、ネギ少年と近衛嬢は驚いた表情で辺りをキョロキョロ見回すだけで、僕と桜子の姿は見られていない。気づかれていない。

流石、伝説の大尉が使っていたギリスーツなだけある。

店内を素早く横切り、二人が物色していた服を回収。

「ぐっ…ない（サイズはどうしようミソにゃん？）」

「グーツナイ（ペアルックなら、片方買ってしまったえば問題ない。桜子のサイズでいいよ。あの子と同じくらいだろ？）」

「ふおろーみー（そんなことないんだけどな…）」

ギリスーツの胸の辺りを押さえる桜子。

言わんとしている事は分かる。察してしまった。

ただし、どちらの意味でかまではギリスーツで表情が隠れてしまっていて分からないけど。

「GOー！（レジへ！）」

標的の服をレジへ持っていくと、当然の事ながら店員は反応しない。

桜子から服を受け取り、ギリスーツの頭部分だけ取り外す。壁を向いているので、ネギ少年達には見えないはずだ。

突然姿を現したように見えただろう。目に見えて店員が驚愕の表情を浮かべて体を硬直させた。

「い!?!…いらっしやいませ…?」

僕の出で立ちに戸惑い、視線を合わせてくれないが、商品を差し出すときつちり会計を済ませてくれる。

ありがとうね。少し…いやかなり現在進行形で傷ついてるけど、そのプロ根性に免じて許してしんぜよう。

…大丈夫。僕は立ち直れる。

「あ…ありがとうございます…え!?!」

再び頭部分を被ると、店員が西川きし師匠化した。

隣で、桜子が必死に笑いを噛み殺している。

狐に化かされたと思ってくれ。

思ってください。割と切実。

「あれ?売れてしもたん?」

戸惑うネギ少年達を横目に、店を脱出した。

「ビューティフォー…(任務完了)」

さて、ある意味苦勞の耐えなかった(主に僕だけ。理不尽。桜子なんかは楽しんだ)作戦だったわけだけど。

「ハイ、アスナさん。四月二十一日の誕生日おめでとございます」

「へ…?」

「今日は朝から、ずっとこのかさんとこのプレゼントを選んでたんです」

垣根の中、隣に居並ぶ三人娘に目を向けると、ギリースーツの顔が三つ揃って僕から目を逸らした。

「す、すてんばーい(あ、あはは)」

「ステンバーイ…（いや）、…か、勘違いだったみたいね！」
ジリジリと後退る。

その時、神楽坂嬢と共にネギ少年達と合流した金髪の少女が、僕等の潜むこの地点に顔を向けた。

見えない筈なのに。

…見えてないよね？

「柿崎さん…釘宮さん…桜子さん…どこからか存じませんが、見ているのでしょうか？」

それは、まるで地底から響くような、人間の生物としての恐怖心を掻き立てる声。

三人娘だけでなく、僕も思わず息を呑む。

怒髪天を突く…とまでは行かないけれど、その長い金髪が明らかに膨れ上がり、

「全く！あなた方はいつもいつも人騒がせなんですからッ！！」

地獄の番犬が咆えた！

「GO！！（総員撤退！）」

「ごー！！（う、打ち上げにカラオケ行こー！！）」

「GO！！（おー！！ほら！みそぎさんも！！暗黒いいんちよが追ってくる！）」

いや、まあ…いいか。

東京観光はまた今度にしよう。

3・2 もだん うおー ふえあ（後書き）

あとがき・解説

もうほとんど幕間劇です。

新兵器（？）の元ネタは、ちょっとマイナーというか、ディープかも。

足フェチ（+1）

眼鏡フェチ（+3）

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしく願いいたします。

3 - 3 みおくるひと（前書き）

はじめに

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

3 - 3 みおくるひと

シン…と深い新月の夜。

街の光が一切届かない森の奥を、腰を屈めて疾走していた。

この身を包むのはギリースーツ。

熱と疲労で火照る体に、春の涼やかな風を感じられないのが非常に不快だ。

『三十メートル先に敵影が…二人。呪文の詠唱に入っているようです』

「ステンバリー（了解。排除する）」

『え、えと…お願いします』

高空からナビゲートしてくれるシャドネに応答し、走る速度を更に上げた。

一際強く吹いた風に、枝葉のざわめき。

その中に混じって、獣のような雄叫びが聞こえた。

『オニが召喚されました。数は……四』

構わない。僕が為すべきことは術者を速攻で潰すだけ。

その為に、こんな装備で出撃しているのだから。

狙撃できれば楽なのだけど、人道的見地からか例え不法侵入・侵攻を企てた不届きものであろうとも、命を奪うことは許可されない。

命を奪う。

それは今でも忌避すべき事とされているけど、軍に入隊している以上割り切らなければいけないこと。避けては通れない。

迷いはすれど、躊躇いはするな。

師匠であるラッチェさんにまず真つ先に叩きこまれた事だ。

木陰で足を止め、地面に体を伏せて前方を確認。

見えた。

体長二メートルを優に越す巨体。
鬼。

金棒を担ぎ、地面を揺らしながらゆっくりと麻帆良へと向かって
いる。

『術者が更に詠唱を開始しました』

新たに導入された偵察用の機材は非常に有用だ。

航空戦力が装備することにより、監視衛星のような役割が果たせ
る。

人間の目を欺く魔術的な結界も、科学の目を誤魔化せない場合が
多いらしい。

ただ、非常に重装備となり速度が殺されるらしいが、その欠点を
補って余りある成果が得られるのではないだろうか。

…と、本国へ提出するレポートを考えながら、通過する鬼をやり
過ぎすべく、地べたに這いつくばったまま息を殺す。

鬼だろうが悪魔だろうが精霊だろうが、目に映らずとも第六感的
な力で感付かれる危険性があるのだ。

事実、葛葉さんには見破られた。あの人は人間だけど、とある件
に関しては鬼にでも悪魔にでもなる。

それは…婚か…。

『一体が方向を変えました。注意して下さい』
言ってる傍からこれだ。

ノシノシと、まるで地盤を固める重機のような足音と共に、赤い
体をした鬼が傍に寄ってきた。

冷え切った汗が額から頬に伝う。

瞳孔の無い瞳が何を映しているのか分からないが、暫く周囲を見
渡した後、一度首を傾げて先行した鬼達を追って行った。

吐き出しそうになる安堵の吐息を、慌てて飲み込む。

それは、見つかってしまうというパニックホラー的フラグという
やつだ。

遠ざかっていく鬼達の足音に神経を尖らせながら、ほふく前進。
やがて十分な距離が開いた所で体を起こし、低姿勢のまま全力疾
走に持っていく。

そして、二人の術者を目視した。

時代錯誤。着物姿の男が二人。

『学園の結界になんらかの力が干渉し始めました。間に合いますか
？』

通信機から聞こえてきた、麻帆良を監視しているクーサンの声に
頷き返す。

「ステンバーイ…（すぐ片付けます）」

どうやら、あの二人の術者の紡ぐ術が結界に干渉しているのだろ
う。

あの強固結界バツをどうこうできるなんて、かなりの手練なのか。
短時間で無力化。しかも二人だと分が悪いかもしれない。

「ステンバーイ…ステンバーイ…（リーベン、行けるか？）」

『了解』

視線を僅かに上げ、一直線に落下してくるオレンジの光点を確認
する。

それにタイミングを合わせた。

「GO！！（僕が左をやる！）」

上体を起こし、今までの疾走から踏み切って一息に飛翔。

僕から見て左。札を指にはさみ、瞑目のまま呪を紡いでいた男が
標的だ。

しかし、視界の端にギリリと煌めく光を捉える。

右側にいた男が腰から日本刀を抜いたのだ。すぐさまその刃が帯
電。

「フォローミー（あっちは神鳴流だったか）」

相手の装備を見落としていた事に肝が冷える…が、轟音がすぐ頭
上まで迫っていた為、気にせず当初通り術者へと飛びかかった。

結界を張っていたのか、指先から二の腕へ痺れが走り、感覚を失

う。

だが止まらない。勢い任せで結界の膜を突き破った。目を見開き驚愕しながらも、懐から術者が何かを取り出そうとする。

「お……がつ!?」

そして何かを口ずさもうとするが、それよりも早く男の背中に取りついた僕の手が、男の器官を締め上げた。

チョークスリーパー。

やがて男は痙攣し、動かなくなった。

神鳴流の男の方も、叩きつけられたのか、半分地面にめり込んでピクピク痙攣している。

落下の勢いをそのまま利用した、力任せのリーベンの突撃を受けてしまったのだろう。

生きているのが不思議なくらいだ。気による体の強化というやつだろうか。

肝心の日本刀は刀身が半ばから融解していた。リーベンには僕の投影したビームライフルを貸している。

神鳴流に飛び道具は効かない。飛びビームは有効だったようだ。

『召喚された鬼が還りました』

「ビューティフォー…（任務完了）」

そんなわけで、僕は今日から一週間、麻帆良の警備員として駆り出されていた。

というのも、麻帆良の核となる様々な学園が修学旅行ラッシュなのだ。

魔法使いの生徒も教師も各地に散らばってしまうのだから、戦力が大幅ダウン。

そして、それを見越して攻め入ろうとする対抗勢力。

まあ、僕としては実践の中でシャドネ達の運用試験や、僕自身のアーティファクトの実験ができるから都合がいいんだけど。

シャドネとリーベンを先に撤収させ、拘束した二人の男を引きずって森を抜けた。

抜けた先は、いつかの駐車場。

そこで待機していた神多羅木さんに二人を引き渡し、さっさとお暇することにした。

上階から響いてくる音楽が、いつになく熱がこもっているように聞こえた。

明日から修学旅行ということで、待ち遠しさや期待感が演奏に現れているのだろう。

例の如く、修学旅行どころか旅行の一つもしたことがない僕にとっては、そんな予測しかできないわけだけど。

…この世界に来て以来、任務だ何だで遠い場所へ行くことがあるんだけど、あれはノーカンだ。ノーカン！

もれなく死に掛けるから。

いいなー京都。行きたいなー、と桜子が持ってきた京都版「るぶ」…ならぬ、「たるぶ」を読んでみる。

ゼロ戦でも置いてあるんだろうか。

ソファーに寝転がって、自分好みの宿泊施設やプランの金額を計算して独り悦に入っていると、慌しく誰かが二階へやって来た。

「こんにちは」

この関西訛りの喋りは、和泉 亜子。

桜子達のバンドメンバー。

ソファーの背もたれから顔を上げると、今まで見たこともないくらい熱に浮かされたような笑顔の亜子嬢と目が合った。

「いらっしやい。三人とも上にいるよー。部活でもあったの？」

確か、サッカー部のマネージャーだとか言ってた筈。

亜子嬢は慌てた様子で髪を整えると、これまた慌てた様子でコク頷く。

「は、はい！部室の片付けしてたら遅くなってもうて…」

この場にいるのが僕一人だけだったためか、緊張させてしまっているようだ。

落ち着きない様子が、小動物を見ているようで結構…いや、かなり楽しい。

「明日から修学旅行だつてのに、大変だ」

「好きでやってますんで」

そう言つて照れくさそうに微笑んだ。

そんな、目に見えて感情を読み取れる表情の変化が大変素晴らしい！と僕は思うわけです。

まあ、それは上にいる三人娘にも言えることだけど。

「あ、じゃあ上、お邪魔します」

「ちよつと待った」

上に行くこうとする亜子嬢を留め、僕は急いで冷蔵庫へ。

スーパーのビニール袋のまま突っ込んでいたスポーツ飲料のペットボトルを取り出し、それを亜子嬢へ渡す。

「忘れてたよ。これ、皆に差し入れ」

「おおきに…です！」

妙な言葉遣いに思わず笑つてしまいそうになる。

自覚しているのだろう。彼女の顔が真っ赤に染まって、これ以上ないくらい恥ずかしそうだ。

しかし、これは傍から見ると僕が虐めているようじゃないか！

「じゃ、頑張つて。僕は下から聴かせてもらうよ」

「うゝ…がんばります」

円に見られると碌な事にならないので、そそくさとソファアの元の位置に帰る。

そんな僕へ、亜子嬢は小さくお辞儀して、小走りでスタジオへ上

がって行った。

で、そんなことがあった翌日。

僕は大宮駅に来ていた。

何をしに来たのかと言うと…。

「お見送りご苦労である。ミソにゃん將軍」

「はっ！光栄であります！桜子陛下！！」

ベンチの上に足を組んで優雅に腰掛ける桜子の前で、傳いて頭を垂れていた。

京都へ向けて進軍されるマジエステイの臣下として、肅々とお見送りに参上した次第でござる。

桜子の両親に頼まれて。

ただし、何かと魔法関係者の多い桜子のクラス。既に変装済みだ。

黒い上下のスーツ。黒ぶち眼鏡。そして髪型はてかり日光が反射する七三分け。ブリーフケースも忘れない。

まさに、出勤途中の会社員である！

「でも、そんなことやっていると変装の意味が無くない？」

「いいのよ円。七瀬さんが奇怪な人間だって知ってるのは私達くらいだし」

円と美砂嬢の生暖かい視線が痛い。

「褒美に京都の土産を持って帰ろうぞー！」

「流石にございます陛下！！」

駅の構内で妙な寸劇を行っている桜子達を見つめる少女がいた。

三段に重なった木製のトレイを首から提げた売り子…なのだが、着ている服は桜子達と同じ麻帆良学園女子中等部の同じもの。

頭のシニヨンが特徴的な、中国からの留学生。

麻帆良の最強頭脳。

超 鈴音。

自らがオーナーを勤める超包子の肉まんを売り歩いていた鈴音は、静かに桜子達を：正確に言えば、桜子達と共にいるサラリーマンのような出で立ちの青年を観察していた。

冷静に、真剣に。

やがて、集合時間が近づいたということで桜子、円、美砂が青年から離れたのに合せて、鈴音もまた視線を青年から外す。

知らず、その口から小さく息が漏れた。

緊張していたのだろうか、自虐の笑みを浮かべ、頬を軽く一叩き。

「らしくないネ」

それは、緊張していた自分に向けた言葉か、あるいはあの青年に向けたものか。

両方だろう。上手いこと言ったネ。と満足気に頷く。

そして、女子中学生の集団の中へ、表情を人懐っこい笑みに変えて向かって行った。

「超包子特製肉まんはいかががネ？」

「おー、超りん。相変わらず商魂逞しいね」

「いるいる〜！」

「私も一つ頂戴」

3・3 みおくるひと（後書き）

あとがき・解説

シニヨンにすべきか、シニヨンにすべきか1時間ほど悩む。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
ざいます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。
どうか次話もよろしくお願いいたします。

3 - 4 いのり（前書き）

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

「暇だ。少し付き合え」

日課の猫釣りしていた僕の所に、茶々丸さんを引き連れた吸血鬼がやってきて一言。

あまりにも唐突だったから、反射的に答えた。

「お断り代打バース」

問答無用で放たれたエヴァンジェリンの右ストレートが僕の頬に付き刺さった。

同時に、僕のクロスカウンター。左手がエヴァンジェリンの頬を容赦なく抓っているけど。

結局、不毛な口論。いや、罵り合いの果てに僕が折れて（大人の余裕であり、敗北ではない）、森の中に一軒だけポツリと佇むログハウスへと連行。否、案内された。

どうやら、エヴァンジェリンの住処らしい。

ログハウスと言っても、筋骨隆々の山男が住むようなものではなく、メルヘン趣味全開の雑誌に『隠れ家的オシャレスポット』と紹介されていそうな家である。

座れと言われたソファーに、所狭しと居並ぶヌイグルミ。

座る場所無いじゃん…。

仕方なくヌイグルミ達を横に退かす。

エヴァンジェリンが青筋を浮かべるが、無視ムシQ。

座れと言ったのはお前さんだろうに。

「もっと丁寧な扱い方があるだろうが。まとめて抱えるなど無粋も無粋。無粋の極み！」

「何を失礼な。仲間外れを作らない為の紳士的配慮だ。その暴言の撤回を要求する！」

ガルルル！！と威嚇し合う僕達の間、ティーセットを持ってき

た茶々丸さんが無表情で割って入る。

さすがメイドさん。その瀟洒な振る舞いはルナティック。

というか、メイドだ。メイド。

女子中等部の制服だった筈の茶々丸さんが、どんな早技かメイド服に着替えていた。

ただ残念な事に。

非常に、非常に残念な事に。

ミニスカートである。

そんなのメイドさんじゃねえ！！

と口に出せる筈も無く、茶々丸さんが紅茶を淹れてくれた紅茶を一口。

ロングスカートメイドさんの素晴らしさは、翻るスカートに集約されるが、それはまた今度語ろう。

「おお…まさにダーズリン」

「アッサムです」

「アッシマーがっ！」

分かってるよ。分かってたさ！アッサムだって事くらい！！

ただ僕は全力でブラン・ブルタークしたかっただけなんだ！ブランがブルタークでブランのブルタークなのさ！

「顔が赤いぞ帝国兵」

「うっさい吸血鬼」

ニヤニヤと笑うエヴァンジェリンから顔を反らし、アッシマーを味わう。

そうだね。ブラン・ブルタークだね。

「あ、あの…やっぱりダーズリンで…」

「やめて茶々丸さん。その心遣いは痛み入りすぎて泣きそうだ！」

「ククク、やるじゃないか茶々丸」

「何が『ククク』だ。そっちの方が痛いわ。おおっと、そういえば中学生だったな。なら仕方がない」

再び睨みあう僕達の後ろで、オロオロとろたえる茶々丸さんに

は悪いと思う。

僕はエヴァンジェリンと波長が合うのだ。
打てば響くというか、当意即妙というか。

お互い…リアクション芸人体質。

スルーという言葉を知らない。

汝、無垢なる雛壇芸人。

やがて、エヴァンジェリンは視線を反らし、深い…それはもう深い溜息を吐きだす。

「まったく、貴様と話しているとつくづく不毛な時間というものを
実感させられる」

「僕を誘ったのはお前さんだろうに」

「ああ、反省してるよ。どうして私は良い暇つぶしになると考えた
んだか」

「体のいい暇つぶしに利用されるだけの僕じゃないってだけさ」

「単に遊んでいるだけだろうが」

「そういう僕を望んだんだろ？」

「気持ち悪い事を言うなよ。殺してしまいそうだ」

フフフフ、と笑い合う僕達の背後で、やはり茶々丸さんはオロ
オロとしていた。

こんな三文芝居的な空気を味わうことこそが、エヴァンジェリン
の目的だったのかもしれない。

かくいう僕もまた、心地良さを感じてしまっているのだけだ。

とはいえ、いき過ぎた戯言の応酬は機械的になりつまらなくなる。
ほんの僅か。適度に上辺を舐めるくらいが丁度いいのだ。

先に目を反らした僕をエヴァンジェリンは鼻で小さく笑い、下着
が見えるのもお構いなしにソファの上で胡坐をかく。

そして、手元に引き寄せた大きめのクマのヌイグルミを抱きかか
え、その頭の上に顎を載せてニヤリと下卑た笑み。

「貴様の事は色々調べさせてもらったぞ。ナナセ ミソギ。随分と面白い事ややってきたみたいだが、一つだけ貴様に聞きたい事がある」

「まあ、吸血鬼の救出作戦なんて面白い事以外の何物でもないね」
碌な質問じゃない予感をヒシヒシと感じたので、かなり露骨な横やりを入れてみる試み。

エヴァンジェリンは眉を吊り上げるが、その笑みに歪んだ表情は崩さない。

やはり、生きてきた時間の差か。自他共に認める腹芸不得意の僕では、本気のエヴァンジェリン相手は分が悪い。

…あの様子を見る限り、付け入る隙はありそうだけど。

「まあいい。私が聞きたいのは、貴様が執心している小娘。椎名桜子の事だ」

「へえ…」

と、意味の無い相づちを打つのが精いっぱいだった。

収束していく意識。

冷や水を浴びせられたと表現するには物足りない体感温度の低下。

僕の目は釘付けになる。

吸血鬼のか細い首へと。

首へと。

ああ、簡単にへし折れそうだ。

「そう物騒な眼をするな。別に椎名をどうこうするつもりは無い」
いつの間にかエヴァンジェリンの右手には鉄扇が握られており、その先端が僕へと向けられていた。

茶々丸さんもその背後に移動している。

ああ、また僕はやってしまったのか。

エヴァンジェリンのような『曰くありげ』な連中の口から桜子の名前を聞いてしまうと、意識が引っ張られる。

最近、それが酷くて『桜』という単語で反応してしまう始末。

妄執？ 煩惱？

過保護なだけさ。

「つくづく僕は交渉事の適性が無いらしい」

「まったくだ。で、椎名に何かがあるのは分かった。あいつは…何だ？」

「何だ…って、どういう答えを期待しているんだよ」

意味深に微笑むエヴァンジェリンは、鉄扇を無造作に手の中で回す。

「魔法使いか？魔族か？混ざりモノか？お前達が言うところの精霊か？」

「…さて。僕から見た桜子は、ごく普通の女の子。ただそれだけだよ」

「貴様に一つ教えてやろう」

広げた鉄扇で口元を隠したエヴァンジェリンは、それはもう楽しそうに笑った。

声こそ出していないが、その目は紛れもなく笑っている。

「他者から搾取し己の力とするあり方を、普通とは言わない」

「アレは私と同類なんだろ？」と。

気に食わない。

まったくもって気に食わない。

こんな数百年を生き、人間という範疇を片手で放り投げ、現在進行形で人外魔境まっしぐらなツルペタに笑って桜子を同類扱いされるなんて気に食わない。

一見すると気付かないが、桜子は意外と…。

「ぐはあ!？」

飛んできた鉄扇が突き刺さり、仰け反った勢いでソファァーから落ちて床に叩きつけられた。

「何をする!！」

「どんだけの腕力で投げてるんだ。」

「僕じゃ無ければ、間違いなく頭が吹き飛んでいた！」

すみません。ちょっと誇張表現入りました。僕の体の強度は普通の人間です。

鉄扇を犯人に投げ返すが、それは事もなげに受け止められ、これ見よがしに掌の上でくるりと優雅に回す。

「ふん。貴様の表情が読めるようになってきたぞ。主に邪な方面で」

「おめでとう。エヴァンジェリンは七瀬検定三級を手に入れた」

「おめでとうございます。マスター」

「おめでとう」

「おめでとうございます」

「ケケケ！オメデトウ」

エヴァンジェリンは呆然とした表情で、うつすらと浮かんだ涙を拭くと、やがて満面の笑顔を浮かべ…。

「ありがとう……とか言うかボケー……！！」

東京駅。京都へと向かう新幹線、ひかり213号。

ヘラス帝国空軍第108技術試験隊の二人：シャドネ・ミランとリーベン・スクラッドは、麻帆良学園の生徒達で賑わう車両、その一つ後ろへと乗り込んだ。

席に並んで着くと、片やリーベンは背もたれに全体重を預け疲れた溜息を吐き、片やシャドネはきっちり背筋を伸ばしたまま、生徒達が乗車している車両を真剣な表情で睨み付ける。

「隊長：気に食わないけど、騎士殿は休暇がてらでいいって言ってます。もつと力を抜いたらどうですか？」

「騎士様の心遣いは嬉しい。けれど、私達に与えてくださった任務は護衛だ。全力で取り掛からねば！」

「任務って……あれは『お願い』でしたよ……」

そんなリーベンの眩きがシャドネに届く事は無い。
シャドネ・ミランにとって、ナイト爵ミソギ・ナナセに抱く感情は様々。

尊敬、敬愛、憧憬、感謝、思慕……。

プラス方面ばかりで胸焼けしそうなものだ。

しかし、それらをシャドネは別腹だとばかりに抱き続ける。

命の恩人というスタートラインから始まったそれは、二十年近くの熟成期間を置き、捻り捻じ曲がって今のミソギ像が出来上がった。いや、二十年近くの時間を置いて尚、と表現されるべきか。

そのあり方は、もはや信奉と言っていいかもしれない。

…他者からの想いが入る余地の無い程に。

そんな彼女を理解してしまっているリーベンは溜息を吐くしかない。

彼にとっての初デートだったのだ。

硬派に生きてきたリーベンが、人生で初めて異性をデートに誘ったのだ！

しかし、何も考えずシャドネが選択した映画を見たのが後悔の始まり。

聞かされる。聞かされる。誰とも知れぬ男の話。

リーベンのテンションの下がり具合は底知れず。

特に、ミソギ・ナナセが生きていたと知らされた時からの、シャドネの感情の昂ぶり具合への反比例っぷりは半端ない。

端的に言えば、リーベンはミソギ・ナナセが嫌いだ。

もっともらしい理由を自分に言い聞かせてはいるが、結局それは嫉妬。

内心、リーベンはそれを自覚しているが、自覚していても、自覚しているからこそ認められることではなかった。

自分が恋敵を嫉妬していると認めることは、負けていると認めることと同義なのだから。

ドアを威嚇し続けるシャドネに、車両を移ってきたサイドポニーの少女が驚き身を竦ませるが、気にするなとリーベンが手振りです。
オロー。

この隊長、どうにかしなければ…と内心泣きたくなるのを我慢する。

折角の旅行だと言うのに、より一層ミソギ・ナナセへの反感を高めていった。

ミソギにとっては理不尽極まりないものであるが。

3・4 いのこり（後書き）

あとがき・解説

会話のキャッチボール。富野節的というか、東方的というか。お互いの頭上に向けて全力投球。

最後に。

このような雑作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

3 - 5 おんばしら（前書き）

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

3 - 5 おんばしら

「おー、流石京都。お寺だらけ」

桜子が参道の土産物屋で貰った清水寺周辺のイラストマップを、
円と美砂の三人で覗き込みながら生徒の流れに従って歩いてきた。

彼女達一班のメンバーは、この三人と鳴滝 風香・史伽の双子の
姉妹。

何かと騒がしいことに定評のある双子（三人も人のことは言えな
い）が先導しているので、道を誤ることはない。

「うーん。音羽の滝は要チエツクね。縁結びに効果があるそうだし」
土産物屋の店員からの情報である。

そんな円の一言に、先行していた双子が反応した。

『えーっ！？ついにくぎみーにもいい人が！！』

一言一句違わずのシンク口に円は一瞬躊躇うが、すぐさま顔を真
っ赤に染めて双子の口を押さえる。

「ち、ちがうわよ！そんな出会いがあればいいなってだけ！朝倉に
聞かれたらどうするの！！」

朝倉 和美。

伝統の麻帆良ブン屋（自称）

麻帆良パパラッチ（他称）

その情報に対する嗅覚は警察犬を凌駕し、他人の色恋沙汰には物
理法則を捻じ曲げかねないほどの反応を示し、動く！

「その話！詳しく！！」

「言った傍から！？」

瞬間移動もかくやという速さで、既にメモ帳とペンを構えたご本
人様が円の横をピツタリと随伴していた。

肩を落とす円と、鼻息を荒くするパパラッチとの戦いを尻目に…。

「ラブ臭が！ここか！！」

またややこしいのが一人増えた気もするが…尻目に、桜子は再び

マップに目を落とす。

「今日は自由行動が無いから、無理かな？」

「なに？桜子は行きたい場所があるの？」

美砂に頷き返し、マップを指差す。

そこには、「八坂神社」と書かれていた。

齊明天皇二年創祀。スサノヲノミコト、クシイナダヒメノミコト、ヤハシラノミコガミを祀る平安建都よりも以前から続く、古く由緒正しき神の社。

もちろん、そんなことを現代っ子女子中学生が知るはずも無く、美砂は何故桜子がある場所に興味を持つのか首を傾げる。

「どこかの本の虫のように神社仏閣仏像マニアじゃあるまいし、と。うん。ミソにゃんがオンバシラ？がどうか？」

「あー……」

納得！と、あらゆる意味で美砂は内心手を打つ。

古くからの知り合いの意味不明さとか、それを真に受ける桜子とか。

「なんか、ガンキャノンガンキャノン煩かったわね。何かしら、ガンキャノンって？」

RX-77-2 中距離支援モビルスーツ。

「ま、そういう場所は行きたがった本人が行かなきゃ意味が無いでしょ。」

「それもそうだね！オンバシラ？っぽいものをお土産に買って帰ればいいか？」

オンバシラっぽいものって何だろう？と二人して首をかしげながら、近くの土産物屋の店先を眺めながら歩く。

「オンバ……シーラ……：カンス？魚？これなんてどうよ？」

美砂が見つけて手に取ったのは、巨大な魚の剥製。

しゃくれた下顎から覗く、鋭利な牙がキュート。

「『さあ今日は焼き魚だ！』って、ミソにゃんなら燃やすよ。きつと。」

ありえる、と二人が頷くのは同時。

「おん…ばしら…：…バシルーラ？キメラの翼？」

別の店先で桜子が見つけたのは、某孔明さんが持っていていそうな鳥の羽で作られた扇。

待て、あわてるな。これは桜子の罠だ。

「あの人に余計なものを持たせちゃだめよ。それで体中をくすぐられるわ！！」

「か、体中を！？」

桜子の顔が真っ赤に染まる。頭から湯気が立ちそうなほどに。

言った本人の癖に、美砂もその様を想像してしまい頬を染める。

「こりゃ変態の仕業じゃあ。」

「くっ、この場になくても私の心をかき乱すとは、やるわね七瀬さん！」

『ほっほっほっ。冤罪じゃ〜』

青空の向こう。キラリと涙を輝かせる青年の姿を、ごく僅かな人間が見たとか見なかったとか。

「桜子、あなた疲れてるのよ」

「そ、そうだよね！うーん、昨日あんまり眠れなかったからなあ」
扇を店先に戻し、いまだにギヤーギヤーやっている円や双子達のもとへ追いつく。

「結局、オンバシラって何なのかしら」

「ほう。お二人は御柱に興味がおありなのですか」

円にラブシューラブシューと謎の単語を浴びせかけ、人間を辞めかけているクラスメイトの早乙女 ハルナ。

その影から小柄な少女が桜子と美砂の元へとやってきた。

京都限定と書かれた毒々しいパッケージの紙パックジュースを片手に、異様に瞳を輝かせているその少女。

3年A組が誇る稀代の寺社仏閣仏像マニア。

綾瀬 夕映。

普段の夕映からは感じられない妙な威圧感に、二人は思わず引い

ていた。

その威圧を『マニアの語りたがり』と呼ぶ。

「お二人の言うオンバシラとは、恐らくミシャグジの依り代とされている御柱のことだと思えます。ミシャグジとは何かといいますと、ミシャグジ信仰は東日本の広域に渡って分布しておりまして、当初は主に石や樹木を依代とする神であつたとされています。その信仰形態や神性は多様で、地域によって差異があり、その土地の神や他の神の神性が習合されている場合があります。信仰の分布域と重なる縄文時代の遺跡からミシャグジ神の御神体となつている物や依代とされている物と同じ物が出土している事等からこの信仰が縄文時代から存在していたと考えられているのです。では、現代における御柱ですが…」

「ねえ、桜子。日本語って何だろうね」

「シャッチョサン イツモノイトクー？」

「気持ちは同じよ。だから戻ってきて。お願いだから私の桜子を返して…」

3・5 おんばしら（後書き）

あとがき・解説

いつもより短いです。

京都でオンバシラ、オンバシラ言ってる話。

後悔は無い。反省は…それはもう盛大に。

Wiki先生は偉大。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
ざいます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

3 - 6 さくらさくら（前書き）

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

這い回るような鈍い頭痛で桜子は目覚めた。

嗅いだ事のない部屋の匂い。

暗い室内には人の気配：というか、寝息がわずかに聞こえてくる。

「あれ……？」

ココハドコ？ワタシハダアレ？とお約束のような定型文を内心呟きながら、記憶を遡る。

はつきりと憶えている一番最後の記憶は、清水寺。音羽の滝。

ほんのりと甘みがあり、喉を微かに刺激する美味しい水。

淡い期待と共に、それを一口飲んだところまでは憶えていた。

それ以降の記憶が一切無い。

疑問の後に恐怖が：襲ってくる前に、それよりも切実な問題で桜子は動き出す。

「み、みずう」

喉が焼け付くようにカラカラ渴くのだ。

モソモソと布団から這い出し、部屋の隅に置かれていた自分の荷物の中から財布を取り出して部屋を出る。

いつの間にか浴衣に着替えていたのにも非常に驚いた。

しかし、照明の眩しい廊下に出た所で、僅かに桜子の記憶に引つかかるものがあった。

「あ、そうか。ここホテルだ」

おぼろげながら思い出す。

夢現の中、夕食を食べたこと。入浴したこと。

そんな危険な状態で入浴できたことは、なんと幸運なことか。

(もしかして、知らないうちににやっちゃった……？)

気分が少し暗くなるのを自覚しながら、とぼとぼと歩き出す。

自販機を探す旅に出ます。捜さないでください。同情するなら水をくれ。

ロビーに売店があったことを思い出し、ふらふらとやってきた桜子は、来客用のソファーに見知った顔が一人で居るのを発見した。

桜咲 刹那。

サイドテールの髪型。肩に立てかけた竹刀袋。

桜子とは、さほど親しくは無い。

というか、とつつき難い雰囲気を纏っており、話しかけようにも足踏みしてしまうクラスメイト。

…の筈なのだが、どうしたことだろう。

その表情は、にやけたり、キリッ！と引き締めたり、ホロリと涙したり、キリッ！と引き締めたり……と見ていて面白いくらいの百面相だ。

そんな面白い現場を桜子が逃す筈が無い。

ソファーに近づくと、ブツブツと刹那の独り言が聞こえてきた。

「ああ！お嬢様…今宵は偏に私の不覚の致す所。未熟のこの身をお許してください！えへへ…でも明日はお嬢様と一緒に……いや待て刹那！敵は大胆にも誘拐を企てたのだ！気を引き締めて護衛せねば！……ううう…でも、今までお嬢様を蔑にするような態度をとってしまった…嫌われて無いだろうか……嫌わないでください！お嬢様あ……！」

とつつき難い子？

訂正。

痛い子だコレ！

今までの大きすぎるギャップが可笑しくて、面白くて、桜子は抑えきれなくなった笑いを顔に貼り付けながらスキップで刹那に近づいた。

「楽しそうだね！桜咲さん」

「お嬢さ！…え？椎名さん？」

いつも鋭い目でクラスメイトと一線を画していた刹那。

そんな子が零れ落ちんばかりに目を見開き、口を半開き。

「み、みみみ見ててててました!？」

「うい、むっしゅ〜」

やがて、刹那の頬が朱に染まる。

いや、頬と言わず顔全体が熟れたリンゴのように真っ赤。下手するとメルトダウンしそうなほどに。

そんな刹那の様子に、ますます桜子は楽しくなってきた。

(これが『ぎゃっぷ・もえ』ってやつなのね!ミソにゃん!!)

(然り。また一つ真理へ至る事ができたな桜子!)

桜子の頭の中で、何故か立派な白髭を蓄えたミソギが重々しく頷いた。

地上で空気を求める魚のように口をパクパク空回りさせていた刹那は、自身の頬を一叩きする事でようやく再起動を果たす。

「コ、コホン。お見苦しいところをお見せしました」

わざとらしく咳払いを一つ。

気を取り直すように表情をキリッ!と改め、姿勢を正し桜子を見上げた。

「にゃ…ふふふ……にゃはははは!」

しかし、その取り繕う様子は、さっきの百面相を見ていた桜子がらすれば面白いもの意外の何物でもない。

「い、今更それは反則だよ桜咲さん!にゃははははは!」

「う…忘れて!忘れてください!そんなに笑うこと無いじゃないですか!」

「ごめんごめん」

ヒィヒィと笑いすぎて息が苦しくなり、こりや堪らんと刹那の隣に倒れこむようにしてソファーに座り込んだ。

刹那は唇を尖らせ、恨めしげな目を向けるだけで何も言わない。

その様子もまた、桜子を楽しませているというのに。

刹那は戸惑っていた。

あまり親しく言葉を交わしたことが無いクラスメイト。

そのクラスメイトが自分を笑っている。

笑っているといっても、不快なものではないのだ。

むしろ、好ましくある。

何故ならば、桜子の笑顔に釣られて、刹那も笑ってしまいそうなのだから。

必死に、それはもう必死に表情を引き締めている。

嘲笑、侮辱、蔑視。

幼い頃に受けたそれらとは一線を画す、自分を好意的に見る笑顔。

屈託の無い。

純粹。

底抜けの明るさが自分に向けられている。

（お嬢様が向けてくださる笑顔と同じだ）

それに釣られてしまいそうになる自分に戸惑い、そして嬉しかった。

嬉しくて、嬉しくて、今日はこんなに嬉しいことが重なって泣きたいくらいだ！と。

実際、顔の筋肉がつってしまい、痛みで泣きそうになった刹那である。

「椎名さんはどうしてこんな所に？」

「あ！そだった！喉が渴いて渴いてしょうがないんだよ……」

刹那のインパクトで今まで忘れていた喉の渴きを思い出し、売店

はどこだ！？と飢えた狼の如く周囲を見回す。

売店はすぐに見つかった。

ロビーの一角。

既にシャッターが降りており、閉店した後の。

がつくりと力尽きそうになった桜子だが、幸いにも売店の傍に自販機を発見した。

「ジュース買ってくるよ。桜咲さんは何がいい？」

「え！？わ、私はいいですよ。今日はちよつと水分が…摂れそうに無いので……」

刹那は、トラウマ直撃の水難に遭ったばかりなのだ。

攫われた近衛 木乃香の追跡時、敵が用いたのは水での圧迫攻撃。幼い頃、溺れた木乃香を救えなかったという自責の念が、刹那の中で再燃している。

「ん…そつか。了解！じゃあちよつと行ってくる！」

敏感に触れてはいけない部分を感じ取った桜子は、恐縮しそうな刹那に笑顔と共にサムズアップを向け、ソファアールから立ち上がった。そして、自販機に向かおうと……したところで体の動きが止まる。訝しげに目を向ける刹那へと振り向く。ギギギと。

「どうしました？」

「にゃ、にゃはは…財布忘れてきちゃった……」

そして、ソファアールの上に体を捻りながらのダイビング土下座。

文句なし！満点の三つ指土下座！！日本の土下座競技の未来は明るい！！

さあ、着地点の『申し出』は決まるか！？

「お金貸してください！」

決まったー！！最高難易度の『キャッシング・デ・ドゲザー』だ
！！！！

肉親や親族でなく、赤の他人にこれを言ったのが高ポイントです
！！

一連の桜子の行動に呆気にとられていた刹那は、すぐに気を抜くような笑みを自然と浮かべる。

「気を使っていたいただいてありがとうございます。桜子さん」

「……うくん、バレてた？」

顔を上げた桜子は、楽しそうに笑っていた。

悪戯が成功した、どこかの双子のような笑みだ。

「はい。……胸の間に財布を隠すのは、どう考えても不可能かと」

浴衣の帯に支えられて、胸の谷間から僅かに覗かせていた財布を引っぱり出す。

そして、チロリと舌を出して無邪気に笑うと、今度こそ自販機へ向かっていった。

3・6 さくらさくら（後書き）

あとがき・解説

桜子さん頑張る。

何かと見え隠れする主人公の影。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

3 - 番外 りよごうのよる（前書き）

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

3 - 番外 りよごうのよる

『やあみんなこんばんは！ギャラクシーマホラジオの時間だ』

『早速だけど…なんかもうお馴染みになっちゃったな。今夜のゲストはこの人達！』

『ふん。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ』

『せいぜい私の美声に聞き惚れるがいい！』

『変なナレーションを入れるな茶々丸！！しかも私の声そっくり！？』

『失礼します。麻帆良学園中等部3年A組10番、絡繰 茶々丸です』

『マスターの声紋データは全て揃っております。再現できないマスターの声など、あんまり無いです』

『よ、よく分らんが、悪用するなよ』

『勿論です。マスター』

『と、まあ修学旅行に行きそびれた二人とお送りする今宵の番組』

『ズバリ！テーマは「修学旅行」！！二人は修学旅行に関する思い出は？』

『く…何か引つかかるが…まあ、いい』

『マスターは旅行雑誌を毎月購読されています』

『む、まあ、ああいうのは見ているだけで楽しめたりするからな』

『うん、それ分かる。自分だったらどんなプランで、どれだけの費用で行けるか計算したり、楽しいんだよね』

『でもさ、修学旅行独特のイベントが味わえないんだよね…』

『修学旅行は旅行だろ。多少人数が多いくらいの』

『甘いです。マスター』

『そっだ、甘いね。クリスマス前に成立した三十路カップルより甘い！』

『それは微妙だな』

『修学旅行とは、古代中国の苦行法「衆我苦」が日本に伝来し、形を変えた新世代型修行プログラムです。主な修行内容として、就寝時の護身法「マクラナ・ゲー」、話術により相手の思考を誘導する「コイバナ」等がございます。これらの修行により毎年修学旅行で命を落とす学生が後を絶ちません』

『茶々丸さん。そのソースは？』

『民明書房刊「修学旅行の今」より抜粋しました』
『それは傑作だな』

桜咲 刹那には、憧れの人が居る。

出会いは幼い頃。

風邪をひいてしまい、剣術の鍛錬もできず部屋に閉じこもっていた時だった。

何もすることができず。

何もできない。

熱に浮かされ、間延びした時間は刹那の心を擦り傷のようにジクジクと痛める。

溺れた友人を救えなかった無力な自分。

そして、忌わしき異形の翼を持つ自分。

見舞いに来てくれた友人を、顔を合わせることなく追い返してしまったこと。

後悔やら恐怖やらが、ない交ぜになった後ろ向きな思考が良くなかったのだろう。

病は気から。

刹那の風邪は一向に良くならず、病床に臥せった日々が続く。

(自分が人間じゃないから治らないんだ)

悲観を通り越して、諦観し始めた時だった。

友人の父であり、刹那の庇護者である近衛 詠春の配慮が、その出会いをもたらしたのだ。

私物が殆ど無く、殺風景だった刹那の部屋に、一つの色が生まれる。

「あの方の姿が輝いて見えました。優しいお姿が、力強いお姿が、私に力をくれたのです」

ホテルのロビーの来客用ソファー。

桜子の隣に座る刹那は、照れくさそうに頬を掻きながら微笑んだ。「病で弱った私の心が、あの方に力強く一刀両断された…と言ったところでしょうか」

「ひゃ〜…ドラマチック！ねえねえ、その人ってカツコイイの！？芸能人の誰に似てる！？」

「似ているといえますか…、歌舞伎役者の中村吉左衛門さんで…」
「か、歌舞伎…というか、誰？」

そんな日頃の『桜咲 刹那』というクラスメイトのイメージを粉々に砕いたご本人様の姿に、桜子は益々楽しくなってくる。

まあ、他人のコイバナが楽しいのは当たり前だろうけれど。

冗談のつもりで振った恋の話。

勿論、最初は刹那も渋っていたが、そこは変な人間と長いこと付き合ってきた、色々な意味での経験が豊富な桜子。

刹那のような純情な子羊を上手く言い包める事などお手の物！……というわけではなく、刹那もまた落とされたのだ。

泣き落としならぬ、笑顔落とし。

件の変な人間への成功率は十割。

恐ろしい子！

話した内容の恥ずかしさからなのか。刹那は頬を赤らめて瞑目し、アチラの世界に旅立たれてしまったようだ。

今までとは違った意味で近寄り難い雰囲気苦笑しながら、桜子は向かいのソファアに座った少女と向き合う。

長谷川 千雨。

クラスメイト。

眼鏡娘同盟。

桜子同様、自販機目的にロビーまでやって来たところを『運良く桜子に捕まり、この修学旅行一日目記念！コイバナ大会！！に付き合わされているのである。』

千雨もまたやはり、日頃のイメージとはかけ離れた現状に驚いているのだろう。

戸惑いの表情を隠そうともせず、視線を刹那と桜子で往復させていた。

とりあえず、桜子はウインクしておく。

千雨は困ったように溜息を一つ。

クネクネと奇行に走り出した刹那をなるべく視界に入れないようにしながら席を移動し、桜子の耳元まで顔を寄せる。

(ね？ここにいて良かったでしょ？)

(待て待て待て！『あの』桜咲だぞ！？変なもんでも食ったのか？)

(うーん…………… あ！きつとあれだね！)

(何だよ)

(京都出身だって言ってたから、その好きな人が京都にいてテンションダダタカ！とか！)

(ダダタカ？)

(ダダタカ！)

意味わからん、と呟きながら向かいのソファーに座りなおす千雨を見送り、桜子は再び刹那へ。

「で！その人ってどんな人？」

我に返った刹那は、慌てて居住まいを正す。

血圧が高くなりすぎないだろうかと心配になるほど顔が真っ赤だが。

「どんな…………… 言葉では言い表せないほど剛毅な方で…………… 恐らく、お二人ともご存知かと」

その返答は予想外、と桜子と千雨は二人そろって首を傾げる。

(ゴウキって何だろ?)

…それもその筈。

桜子達に通うのは女子校。

異性の知人は少ない。

その上、桜子と千雨は眼鏡を愛好する同志であるが(ウラー！)、部活動等の活動は全く異なり、共通する異性の知り合いは居ないといつて過言ではない。

「小等部の時の同級生かなあ？」

「桜咲は中等部から麻帆良コッチなんだろ？それは無くないか？」

「そ、そうですね」

「じゃあ、私の知ってる人を片っ端から言ってく！下手な鉄砲数撃てば暴発！」

「つつこまねえぞ」

修学旅行一日目の夜は更けていく。

3・番外 りよごつによる（後書き）

あとがき・解説

答えが全く描かれない話。

ヒントは今回初登場の…。

ラジオが読み辛い時は、括弧の前に名前を入れようかと思えます。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
ざいます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。
す。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

3 - 番外? あらぶる のじか(前書き)

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま!」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

3 - 番外? あらぶる のじか

奈良県には、とある伝説がある。

ただし、それはマイナーなオカルト雑誌に一度だけ特集される程度の都市伝説というか、ゴシップというか、その程度の話なのであるが。

「お前は本当に『ソレ』が存在しているというのか？」

「勿論。吸血鬼の真祖が存在するんだから、きつと『彼』も存在してる」

ラジオの収録も終わり、二階のリビングで茶々丸さんの淹れてくれたお茶を楽しむ。

僕に気を使ってくれたようで、

「ダージリンです」

ありがとうだっちゃ。

ここ最近頻繁に顔を合せるせいで、エヴァンジェリンの僕への呼称が「貴様」から「お前」にランクダウンしたことは喜ぶべきか、咽び泣くべきか。

いやいや、腹を抱えて爆笑すべきだろう。今なら指を指してやるサービス付き。

「私をそんな胡散臭い存在と一緒にするな」

エヴァンジェリンはコクリと紅茶を一口飲み、カップに齧りついたまま胡散な瞳を僕に投げかけた。

「胡散臭くななんてないでしょ。ネギ少年の傍にも似たような動物がいるんだし」

「あれは妖精だ。お前の言うような存在は聞いたことが無い」

「数世紀を生きた吸血鬼も知らない存在か。胸が熱くなるね」

「情報源が三流オカルト雑誌という時点で興奮めだろ」

不定期刊『るー』を舐めてはいけない。

一見、馬鹿馬鹿しく鼻で笑えるレベルの情報を大真面目に解説、推察しているのだから。

世の学者全員がビックリするレベルで。

伊達に、宇宙と交信しそうな誌名をつけていないのである。

そんな雑誌の特集の中に、『向こうの世界』では完全にフィクションな存在だった彼が記事になっていたのだ。

端的に言えば、人語を話す動物が奈良県に生息しているというものの。

まあ、魔法世界なんて場所には亜人や獣人がいることだし、何より目の前には吸血鬼がいる。

「だから！私をそこの珍獣と一緒にするな！！」

「え？」

「なんだ、その珍獣じゃないの？みたいな顔は！！」

「いや、UMAでしょ」

「ひひーん」

「……茶々丸、今からメンテナンス受けて来い」

修学旅行二日目。

奈良で班別行動の日となり、桜子達一班は奈良市のすぐ近く、春日山原生林に来ていた。

古都奈良の文化財の一部として世界遺産に登録されているこの場所は、市街地に近いにも関わらず自然が溢れている。

というか、自然しか無い。

グッド・ネイチャー。

「秋なら良かったのにね。紅葉でいっぱいなんだってさ」

円がパンフレットをヒラヒラさせながら、隣を歩く美砂に話しか

ける。

「へえ、それは見てみたいわね」

二人の前を並んで歌いながら行進していた鳴滝姉妹プラス桜子の三人組を、嬉々として携帯の動画機能で録画していた美砂は、思わせぶりに微笑を浮かべ瞑目した。

「舞い落ちる紅葉の中、腕を組んで歩く男と女…」

「あなた、春もそんな事言ってなかったっけ？舞い落ちる花びらの中、唇と唇が触れ合う男と女…とか」

「いいと思わない？」

「まあ……憧れるけどさ」

円の瞳が宙を泳ぐ。

しかし、そこは流石の幼馴染。それに目ざとく気づいた美砂は、ニヤアと口を歪めた。

「おやおやあ？くぎみーはお相手に誰を想像したのかなあ？」

「うっさいわね！それとくぎみー言うな」

ふん！と鼻息荒く再度パンフレットに目を落とす。

初日に、どこぞのパラッチのせいで痛い目を見たのだ。

お祭り好きではあるけれど、決して自分が担ぎ上げられるのは好きではない。

まあ、同様にお祭り好きの3年A組の誰もが思っていることではあるのだが。

担ぎ上げる側の美砂だが、そこは幼馴染補正。

『今は』度を越えて円をからかうべきではないと判断した。

「ふっふふー、愛いやつ愛いやつ。でも…まあ、あなた苦労するわよ〜？」

色々な意味でね、と続いた美砂の言葉を円は聞かなかったことにする。

言われなくても分かっているわよ、と円は前に行く三人を見て、ほんの僅かに感じた胸の痛みに溜息。

それを忘れるように、円は努めて強気の瞳で勢いよく顔を上げた。

「その話は終わり！それより、七瀬さんの言ってたヤツが本当にいると思う？」

「ん？何だっけそれ？」

「知っててここに来たんじゃないんかい……」

円が二度目の溜息を吐いていると、鳴滝姉妹が揃って声を上げた。

「シカだー！」

「シカですー！」

「アリだー！」

桜子の声は当然の如く全員に聞き流された。

円と美砂が双子の視線を追っていくと、成る程。鹿が悠々と五人の目の前に出てきて、つぶらな瞳を向けている。

奈良の鹿特有の人を警戒しない姿。

双子は嬉々として近寄っていった。その手には、いつの間にも用意したのかシカせんべい。

「おーい！気をつけるよー！」

環境的故に人を警戒しなくなったとはいえ、出産期が近いため気が荒くなっているかもしれない。

円の注意に二人は揃って手を振り、大丈夫とアピール。

しかし、ボソツと呟いた美砂の声が、不思議と全員に届いた。

「……毎年、鹿に餌をあげようとした人が、手ごと噛まれて……指を無くす事故が絶えないらしいわ（嘘）」

「うえ！？だ、大丈夫だって……気をつければ」

「わ、わわわ、お、お姉ちゃん！やめとこようよ！？」

双子がアワアワと慌てるも、餌に釣られて鹿が寄ってくる。

「こ、こっちにきたよお姉ちゃん！」

「ギャー！ちよつとタンマ！タンマ！」

二人と一匹がドタバタしているのを見て、爆笑する美砂。

「イイ性格してるぜコイツ！」

一通り戯れた五人は鹿と別れ、再び遊歩道をのんびりと散策する。円は今、桜子と並んで歩いていた。

美砂はというと、嘘を吐かれたことに仕返しを企む双子（主に姉の風香）と熾烈な攻防を演じている。

「うーん…あの子は喋らなかつたねー」

残念そうに呟く桜子に、円は苦笑を浮かべた。

「いや、普通は鹿は喋らないからね。そうそう喋る鹿がいたら、たまらないって」

喋る鹿。

春日山には、人の言葉を喋る鹿がいる！

それが七瀬 みそぎに吹き込まれた奈良に生息する鹿の伝説だ。

面白半分で春日山原生林に行くことに賛成した円だが、ゆったりとした時間、しかし時々起こる騒動に今ではこの時間が楽しくてたまらない。

桜子は面白半分どころか、本気で喋る鹿を探す腹積もりのようだが。

「えーっと、なんて名前の鹿だったっけ？喋るヤツ」

「えつとねー…えつと…えと？…あ！江藤さんってミノにゃん言ってたよ」

「なんか胡散臭い名前だわ」

「そっかな？『喋る鹿 江藤さん』…にゃはは、そっかも！」

グリーンスーツ着用で、護衛と称して桜子達を山中から尾行していたシャドネとリーベンは一つの奇跡を目撃していた。

「……………」

「……………」

遠く、遙か遠く。

普通の人間では視認できない距離。

木漏れ日が降り注ぐ、少し森が開けた場所を鹿達が群れを成して歩いている。

…鹿達が歩いているだけなのだが、その中に混じって一頭、明らかに他の鹿とは一線を画した鹿…いや、生物がいた。

その鹿(?)一頭だけに生えた、天を突く立派な二対の角(?)。そして、恐らく人間よりも巨体。

白い体毛(?)。

顔は鹿。

間違いなく鹿なのだ。

にも関わらず、その鹿は…あろうことが二足歩行していた。まあいい。

突然変異か何かで、白い体毛で二足歩行する巨大な鹿が生まれてもおかしくは無い。

おかしくは…無い。

ただ。ただシャドネとリーベンにとって理解不能という状況に陥らせた大きな原因が別にある。

その鹿は

。

黄色いレオタードを着用していたのだ。

後にシャドネは語る。

「あの角は、電波を受信しそうでした」

3 - 番外? あらぶる のじか(後書き)

あとがき・解説

イメージとしては、シシガミ様に初めて遭遇したアシタカ。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

3 - 7 いながわ（前書き）

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

3 - 7 いながわ

「貴女に聞きたい事があるんだ」

「なんや新入り」

春日山原生林。

やや視界の開けた場所に、鹿に囲まれた二人がいた。

関東魔法協会より近衛 木乃香の拉致。

そして、関西呪術協会の乗っ取り計画進行中の関西呪術協会の呪符使い、天ヶ崎 千草。

助っ人として参加の西洋魔術師、フェイト・アーウェルンクス。

式神として使役している鹿から、木乃香や、昨晚の誘拐劇の邪魔をした護衛達の状況報告を受け取りながら、千草はのっそりと振り返った。

その、ニメートルはありそうな巨体と共に。

その様子を、やや胡乱さが混じった無表情で見つめながら、フェイトは今朝からずっと思っていた疑問を口に出した。

「その着ぐるみに意味はあるのかい？」
着ぐるみ。

デフォルメされた身体と、愛くるしい顔を持つ二足歩行の鹿。

黄色いレオタードと、電波を良く受信できそうな角がチャージングな鹿だ。

「当たり前やないかい！いいか新入り。古来から私達呪符使いはな、使役する式神との交信率を高めるために、その造形を真似てきたんや。この世に意味のないことは何も無いんや」

「その割には……鹿とは程遠いと思うのだけど」

「アカン…アカンで新入り。この着ぐるみを見て鹿と思わへん人間は、日本人やあらへん！」

「僕は日本人じゃ……」

「郷に入れば郷に従え！」

「……そう」

ユニーク、と内心呟きながら、フェイトは千草と会話する事を諦めた。

所詮、フェイトと千草の協力関係は今回の木乃香誘拐の計画中のみ。

まともなコミュニケーションが取れないことなんて、些細な事なのだ。きつと。

フェイトは自身の目的を完遂することだけを考える。

それは、単なる視察であるが、重要な事。

いずれ、魔法世界と旧世界の両方でフェイト『達』は事を起こす。千草が復活を目論む鬼神が、その戦力になりうるかどうか。

無意識に手近にいた鹿を撫でていたフェイトは、鹿達の様子が急激に変わった事に気付いた。

何かに警戒するように、一斉に同じ方向へ顔を向けているのだ。フェイトもまた神経を研ぎ澄ませ、鹿達の警戒する先を探って気付く。

のしり、のしりと近づいてくる巨大な何か。

気配を隠そうとしない、しかも敵意を持った生物。

千草も角で警戒波を受信したのだろう。懐(?)から呪符を取り出して身構える。

野生の動物だろうと目星を付けたフェイトの前に、果たしてそれが現れた。

「なんでこないな場所に熊がおるんや!？」

熊。

日本に生息する陸棲哺乳類の中で最も大きい動物。

ヒグマ。

千草が使役するファンシーなクマの式神・熊鬼と違い、真つ当な熊である。

張り巡らされた認識阻害の結界の影響を受けないのだから、相当なツワモノ熊だろう。

ただなんというか、その熊からは理不尽な現実に対する哀愁というか、怒りというか、そんな感情を感じ、フェイトは取っ組み合いの戦いを始めた千草とヒグマを眺めながら「アナログだ」と、それこそ電波を受信したかのように呟いた。

どうかしてる、とフェイトが見上げた空は、どこまでも青く澄み渡っている。

そんな、一昔前のバラエティ番組も真つ青なコントが繰り広げられていたにも関わらず、認識阻害結界の影響で森林浴に来た観光客や地元の住人が気付く事は無かった。

勿論、修学旅行中の生徒達も。

だが、後日この地で新たな伝説が囁かれ始める。

曰く。

「春日山には、熊に打ち勝つ鹿がいたんですよ騎士様！あれは……素晴らしい右フックでした」

麻帆良学園の生徒達が宿泊するホテル。

時刻は午後九時を少し回ったところ。

もうじき消灯時間なのだが、むしろ今からが本番だと生徒達のポルテージはウナギ登り！

そして引率教師の血圧も天井知らず！

そんなざわめいたホテルの中で一室、不気味に静まり返った部屋があった。

あろうことか。

嘘みたいな話だけど。

ハハッ、そんな馬鹿な！

普段から一番騒がしい3年A組に割り当てられた一室、桜子達一班の部屋である。

隙間なく閉め切られたカーテン。

主電源の切られたテレビ。

時計の音がコツコツと静かに溶け出す暗闇の中で、誰かがゴクリと唾を飲み込んだその瞬間。

唐突に生まれた光が、下から上へと突き抜けた！

光に照らし出されたのは女の顔。

下からの光に浮かび上がった顔は、ニタリと不気味な笑みを浮かべている。

「にぎやーーーーー!!」

「きやーーーーー!!」

その顔を直視してしまった双子、鳴滝 風香と史伽の絶叫に、光に浮かび上がる顔…柿崎 美砂がより一層笑みを深めた。

「いい…？これは私が親戚のおじさんに聞いた話……」

美砂は手に持った懐中電灯を下から顔に当てたまま、布団を突き合わせて顔だけを出している四人、桜子、円、風香、史伽を順番にゆっくりと一人ひとり目を合せていく。

一通りそれを行うと、低い口調で語り出した。

語られるのは、とある深夜の出来事。

「おじさん…仮にTさんとしましようか。Tさんの仕事は時々すごく忙しい時期があつてね、会社に泊ることもしよっちゅうあつたら

しいのよ」

「不思議な体験をしたのは、そんな日だった」

「仕事の責任者だったTさんは同僚達を先に帰らせて、一人で会社に居残って仕事をしていたの」

「あ、会社といっても、小さな会社でね。元々はデパートだったビルの一フロアを借りて、パーティーションで部署を仕切っただけの、広々とした職場らしいわ」

「そんな広い空間で、Tさん一人。照明もTさんの部署の所だけで、他は真っ暗」

「まあ、Tさんもその辺りは慣れたもので、淡々と仕事をこなしていたらしいわ」

そこで、美砂は表情を変えた。

おどろおどろしい、どこか胡散臭さを感じる表情に。

しかし、下からの懐中電灯に照らされたその表情は妙な迫力がある。

耳を傾けていた誰もが息を呑むほどに。

「キーボードを叩く音だけが響く。ふと、Tさんは今何時だろうな」
「……って壁の時計を見たんだ」

「時間は午前二時。喉が渴いたし、丁度いいかなと休憩することにした」

「席を立って給湯室に向かう途中、ふと微かに音が……聞こえる」

「スルスル、スルスル……って布が擦れるような音だ」

「何だろうな？不思議だな……ってTさんは辺りを見回す。でも何も無い」

「仕事もまだ残ってることだし、気にしないことにして給湯室に向かったんだ」

「給湯室ってというのは小さめの個室で、電気コンロや流しがついてる」

「そこに入ってお湯を沸かそうとしたときに、またあの音が聞こえてきた」

「スルスル、スルスル」

「気のせいか……さっきよりもはっきりと、しかもだんだん音が大きくなっている」

「何だろうな？何なんだろうな？」

「だんだんとTさんは怖くなってきた」

「どンドン、どンドン！音が近づいてくるんだ！！」

「慌てて給湯室から出ようとしたんだけど……出れない」

美砂はそこで一拍溜めを作る。

その間に、誰もが呼吸を忘れたのを見計らった美砂は大げさに身を乗り出し、

「ドアが開かない！！」

「びぎい……」

双子はもうすでに涙目だ。

しかし美砂はそれを気にすることなく畳み掛ける！

「バチッ！」

「そんな音が響いて……給湯室の電灯が消えてしまった！！」

美砂の持つ懐中電灯の光が消えた。

再び部屋に暗闇が戻ってくる。

怖い話しにある程度耐性のあるつもりだった桜子や円ですら、枕を抱きしめた手に力が籠っていた。

雰囲気ですらを感じた美砂は、ニヤリと口を歪める。

「そして……スルスル……って音が……ピタリと止まったんだ……」

「完全に気が動転してしまったＴさんは、もう無我夢中でドアを開けようとドアノブを必死で回す！」

「そんな……Ｔさんのシャツが、クイクイツ……と後ろから引かれた」「ハッ！と息が止まったＴさんは、反射的に後ろを振り向く」

「……………」

「しかし、Ｔさんの背後には、何も無かったんですよ」

「なんだ、何も無いじゃないか。気のせいか。電気が消えたのも夕イミングが悪かったんだ……Ｔさんが落ち着きを取り戻した時だった」「Ｔさんの耳元で」

パツと、懐中電灯が点灯した。

これでもか！とばかりに目を見開いた美砂の表情が現れる！

『お母さんが見つからないのぉ！！』

「ぎゃあああああ！！」

「びぎゃああああ！！」

更に、この世のものとは思えぬ美砂の作り声。

犠牲者が二名。

残り二名は、ある程度予想していたため体が跳ねるだけに留まることができた。

嫌な……事件だったね。

「次の日、その夜の出来事をデパート時代からビルに勤めていた守衛さんにＴさんは話したの」

「守衛さんはそれを聞いて、悲しそうに昔この場所で起こった事件を話してくれたそうよ」

「ここがまだデパートだった頃、女の子が一人迷子になった……って。両親の届出でデパートの従業員。やがては警察も加わって捜索が行われたけど、結局は見つからず。それから二年後、デパートが閉店

されることになり、改装が行われた際に女の子の遺体が見つかった
って」
「その場所が…丁度Tさんが勤める会社が入っているフロアだった
の」

修学旅行二日目の夜は更けていく。

3 - 7 いながわ（後書き）

あとがき・解説

この世界にネロ・カオスさんがいらっしやれば、きっと喋る鹿 江藤さん…じゃなく、エトに出会えた筈。

最後の怪談は、この話のサブタイトルを踏まえた上で脳内再生されれば、きっと楽しめます。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

3 - 番外？ おにへい（前書き）

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま！」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

3 - 番外? おにへい

「あ…あぁ……」

桜咲 刹那はその姿を見た瞬間、木乃香の護衛だとか、街中堂々と行われた襲撃だとか、関西呪術協会に向かったネギや明日菜の事全てが頭から吹っ飛んだ。

吹き飛んでしまった。

吹き飛んでしまうほどの衝撃。

震える指先。

熱に浮かされたように火照った頬。

大きく見開かれた目は、まるで幼子のようにキラキラと輝いていた。

太秦シネマ村。

映画会社の撮影所の一部を一般公開した観光施設。

街中での敵の追跡を振り切るべく、刹那はそこへ逃げ込んだ。

木乃香を、いや正確には自分を狙ってきていたと刹那は感じている。

(先に邪魔者を排除するつもりか?)

人の多い場所なら、下手に仕掛けてこないだろうと目論んだが、しかしそこには別の問題が。

ヨタヨタとそれに近づこうとした刹那だが、木乃香のはしゃぐ声で我に返った。

そこはシネマ村にある貸衣装屋。

事情を知らない木乃香が、嬉々として刹那を連れ込んだのだ。

「せつちゃんにはこれが似合うと思うんや!」

壁一面にかけられた時代劇に使われる衣装の中から、木乃香は一着を取り出して刹那に見せる。

袖口にダンダラ模様を黒く染め抜いた白の羽織。

袴に鉢金、胴まである。

新撰組っぽい衣装だった。

羽織の背には「誠」一文字。

良い船ですね。

「なー、なー、着てみてや〜」

「で、ですがお嬢様。それは男物では？」

「だめ？」

（その表情は反則ですお嬢様！！）

ちらりと木乃香が見せた切なげな表情に、刹那が逆らうことができようか？いや、できない。

できるはずが無い！

刹那にとって初めての友人。

特別な人なのだ。

刹那は後ろ髪を引かれる思いで「それ」…いや、衣装を着飾ったマネキンに一度だけ目を向ける。

「せつちゃん、それ着たいん？」

「い、いいいいいいえ！そんな訳では！！で、ではお嬢様のお勧めに着替えてまいります！！」

高鳴る鼓動。

揺れる想い。

それらを誤魔化すべく刹那は木乃香の手から衣装をひったくるように奪い、早足で更衣室へと消えていった。

桜咲 刹那には、憧れの人が居る。

憧れの男性。理想の男性。

敢然と悪に立ち向かい、毅然と裁く。

職務においては厳しい姿だが、罪人に対して情けをかけることもある。

そして何より、強い。

実直な対人剣術。

刹那の収める京都神鳴流のような、化生相手を想定した剣術：気を用いて放電したり、一瞬にして無数の斬撃を放つような見た目からして強力な剣ではないのだ。

一振り一振りに必殺の重みを感じさせる剣。

幼いころに見たその姿は、刹那が剣を習得する上で大きな影響を与えた。

神鳴流の生ける伝説たる近衛 詠春には尊敬を、そして後見人になつてくれた事に対する大きな恩を感じている。

だが、剣士として目指した理想は別にあつた。

桜咲 刹那には、憧れの人がある。

力強いその姿は、刹那に生きる力を与えてくれた。

力を求めた切っ掛けを思い出させてくれた。

大切な物を守るために強くあろうと。

幼い頃、ブラウン管の中に見たその人は、今でも刹那のヒーローだ。

敵の神鳴流剣士 月詠は、刹那に手袋を叩き付けて去っていった。決闘の申し込み。

受ける道理は無いが、しかし月詠に垣間見た狂気……あれは危険

だと刹那の直感が訴えかける。

腰に差した夕風の柄に、そつと指を走らせた。

幼いころからの、試合もしくは死合前の刹那の癖。

(仕方ない…か)

と、意識を戦闘用のそれに切り替えた矢先、背に庇った木乃香が刹那の手をきつく握り締めてきた。

その事に動揺しつつ刹那が振り返ると、驚くほど木乃香の顔色が悪い。

揺れる瞳が異常を訴えかけていた。

「ど、どうされました!? 大丈夫ですかお嬢様!」

「せつちゃん…あの怖い」

(月詠の狂気に当てられたか!!)

瞬間的に沸騰する己の感情を必死に抑え、刹那は木乃香に正面から向き合う。

少しでも安心していただこう、と思ったのだが、しかし戸惑い…というか、躊躇で思考が停止してしまった。

こんなとき、どんな顔をすればいいかわからないの…。

(ダ、ダメダメだー!!)

自己嫌悪で泣きたくなつた刹那の脳裏に、なんだかんだあって仲良くなつたクラスメイトの顔が浮かんだ。

『笑えばいいと思うよ! 笑顔! 笑顔!』

(わ、私なんか笑ったところで…いえ)

緊張から出た唾を飲み込み、握った拳に力を込める。

「……安心してください。このかお嬢様」

「せつちゃん?」

(い、いいいいい今の私って、うまく、うまく笑えてる!?)
ぎこちなさはある。

時折頬が痙攣したり、瞬きの回数が目に見えて多くなったり。けれども。

けれども、今刹那が浮かべている表情は、誰が見ても「優しい」

笑顔だった。

「ほほう」

「うへへへへへ」

影から見守っていた綾瀬 夕映と早乙女 ハルナが感心するほどに。

まあ、若干一名妖しく目を光らせているのだが。

「何があっても、私がお嬢様をお守りします」

「せつちゃん！」

木乃香に笑顔が戻ったことに安堵した刹那は、意識を待ち受ける戦いへと切り替えた。

月詠とは一度だけ手合わせしたことがある。

感想は一言。

「やり辛い相手です」

「せつちゃん……あの人と戦うん？」

心配そうに眉尻を下げた木乃香に、自然と刹那は微笑を向けていた。

「大丈夫です、お嬢様」

大丈夫、私に守るものがある限り、絶対に負けはしないと。

そこでふと、刹那は小さな願望を抱いた。

敵がいる。

市井の者……か弱い女性に手出ししようとする輩が。

そういつた悪に立ち向かうことに、ずっと、ずっと夢見てきた。憧れていた。

貸衣装屋で見た、憧れの人と同じ衣装を思い出す。

(力を、私に力を貸してください！)

真剣勝負の前に、コスプレの事を考える。

人にはふざけているのか！と思われるだろう。だが悲しいかな。

刹那にとっては切実。真剣。いたって真面目。

それほどまでに、刹那の抱く憧憬は強烈であった。

決闘の噂は瞬く間に広がった。

まあ、一部始終をお祭り好きのクラスメイト達が見ていたのだから当然だろう。

いいんちよ……雪広 あやかが変に感銘を受けてしまって、騒ぎを大きくしてしまった結果、決闘場所である「日本橋」には人だかりができてしまっていた。

シネマ村に来ていたクラスメイト達だけでなく、他の観光客達まで。

橋の上にはただ一人、西洋風のドレスを纏った眼鏡っ娘、月詠。衆人観衆の視線を一身に集めながら彼女は……。

（はあ……はあ……見られてる。見られてますえ……こない大勢の人に体が熱くなつて堪らんわあ〜）

頬を赤く染め、モジモジクネクネと身をよじり続けている。

その両手に持った二刀のせいで、かなりシユール……というか謎な光景。

その様子を、緊張からだろうとその場にいた全員が全員、意図的に深く考えることを避けた。

「桜咲さんはまだですか？」

そう、今回の役者は未だ月詠一人のみで、お姫様とそれを守護する騎士……ではなく武士が到着していない。

用事があるということで刹那達はクラスメイト達と別れたのだ。

「あ……ああん」

いい加減にしないと、橋の上だけ十八禁な光景に……とあやか達
が危惧し始めた時だった。

観衆のざわめきが最後尾のほうから静まっっていく。

誰もが背後を振り返り、そして誰もが感嘆で言葉を失う。

自然と、人垣が左右に分かれて道を作った。

その中心を歩いてくる、お姫様を背後に守る少女。

威風堂々、明鏡止水。

きつちりの伸ばされた背筋。

歩みに気負いや迷いは一切見られない。

凜と。

厳と。

一直線に月詠を睨むその視線に、傍から見ていた誰もが息を呑んだ。

少女？

否、鬼だ。

一人の鬼がそこにいる。

誰もがその姿に鬼を見た。

家紋入りの陣笠。

艶と輝く黒塗りの胸当て。

胸当てよりも更に黒い羽織。

歩みとともにしつとりと揺れる袴。

江戸の時代、悪党共に「鬼」と呼ばれた男の姿を纏い、刹那は現れた。

橋の手前で立ち止まった刹那は、背に庇っていた木乃香を途中合流した担任、ネギの式に任せ下がらせる。

「あ、せつちや……」

「いつて参ります」

何か言いたげな木乃香にそれだけ伝え、刹那は小さく微笑んだ。

木乃香は釣られるようにして微笑み、ネギに手を引かれて群集の

中へ消えていく。

「……すう」

とりあえず、これで心置きなく、と表情を引き締めなおすと同時に静かに呼吸。

時折焚かれるフラツシユ以外、シンと静まり返った周囲。

刹那は腰に差した野太刀「夕凧」ではなく、十手を静かに引き抜いた。

風を切り、十手の先端が月詠を指す。

ゴクリと、唾を飲み込んだのは誰だっただろうか。

月詠はその様子に、堪らなく気持ちよさそうに表情を歪めた。

「お待ちしておりましたえ、センパイ」

その様子を刹那は忌々しく睨み、腹に力を込めて目一杯の声を張り上げる。

意識の切り替えだ。

いつもは心中だけで行い、声に出すことはしなかった。しかし今は、今この時だけは声に出さずにいられない。

何故ならば、刹那は今憧れと共にあるのだから。

「火付盗賊改方、長谷川 平蔵である！」

刹那の宣言と同時に、月詠は二刀を鞘から抜き放ち飛び出した。

堪らない、堪らない！と厳しい刹那の視線に背筋を歡喜に震わせながら間合いへと。

月詠の間合いは、刹那の振るう野太刀よりも短い。

だが、それをカバーするのが瞬発力だ。

気による強化で上乘せされたそれを、常人が視認することは不可能に等しい。

観衆には、月詠の姿が掻き消えたように写っただろう。

だが勿論、二刀の間合いに自ら飛び込んできた刹那は、しっかりと月詠を睨みつけていた。

「あは 想像以上ですえ、センパイ！！」

振るわれる月詠の二刀を受け止めようとせず、十手を放り両手持ちとなった野太刀「夕凧」が、唸りを上げて月詠に迫る。

唐竹割り。

剣速を持ち味とする月詠の二刀を上回る速さだ。

それはただ偏に、無駄を徹底的に省いた剣。

刹那の持つ最大の力で振るわれ、最短距離を突っ走る。

野太刀の重量を十全に生かした、まさに「二の太刀要らず」を体現したような。

それが自分とは剣を合わせる価値が無いと言われているようで不満を感じるものの、それでもやはり自分の目に狂いは無かったと内心どころか、表情からして歡喜が満ち溢れる月詠がいた。

「イっちゃいそうですう……」

「……………」

真一文字に口を結んだ刹那の表情は揺るがない。

3 - 番外? おにへい(後書き)

あとがき・解説

この作品の刹那嬢は、だいたいこんな感じ。

本当は、もっと時代劇バカにしようかとも思ったのですが、よくよく考えると彼女のこれは真面目にやっけていても、傍から見るとバカだよなあ、と。

関係ありませんが、鬼平のエンディングは最強。

あと、京言葉がサツパリすぎてサツパリです。

ちなみに、この後の展開は原作どおり。

というか、そもそもこの作品自体が原作を知っていること前提で書かれていたりします…ということに今更気づきました。ご容赦を。

最後に。

このような稚作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

3 - 8 ひーろー けんざん(前書き)

この作品は赤松健先生の漫画作品「魔法先生ネギま!」の世界を間借りした作品です。

オリジナルキャラクター、要素をふんだんに使用した二次創作となりますので、お読みになる前に、あらかじめご了承ください。

それと、自重していないパロディネタが多数ありますので、ご注意ください。

また、登場する団体、個人名等はフィクションです。

実在の団体、個人名とはなんら関係ありません。

3 - 8 ひーろー けんざん

「フ、フハ！フハハハハハ！」

爆笑しながら真夜中の街中を闊歩する吸血鬼は、都市伝説級に近所迷惑である。

なにがそんなにご機嫌なんだか。

ちっこい吸血鬼は仁王立ちしながら歩くと言う変態的に器用な動きで僕と茶々丸さんの目の前を歩いていった。

それに反して、僕のテンションは西高東低。シベリア寒気団も凍えるほどの寒気到来。

何故ならば、本日のお勤めを終了して眠りの世界へ誘われそうなところを叩き起こされたのだ。

一番！

一番気持ちの良い瞬間に！！

今度、にんにくの醤油漬けを送りつけてやる。

それにしても…。

「未だに状況が掴めてないんだけど」

説明を希望して隣の茶々丸さんを見遣る。

関西呪術協会が壊滅だとか、誰かがさらわれたとか聞いた気がするものの、それは目新しい情報ではなくフィリウスさんから既に知らされていた事。

ついでに言えば、京都に行ったシャドネからリアルタイムで状況を聞いていた。

所詮、人様の組織内部でのゴタゴタ。

イエス混乱、ノータツチ。

魔法世界の某連合やら、関東のなんとか協会やらの目が最近厳しいので、僕達は太平洋を決め込んでいる次第なのだ。

「マスターが京都に派遣されるそうです。それで、マスターが是非ナナセさんも、と」

「フハハハハ！お前の目に見せてやろう！焼き付けてやろう！最強の魔法使いというものをな！！」

「…つまり、僕も京都に行けと？」

関東魔法協会の理事であり、麻帆良学園の責任者である近衛 近右衛門学園長は、救援としてエヴァンジェリンを抜擢したらしい。

正直、エヴァンジェリンに救援という言葉は死ぬほど似合わない
と僕は思うわけで。

「どうやらお前は真祖たる私を舐めてるようだからな。丁度いい機会だ！」

スキップを始めたエヴァンジェリンは鼻歌まで歌い出す始末。

本人もまた、救援云々よりストレス発散の窓口を求めているらしい。

さて、本人が築きあげようとしていた気高いイメージは、何処に行ってしまったのやら。

「マスターは旅行が出来る事も喜んでいらっしやるのです」

「なるほどね。十五年も閉じ込められてたってんだから、仕方ないか」

まあ、僕が京都に行くことはやぶさかでない。

というか、僕だって京都に行きたかったのだ。

行きたいのだ！

でも、行くことの出来ないやむにやまれぬ大人の事情があるわけ
で。

「おいじじい！！準備は整ったか！？」

麻帆良学園女子中等部校舎。

学園長室のドアを蹴破るような勢いでエヴァンジェリンは突入し
ていった。

中には、古めかしい本片手に、床に描かれた魔法陣と睨めっこを
続ける学園長。

本日も清々しいくらい仙人しててなにより。

入ってきたのがエヴァンジェリンだと分かると、目に見えてうろたえ始めた。

その特徴的な頭部には、うっすらと汗が滲む。

しばらく言葉に詰まっていた学園長だったが、魔法陣をバシバシ叩いて催促するエヴァンジェリンのプレッシャーに屈したのだろう、やけっぱち、捨て身、背水の陣的な笑みを浮かべ一言。

「やっぱ無理かも」
てへりと。

「学園から出れると言っただろおがああ!？」

その刹那放たれたエヴァンジェリンの踵落としを、僕は一生忘れないだろう。

その形は芸術的であり、その威力は鬼神の如く。狙いを違わず、学園長の眉間へと突き刺さった。

ナイスキル!

しかし、流石仙人然の見た目をしていない。

学園長は眉間をさすりながらも、平然と起き上がった。

躊躇い無く急所を狙ったエヴァンジェリンもそうだが、どっちもどっちである。

「し、死ぬかと思ったぞい!」

「次は死なす。とにかく、何とかしろ!」

冷酷に言い放つエヴァンジェリンに必死に頷きながら、その目がようやく部屋の入りに口を佇んでいた僕と茶々丸さんに気づいた。

「ふお?七瀬君ではないか。どうしてここに?」

「ナナセも京都に連れて行く。コイツには一度、私の力を見せてやらないと気が済まん!」

それを聞いた学園長は、静かに咳払いを一つ。

しかし、冷静さを装ってはいるが、流れる汗が先ほどより増している。

「か、彼にはここにいてもらわねばならん。ただでさえお主を京都に向かわせ戦力が落ちるのだ」

春の一件以降、僕達への対応が慎重になっている。

具体的に言えば、ネギ少年やその周囲となるべく接触させないよう心がけられているといった感じ。

まあ、望ましいことではあるけど。

「笑えない冗談はよせじじイ。コイツを戦力として数えるまで、お前達は落ちたのか？」

「なんかそれ、僕に酷くない!？」

そんな僕の叫びを無視し、二人は「人手不足」だの「問答無用」だの言い争いが続く。

ところで、緊急事態だつて話だけど、時間は大丈夫なのだろうか。

六十五年、飛驒国有一人。

曰宿儺。

其為人、背体有両面。面各相背。頂合無項。各有手足。其有膝而無臍踵。

力多以輕捷。左右佩劔、四手並用弓矢。

是以、不随皇命。掠略人民為樂。

於是、遣和珥臣祖難波根子武振熊而誅之。

リヨウメンスクナノカミ。

両面宿儺。

飛驒、美濃で畏敬の念を抱かれ、信仰を集めた古き神。
しかし、今そこにいるのは神として崇められた姿ではない。
土地から切り離され、信仰を失った一匹の妖怪。
霊地安定の為に捧げられた成れの果て。

リョウメンスクナの背面の手に構えられた弓の弦が引き絞られる。
「くっ！」

桜咲 刹那はそれを視認し回避運動に移る。

バサリと、刹那の背で巨大な翼が力強く風を打った。

純白の…夜空において尚輝く純白の翼。

刹那が異形であることの証。

忌み嫌われる対象であったことから、ひた隠しにしてきた体の一部。

刹那自身も忌み嫌ってきた思いの具現。

だがしかし、木乃香を救出するために翼を用いることは躊躇わなかった。

リョウメンスクナの弓から放たれるのは、矢などという常識的なものではない。

例えるならそれは炎の柱。

柱は柱でも、太さが成人男性の身長ほどもある凶悪さなのだ。

「オオオオオオオオオ！」

根源から竦み上がりそうな雄たけびと共に、それが放たれる。

「当たるわけには！」

余裕を持つて距離をとらねば、熱で焼かれる。

それは今まで何度も繰り返してきたやり取りから、嫌というほど学んでいたが故に大きく羽ばたいた。

炎の柱は刹那に着弾することなく空を切り、リョウメンスクナが封じられていた湖の岸に激突。

その炎は棧橋を、木々を、そして水面までを燃やし火が広がる。
幾度にもわたるその爆撃で、今や湖は完全に炎に囲まれていた。

しかし、その矢をかわしたからといって刹那が安心する暇は無い。次に襲い来るのは、リヨウメンスクナの前面の手に掲げられた長大な剣。

身の丈十八丈を遥かに超える巨体でありながら、刀身が霞むほどの勢いで刹那めがけて振り下ろされる。

「っ！！」

幾ら気とネギからの魔力供給で強化した体といえ、小柄な刹那が正面から受け止めるのは無謀。

悔しさに唇を噛み締めながら、刹那は回避に大きく羽ばたく他は無い。

「フッフ……アハハハハ！！圧倒的な力やないか！！不完全な状態ながらこの力！やれる！やれるで！！その力を全て解き放ち、西洋魔術師供を押しつぶしたる！！その前に目の前のうざったらしい羽虫や！焼き殺せ」リヨウメンスクナノカミ「！アハハハハハ！！」

リヨウメンスクナの肩の上に立つ女術者、天ヶ崎 千草は狂ったように笑い続ける。

やがて、うっとりとした視線を目の前に横たわり浮かぶ近衛 木乃香に向け、手をかざした。

ピクリと小さく跳ねる木乃香の体。

その様に嗜虐的な心をくすぐられながら、千草は小さく呪を唱える。

それに呼応するようにリヨウメンスクナは大きく吼え、背面の弓が向けられるのは刹那ではなく虚空。

天に向かって構えられていた。

引き絞られる弦。

一呼吸の間合いもなく、天に向けて炎の柱が撃ち放たれた。

「何を……まずいつ！？」

一瞬、その動作に戸惑った刹那だったが、すぐにその意図を察し

た。

否、視認した。

炎の柱は天に弧を描きながら昇り、やがて失速して滞空。

それがそのまま落下してくるのかと思いきや、轟音と共に矢が破裂したのだ。

するとそこには、無数の小さな…といっても、人間が用いるような大きさの炎の矢が無数に、無数に生み出されていた。

その光景から予想しうる事態は唯一つ。

炎の雨が刹那を、刹那だけに留まらず棧橋の上で白髪の少年と戦鬪を繰り広げていたネギと明日菜に降り注ぐ！

「くっ！神鳴流奥義…っ！」

百烈桜華斬。

刹那が振るうのは、無数の斬撃。

苛烈にして鮮烈。

技名のとおり、桜花色の軌跡が夜空に舞う。

その攻撃は狙いを違わず、刹那の頭上に迫った炎の矢を、更にネギと明日菜に降り注ぐとした矢をも打ち落とす。

見事、と鑑賞する者がいたら、誰もが賞賛しただろう。

だが…。

だがしかし。

「今や！叩き斬れ！！」

足が、いや翼が止まってしまったその隙は、致命的過ぎた。

刹那のすぐ目の前まで、巨大な刃が迫る。

(まだ落ちるわけには…?)

無謀だと分かりつつ、それを受け止めようと夕凧を構えた刹那は見た。

刹那のすぐ目の前に出現した西洋式の魔法陣。

闇色と表現するにふさわしい黒色のそこから、溶け出すようにし

て人が現れた。

妙に妖しい…というか、怪しいマスクを顔に着けた男。

その手には、光り輝く…おそらく剣を振りかぶり、刹那を両断しようとしていた暴虐なまでの一撃に、無造作に合わせた。

「な!？」

そんなばかな!?!と刹那は目を疑う。

何故ならば、両断されたのはリョウメンスクナの剣の方だったからだ。

あまりにもあっけなく、あまりにも淡々と。

風切り音を奏でながら、切断された刀身は夜空を飛び、湖面に墜落し沈んでいった。

そして、そんな異常を成し遂げた怪しいマスク男はというと…。

「厄介な奴だよ君はあああああゝ」

斬撃の勢いまでは殺せなかつたらしい。

謎の台詞をエコーさせながら吹っ飛んでいったのであった。

3・8 ひーろー けんざん（後書き）

あとがき・解説

色々と久しぶり。

『厄介な奴だよ君は！』
恐らく、シリーズ至上最も饒舌に戦闘中に喋った人。

最後に。

このような雑作に付き合ってくれている皆様、本当にありがとうございます。
ざいます。

こんな作品ですが、皆様に満足していただきたく精進してまいります。

どうか次話もよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8410m/>

ニジゲマ

2011年3月26日15時25分発行